

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第7集

# 北堀遺跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1985.3

山梨県教育委員会  
日本道路公団

# 北 堀 遺 跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1 9 8 5 . 3

山梨県教育委員会  
日本道路公団

## 序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち、甲府盆地の東部に位置する山梨県東八代郡一宮町地内において発掘調査された一連の遺跡のうち、北堀遺跡についてその結果をまとめたものであります。

一宮町は、原始・古代から人々の生活の跡を語る埋蔵文化財が濃厚に分布する地域で、とくに金川・大石川・京戸川等の扇状地には縄文時代の大集落や古墳時代後期の古墳群が存在し、さらに律令時代には国分寺・国分尼寺なども置かれ、政治・文化の中心地として栄えております。

中央自動車道はこの町をほぼ東西に貫通し、東端から勝沼町地内にわたって釣込堂の大遺跡群が発見されたことは特に有名ですが、西へ向って東新居遺跡、当北堀遺跡、笠木地蔵遺跡、豆塚遺跡、四ツ塚古墳群等々の遺跡が発掘調査されました。

北堀遺跡は、金川扇状地の東縁、一宮町大字塩田字北堀に位置し、1980・81両年度にわたり約14,000m<sup>2</sup>の地が発掘調査され、その結果、縄文時代から近世に至る各時代の各種遺構と豊富な遺物とが検出されました。例えは縄文中期後葉の住居址のうち1軒からは、関東的色彩の濃厚な連弧文土器が出土し注目を受けました。また古墳時代から平安時代末期に至る住居址57軒が調査されましたが、出土の土師器によっておよそ7時期に区分され、鬼高期末期から国分期まで断続的に集落が営まれたことが明らかにされました。とくに本遺跡の主体をなす時期が、周辺の遺跡をも含めて平安時代に位置づけられ、『和名抄』にいう「山梨郡林部郷」を形成する集落の存在を推定する資料が得られました。

その他、平安時代後期の住居址からは珍しい土師製の硯が出土し、平安時代から中世にかけてのものと考えられる土塙約300基、近世の墓塙4基なども発見され、ここが長期間にわたり、人類の足跡を示す貴重な遺構と遺物に恵まれた遺跡であることが明らかとなりました。本報告書が、嶺東の歴史を究明するための資料として、多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に当たられた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1985年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磐貝正義

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和55年度に日本道路公団東京建設局から委託されて山梨県教育委員会が実施した、東八代郡一宮町に所在する北畠遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、昭和59年度の日本道路公団東京第二建設局と山梨県教育委員会の契約による。
3. 発掘調査は長沢宏昌、出月洋文が、出土品等の整理及び報告書の作成は長沢宏昌が担当した。
4. 本報告書は、鉄器については坂本美夫が、石器については保坂康夫が、それ以外は長沢宏昌が執筆し、編集は長沢が行った。
5. 写真撮影は、遺構を長沢宏昌、出月洋文が、遺物を塚原明生（日本写真家協会会員）が行った。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 出土品整理参加者  
宝福寿美江、遠藤映子、石田文次郎、山本治代、渡辺薰、志村芳美、高野俊彦、羽中田恵子、丸山孝子、広瀬千江美、坂本穂波、志村好美
8. 本報告書の作成にあたって、都留市教育委員会・奈良泰史氏の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

## 目 次

第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡概況	2
第1節 位 置	2
第2節 地理的・歴史的環境	2
第Ⅲ章 遺構と遺物	5
第1節 桶文時代	5
1. 住居址	5
2. 単独埋甕	22
3. グリッド出土遺物	22
第2節 古墳時代	30
第3節 奈良時代	40
第4節 平安時代	46
1. 住居址	46
2. 土 坡 群	112
第5節 中世・近世	122
1. 土 坡	122
2. 方形石組遺構・溝	123
3. 墓 坡	128
第Ⅳ章 ま と め	130
参考文献	138

## 挿図目次

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 第 1 図 遺跡位置図            | 第 34 図 土製円板            |
| 第 2 図 北堀遺跡全体図          | 第 35 図 グリッド出土石器 その 1   |
| 第 3 図 44号住居址平面図        | 第 36 図 グリッド出土石器 その 2   |
| 第 4 図 44号住居址炉実測図       | 第 37 図 グリッド出土石器 その 3   |
| 第 5 図 44号住居址埋甕実測図      | 第 38 図 23号住居址平面図       |
| 第 6 図 44号住居址出土土器       | 第 39 図 23号住居址カマド実測図    |
| 第 7 図 44号住居址出土石器       | 第 40 図 23号住居址出土土器      |
| 第 8 図 58号住居址平面図        | 第 41 図 27号住居址出土土器      |
| 第 9 図 58号住居址炉実測図       | 第 42 図 52号住居址平面図       |
| 第 10 図 58号住居址出土土器      | 第 43 図 52号住居址カマド実測図    |
| 第 11 図 58号住居址出土石器 その 1 | 第 44 図 52号住居址出土土器 その 1 |
| 第 12 図 58号住居址出土石器 その 2 | 第 45 図 52号住居址出土土器 その 2 |
| 第 13 図 59号住居址平面図       | 第 46 図 53号住居址平面図       |
| 第 14 図 59号住居址炉実測図      | 第 47 図 53号住居址カマド 2 実測図 |
| 第 15 図 59号住居址埋甕実測図     | 第 48 図 53号住居址カマド 1 実測図 |
| 第 16 図 59号住居址出土土器      | 第 49 図 53号住居址出土土器 その 1 |
| 第 17 図 59号住居址出土石器 その 1 | 第 50 図 53号住居址出土土器 その 2 |
| 第 18 図 59号住居址出土石器 その 2 | 第 51 図 53号住居址出土石器      |
| 第 19 図 61号住居址平面図       | 第 52 図 54号住居址平面図       |
| 第 20 図 61号住居址炉実測図      | 第 53 図 54号住居址カマド実測図    |
| 第 21 図 61号住居址埋甕実測図     | 第 54 図 54号住居址出土土器      |
| 第 22 図 61号住居址出土土器      | 第 55 図 3号住居址平面図        |
| 第 23 図 61号住居址出土石器 その 1 | 第 56 図 3号住居址内微細図       |
| 第 24 図 61号住居址出土石器 その 2 | 第 57 図 3号住居址内微細図       |
| 第 25 図 62号住居址平面図       | 第 58 国 3号住居址出土土器       |
| 第 26 図 62号住居址炉実測図      | 第 59 国 32号住居址平面図       |
| 第 27 国 1号単独埋甕          | 第 60 国 32号住居址カマド実測図    |
| 第 28 国 1号単独埋甕実測図       | 第 61 国 32号住居址出土土器      |
| 第 29 国 2号単独埋甕          | 第 62 国 50号住居址平面図       |
| 第 30 国 2号単独埋甕実測図       | 第 63 国 50号住居址カマド実測図    |
| 第 31 国 グリッド出土土器 その 1   | 第 64 国 50号住居址出土土器      |
| 第 32 国 グリッド出土土器 その 2   | 第 65 国 50号住居址出土石器      |
| 第 33 国 獣面把手・土偶         | 第 66 国 57号住居址平面図       |

- 第 67 図 57号住居址カマド実測図  
第 68 図 57号住居址出土土器 その 1  
第 69 図 57号住居址出土土器 その 2  
第 70 図 57号住居址出土置きカマド  
第 71 図 26号住居址平面図  
第 72 図 26号住居址出土土器  
第 73 図 39号住居址平面図  
第 74 図 39号住居址カマド実測図  
第 75 図 39号住居址出土土器  
第 76 図 46号・47号・48号住居址平面図  
第 77 図 46号住居址カマド実測図  
第 78 図 46号住居址出土土器 その 1  
第 79 図 46号住居址出土土器 その 2  
第 80 図 47号住居址出土土器  
第 81 図 5号住居址平面図  
第 82 図 5号住居址カマド実測図  
第 83 図 5号住居址出土土器  
第 84 図 24号住居址平面図  
第 85 図 24号住居址カマド実測図  
第 86 図 24号住居址出土土器 その 1  
第 87 図 24号住居址出土土器 その 2  
第 88 図 38号住居址平面図  
第 89 図 38号住居址カマド実測図  
第 90 図 38号住居址出土土器  
第 91 図 41号住居址平面図  
第 92 図 41号住居址カマド実測図  
第 93 図 41号住居址内微細図  
第 94 図 41号住居址出土土器 その 1  
第 95 図 41号住居址出土土器 その 2  
第 96 図 41号住居址出土石器  
第 97 図 42号住居址平面図  
第 98 図 42号住居址カマド実測図  
第 99 図 42号住居址出土土器  
第100図 36号・45号住居址平面図  
第101図 45号住居址カマド実測図  
第102図 45号住居址出土土器  
第103図 36号住居址カマド実測図  
第104図 36号住居址出土土器  
第105図 56号住居址平面図  
第106図 56号住居址カマド実測図  
第107図 56号住居址出土土器  
第108図 1号住居址平面図  
第109図 1号住居址カマド実測図  
第110図 1号住居址出土土器 その 1  
第111図 1号住居址出土土器 その 2  
第112図 8号住居址平面図  
第113図 8号住居址カマド実測図  
第114図 8号住居址出土土器  
第115図 10号住居址平面図  
第116図 10号住居址カマド実測図  
第117図 10号住居址出土土器  
第118図 11号・12号・16号・34号住居址平面図  
第119図 11号住居址平面図  
第120図 11号住居址カマド実測図  
第121図 11号住居址出土土器  
第122図 12号・34号住居址平面図  
第123図 34号住居址カマド実測図  
第124図 34号住居址出土土器  
第125図 12号住居址カマド実測図  
第126図 12号住居址出土土器 その 1  
第127図 12号住居址出土土器 その 2  
第128図 21号住居址平面図  
第129図 21号住居址出土土器  
第130図 51号住居址平面図  
第131図 51号住居址カマド実測図  
第132図 51号住居址出土土器  
第133図 4号住居址平面図  
第134図 4号住居址カマド実測図  
第135図 4号住居址出土土器  
第136図 6号住居址平面図  
第137図 6号住居址カマド実測図

- |       |               |       |              |
|-------|---------------|-------|--------------|
| 第138図 | 6号住居址出土土器     | 第174図 | 2号住居址カマド1実測図 |
| 第139図 | 14号住居址平面図     | 第175図 | 2号住居址出土土器    |
| 第140図 | 14号住居址カマド実測図  | 第176図 | 7号住居址平面図     |
| 第141図 | 14号住居址出土土器    | 第177図 | 7号住居址カマド実測図  |
| 第142図 | 15号・31号住居址平面図 | 第178図 | 7号住居址出土土器    |
| 第143図 | 15号住居址カマド実測図  | 第179図 | 9号住居址平面図     |
| 第144図 | 15号住居址出土土器    | 第180図 | 9号住居址カマド実測図  |
| 第145図 | 15号住居址出土硯     | 第181図 | 9号住居址出土土器    |
| 第146図 | 31号住居址出土土器    | 第182図 | 13号住居址平面図    |
| 第147図 | 16号住居址平面図     | 第183図 | 13号住居址カマド実測図 |
| 第148図 | 16号住居址カマド実測図  | 第184図 | 13号住居址出土土器   |
| 第149図 | 16号住居址出土土器    | 第185図 | 20号住居址平面図    |
| 第150図 | 16号住居址出土置きカマド | 第186図 | 29号住居址平面図    |
| 第151図 | 16号住居址出土石器    | 第187図 | 29号住居址出土土器   |
| 第152図 | 17号・18号住居址平面図 | 第188図 | 30号住居址平面図    |
| 第153図 | 18号住居址内微細図    | 第189図 | 30号住居址カマド実測図 |
| 第154図 | 18号住居址出土土器    | 第190図 | 30号住居址出土土器   |
| 第155図 | 19号住居址平面図     | 第191図 | 35号住居址平面図    |
| 第156図 | 19号住居址カマド実測図  | 第192図 | 35号住居址カマド実測図 |
| 第157図 | 19号住居址出土土器    | 第193図 | 35号住居址出土土器   |
| 第158図 | 22号住居址平面図     | 第194図 | 37号住居址平面図    |
| 第159図 | 22号住居址内微細図    | 第195図 | 37号住居址カマド実測図 |
| 第160図 | 22号住居址出土土器    | 第196図 | 37号住居址出土土器   |
| 第161図 | 25号住居址平面図     | 第197図 | 37号住居址出土石器   |
| 第162図 | 25号住居址カマド実測図  | 第198図 | 40号住居址平面図    |
| 第163図 | 25号住居址出土土器    | 第199図 | 40号住居址カマド実測図 |
| 第164図 | 43号住居址平面図     | 第200図 | 40号住居址出土土器   |
| 第165図 | 43号住居址カマド実測図  | 第201図 | 28号住居址平面図    |
| 第166図 | 43号住居址出土土器    | 第202図 | 28号住居址カマド実測図 |
| 第167図 | 49号住居址平面図     | 第203図 | 33号住居址平面図    |
| 第168図 | 49号住居址カマド実測図  | 第204図 | 55号住居址平面図    |
| 第169図 | 49号住居址出土土器    | 第205図 | 鉄製品          |
| 第170図 | 60号住居址平面図     | 第206図 | 土塙群 その1      |
| 第171図 | 60号住居址出土土器    | 第207図 | 土塙群 その2      |
| 第172図 | 2号住居址平面図      | 第208図 | 土塙群 その3      |
| 第173図 | 2号住居址カマド2実測図  | 第209図 | 土塙群 その4      |

- 第210図 土塙群 その5  
第211図 土塙群 その6  
第212図 土塙群 その7  
第213図 土塙群 その8  
第214図 土塙群 その9  
第215図 土塙群 その10  
第216図 土塙群 その11  
第217図 土塙群 その12  
第218図 土塙群 その13  
第219図 土塙出土土器  
第220図 286号土塙平面図  
第221図 286号土塙出土土器  
第222図 286号土塙出土古銭  
第223図 その他の土塙出土古銭  
第224図 1号方形石組遺構  
第225図 2号方形石組遺構  
第226図 2号方形石組遺構出土土器  
第227図 1号・2号溝平面図  
第228図 2号溝出土土器  
第229図 5号溝平面図  
第230図 6号・7号・8号溝平面図  
第231図 9号溝平面図  
第232図 10号・11号溝平面図  
第233図 11号溝出土土器  
第234図 1号墓塙平面図  
第235図 1号墓塙出土古銭  
第236図 2号・3号墓塙平面図  
第237図 2号墓塙出土古銭  
第238図 3号墓塙出土古銭  
第239図 4号墓塙平面図  
第240図 4号墓塙出土古銭  
第241図 グリッド出土古銭  
第242図 連弧文土器文様モチーフ  
第243図 北堀遺跡出土土師器編年図 その1  
第244図 北堀遺跡出土土師器編年図 その2

## 図版目次

- 図版1 北堀遺跡全景、調査風景
- 図版2 44号住居址
- 図版3 58号住居址、59号住居址
- 図版4 59号住居址埋甕、61号住居址
- 図版5 1号単独埋甕
- 図版6 1号住居址
- 図版7 3号住居址、4号住居址
- 図版8 5号住居址、7号住居址
- 図版9 8号住居址、11号・12号・16号・34号住居址
- 図版10 14号住居址、15号・31号住居址
- 図版11 15号住居址現出土状態、17号・18号住居址
- 図版12 19号住居址、20号住居址
- 図版13 21号・22号住居址、23号住居址
- 図版14 23号住居址遺物出土状態、24号住居址
- 図版15 26号住居址、28号住居址
- 図版16 29号住居址、30号住居址
- 図版17 32号住居址、35号住居址
- 図版18 36号・45号住居址、37号住居址
- 図版19 38号住居址、40号住居址カマド
- 図版20 41号住居址、42号住居址
- 図版21 43号住居址、46号・47号・48号住居址
- 図版22 50号住居址
- 図版23 52号住居址遺物出土状態、同カマド付近
- 図版24 53号住居址、53号住居址カマド
- 図版25 53号住居址カマド
- 図版26 57号住居址遺物出土状態
- 図版27 土塙群
- 図版28 土塙群
- 図版29 1号墓塙、2号方形石組遺構（調査前）
- 図版30 2号方形石組遺構・1号溝、同トンネル
- 図版31 44号住居址出土土器
- 図版32 44号住居址出土土器
- 図版33 58号住居址出土土器

- 図版34 58号住居址出土土器
- 図版35 59号住居址出土土器
- 図版36 59号住居址出土土器
- 図版37 61号住居址出土土器
- 図版38 61号住居址出土土器
- 図版39 61号住居址出土土器
- 図版40 44号住居址出土石器、58号住居址出土石器
- 図版41 59号住居址出土石器、61号住居址出土石器
- 図版42 1号単独埋甕、2号単独埋甕
- 図版43 グリッド出土土器、土製円板
- 図版44 獣面把手・土偶
- 図版45 グリッド他出土石器
- 図版46 1号住居址出土土器
- 図版47 2号住居址出土土器、3号住居址出土土器
- 図版48 4号住居址出土土器、5号住居址出土土器、7号住居址出土土器
- 図版49 8号住居址出土土器、10号住居址出土土器、11号住居址出土土器、12号住居址出土土器
- 図版50 15号住居址出土土器、16号住居址出土土器
- 図版51 18号住居址出土土器、21号住居址出土土器
- 図版52 22号住居址出土土器、23号住居址出土土器、24号住居址出土土器
- 図版53 24号住居址出土土器、25号住居址出土土器、26号住居址出土土器
- 図版54 30号住居址出土土器、32号住居址出土土器、34号住居址出土土器、36号住居址出土土器、37号住居址出土土器
- 図版55 37号住居址出土土器、38号住居址出土土器、39号住居址出土土器
- 図版56 40号住居址出土土器、41号住居址出土土器、42号住居址出土土器
- 図版57 42号住居址出土土器、43号住居址出土土器、45号住居址出土土器、46号住居址出土土器
- 図版58 46号住居址出土土器
- 図版59 49号住居址出土土器、50号住居址出土土器、51号住居址出土土器
- 図版60 52号住居址出土土器
- 図版61 52号住居址出土土器、53号住居址出土土器
- 図版62 53号住居址出土土器、54号住居址出土土器
- 図版63 57号住居址出土土器
- 図版64 57号住居址出土土器、58号住居址出土土器、60号住居址出土土器
- 図版65 墨書
- 図版66 暗文、ペン先状工具による沈刻

図版67 紡錘車、15号住居址出土硯

図版68 鉄製品、軽石、砥石

図版69 11号溝出土土器、35号土塙出土土器、98号土塙出土土器、286号土塙出土陶器

図版70 古錢（286号土塙）

図版71 古錢（1号～4号墓塙）

# 第Ⅰ章 調査状況

## 第1節 調査に至る経過

- 昭和54年11月21日 文化庁に発掘通知を提出する。  
12月18日 文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。  
昭和55年8月15日 発掘調査を開始する。  
昭和56年7月28日 発掘調査を終了する。なお、調査終了後石和警察署へ発見通知を提出する。

## 第2節 調査組織

### 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査担当者 出月洋文（県文化財主事、現相川小学校教諭）

長沢宏昌（県文化財主事）

調査員 日原喜昭（山梨学院大学卒業生）

作業員 中川文武、早川かとり、川上勝子、中村みどり、武田良子、奥村澄江、中沢益、田草川かみじ、金子美江、田中きくの、豊角ちかの、田草川和子、広瀬咲代、雨宮照子、原田好子、田中仁子、古屋邦治、古屋とき恵、稲葉みち子、窪田満子、須田君子、雨宮八重子、古屋昌千代、小沢幸江、須田すみ代、古屋一恵、久保田典男、笠井淳子、前田正人、佐藤和子、丸山栄子、古屋泰美、船田泰子、原順子、山本成美、村松徳子、広瀬弘行、関本剛、梶原生己吉、田村幸貴、古屋春人、田辺英樹、守屋真理、小林としえ、松岡友平、松岡美恵子、田草川まさ子、矢花克己、岩間まこと、雨宮雪江、水上久美子、広瀬徳昭、深沢直子、小田切俊江、大浦真、菊地智行、竹島和幸、杉山正之、佐藤勝美、石川陽一、飯窓明夫、降矢やす子、小河いつえ、小河順一、袖野光、内藤和子、三枝基一、笠井公子、守屋裕史、若林正人、丸山美津子、武井茂子、山下いく代、鈴木剛、小林美人、藤原ちか子、古屋美智子、羽中田道子、小沢正史、伊賀典子、奥村一章、保坂さち子、加賀美綾、江口史郎、雨宮茂、中村美智子、中村香織、中沢由美、渡辺薫、山本恵子、中山倫子、宝福寿美江、石川龍子、石川澄子、小林敏子、土手本京子、高橋従子、小俣好子、小山菊江、山内順子、輿水登美子、齐藤潔井、江刺久子（順不同）

## 第Ⅱ章 遺跡概況

### 第1節 位 置

山梨県東八代郡一宮町塩田字北堀、中新居、桜地蔵に所在する。

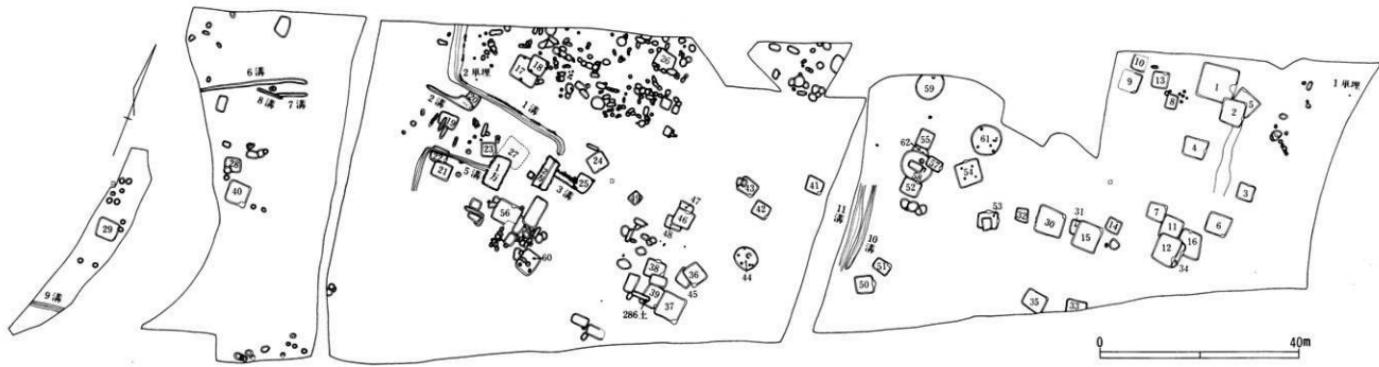
### 第2節 地理的・歴史的環境

一宮町は、甲府盆地東部、県中央部を北東から南西に走る御坂山塊の北側に位置する。笛吹川支流の金川、日川、御手洗川などによる扇状地が接合して、複合扇状地を形成している。

遺跡は、これらの扇状地のうち、金川扇状地の東縁に位置し、発掘調査区域の標高は381m～383mを測る。当地には多くの遺跡が確認され、居住は先土器時代にまで遡ることが明らかになっており、釧路堂遺跡群(5)、笠木地蔵遺跡(2)などで遺物が出土している。縄文時代では、釧路堂遺跡群が早期末と中期の集落遺跡として有名である。それ以外でも、草創期の有舌尖頭器が国分地内から、また、早期中葉の押型文土器が豆塚遺跡(1)から出土し、前期の遺物は本遺跡で出土したほか、釧路堂遺跡群では数軒の住居址が調査されている。中期は、本遺跡、釧路堂遺跡群をはじめ、非常に多くの遺跡が確認され、後・晩期は、釧路堂遺跡群、豆塚遺跡などで住居址が調査されている。弥生時代の遺跡は多くはないが、塙田地内、国分地内、豆塚遺跡などで遺物の出土がある。また、古墳は、金川沿岸や千米寺地内に集中しており、県下でも有数の古墳群として知られている。さらに、本遺跡の主体を成す、奈良・平安時代は、当地が甲斐國の中心地として、国分僧寺、国分尼寺などを中心に多くの遺跡が存在する。本遺跡に近接する笠木地蔵、東新居(4)の両遺跡でも、平安時代後半を主体とする集落が確認されており、さらに、国分僧寺、国分尼寺付近では発掘調査や耕作によって多くの遺構、遺物が確認されており、該期における当地方の繁榮を窺うことができる。



第1図 遺跡位置図 1. 豆塚遺跡 2. 笠木地蔵遺跡 3. 北新居遺跡 4. 東新居遺跡  
5. 釧路堂遺跡群 6. 甲斐國分僧寺跡 7. 甲斐國分尼寺跡 8. 四ツ塚古墳群



第2図 北堀遺跡全体図

### 第III章 遺構と遺物

本遺跡の調査区域は、幅約60m、長さ約240mに及ぶ。調査は区域内のセンターライン（東西方向）を基準に、南をS、北をN、それぞれセンターラインから外に向かって1、2、……と定め、西方向から工事用STANに従って4m×4mのグリッドを設定し、全面調査を行った。前述したように、塙田地内では以前から耕作中の遺物出土が多くあり、また事前の表面探集でも縄文土器、土師器、須恵器の散布が確認されたため、縄文時代、平安時代の集落の存在が予想された。

遺跡は、北側に緩やかに傾斜する金川扇状地の東縁に位置し、調査区東端は御手洗川の支流である田垂川によって制限されており、東端には小谷が形成され、黒色土の堆積がみられる。西には極く小さな谷が存在し、そこで集落は制限されているが、小谷の西側には笠木地蔵遺跡が存在する。このように本遺跡は両端を小谷に制限された微高地上に立地しており、表土下は暗褐色土が堆積し、その下が黄褐色砂質土層となっている。遺構は、暗褐色土層から掘り込まれ、地山である黄褐色砂質土層に至っている。ただ、東端ちかくでは、谷に堆積した黒色土層中にも遺構が存在した。

調査の結果、縄文時代中期の住居址5軒、古墳時代後期の住居址5軒、奈良時代の住居址4軒、平安時代の住居址48軒、及び平安時代が主体と考えられる土塙290基（一部中世に含まれる）、近世と考えられる水溜遺構2基及びそれに付随する溝11本と近世墓塙4基を検出した。

縄文時代中期の住居址は、曾利Ⅲ式期を中心とするもので、調査区北側の畠から耕作中に中期の土器の出土があったことなどから、該期の集落と考えられる。この他、縄文時代の遺物では、調査区中央部の1号方形石組遺構内及びその北側から、前期末の諸磯式～十三苦提式の土器片が多量に集中して出土しており、遺構がかつて存在したと思われる。

古墳時代の住居址は、いずれも鬼高期で、金川沿岸や国分地内の後期古墳につながるものであろう。奈良時代の住居址は、わずか4軒だけの調査であるが、当地方の該期の調査例は極めて少なく、資料蓄積段階の現状では、貴重なものと言えよう。平安時代の住居址は、調査区全域に広がっており、本遺跡で主体を成す時期で、初頭から終末期まで続いている。豊富な出土遺物があるが、なかでも、土師製硯は県下では他に例をみない貴重な資料である。

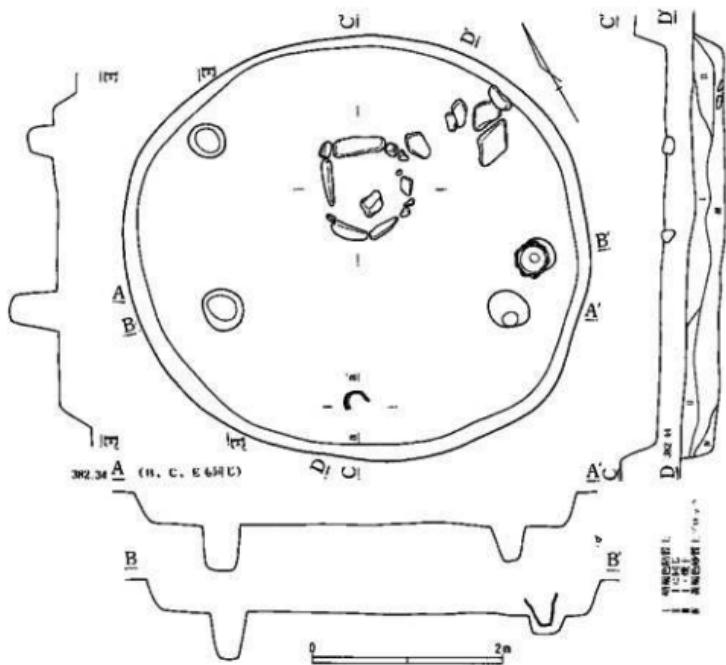
土塙群は、多くが平安時代と考えられるが、出土遺物が少なく、時期、性格の決定が困難である。ただ、分布上の片寄りがあり、調査区中央部の1号溝で囲まれた部分の一部は、溝、水溜遺構の時期まで下る可能性もある。近世墓塙は4基を報告するが、グリッドから、寛永通宝などの古銭の出土があり、遺構として把握できない、より多くの墓塙が存在したと考えられる。

#### 第1節 縄文時代

##### 1. 住居址

###### ○44号住居址

554+24S4+S5,+28S4+S5グリッド。梢円形を呈し、長軸4.9m、短軸4.4m、壁高0.3mを測る。

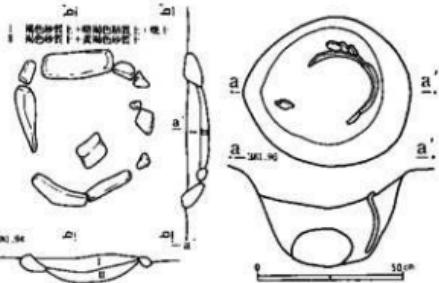


第3図 44号住居址平面図

住居の主軸は径の短軸と同一で、入口は南西を向く。柱穴は4本と考えられるが、1本は確認されなかった。床面からの柱穴の深さは26cm、37cm、48cmとなっている。住居入口部には埋甕が存在し、炉は五角形を呈する石囲い炉である。なお、周溝は存在しない。地山への掘り込みがあり、床は軟弱な部分が多い。東側柱穴ちかくには半埋甕状の曾利Ⅱ式土器が立てられており、径30cm程度のピットが確認された。覆土は、大きく上下二層に分けられる。共に暗褐色粘質土であるが、下層には焼土、カーボン粒子がみられる。また、壁付近には一部に壁の崩落と思われる三角堆土がみられた。

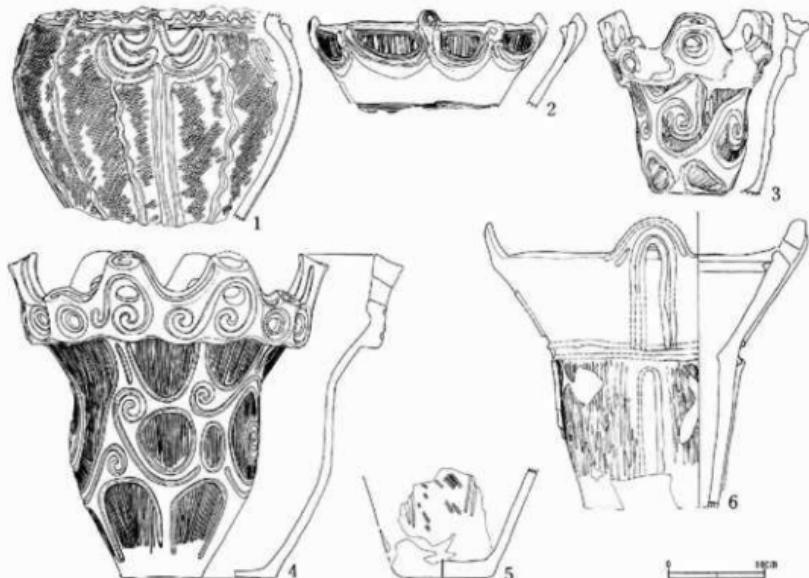
炉は、 $1.1m \times 0.9m$ 程度の五角形を呈すると思われる。各炉石は $0.3m \sim 0.5m$ の大きさの礫を用いているが、東側の  
み小石を用いている。掘り込みは15cmと浅く、炉内の焼土粒子は極くわずかである。

埋甕は胴張りの深鉢の口縁部と底部を欠損したものを用い、埋甕内には径20cm程度の礫がみられた。掘り方は $0.6m \times 0.5m \times 0.3m$ を測る。



第4図 44号住居址炉実測図

第5図  
44号住居址埋甕実測図



第6図 44号住居址出土土器

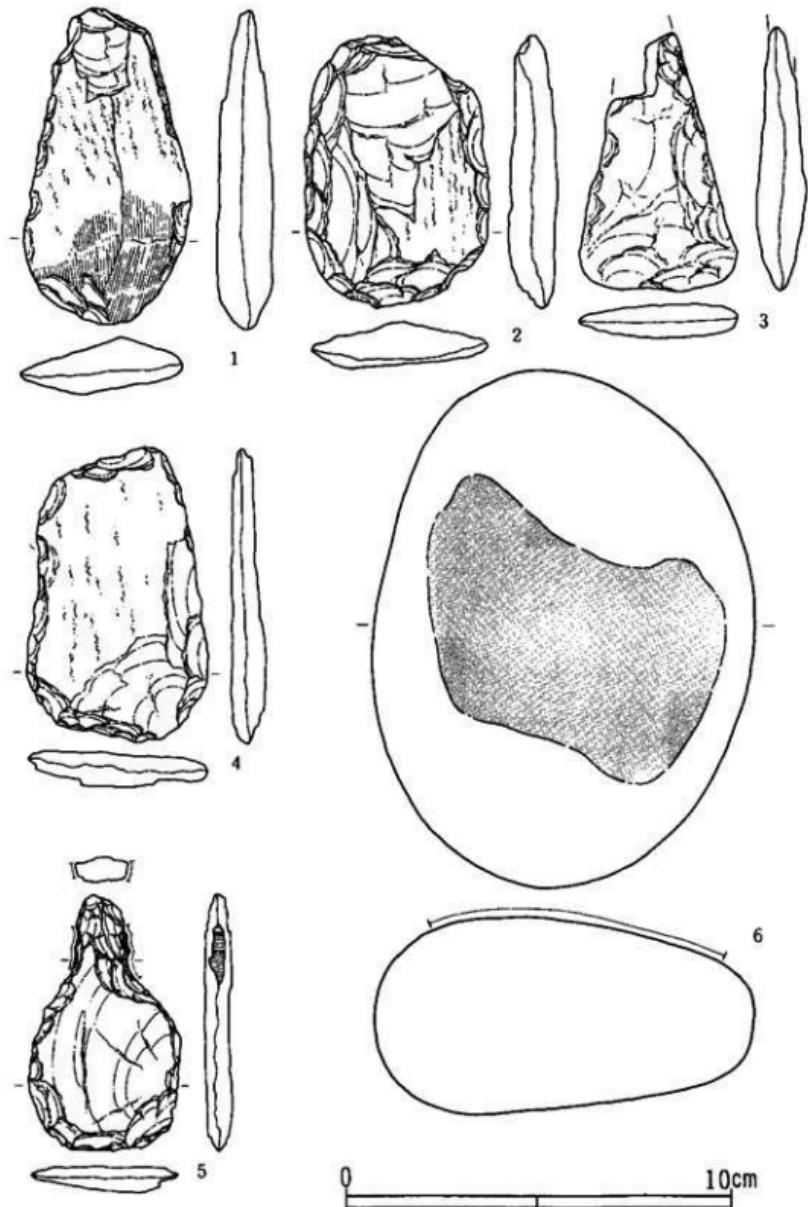
### 土器

土器は、覆土、床面直上から多く出土しているが、復元可能及び比較的大きな破片は、第6図に示した6点である。

1. 深鉢。埋壺である。口縁及び底部を欠損している。胴部最大径推定30cm、頸部径推定25cm、現存高22.5cmを測る。暗褐色を呈し、胎土は精選され、磨きも丁寧である。擦りの荒い桃文を地文とし、粘土紐を貼付し懸垂文としている。 2. 深鉢。口縁部径25cm、頸部径14.5cmを測る。褐色を呈し、胎土には白色粒子が含まれる。粘土紐の貼り付けは難であり、貼り付け面の潰しがみられない。口縁内面にも一条の貼り付けがみられる。 3. 底面剥離の深鉢。口縁部径18cm、底部径推定7cm、器高推定20cmを測る。褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。胴下半外面にはところどころ剥離がみられる。なお、口縁部の突起は大小3単位ずつである。

4. 半埋壺の深鉢。口縁部径30cm、突起部径33.5cm、底部径8cm、器高33.5cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は精選されており、磨きも良好である。なお、図示しなかったが、胴下半を5cm×6cm程度楕円形に欠損しており、胴部穿孔の可能性もある。 5. 深鉢底部。底部径9cm、現存高11cmを測る。褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面の磨きは難である。 6. 深鉢。口縁部径22cm、頸部径19cm、現存高30cmを測る。明褐色を呈し、胎土は精選されており、磨きも良好である。ただし、粘土紐の貼り付けは極めて難で、貼り付け面の潰しは全く行われていないために、剥離した部分が多い。胴下半内面は黒変している。

1及び4から木住居址は曾利Ⅰ式末～Ⅱ式期に比定される。



第7図 44号住居址出土石器

## 石器

形態の推定が可能な打製石斧10点、その破片12点、磨石1点、石核2点、黒曜石剝片12点が出土した。主な石器は以下のとくである。

打製石斧（第7図1～5） 櫛形（1・3・4・5）と短冊形（2）とがあるが、全体に寸づまりの短いものが多いようである。1は片面に自然面と節理面とを大きく残している。周辺に若干の剥離を加えている。刃部側に擦痕が非常に顕著である。片岩製である。2も一部に節理面を残している。裏面は周辺に剥離が加えられている。片岩製である。3は両面に広く剥離が加えられ、明確に櫛形に整形されている。刃部は円刃ながらや直線的である。砂岩製である。4は表・裏面とも広く節理面が残存している。周辺部を若干加工している。非常に薄手である。片岩製である。5は櫛形としたが、特異な形態である。刃部側は円形に近い形を呈し、基部は非常に細く突出するように作り出されている。基部両縁は、鋭い刃が取られ、平坦に磨かれているものと思われる。平坦な縁部にある擦痕は刃に対して直交しており、刃を潰すように磨かれたものと思われる。平坦に磨かれた部分は直線的ではなく波状を呈す。磨かれた部分は基部と身部の接する部分からはじまるが、右側は3つの弧が、左側は2つの弧が接し波状を呈している。両側縁の身部側の2つの弧はほぼ同位置に並んでいる。弧と弧の接する波状の頂部は鋭い。着柄を意図した加工であるよりも思われるが、この弧に柄をあてがうのか、紐を掛けたための挟りであるのかは不明である。

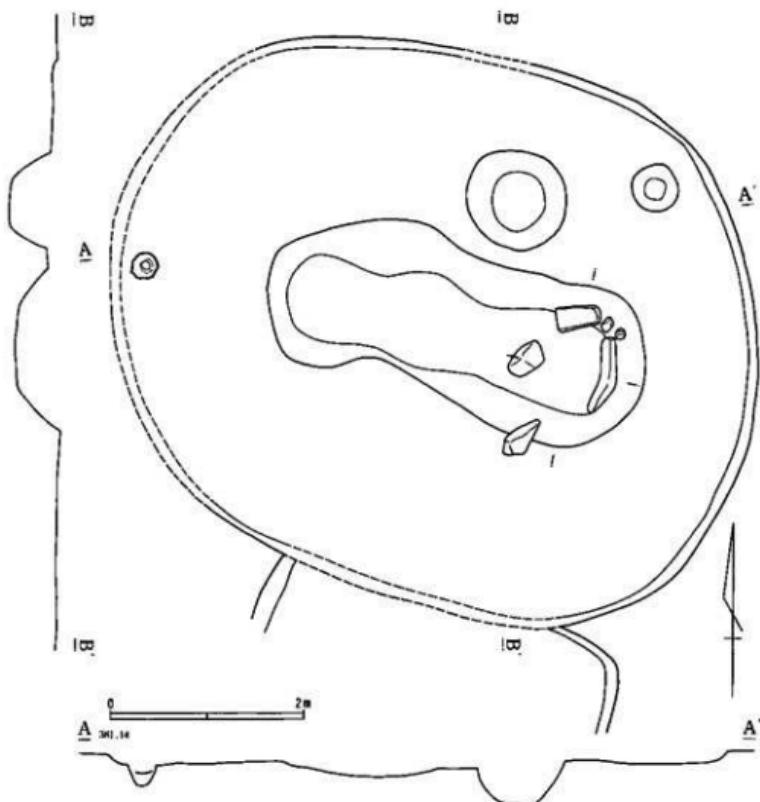
さて、本住居址出土の打製石斧は全体に寸づまりの短いものできゅしゃである。大型のものが再加工されたものもあるだろうが、おそらくその齊一性から小品を意図的に製作したものと考えよいのではないだろうか。

磨石（第7図6） 花崗岩の円礫の広い面を利用している。利用している面は一面であるが、他の面よりも丸みをもっている。磨耗した面は、礫の長軸よりも短軸方向に長く広がりをもつている。この石器は炉内より出土しているが、焼成を受けた形跡がなく、炉の機能が停止した後に落ち込んだものと思われる。

## ○58号住居址

555+56N1+N2,+60N1+N2,+64N1+N2グリッド。椭円形を呈し、長軸推定7m、短軸推定5.6m、壁高約0.3mを測る。住居の入口部分は、西北西方向を向く。柱穴は1本だけ確認された。径約50cm、深さ30cmを測る。住居入口部には埋甕が存在し、炉は石囲い炉であるが、住居址中心部分に攪乱があり、炉の前半部分がとり払われている。周溝は存在しない。床は軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土で、焼土粒子、カーボンを含んでいる。

炉は幅1.1m～1.2m程度と推定されるが、攪乱のため形状は不明である。なお、攪乱内には、炉石と考えられる30cmほどの礫が落ち込んでいた。また、炉石の火熱による剥離はみられなかつた。掘り込みは30cm程度あり、焼土は最下部に5cmほど堆積していた。掘り方の幅は1.7mである。埋甕は、キャリバー形深鉢を用いている。口縁及び胴部の一部を欠損しているが底部に穿孔は施されていない。正位である。



第8図 58号住居址平面図

土器

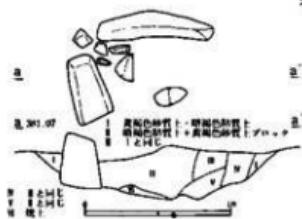
本住居址から出土した土器も破片が多いが、復元可能なものは図示した9点である。

1. 深鉢。埋甕である。口縁部径推定26cm、底部径7cm、器高31.5cmを測る。口縁の大部分と胴部の一部を欠損している。明褐色を呈し、胎土は精選されており、磨きも良好である。

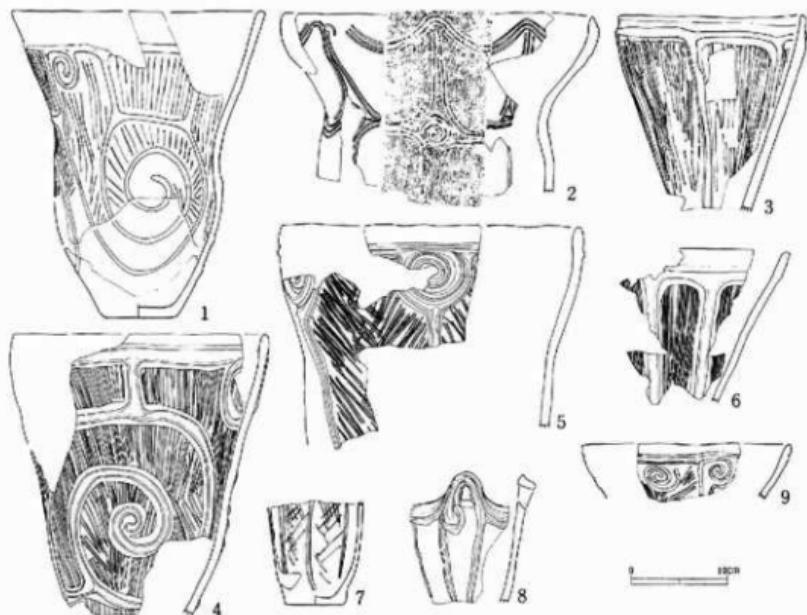
2. 深鉢。口縁部径32cm、頸部径23cm、現存高19cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成、磨きも良好である。施文も丁寧に行われている。

3. 深鉢。口縁部径18.5cm、現存高20cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は精選されているが、磨きは内外面ともに雑である。

4. 深鉢。口縁部径推定25.5cm、現存高29cmを測る。胎土は精選されており、磨きも良好である。本資料は火熱を受けた痕跡が頭著で胴部



第9図 58号住居址炉実測図



第10図 58号住居址出土土器

内面下半は黒変し、外面上半は黒褐色、同下半は明褐色を呈する。5. 深鉢。口縁部径推定31cm、現存高23cmを測る。褐色を呈し、胎土、磨きとも良好で、施文も丁寧に行われている。

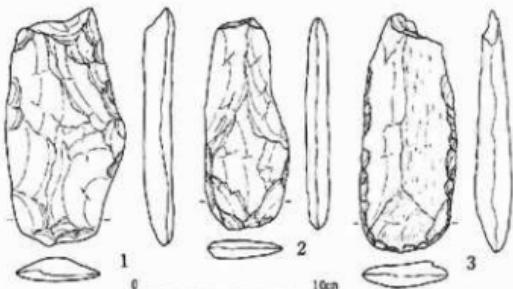
6. 深鉢。現存高16cm。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれ、磨きは良好である。7. 深鉢。底部径6cm、現存高11cmを測る。明褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、磨きは良好である。8. 深鉢。現存高13.5cm。褐色を呈し、胎土、磨きとも良好であるが、粘土紐の貼り付けは難である。9. 深鉢。現存高6cm。赤褐色を呈し、胎土、磨きとも良好である。埋甕から曾利Ⅲ式期に比定される。

#### 石器

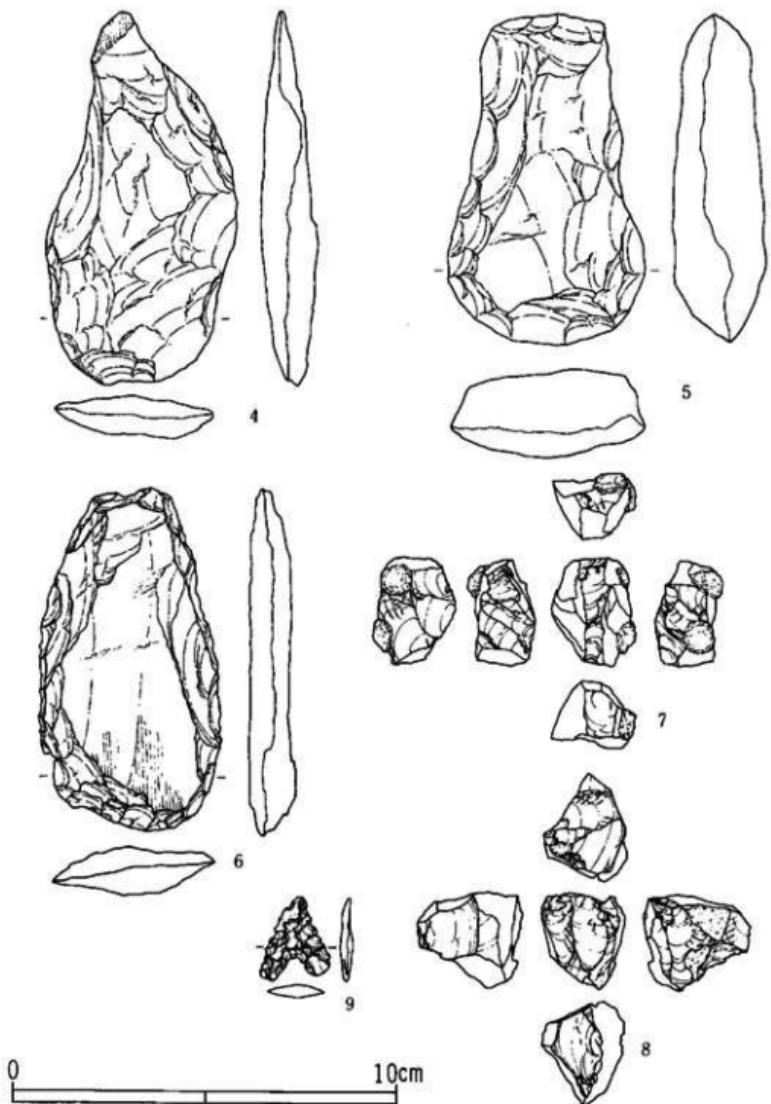
形態の推定可能な打製石斧28点、その破片25点、石鏃1点、石核2点の他、黒曜石剥片・砂片が多量に出土した。主な石器は以下のごとくである。

#### 打製石斧（第11図、第12図4～6）

短冊形（1～3）、盤形（5・6）がある。4は不定形であるが、いずれかが破損したものを再加工



第11図 58号住居址出土石器 その1



第12図 58号住居址出土石器 その2

したものと思われる。刃部の一部に擦痕がみられるが、基部端にもある。基部端のものはおそらく旧刃部の名残りと思われる。5は撥形ながら両側縁がやや内湾する。3・6には刃部付近に擦痕がみられる。6は基部付近に、刃部とは連って短軸方向の擦痕が若干見受けられる。着

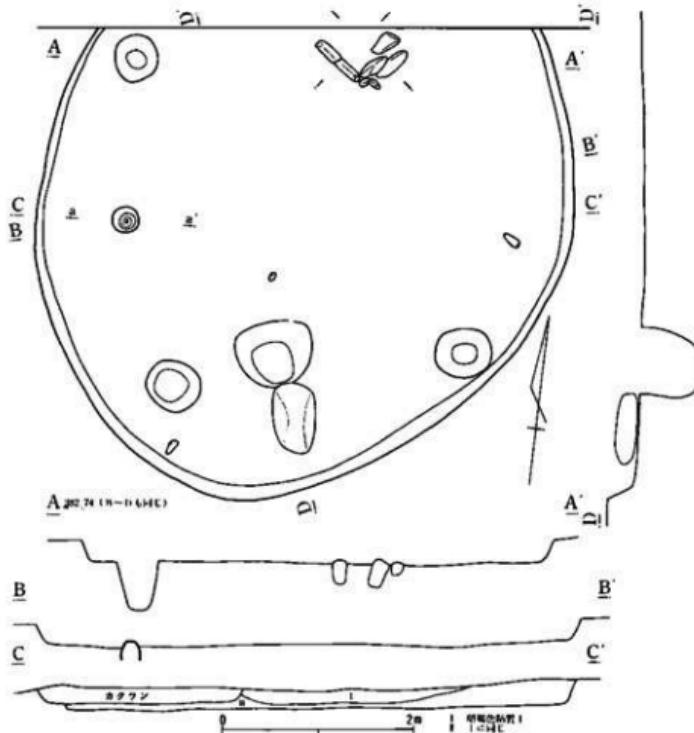
柄によるものかもしれない。いずれも円刃で、片岩・粘板岩製である。

石鎌（第12図9） 凹基無茎鎌である。素材の剥離が一部に残存する。黒曜石製。

石核（第12図7・8） 小剝片を剥離した残核である。いずれの面においても、同様な大きさ・形の剝片が剥取されたものと思われ、いずれもが剝片剥離作業面と思われる。各剝片剥離作業面を打面としているので立方体の形態を呈している。こうした剝離面の中に、7のように上下両端からの対向的な剝離や、破碎したような連続した小剝離が見受けられる。台石を用いた剝離技術によるものと思われる。各住居址から楔形石器風の破碎剝片がかなりの数見い出されたが、こうした剝離技術の産物と考える。本遺跡からは、グリッド出土のものも含め11点の石核が出土している。いずれも、小型で同様な状況を示している。いずれも黒曜石製である。

#### ○59号住居址

555+N5+N6,+64N5+N6グリッド。梢円形を呈し、長軸推定6.2m、短軸5.5m、壁高0.2mを測る。住居の入口部分は南西方向を向く。柱穴は2本確認され、径50cm、70cm、深さ50cm、60cmを測る。入口部には埋甕が存在し、炉は石囲い炉である。他に径50cm、深さ30cm程度の

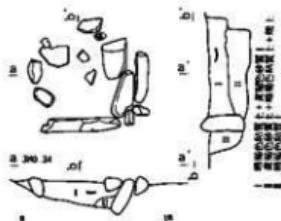


第13図 59号住居址平面図

小型の住居内ピットが2基確認されたが、周溝は存在しない。床はやはり軟弱である。覆土は暗褐色粘質土を主体とするが、大きく二層に分かれ、下層には砂が多く含まれている。

炉は、四角形を呈すると考えられる。南東、南西側は大きな礫を用い、しっかり構築しているのに対し、北東、北西側の石組みは小礫を用いる。掘り込みは25cmで、焼土の堆積はほとんどなく、ブロック状に焼土粒子が確認される程度である。

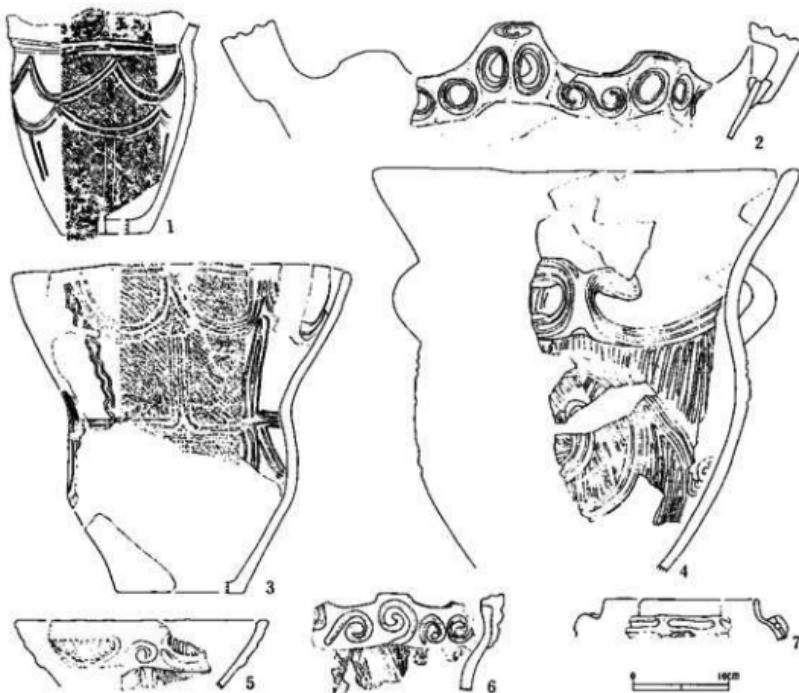
埋甕は、逆位であり、底部は打ち欠いたように欠損し、口縁も欠損している。掘り方は、径90cmを測り、極めて大きい。



第14図 59号住居址炉実測図



第15図 59号住居址埋甕実測図



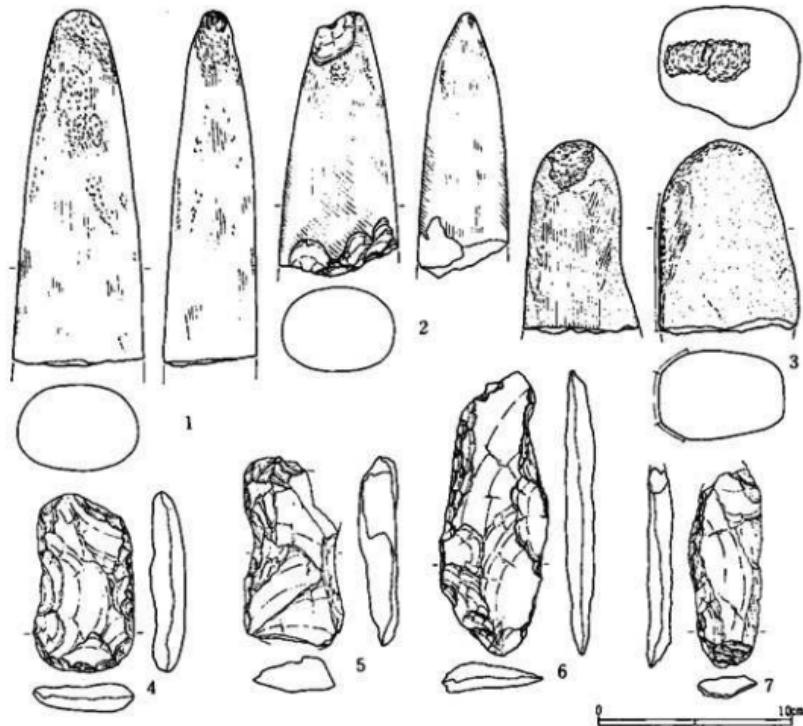
第16図 59号住居址出土土器

#### 土器

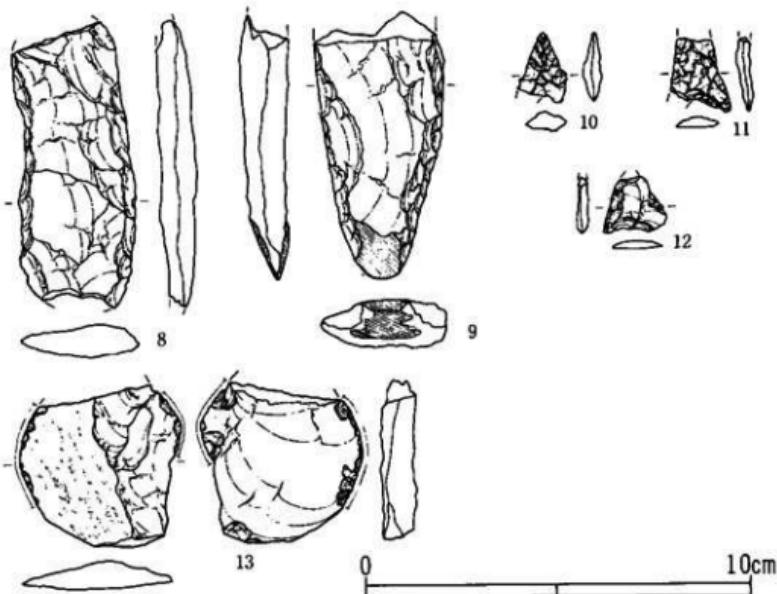
本住居址も小破片が多く、復元可能なものは図示した7点である。

1. 深鉢。埋甕である。口縁及び底部の一部を欠損している。頸部径18cm、底部径9cm、現存高23.5cmを測る。やや弱い張るキャリパー形深鉢を用いたもので、底部の打ち欠きは穿孔を意識して行ったものであるが、打ち欠き面の磨きは全く行われていない。赤褐色を呈し、胎土は精選されており、磨き、焼成とも良好である。また、施文も丁寧に行われている。2. 深鉢。現存高12cm。褐色を呈し、胎土は精選され、磨き、焼成とも良好である。3. 深鉢。口縁部径35cm、底部径推定13cm、器高34.5cmを測る。明褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。また、内面の磨きはやや難て、表面が荒れている。焼成は良好で、施文も丁寧に行われる。4. 深鉢。現存高41.5cmを測る。X字状把手を有し、施文は丁寧に行われている。赤褐色を呈し、内面の磨きも丁寧であるが、胎土には砂粒が多く含まれている。焼成も良好である。5. 深鉢。現存高7cm。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれ、とくに雲母が目立つ。磨き、焼成は良好である。6. 深鉢。現存高10cm。褐色を呈し、胎土、磨き、焼成とも良好である。7. 有溝小把手土器。口縁部怪推定16cm、現存高4cm。褐色を呈し、胎土は精選され、磨き、焼成とも良好である。内外面とも赤色顔料が施される。

1. 3. 7. など関東色の強い土器が認められるが、曾利Ⅲ式期に比定されよう。



第17図 59号住居址出土石器 その1



第18図 59号住居址出土石器 その2

#### 石器

形態推定可能な打製石斧32点、その破片50点、磨製石斧3点、磨石1点、石鎌4点、チャート剥片1点、石核2点、黒曜石剥片78点が出土した。主な石器は以下のとくである。

打製石斧（第17図4～7、第18図8） 短冊形7・8、擾形6の他、やや抉りがあり分銅形に近いもの4・5がある。いずれも側縁が直線ではなく、円刃である。粘板岩・片岩製である。

磨製石斧（第17図1・2、第18図9） 1・2は乳棒状磨製石斧で、いずれも刃部側を欠損している。かなり大型である。流紋岩と思われる。9は、打製石斧に似るが、刃部を磨いて作り出している。片岩と思われるが、打製石斧の石材より硬質である。

磨石（第17図3） 花崗岩の細長い円盤で、横面を長軸方向に擦っており、末端では広い平坦面にややまわり込んでいる。先端部には敲打痕がみられる。一部欠損しているらしい。

石鎌（第18図10～12） 10はやや肩部が張り、厚手である。凹基無茎鎌で黒曜石製。11はチャート製である。凹基無茎鎌であるが薄手である。12は、やや抉り込む凹基無茎鎌である。素材の剥離面が大きく残存している。同様な石鎌がもう1点出土している。黒曜石製である。

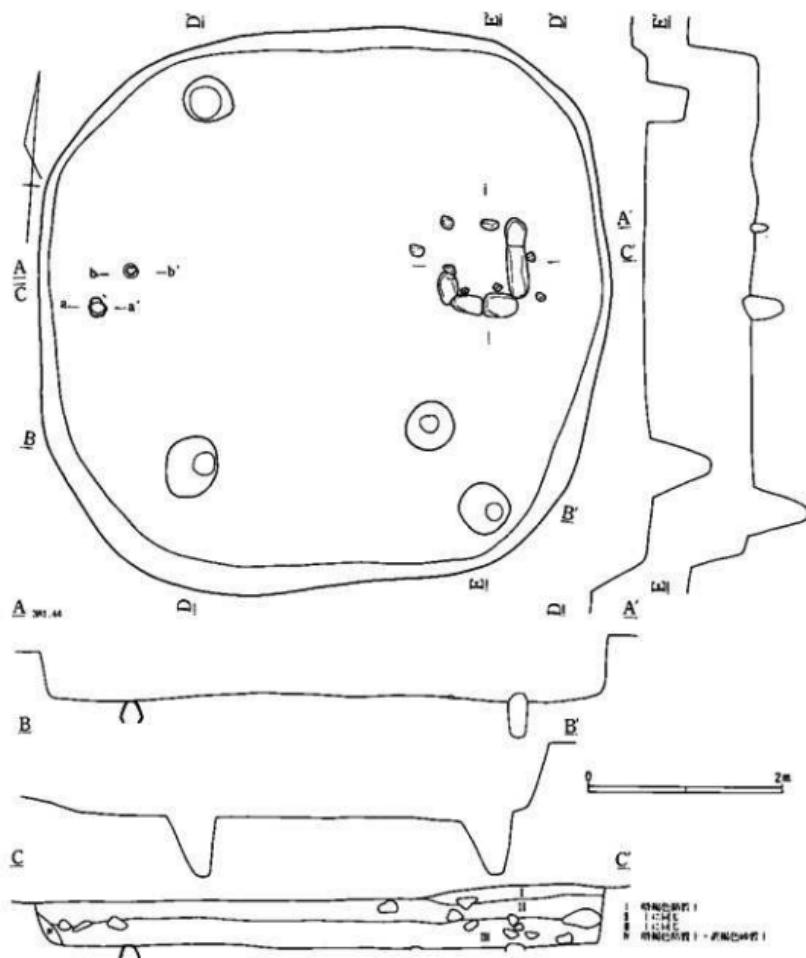
チャート剥片（第18図13） 使用痕のある剥片である。両側縁に小剥離痕がみられる。

#### ○ 61号住居址

555+72N2+N3,+76N2+N3グリッド。梢円形を呈し、長軸6m、短軸5.8m、壁高0.5mを測る。

住居の入口部分は西方向を向く。柱穴は4本確認されており、いずれも径50cm、深さ60cm程度である。しかし、本来考えられる炉の北側の柱穴は確認されず、逆に、炉の南側に2本が確認された。この2本については、「直し」によるものと考えられる。住居入口部には2基の埋甕が確認され、炉は石囲い炉である。周溝は存在しない。床は、炉のちかくだけが踏み固められており、他は軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたものであるが、焼土粒子、カーボンなどの混入はみられない。

炉は、90cm×100cmの長方形と推定されるが、本住居址でも、東及び南側の炉石には大きな



第19図 61号住居址平面図

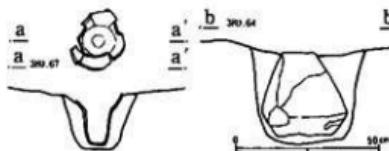
礫を用い、しっかりと構築しているのに対し、対面の2辺には小砾を用いている。掘り込みは30cmを測り、焼土の堆積もほとんどみられず、ブロック状に粒子がみられる程度であった。炉

の構築法、内部の状態など、59号住居址の炉に酷似している。

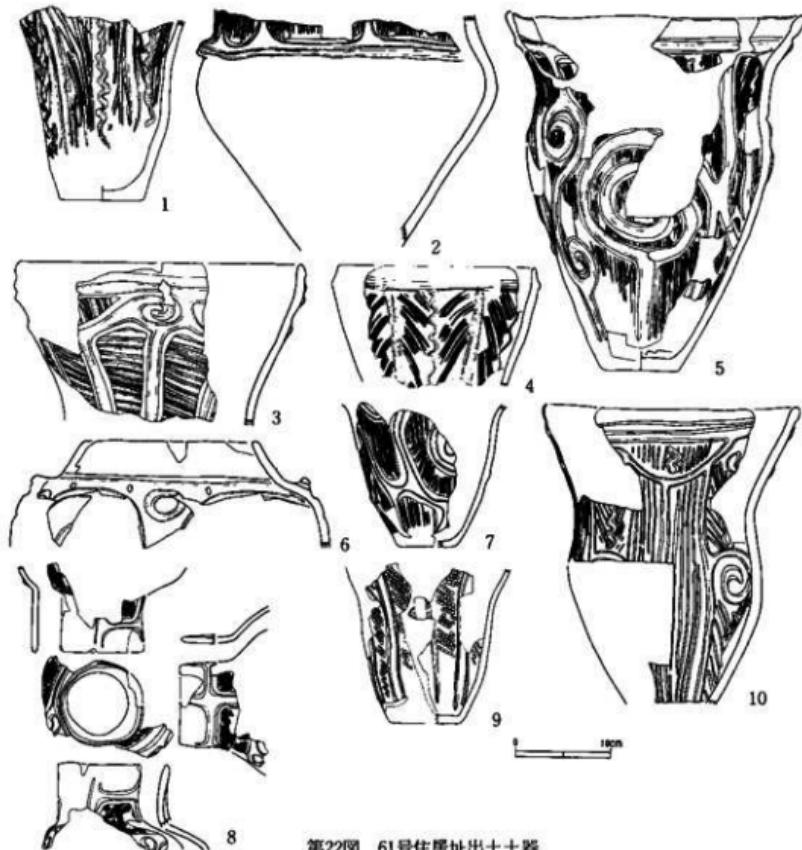
埋甕は2基存在し、ともに深鉢を用い、1基は正位で口縁部欠損、もう1基は逆位で底部及び口縁部を欠損している。



第20図 61号住居址炉実測図



第21図 61号住居址埋甕実測図

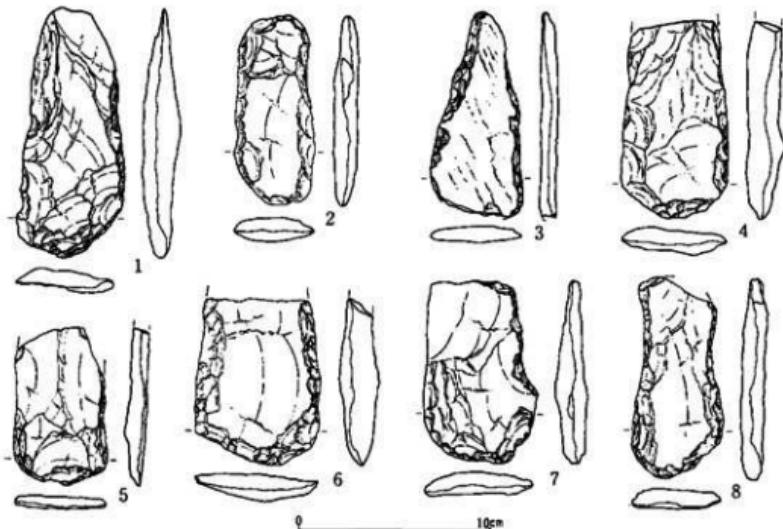


第22図 61号住居址出土土器

土器

1. 深鉢。埋甕である。底部径8.5cm、現存高19.5cm。口縁部は欠損しているが、底部の打ち欠きはみられない。褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。磨き、焼成とも良好である。 2. 深鉢。埋甕である。胴部最大径31.5cm、現存高25cm。口縁部及び底部を欠損しており、底部の打ち欠き部に磨きはない。頸部には把手の剥離痕が認められる。外面明褐色、内面赤褐色を呈し、胎土は精選されている。磨き、焼成とも良好である。 3. 深鉢。現存高16cm。褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母が目立つ。磨き、焼成は良好である。 4. 深鉢。口縁部径推定20cm、現存高12.5cm。褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母が目立つ。磨き、焼成とも良好である。 5. 深鉢。口縁部径推定30.5cm、底部径7.5cm、器高36.5cmを測る。明褐色を呈し、胎土、磨き、焼成とも良好な、丁寧なつくりである。 6. 有孔鈎付土器。口縁部径17.5cm、鈎部径28cm、現存高11cmを測る。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。外面の磨きは丁寧であるが、内面はやや雑である。なお、外面にのみ、赤色顔料塗布の痕跡が認められる。 7. 深鉢。底部径推定6cm、現存高15cm。赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好であるが、磨きはやや雑である。 8. 壺。口縁部径8cm、頸部径8.5cm、現存高9cmを測る。胴下半は球形にならず、片側が突出した器形と思われる。褐色を呈し、胎土、磨き、焼成とも非常に丁寧に行われている。 9. 深鉢。底部径推定7cm、現存高16.5cm。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、磨きも雑である。 10. 深鉢。口縁部径推定26cm、頸部径18.5cm、現存高30.5cmを測る。黄褐色を呈し、胎土は精選されている。磨き、焼成は良好である。

2基の埋甕のうち、1は曾利Ⅰ式に、2は曾利Ⅱ式に比定される。また他の土器にも、5、

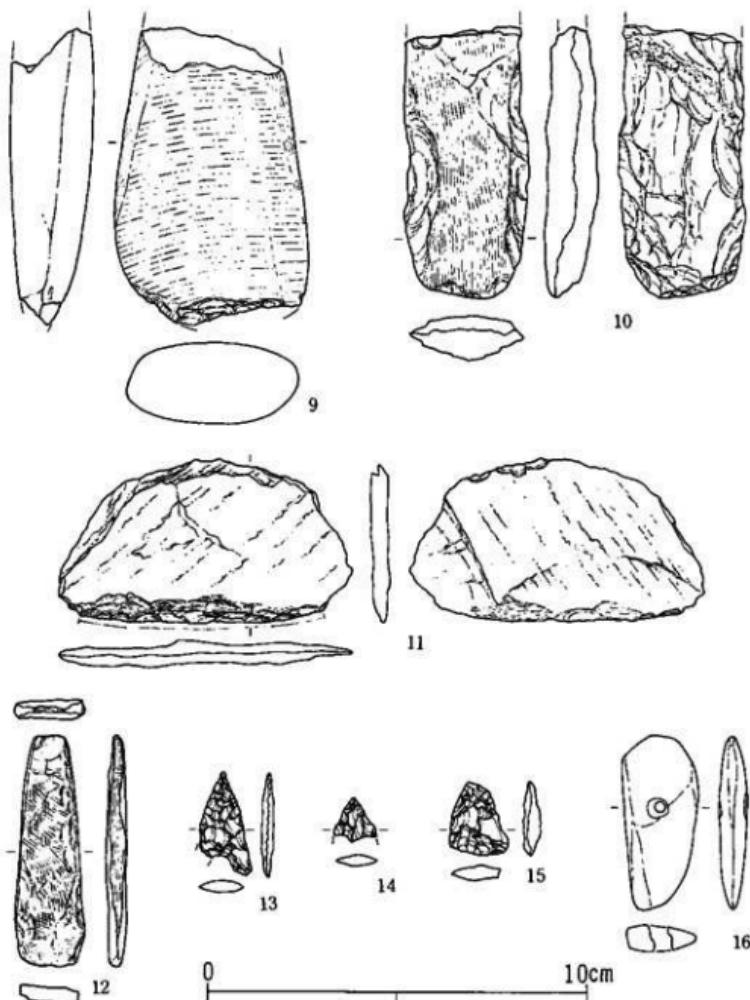


第23図 61号住居址出土石器 その1

6など曾利Ⅲ式と、4など曾利Ⅳ式に比定されるものが混在しており、本住居址も曾利Ⅲ式末～Ⅳ式初期に位置づけられるものであろう。

#### 石器

形の復元可能な打製石斧30点、破片26点、磨製石斧2点、石鎌3点、使用痕のある刺片1点、石製垂飾品1点、石核3点、黒曜石剥片90点が出土した。主な石器は以下のごとくである。



第24図 61号住居址出土石器 その2

打製石斧（第23図・第24図10） 棱形と短冊形とがみられる。棱形は、1・4・6・7のように両側縁が直線的でやや内側に傾斜するものが主体である。3のように内側にかなり傾斜するもの、8のようにやや内湾するものもある。短冊形は前者に比べやや数が少ない（2・10）。10は擦痕が著しい。長軸方向で片側に多く、表面の剥離痕が全くわからないほど磨耗している。磨耗面にかなり凹凸があること、その方向からして、使用時のものと思われる。なお、棱形、短冊形ともに刃部は円刃である。石材は、片岩・粘板岩などの変成岩である。

磨製石斧（第24図9・12） 9は、かなり扁平ですづまりであるが定角式ではない。刃部及び基部欠損。流紋岩製と思われる。12は、通常のものと異なり、粘板岩製で実用的なものとは思われない。定角式のように仕上げられているが、刃部はない。潰れたか頭初からなかったものと思われる。

使用痕のある剥片（第24図11） 半円形の粘板岩剥片を用い、直線的な縁辺を使用している。刃部には小剥離痕がみられるが片側のみが多い。擦痕は刃部に平行しており、両面にみられる。

石鎌（第24図13・14・15） 13は凹基無茎鎌である。黒曜石製である。中央やや下半部に若干抉り込みがみられる。14は先端部のみの欠損品である。肩が張り出し、やや厚手である。黒曜石製。15は平基無茎鎌である。素材の主剥離面が残存する。剥離がかなり荒く、製作途上のものであるかもしれない。黒曜石製。

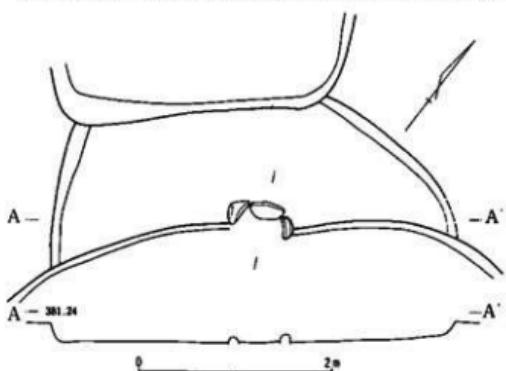
石製垂飾品（第24図16） 長楕円形で扁平なものである。縁辺は一方が鋭く、一方は扁平に仕上げられている。穴は、両側から穿孔されている。黄褐色のメノウ製と思われる。

#### ○ 62号住居址

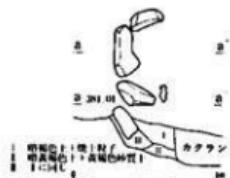
555+60N2グリッド。55号住居址と58号住居址に切られているため、形状は不明であるが、主軸が南東方向の楕円形を呈する住居址と思われる。エレベーション図が住居の短軸にほぼ一致すると考えられ、4.2mを測る。58号住居址調査中に確認された住居址で、掘り込みが浅く、壁高は15cmにすぎない。床は、炉のちかくも含めて、軟弱である。

炉は、幅60cmの小型の石圓い炉で、残存した炉石は20cm～30cm程度のもの3個である。掘り

込みは20cmを測り、焼土の堆積は全くみられなかった。出土遺物はないが、残存した炉の形態から、井戸尻～曾利Ⅰ式期までと推定される。

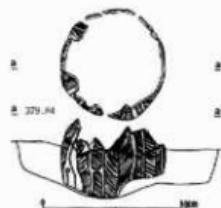


第25図 62号住居址平面図



第26図 62号住居址炉実測図

## 2. 単独埋甕



第27図 1号単独埋甕

### ○ 1号単独埋甕

555+48N7グリッド。調査区東端ちかくで確認された埋甕で、口縁部及び底部を欠損した深鉢を、おそらく逆位で用いていると思われる。確認面からの掘り方は、円形を呈し、径70cm、深さ18cmを測る。土器内部の土からは、骨片、焼土、カーボンなどは確認されなかった。

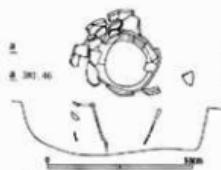
土器は、現存高25cm、胸部最大径35cmを測る。明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、雲母が目立つ。焼成は良好であるが、内外面とも磨滅が激しく、外面の文様も薄くなっている。施文は、沈線による縱方向の区画に、簡略化した渦文やU字状文を配し、区画内を綾状沈線で充たしている。曾利賀式に比定されよう。



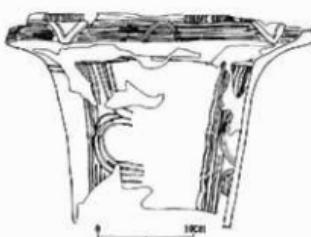
第28図 1号単独埋甕実測図

### ○ 2号単独埋甕

554+72N5グリッド。口縁部及び底部の欠損した深鉢を正位で用いている。確認面からの掘り方は、円形を呈し、径64cm、深さ17cmを測る。土器内部の土には、やはり骨片、焼土、カーボンなどは含まれていない。



第29図 2号単独埋甕



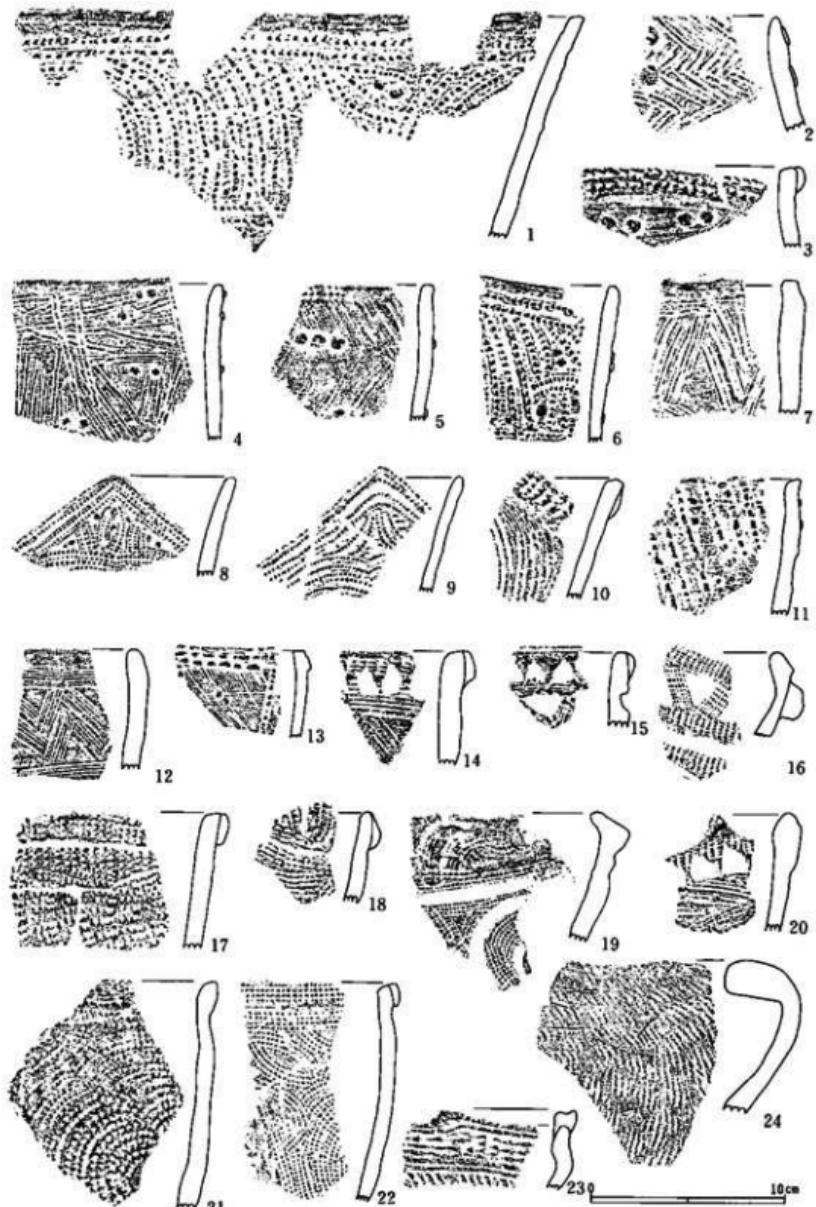
第30図 2号単独埋甕実測図

土器は、現存高23cm、頸部径23cmを測る。口縁部及び底部を欠損しているが、口縁欠損部の一部分は、打ち欠き後に磨きが行われ、欠損部がほぼ平坦を成している。意識的な打ち欠きであることが窺われる。褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母を多く含む。磨きは内外面とも丁寧で、焼成も良好である。施文は、半截竹管による連続爪形文と平行沈線によるもので、胸部は縱方向の沈線とU字状沈線の組み合わせである。五額ヶ台式に比定される。

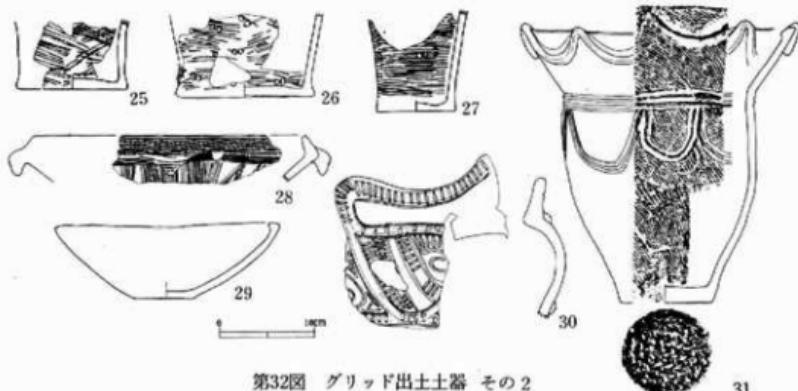
## 3. グリッド出土遺物

### ○ 土器

前述した遺構以外からも多量の遺物が出土しているが、第31図に示したように諸磯c式、十



第31図 グリッド出土土器 その1



第32図 グリッド出土土器 その2

三菩提式の土器片が、1号方形石組造構北側を中心に多量に出土している。該期の土器片は、この部分だけでもかなりの量に及ぶが、接合できるものはほとんどない。出土量から、かつて該期の遺構が存在したと思われる。諸磯c式は、半截竹管による平行沈線を地文として、貼付文の施されるもの（1～6、8、11、13）、結節状浮線文の施されるもの（1、4、6、8、9、11、13）とがある。十三菩提式は、口縁部の三角形沈刻文（14、15、16、20）と半截竹管の組み合わせとなるが、半截竹管で連続爪形文を施す場合、半截面利用（19、22）と背面利用（14～18、20、21）とがみられる。これら諸磯c式、十三菩提式土器は、薄手のものが多く、胎土は精選され、磨きも非常に丁寧に行われている。なお、23は五領ヶ台式に、24は藤内式に比定される。

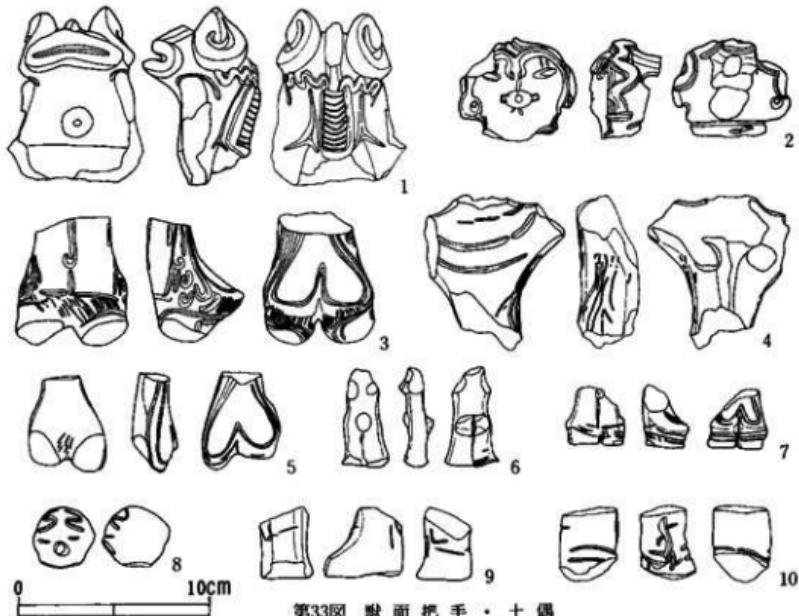
第32図25～27は諸磯c式土器であるが、25は平安時代の38号住居址カマド内から出土したもので、カマド構築時に再利用されたものと思われる。28. 深鉢。褐色を呈し、胎土は精選され、雲母を多く含む。五領ヶ台式土器。29. 浅鉢。口縁部径21.5cm、底部径6cm、器高7.5cmを測る。灰褐色を呈し、胎土、磨きも良好である。30. 深鉢。褐色を呈し、胎土、磨きとも良好である。井戸尻I式土器。31. 深鉢。口縁部径28cm、底部径9cm、器高28cmを測る。赤褐色を呈し、刷下半内面は黒色を呈する。胎土は精選され、磨き、焼成も良好で、施文も丁寧である。関東色の強い土器であり、曾利Ⅱ式期に位置づけられよう。

#### ○獣面把手・土偶

本遺跡からは2点の獣面把手、14点の土偶（頭部3、胸部5、手3、足3）が出土している。このうち、残存状態のよい10点を図示した。

1. 59号住居址内出土の獣面把手。粘土紐の貼り付けによって、口部、耳部を表現している。口部から頭部中央にかけて欠損部分があり、後面の爪形文隆起部に続いている。曾利Ⅱ式期の住居址出土ではあるが、おそらく井戸尻式期のものであろう。2. 59号住居址出土土偶頭部。口唇及び眼部に刺青らしき沈線が施され、耳部には耳飾用の貫通孔が描かれている。3. グリッド出土。下半身の前面から後面及び内股部分に極細の沈線が施され、側面には沈線による渦巻が描かれている。腹部には正中線がある。4. グリッド出土。右側面に数条の沈線が施

文されるため、図は背面から並べてある。前部には乳房と正中線が表現されており、背部には、三条の強状沈線が施されている。 5. グリッド出土。前面股部に沈線が施されている。陰部の表現であろう。後面は沈線によって臀部が表現されている。 6. 61号住居址内出土。前面には乳房と張り出した腹部とが表現され、後面は臀部が表現される。 7. 45号住居址内出土。太股部分に沈線が周回して、ヘソ及び腹部には正中線が表現される。 8. グリッド出土。簡略化された頭部で、口部を刺突で、眼、眉を沈線で表現している。 9. グリッド出土。右足。



第33図 獣面把手・土偶



側部から後部に沈線が施される。  
10. 32号住居址内出土。  
足と思われる。側部に縱方向  
の沈線があり、また、二条の  
沈線が周回する。

○土製円板

土製円板は全部で24個出土  
している。すべてが土器片を  
再利用したもので、最小が径  
3 cm、最大が径 6 cmである。

第34図 土製円板

このうち無文は13個を数え、これは図示しなかった。

第34図に示した土製円板のうち、9、11は諸磯c式土器片を用い、他に無文ではあるが、胎土から明らかに前期末の土器片を用いたと考えられるものが1点ある。ただし、前期末段階での土製円板の使用はあまり一般的ではなく、土器片そのものが前期末であっても、土製円板としての再利用は中期の可能性が強い。本遺跡においては、平安時代の住居址のカマド内に諸磯c式土器底部が再利用された例もみられる。他の有文のものでは1、10など井戸尻式期の土器片を利用したもので、中期中葉以降と考えられよう。なお、2、6、7、9、11及び無文のうち前期末の土器片利用と考えられるものは、打ち欠き後の磨きが非常に丁寧に行われ、他はやや雑に行われている。

#### 石器

打製石斧（第35図1～6） 振形（1～3）と短冊形（4～6）とがある。縄文時代の住居址出土のものも含めて、本遺跡には明確な分類形が存在しない。ここに提示したものは、本遺跡出土のものの中でも最も大型のものである。いずれも円刃であるが、2・3のようにやや傾斜するものもある。いずれも片岩・粘板岩製である。

凹石（第35図7・8） 7は両面を凹石・磨石として利用、さらに片側縁部をタタキ石として利用している。8は両面を凹石として、片側縁部を磨石として利用している。7は多孔質の安山岩、おそらく熔岩、8は安山岩である。同様な多目的石器が他に4点ある。

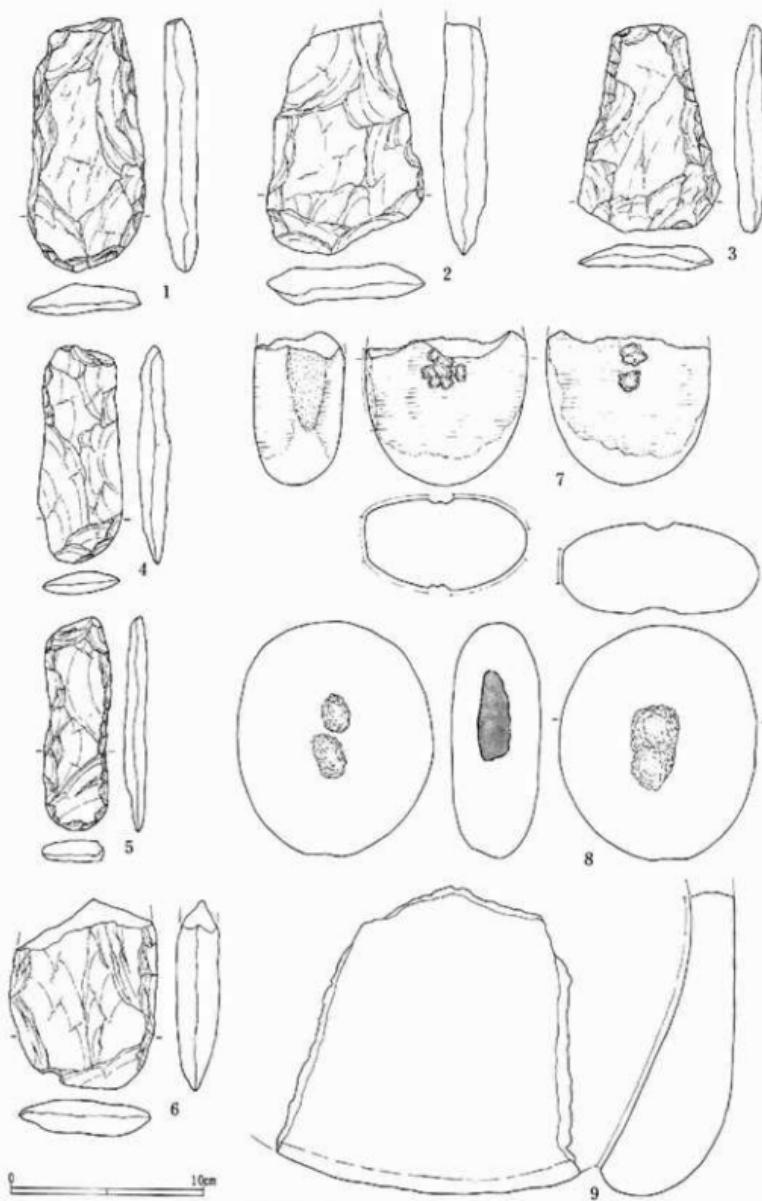
石皿（第35図9） 多孔質の安山岩、おそらく熔岩を用いているものと思われる。外面は敲打によって、凹凸なく皿状に整形されている。皿の作業面は平滑に磨耗しているが、断面にみえるように底部から縁部に至る中央付近がやや盛りあがる。

磨製石斧（第36図、第37図15・16） 乳棒状のもの（11・12・13）がある。いずれも欠損品である。11が安山岩、12が流紋岩、13が緑色の凝灰岩である。扁平な梢円形の断面の小型品（14・15）がある。いずれも蛇紋岩と思われる。扁平で、両縁部がやや平坦なもの（10・16）がある。いずれも縫はさほど明瞭ではないが、定角式と思われる。16は完形品で、両端に刃部をもつ。いずれもかなり硬質の凝灰岩と思われる。

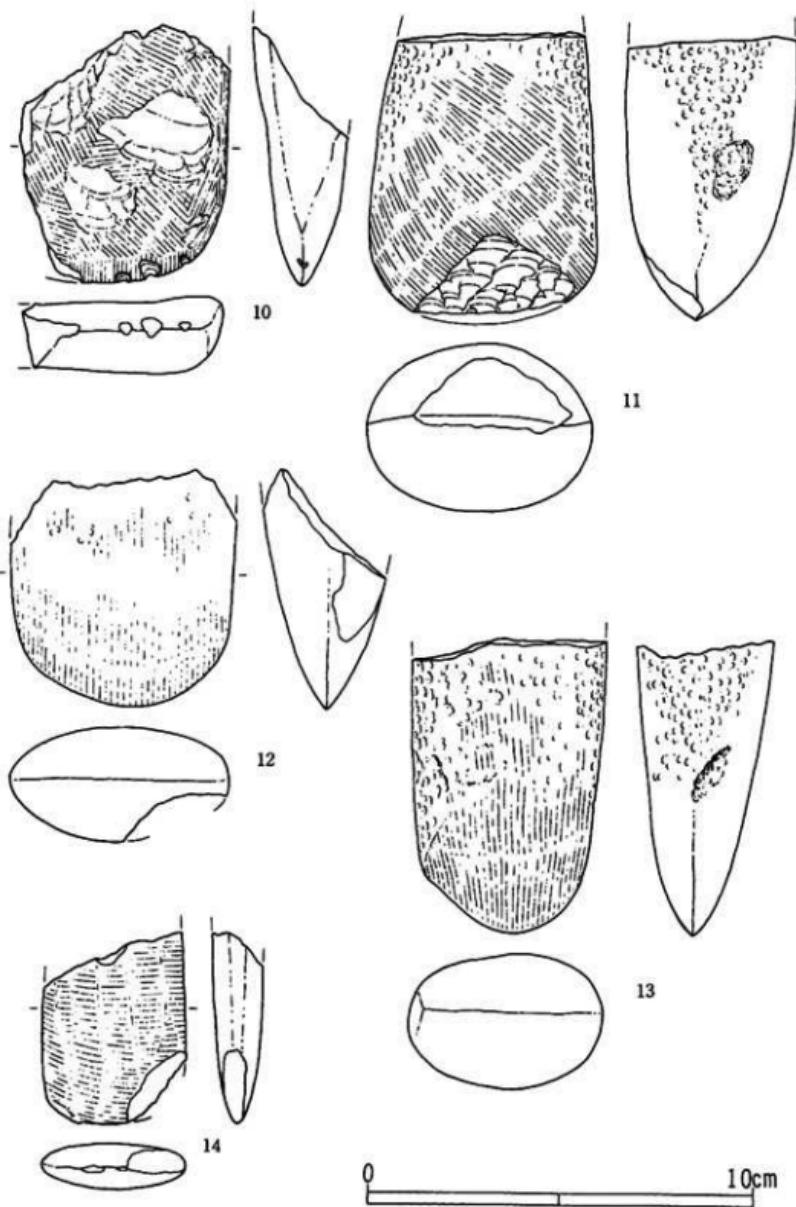
石匙（第37図17～19） ここに提示したもののみが出土した。すべて横型である。17は非常に薄く丹念に整形されている。前期のものであろう。下呂石風の安山岩である。18はチャート製で、裏面は抉り部のみに加工がある。19は安山岩製で周辺のみに加工がみられる。他の二者に比べて加工が雑である。

石槍（第37図20・21） いずれも基部のみの欠損品である。20はチャート、21は黒曜石である。先土器時代のもの可能性もあるが、関連品が皆無であり、一応縄文時代のものとしておきたい。

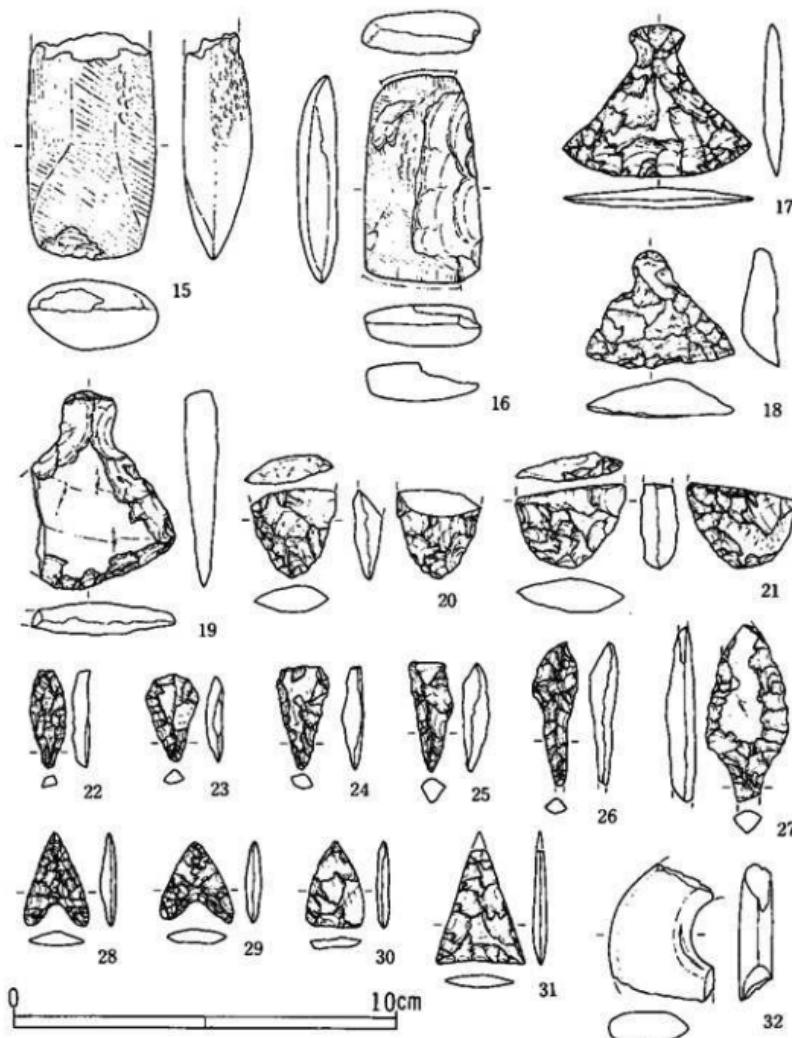
石錐（第37図22～27） 22は片面加工であるが、他はすべて両面に加工がみられる。筋鉤形のもの（22）、錐部と頭部とが連続的で、三角形状のもの（23～25）、頭部の明瞭なもの（26・27）がある。27は特に頭部が大型で、両面に周辺加工がみられるが、頭部端にゆくにしたがい加工が弱く小規模になる。断面はいずれも四角形である。いずれも黒曜石製である。



第35図 グリッド出土石器 その1



第36図 グリッド出土石器 その2



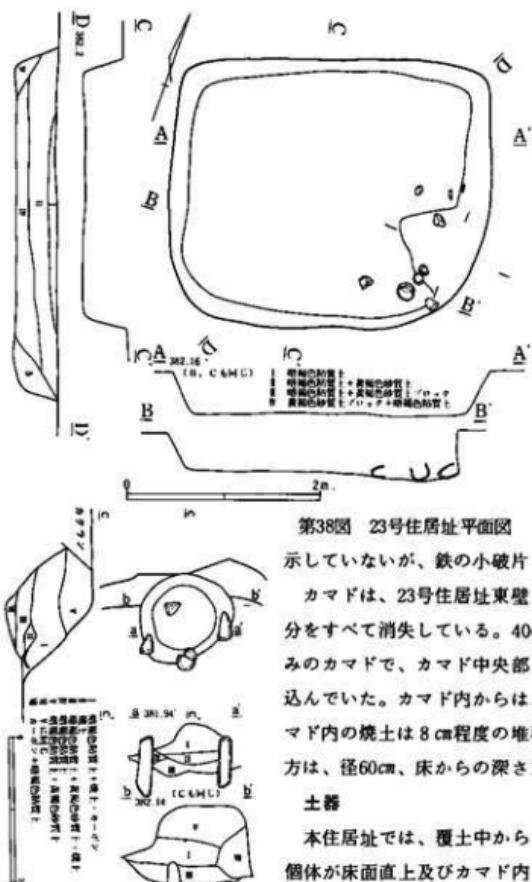
第37図 グリッド出土石器 その3

石錐（第37図28～31） 四基無茎錐（28・29）、平基無茎錐（30・31）とがある。28～30は黒曜石である。31は安山岩製で、薄く丹念に整形されている。

石製状耳飾（第37図32） 黒色で滑石のようにもろい石材で作られている。内側の断面はとがり、外側は丸い。前期のものであろう。

## 第2節 古墳時代

### ○23号住居址



第39図 23号住居址カマド実測図

1. カマド内出土。杯。口径12.4cm、器高4cm、底径4cmを測る。ナデの後、胴部から底部にかけてヘラ削りを行い、さらにヘラ磨きを行っている。口縁下の稜はあまり明確ではない。胎土は精選されており、焼成も良好である。外面淡褐色、内面は褐色を呈する。

2. カマドの脇に重ねられていたうちの土師器杯。口径11.6cm、器高3.6cm、底径3cmを測る。1と同様の整形がなされている。ヘラ磨きが丁寧に行われ外面上半は光沢がある。1に比べやや小型の杯で、口縁の立ち上がりがやや強い。胎土は精選されており、焼成も良好である。内外面とも暗褐色を呈する。

3. 2と重ねられていた須恵器杯。口径10.4cm、器高3.7cm、底径5.2cmを測る。ロクロ整形。底部は糸切り後ヘラ削りが行われている。

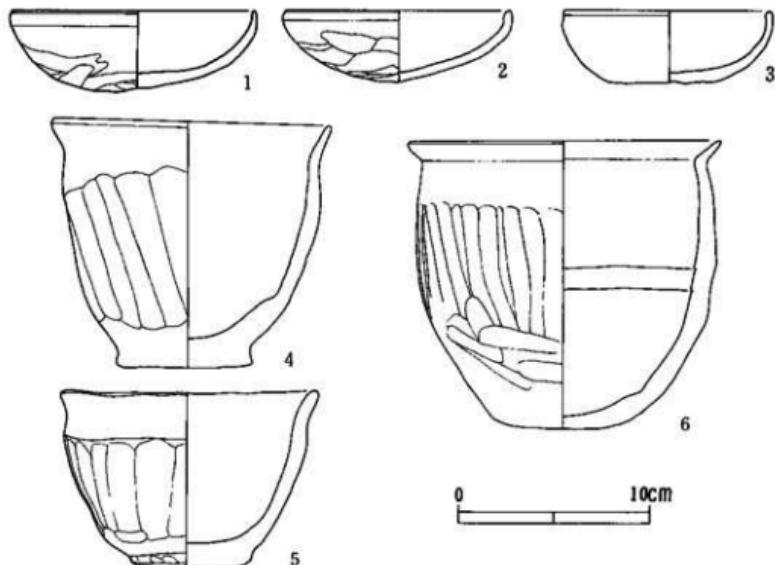
554+72N2、+76N2グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、ほぼ東西方向を向いており、長辺3.4m、短辺2.8m、壁高0.4mを測る。カマドは東壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。覆土は、暗褐色粘質土を主体とするもので、壁付近には、地山である砂質土の混入が目立つ。床は全面硬く踏み締められている。遺物はカマド付近に集中している。土師器と須恵器の壺各1個体が重ねられ、小型の甌3個体が置かれていた。また、カマド近くでは図示していないが、鉄の小破片も出土している。

カマドは、23号住居址東壁に接して攪乱があるため煙道部分をすべて消失している。40cm程度の平石を袖石とした石組みのカマドで、カマド中央部には、天井石らしき石片が落ち込んでいた。カマド内からは、壺1個体が出土している。カマド内の焼土は8cm程度の堆積である。なお、カマドの掘り方は、径60cm、床からの深さ10cmを測る。

#### 土器

本住居址では、覆土中からの遺物の出土ではなく、完形品6個体が床直上及びカマド内から出土している。

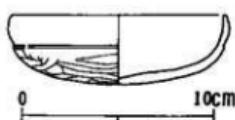
底部から口縁部にかけて、自然釉がみられる。4. 壁に倒れかかっていた壺で、口径14.1cm、器高12.7cm、底径6.6cmを測る。内外面とも横ナデ調整がなされ、胴部外面には縦方向のヘラ削りが施される。褐色を呈するが、胴下半内面は黒色を呈する。胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。5. 床面に倒れていた小型の壺である。口径13cm、器高9cm、底径5.7cmを測る。内面及び頸部外面には横ナデ調整がなされ、胴部外面は縦方向にヘラ削りが施されている。褐色を呈するが、外面の一部にススが付着し、胴下半内面は黒変しており、さらに、ところどころ剥離がみられる。胎土には小砂粒をわずかに含んでおり、焼成は良好である。6. 床に置かれていた壺である。口径15.8cm、器高14.9cm、底径6cmを測る。内面及び頸部外面には横ナデ調整がなされ、胴部外面から底部にかけて、縦方向のヘラ削りが施されている。本資料の胴部には輪積み痕が明瞭に残っており積み上げ後の接着面の潰し、さらにその後の横ナデが難に行われている。褐色を呈するが、底面は淡褐色、胴部外面から口縁部にかけてのスス付着、さらに内面の黒変及びほぼ全面の剥離など、火熱を受けた痕跡が明瞭である。胎土には砂粒が多く含まれている。



第40図 23号住居址出土土器

○27号住居址

554+76N2+N3,+80N2+N3 グリッド。1号方形石組遺構の北側に、かつて存在したと思われる住居址で、住居址北壁と考えられる部分にわずかに焼土粒子がみられた。東、西、南の各壁は確認されなかつたため、規模、形状は不明である。



第41図 27号住居址出土土器

床面は壁の立ち上がりから一部が確認されたにすぎず、柱穴も確認されなかった。焼土と落ち込みにより、一応住居址とすることとした。

遺物は杯一点だけで、口径11cm、器高3.6cmを測る。外面はヘラ削りの後、ヘラ磨きを施し、内面にはヘラ磨きがみられる。褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。

○52号住居址

555+56S1+N1,+60S1+

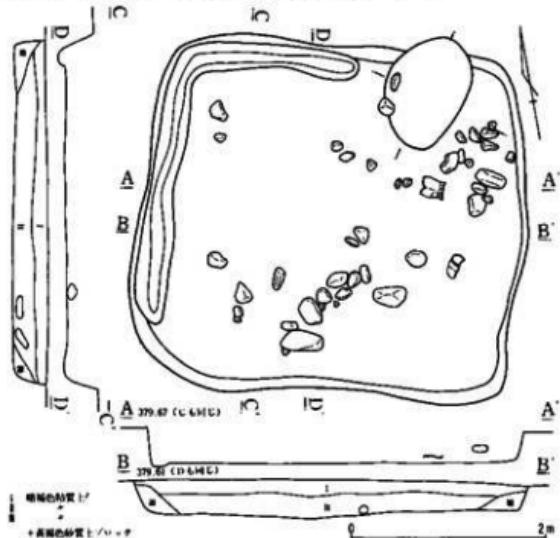
N1グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺4m、短辺3.5m、壁高0.3mとやや小型である。カマドは北壁の北東コーナー寄りに構築される。柱穴は確認されていないが、北壁から西壁にかけて、幅20cm~30cm、深さ10cm程度の周溝が存在する。壁は、北壁、西壁では垂直にちかい立ち上がりである。床は、ほぼ全面踏み固められていた。覆土は、暗褐色粘質土を主体とするもので、壁際には、地山である砂質土がブロック状に

混入している。遺物は土器だけで、床面のほぼ全面とカマド内から多く出土している。

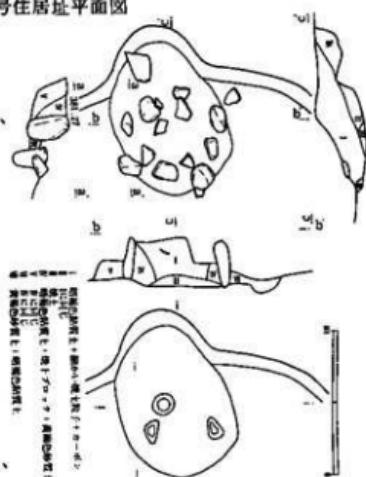
カマドは、30cm程度の平石を袖石に用いた石組みカマドで、カマド中央部には天井石らしき石の落ち込みがみられる。立てられていた袖石は左右2枚ずつで、前部の2枚は掘り込みが床面下に及んでいる。掘り方は、120cm×80cmを測り、本体の床面下への掘り込みはみられない。焼土の堆積は約5cmを測る。

土器

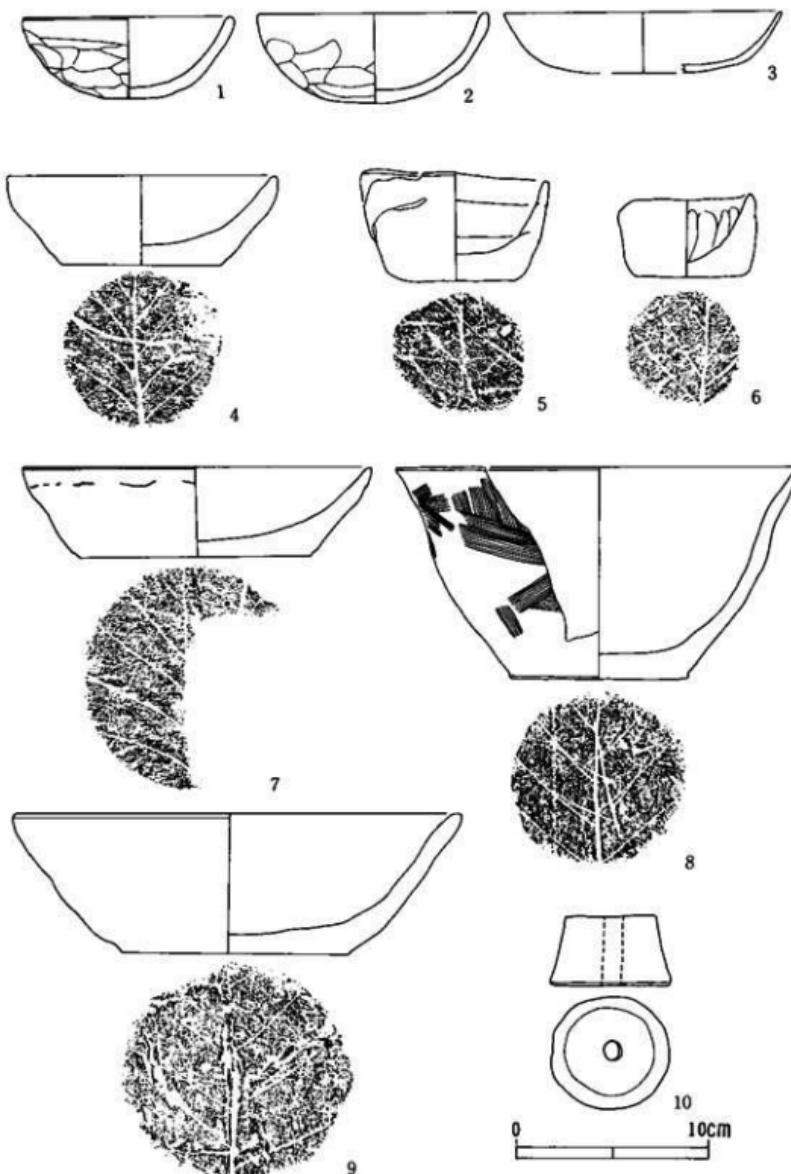
1. 床面直上出土。杯。口径10.5cm、器高4.3cm、底径3.3cmを測る。横ナデ後、外面にヘラ削りを施す。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、黄褐色を呈する。2. 床面直上出土。杯。口径11.7cm、器高4.4cm、底径3cmを測る。整形、胎土、色調とも1に同じ。3. 覆土出土。杯。口径14.2cm、器高3.1cm程度と推定される。磨滅が激しいが、磨きは丁寧



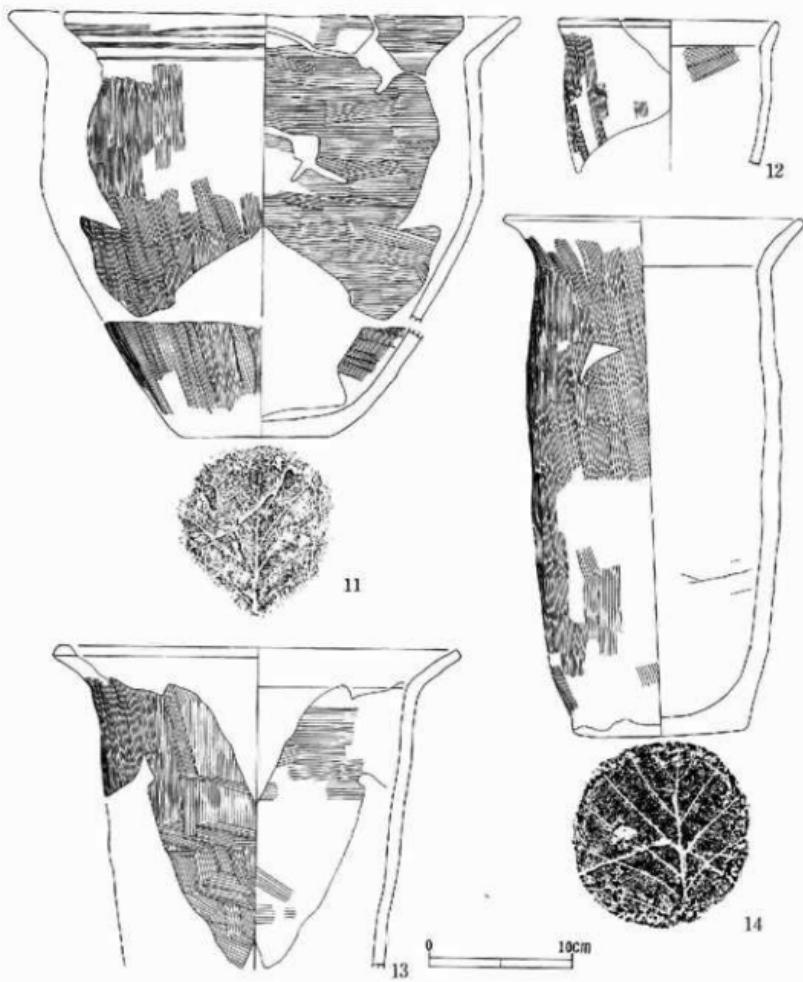
第42図 52号住居址平面図



第43図 52号住居址カマド実測図



第44図 52号住居址出土土器 その1



第45図 52号住居址出土土器 その2

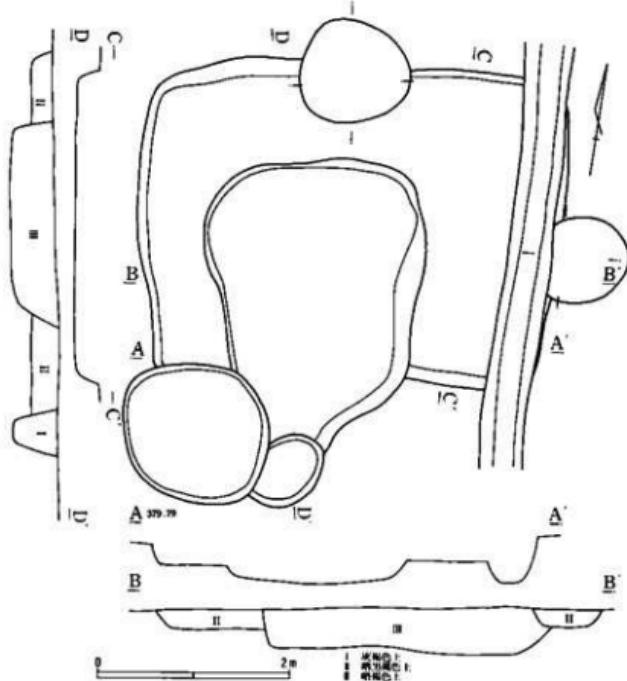
である。明褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。4. 床面直上出土。鉢。口径13.6cm、器高4.6cm、底径8cmを測る。内面は横ナデ、外面は指頭による調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。黄褐色を呈する。5. カマド内出土。手捏ね。器高6.5cm、底径5.6cmを測る。輪積み痕が残り、整形は雑である。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。黄褐色を呈する。6. 床面直上出土。手捏ね。口径6.3cm、器高4cm、底径6cmを測る。整形、胎土、焼成は5と同じであるが、内面には指頭調整がみられる。赤褐色を呈する。7. 床面直上出土。鉢。口径17cm、器高4.6cm、底径11.8cmを測る。外面には輪積み痕が明瞭で、

調整は難である。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、黄褐色を呈する。 8. カマド内出土。鉢。口径21cm、器高11cm、底径9cmを測る。内面は横ナデ、外面はハケ調整がなされる。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。 9. カマド内出土。鉢。口径23cm、器高7.2cm、底径11.6cmを測る。内外面とも横ナデ。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、赤褐色を呈する。後述する壺と同じ胎土である。 10. 床面直上出土。紡錘車。台形を呈し、上底4.6cm、下底6cm、器高3.6cm、孔径1cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は良好で、褐色を呈する。 11. 床面直上出土。壺。口径34.6cm、底径10cmを測り、器高は30cm程度と推定される。内面及び口縁部外面は横方向の、胴部外面には縱方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。 12. 床面直上出土。壺。口径14.7cm。整形は11と同じ。胎土には砂粒が多い。焼成は良好で、赤褐色を呈する。 13. 床面直上出土。壺。口径27.4cm。磨滅が激しいが、内外面にハケ調整痕が残る。胎土、焼成、色調は11に同じ。胴下半内面は黒変している。 14. 床面直上出土。壺。口径20cm、器高36cm、底径11.8cmを測る。内面は横ナデ、外面には縱方向のハケ調整がなされている。外面には、使用中の「吹き零れ」による付着物がほぼ全面にみられる。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。

#### ○53号住居址

555+72S2-S3、  
+76S2-S3グリッド。本住居址は、2基のカマドをもつ。  
あるいは、2m四方程度の小型の住居址の重複とも考えられるが、調査段階では、セクションでの切り合いや張り床などは検出されなかつたため、一軒の住居址として扱うこととする。

隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.4m、短辺3.2m、壁高0.25mを測る。  
カマドは北壁及び東壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかつた。床は、カ



第46図 53号住居址平面図

マド付近だけが踏み固められており、他部はやや軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土ブロックが少量混入する。

北壁のカマド（カマド1）は、 $110\text{cm} \times 90\text{cm}$ の掘り方をもち、床面下への掘り込みは $10\text{cm}$ を測る。本体に石は用い第47図 53号住居址カマド2実測図す、袖石の代わりに、底部欠損の甕を伏せて用い、天井石の代わりに円筒形土器を用いている。焼土はほぼ全面に散っているが、焼土層は $8\text{cm}$ を測る。東壁のカマド（カマド2）にも石組みはみられなかった。 $100\text{cm} \times 100\text{cm}$ の掘り方をもち、焼土粒子はほぼ全面に散っていた。

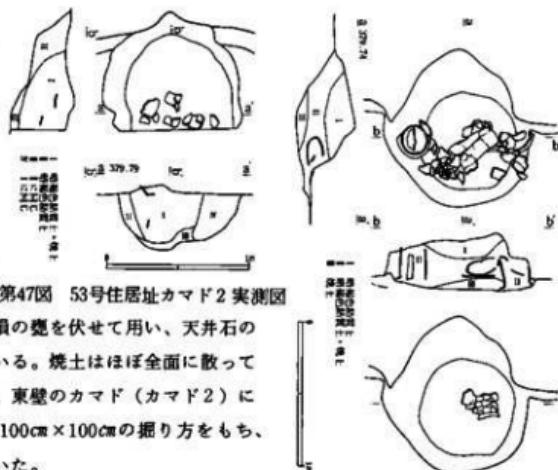
#### 土器

本住居址では、床面直上、覆土からの遺物出土はわずかで、北壁のカマド（カマド1）からがほとんどである。1. カマド1出土。甕。口径 $16.2\text{cm}$ 、器高 $16.5\text{cm}$ 、底径 $10\text{cm}$ を測る。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。口縁部外面が暗褐色、他部は赤褐色を呈するが、胴下半外面はとくに赤変し、剥離も目立つ。

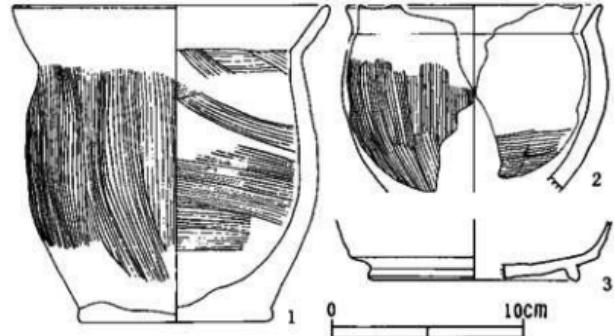
2. 覆土出土。甕。磨滅が激しいが、内面には横方向の、外面には縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、内面黒色、外面褐色を呈する。3. 床面直上出土。須恵器坏。台部径推定 $10.5\text{cm}$ 。クロロ整形。台部は整形後の貼り付けによる。外面には回転ヘラ削りが施される。胎土、焼成は良好で、灰色を呈する。4. カマド1出土。甕。口径 $20.6\text{cm}$ 、器高 $32.8\text{cm}$ 、底径 $9.1\text{cm}$ を測る。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。胴部外面の一部が、黒ないし暗褐色を呈し、他部は赤褐色を呈する。本

資料は、カマドの右袖に使用されたもので、ところどころに剥離がみられる。

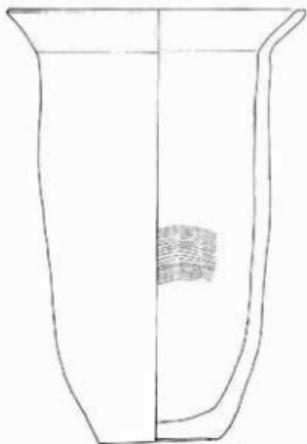
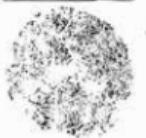
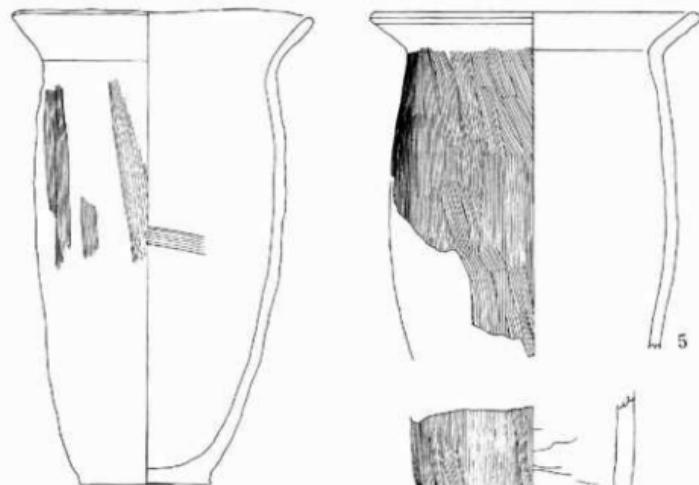
5. カマド1出土。甕。口径 $21.9\text{cm}$ 。口縁部は横ナデ、内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされる。4に比べ



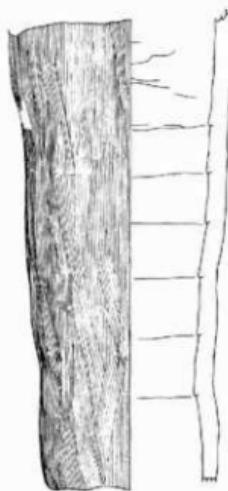
第48図 53号住居址カマド1実測図



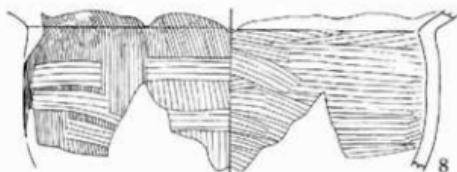
第49図 53号住居址出土土器 その1



6



7



8

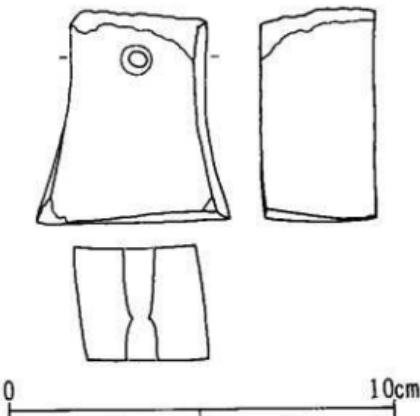


第50図 53号住居址出土土器 その2

やや胴が張る。胎土、焼成は4と同じ。赤褐色を呈する。本資料もカマドの左袖に使用されたもので、外面の一部に剥離がみられる。6. カマド1出土。甕。口径19.8cm、器高29.8cm、底径8.4cmを測る。内面には横方向のハケ調整がなされるが、外面は剥離が激しく、調整は不明。胎土、焼成は4と同じ。赤褐色を呈するが、とくに下半は赤変が著しい。7. カマド1出土。円筒形土器。上部径15.4cm、下部径11.8cmを測り、両端を欠損した現存高32.4cmを測る。外面は縦方向のハケ調整が、内面には指頭によるナデがなされているが、輪積み後の済しが難ため、輪積み痕が明瞭である。本資料は、4、5の間に横たわっていたもので、カマドの天井石代わりに使用されていたと思われる。火熱による剥離がみられる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、外面褐色、内面赤褐色を呈する。8. カマド2出土。甕。頸部径推定28.2cm。内面には横方向のハケ調整、外面は縦方向で行なった後横方向のハケ調整がなされている。4、6などに比べ、胴の張る球形にちかい甕である。胎土は比較的精選されており、焼成も良好で、内外面明褐色を呈する。

#### 石器

砥石が1点出土した。硬質の凝灰岩製である。図の上面を除き、すべての面が研磨されている。図正面及びその裏面、それから底面については、非常に平滑で、平坦である。正面は、断面にあるようにやや突起をもち、他の二者はやや膨む。両側面は湾曲し、風字形になっている。断面は、やや膨をもっている。上面は割れた面であるが、素材時のものか使用時のものかは不明である。上部にかたよって、穴があいているが、断面にみると両側から穿孔されている。図正面からの作業が深くなされている。断面から判断するかぎりでは工具の先端は丸みをもっているものと推定される。

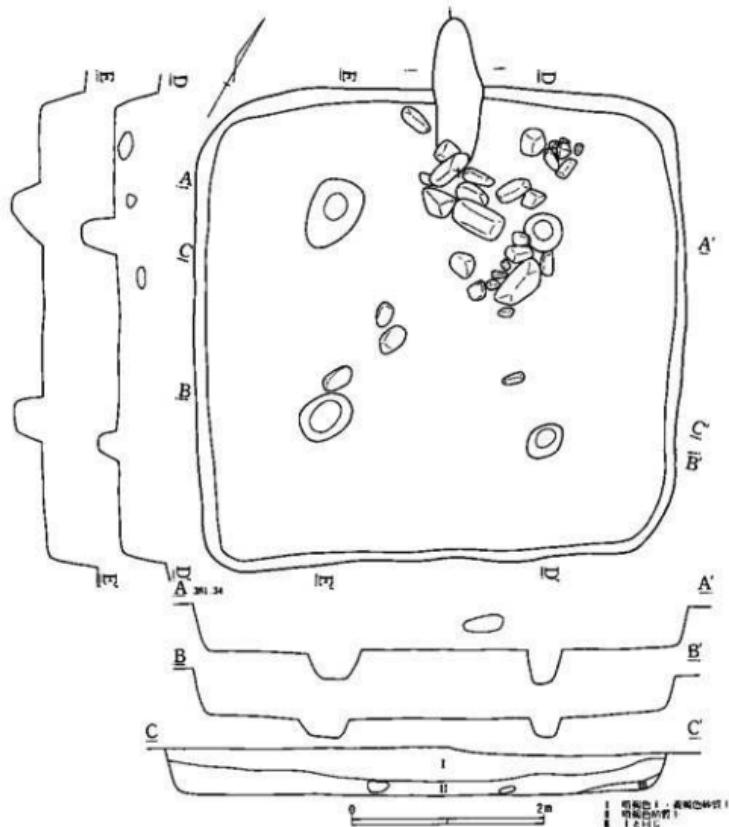


第51図 53号住居址出土石器

#### ○54号住居址

555+68S1+N1,+72S1+N1グリッド。隅円方形を呈し、長辺5.1m、短辺4.9m、壁高0.4mを測る。カマドは北壁に構築される。壁は比較的強く立ち上がっている。床は、カマドちかくだけが踏み固められており、他部は軟弱である。周溝は存在しないが、柱穴は4本が確認された。いずれも、径40cm~50cm、深さ30cm程度である。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、壁ちかくでは砂質土がブロック状に混入している。

カマドには石組みはみられなかった。掘り方は、150cm×60cmと非常に細長く、床面下への



第52図 54号住居址平面図

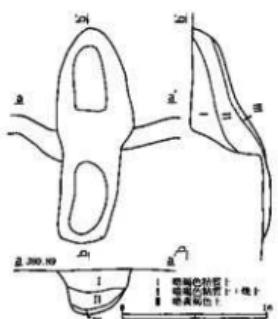
掘り込みは5cmと浅い。焼土は、ブロック状に10cm程の堆積がみられた。

#### 土器

本住居址からは出土遺物が少なく、その中でも覆土から出土したものが多くを占める。

1. 覆土出土。壺。口径14.4cm、器高3.4cm程度と推定される。外面下半にヘラ削りがみられる他はナデ調整である。胎土に砂粒多く、焼成は良好で、暗褐色を呈する。

2. 覆土出土。壺。口径17cm、器高4.8cm、底径8cm程度と推定される。調整、胎土、焼成とも1と同じ。褐色を呈する。

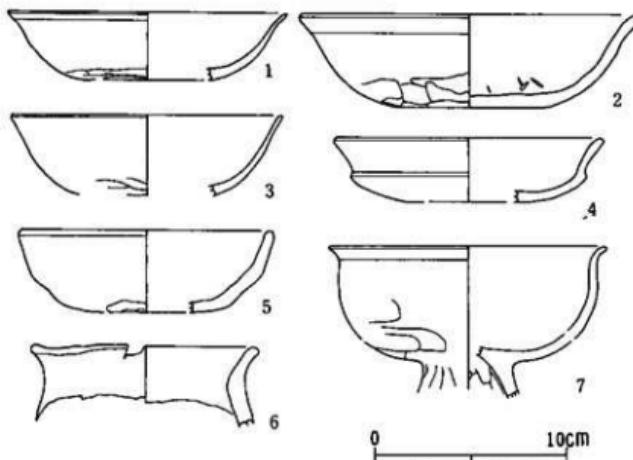


第53図 54号住居址カマド実測図

覆土出土。杯。口径14cm程度と推定される。内面にはナデ、外面にはヘラ削りがみられるが、雑なつくりである。胎土、焼成、色調は1と同じ。

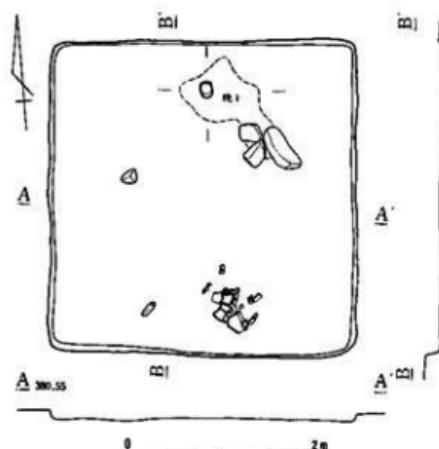
4. 覆土出土。杯。口径13.8cm、底径6cm、器高3.3cm程度と推定される。内外面ともナデ調整がなされる。胎土、焼成は

1と同じ。5. 床面直上出土。杯。口径13cm、器高4.2cm程度と推定される。内面は横ナデ、外面下半はヘラ削りが行われる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。6. 床面直上出土。甕。口径11.4cm程度と推定される。現存部分は内外面とも横ナデ調整がなされる。胎土、焼成、色調は5と同じ。7. 覆土出土。高杯。杯部の上半は横ナデ、下半はヘラ削りがなされている。胎土は精選され、焼成も良好である。黄褐色を呈する。



第54図 54号住居址出土土器

### 第3節 奈良時代



第55図 3号住居址平面図

#### ○ 3号住居址

556+24S1-N1.+28S1グリッド。ほぼ正方形を呈する住居址で、一边3.2m程度である。黒色土中



第56図 3号住居址内構造図



第57図

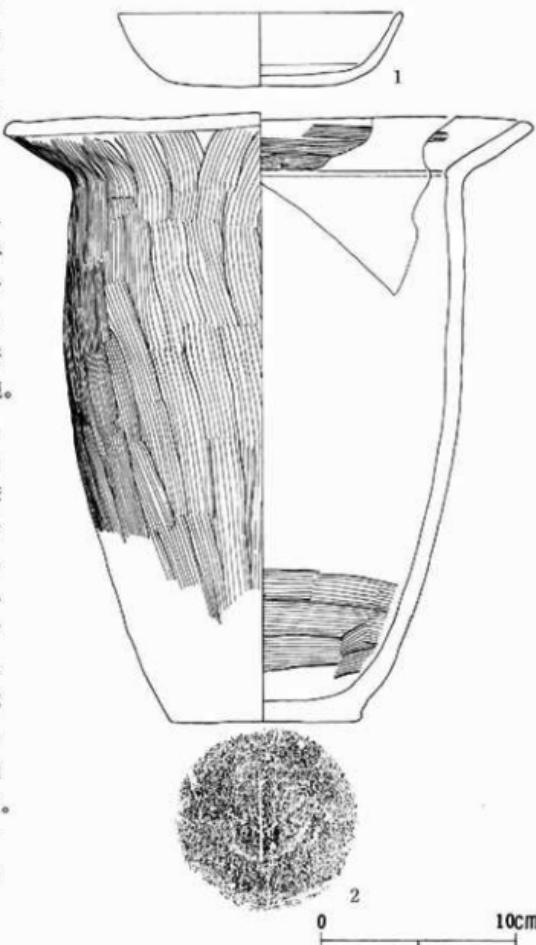
3号住居址内微細図 みが確認されたにすぎない。

遺物も極めて少なく、焼土に乘るかたちで、杯が1点、床面直上から甕が1点出土し、他には復元不可能な甕の小破片が出士しただけである。

#### 土器

1. 杯。口径14.4cm、器高3.7cm、底径8.5cmを測る。内外面ともに、横ナゲ後ヘラ磨きを行っている。胎土はとくに精選されている。焼成も良好で、淡褐色を呈する。 2. 甕。口径26cm、器高31.2cm、底径9.5cmを測る。第57図に示したように、底部は伏したかたちで床面に接し、口縁から胴部の破片はその上に乗った状態で出土した。内面の胴下半から底部にかけては、指頭による調整、胴下半及び口縁内面はハケ調整がなされる。外面は、口縁から底部にかけて縦方向のハケ調整がなされている。胎土は比較的精選されており、焼成も良好である。外面暗褐色、内面赤褐色を呈するが、底部外面は、火熱によるものか、赤色を呈している。

に掘り込まれた住居址のため、プラン確認に手間どり、床面から10cm程度の高さまで落とし確認された。この間、カマドの焼土、石組みなどは確認されておらず、第55図、56図に示したように、北壁に存在したカマドは破壊されていたと思われる。床面は、焼土が散っていた範囲が踏み固められていたほかは、極めて軟弱であった。柱穴、周溝などは検出されず、焼土下に、65cm×85cm、深さ10cm程度の浅い掘り込



第58図 3号住居址出土土器

### ○32号住居址

555+80 S 2グリッド。ほぼ正方形を呈する住居址で、一辺2.7m、壁高0.5m~0.6mを測る。カマドは東壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。覆土は、暗褐色粘質土を主体とするもので、壁付近には、黄褐色砂質土がブロック状に堆積している。壁は、比較的立ち上がりが強い。床は、踏み固められた部分が多く、床面には30cm~40cm程度の石が置かれていた。

カマドは、一部擾乱を受けている。このカマドには、石組みはみられず、また、袖石などの掘り込みもみられない。逆に、カマド内の焼土、カーボンを覆うように、黄褐色粘土が残存していることから、粘土の積み上げによるカマドと推定される。カマド内からは、土器の小破片が出土しただけである。

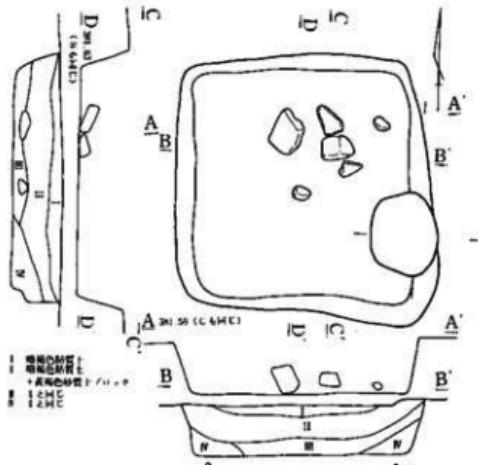
#### 土器

1. 覆土出土。壺。口径14.1cm、器高3.5cm。底部は糸切り後ヘラ削りを行っているが、中心部分には糸切り痕が明瞭に残る。内面には横ナデ調整がなされている。胎土は精選されており、赤色粒子を多く含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。

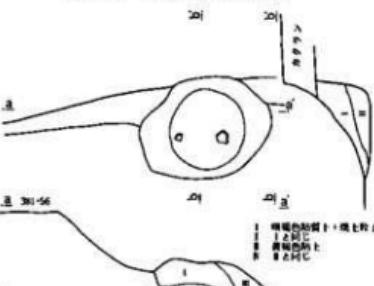
2. 覆土出土。壺。底径4cm。内面横ナデ、外面にはヘラ削りがなされる。胎土は1と同様に赤色粒子を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

#### ○50号住居址

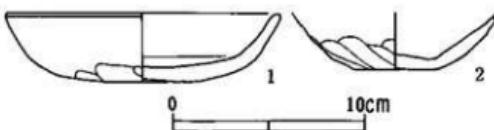
555+48 S 5+S 6,+52 S 5+S 6グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4m、短辺3.7m、壁高0.4m~0.5mを測る。カマドは東壁中央に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は暗褐色粘質土を主体とするもので、壁付近には、黄褐色砂質土ブロックが多く含まれる。床は踏み固められており、住居の東半には、カマド付近を中心に焼土粒子が散っている。



第59図 32号住居址平面図



第60図 32号住居址カマド実測図



第61図 32号住居址出土土器

カマド付近には礫が多くみられるが、40cm程度のものが、1個みられただけで、他は20cm以下程度のものである。袖石の掘り込みはとくにみられない。カマド内には黄褐色粘土が最下面にみられ、また、本来袖石のみられる部分にも粘土があることから、カマド本体は粘土の積み上げによるもので、部分的な補強に石を用いたものと推定される。遺物は、カマド内及び覆土中から数点の土器と軽石1点が出土しており、床面直上からは出土していない。

#### 土器

1. カマド内出土。壺。口径15cm、器高3.6cm、底径10cm程度と推定される。内面横ナデ、外面下半はヘラ削りが行われる。胎土は精選されており、表面のざらつきはみられない。やはり、赤色粒子が含まれる。焼成は良好で、内面明褐色、外面淡褐色を呈する。

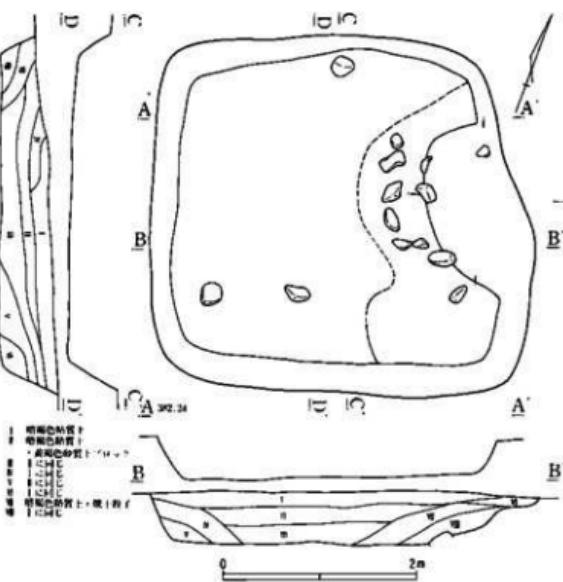
2. カマド内出土。壺。口径14.6cm、器高3.7cm、底径9cm程度と推定される。調整は1と同様であるが、整形は極めて雑である。

胎土には小砂粒が多く、赤色粒子とともに、石英粒、雲母なども認められる。焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。

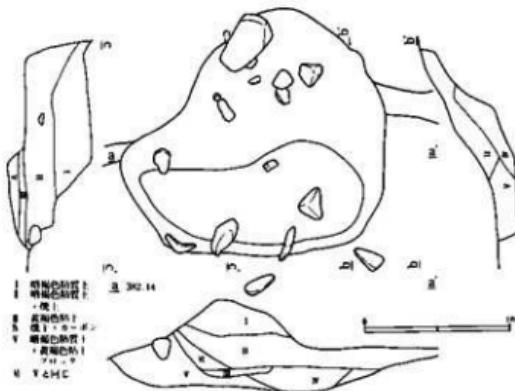
3. 覆土出土。壺。口径14.3cm、器高3.4cm程度と推定される。調整は1、2と同様であり、表面のざらつきはない。胎土は精選され、赤色粒子が認められる。焼成も良好で、内外面ともに淡褐色を呈する。

4. 覆土出土。壺。小破片で、口径14.8cm程度と推定される。磨滅しており、調整は不明である。胎土には砂粒が多く含まれ、外面暗褐色、内面明褐色を呈する。

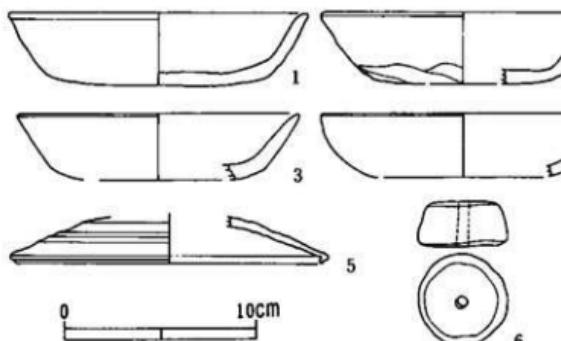
5. 覆土出土。須恵器蓋。径15.7cm程度と推定される。内面には「か



第62図 50号住居址平面図

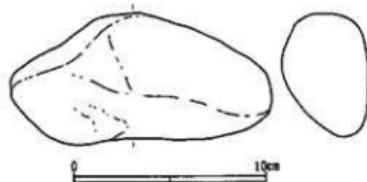


第63図 50号住居址カマド実測図



第64図 50号住居址出土土器

「えり」がつく。ロクロ整形後、外面上部にヘラ削りを施す。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈する。6. カマド内出土。紡錘車。上底3.4cm、下底4.5cm、器高2.3cm、孔径0.6cmを測る。全面磨滅が激しい。胎土に砂粒が多く、焼成は良好で赤褐色を呈する。



第65図 50号住居址出土石器

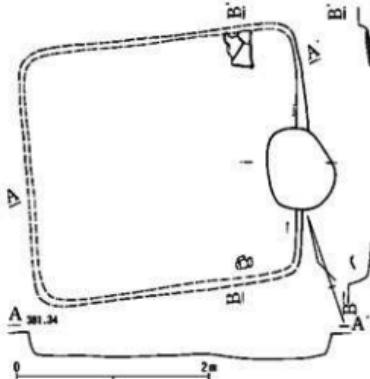
#### 石器

軽石の円礫である。磨きや敲打などの加工の跡は、全くみられない。16号住居址で出土したものに比べて、大型で長細い形をしている。加工はないが、中央がやや痙攣しているので、この部分に紐を掛け、浮子として利用したのかもしれない。

#### ○57号住居址

555+60N2+N3,+64N2+N3グリッド。隅円方形を呈すると思われる住居址で、東壁以外の三辺は確認されなかった。長辺3m、短辺2.7m、壁高0.2m程度と推定される。カマドは東壁に構築される。柱穴、周溝は確認されず、床面もカマド付近以外は軟弱である。

カマドは、30cm程度の礫を立てて袖石とする石組みのカマドで、掘り方は80cm×80cmを測る。天井石は、残存していなかった。焼土は8cmの堆積である。



第66図 57号住居址平面図

遺物は、カマド内及び住居址東半の床面上から出土している。

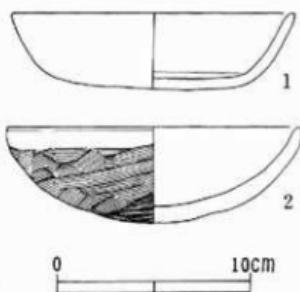
#### 土器

1. カマド内出土。杯。口径14.4cm、器高3.8cm、底径9.8cmを測る。内外面とも横ナデ、底部外面にはヘラ磨きがなされている。表面のざらつきはみられないが、

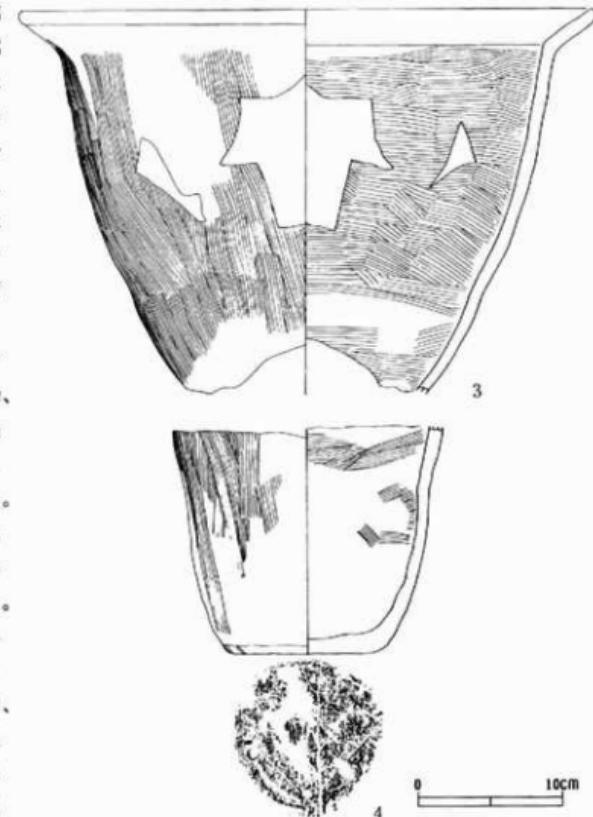
第67図  
57号住居址カマド実測図

内外面ともところどころ剥離している。胎土は精選されており、赤色粒子がみられる。焼成も良好で、淡褐色を呈する。  
 2. カマド内出土。杯。口径14.9cm、器高5cmを測る。内面横ナデ、外面は横方向のハケ調整がなされている。胎土には砂粒が多く含み、焼成は良好である。赤褐色を呈する。  
 3. カマド内出土。壺。口径39.3cm、頸部径34cmを測る。極端に底部が狭くなる器形の壺で、むしろ鉢にちかいものである。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされている。整形はやや難で、内面の一部には輪積み痕が残る。胎土は精選されており、焼成も良好である。内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。

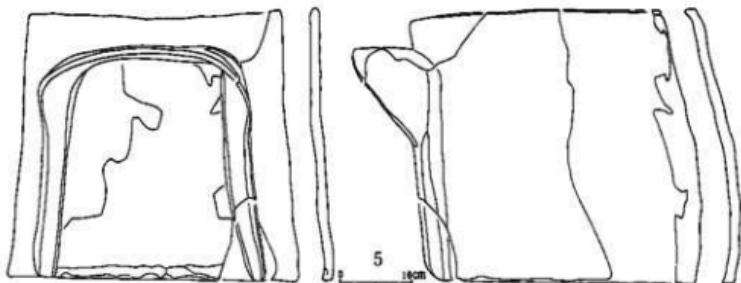
4. カマド内出土。壺。底径10cm。内面下部は部分的に黒変し、一部剥離がみられる。内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整がなされる。やはり、内面には部分的に輪積み痕が残る。胎土は精選され、焼成も良好である。内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。  
 5. 床面直上出土。置きカマド。器高36cm、奥行34cm、炊き口高32cm、上端部径32cmを測る。内外面ともに横ナデ調整がなされる。炊き口及び本体の上部は5cm程の幅で黒変しており、使用を物語っている。本体の整形は丁寧に行われているものの、炊き口部の貼り付けはやや難で、表面が荒れている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。



第68図 57号住居址出土土器その1



第69図 57号住居址出土土器 その2



第70図 57号住居址出土置きカマド

#### 第4節 平安時代

##### 1. 住居址

○26号住居址

555+08N6+N7,+12  
N6+N7グリッド。隅円長方形を呈すると思われ、長辺4.2m、短边3.7mを測る。北辺、南辺、北西コーナーに擾乱を受けしており、カマドは確認されなかった。本住居址は掘り込みが浅く、確認面からの壁高は10cmに満たない。床は全体に軟弱である。遺物は床面直上及び覆土から土器3点が出土したにすぎない。

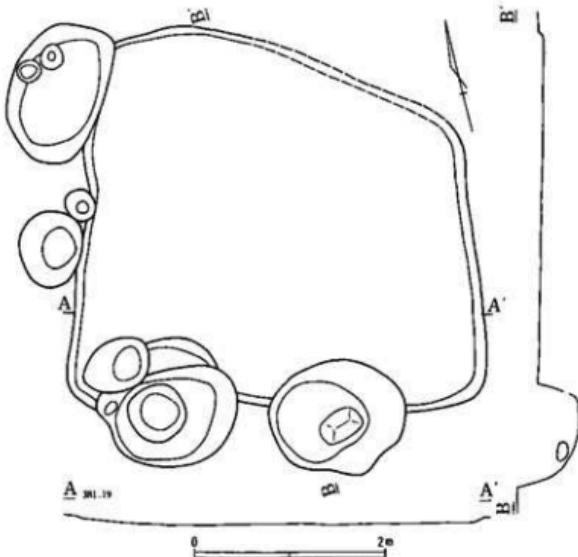
##### 土器

1. 床面直上出土。壺。

口径11.4cm、器高4.1cm、底径6.5cmを測る。外面上半及び内面は横ナデ、外面下半はヘラ削りがなされる。底部にもヘラ削りが施されているが、糸切り痕が一部に残る。なお、底部には、図版66に示した、ヘラによる沈刻がある。また、外面にはタール状の付着物がみられる。胎土は精選され、焼成も良好である。内面明褐色、外面暗褐色を呈する。

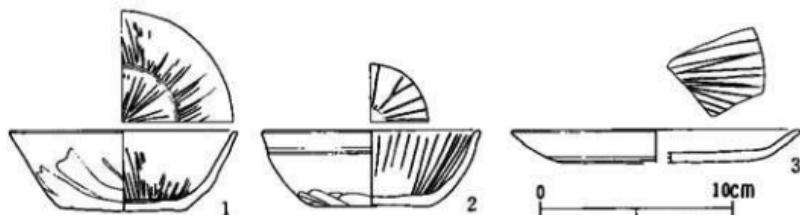
2. 覆土出土。壺。口径11.1cm、器高3.8cm、底径5.8cmを測る。外面上半及び内面は横ナデ、外面下半から底部にはヘラ削りがなされ、内面の暗文は、みこみ部にまで及ぶ。胎土には赤色粒子を含み、焼成も良好で、褐色を呈する。

3. 覆土出土。皿。整形は1、2と同じ。暗文もみこみ部に及ぶ。胎



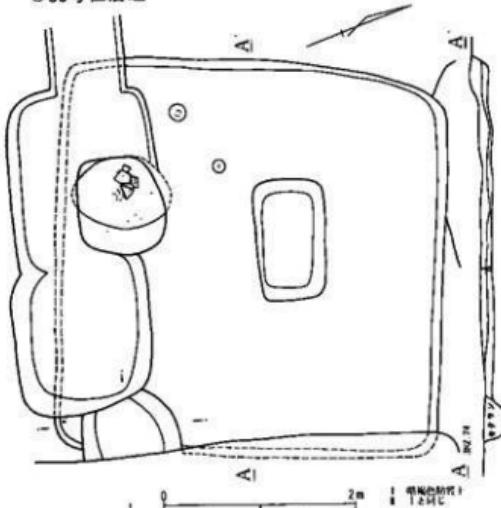
第71図 26号住居址平面図

土は2と同じで、焼成は良好である。明褐色を呈する。

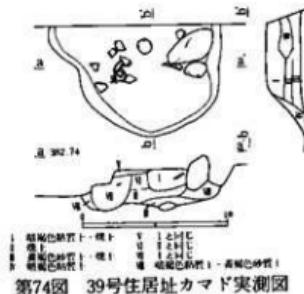


第72図 26号住居址出土土器

○39号住居址



第73図 39号住居址平面図

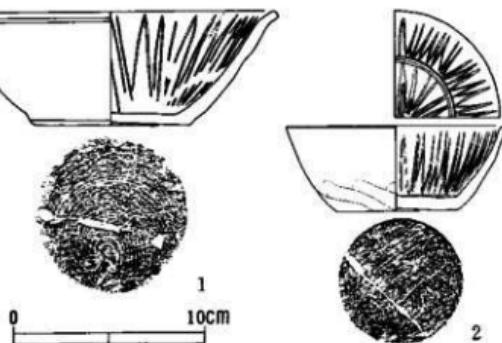


第74図 39号住居址カマド実測図

555+04 S 6・S 7,+08 S 6・S 7

グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.6m、短辺4m、壁高0.2mを測る。カマドは東壁に構築される。東壁、南壁は攪乱を受け、カマドの一部も破壊されている。柱穴、周溝は確認されなかつたが、径15cm程度の小ピット2基が確認された。床は、全体的に軟弱であるが、カマド付近だけが踏み固められていた。覆土は、暗褐色粘質土を主体とする。

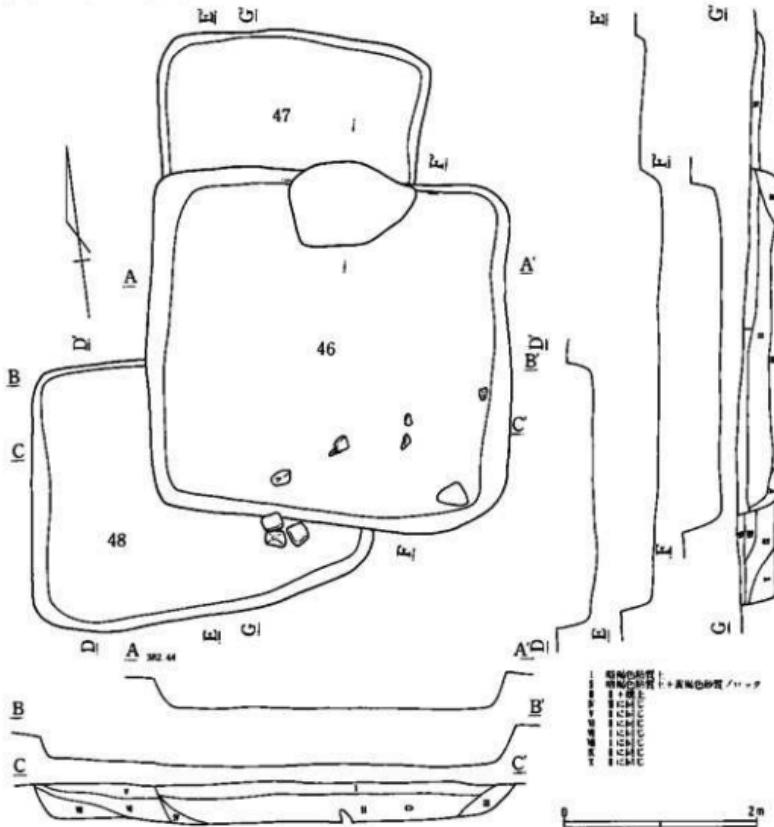
カマドの掘り方は150cm×100cmで、床面下への掘り込みは極く浅い。カマド内には、20cm程の礫がみられ、石組みカマドと思われる。焼土の堆積は10cmを測る。



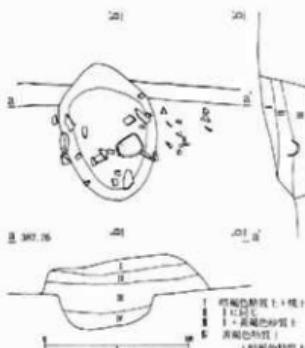
第75図 39号住居址出土土器

遺物は土器だけで、床面直上から2点、他にカマド内から復元不可能な壊れ小破片が出土している。1. 床面直上出土。杯。口径16.8cm、器高5.9cm、底径8cmを測る。内外面とも肩部は横ナデ、底部内面はヘラ磨き、底部外面は糸切り後、ヘラ削りが一部になされている。口唇部には明瞭な稜がつくり出されている。内面の暗文は、みこみ部には達していない。本資料は、器体の半分に火熱を受けたらしく、その部分の剥離と黒変が認められる。胎土は精選され、赤色粒子が混入する。焼成は良好で、明褐色を呈する。2. 床面直上出土。杯。口径11.3cm、器高4.4cm、底径6.3cmを測る。内面は横ナデ、底部内面にはヘラ磨きが施される。外面は横ナデ後ヘラ削り、底部外面は糸切り、ヘラ削りの後、拓本に示したようなヘラによる沈刻が施される。内面の暗文は、みこみ部にまで及び、屈曲部にも施されている。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内面暗褐色、外面赤褐色を呈する。

○46号・47号・48号住居址



第76図 46号・47号・48号住居址平面図



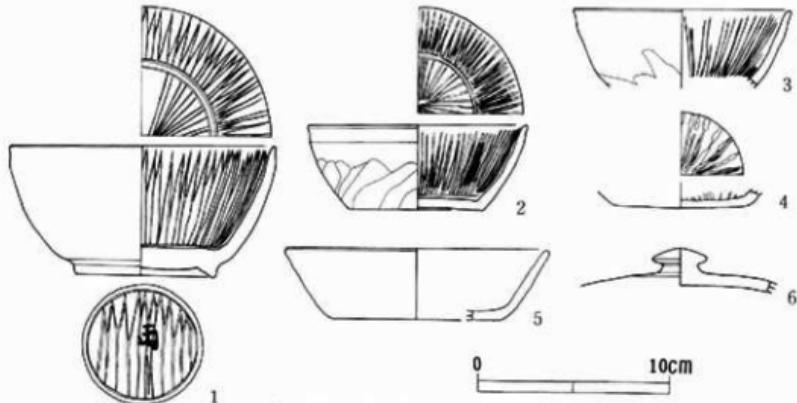
第77図 46号住居址カマド実測図  
軟弱な部分が多く、47号住居址も、踏み固められた部分は確認されなかった。壁の立ち上がりは、46号、48号住居址は強く、47号住居址は残存部分で見る限り、弱い。

遺物は土器だけで、46号住居址は床面直上及びカマド内から出土しているが、48号住居址からは全く出土せず、47号住居址も覆土中から1点出土したにすぎない。

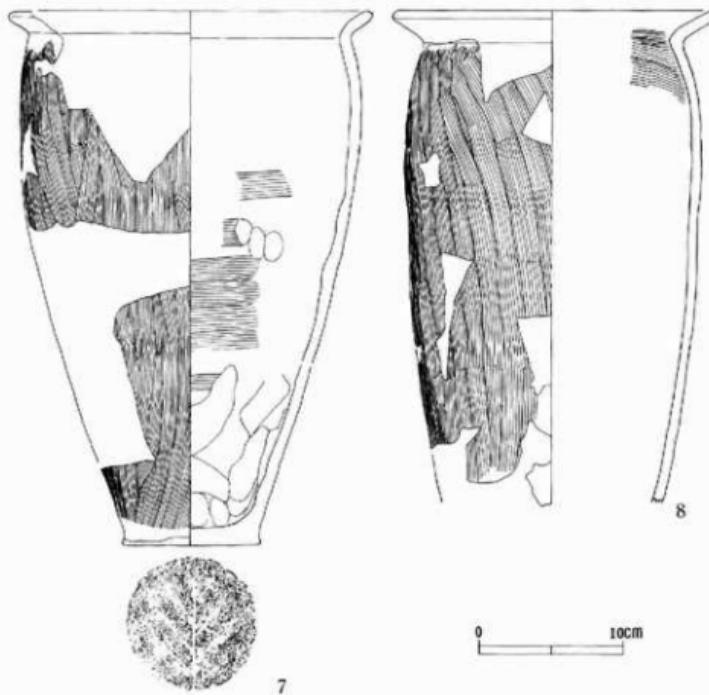
46号住居址カマドは、95cm×65cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みも深く、30cmを測る。袖石、天井石などは内部に存在せず、粘土積み上げによると思われる。なお、確認された焼土は極くわずかであった。

#### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径13.5cm、器高6.8cm、底径7cmを測る。内面は横ナデ、外面にはヘラ磨きが行われる。台部は貼り付けにより、底部には「丙」の墨書きがみられる。内面の暗文は、みこみ部に及ぶ。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、褐色を呈する。 2. 床面直上出土。杯。口径11.4cm、器高4.4cm、底径7cmを測る。内面横ナデ、外面は横ナデ、



第78図 46号住居址出土土器 その1



第79図 46号住居址出土土器 その2

ヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。内面の暗文は、みこみ部に及ぶ。胎土、焼成、色調は1と同じ。3. カマド内出土。壺。口径11cm。整形、胎土、焼成は2に同じ。明褐色を呈する。

4. 床面直上出土。壺。底径6.8cm。外面は全面丁寧なヘラ磨きが行われている。内面は横ナデ後、暗文が施文される。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成も良好で、内面黒色、外面明褐色を呈する。5. 床面直上出土。壺。小破片で、口径13.5cm程度と推定される。内外面とも横ナデ調整がなされるが、外面に磨きはみられない。内面には暗文が施文されるようである。胎土、焼成は2に同じ。褐色を呈する。6. 床面直上出土。須恵器蓋。ロクロ整形後、外面にヘラ削りがなされる。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈する。7. カマド内出土。壺。口径24.4cm、器高36.6cm、底径9.4cmを測る。内面横方向の、外面縦方向のハケ調整。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。

8. カマド内出土。壺。口径21.8cm。整形、胎土、焼成、色調とも7に同じ。

第80図は47号住居址覆土の皿で、口径12.8cm、器高1.8cm、底径7.6cmを測る。横ナデ後、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削りが施される。内面に暗文はなく、46号住居址より新しく位置づけられる。第80図 47号住居址出土土器

○ 5号住居址

556+24 N5+N6,+28  
N5+N6グリッド。隅円  
方形を呈する住居址で、  
一辺4.5m、壁高0.2m  
を測る。カマドは、北壁  
の北西コーナー寄りに構  
築されたと思われるが、  
すでに破壊されており、  
焼土が確認された。柱穴、  
周溝は確認されなかった。  
床は、焼土付近のみ踏み  
固められ、他部は軟弱で  
あった。覆土は、暗褐色  
粘質土を主体とする。

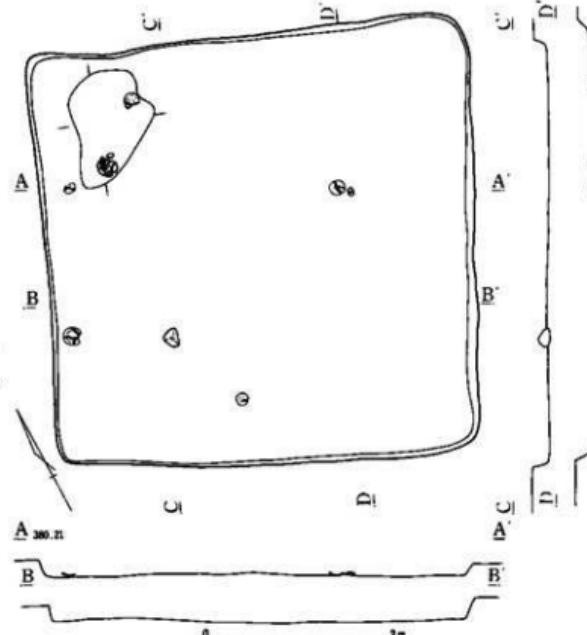
カマドの存在した部分  
には、95cm×85cmの範囲  
で、10cm程の浅い掘り込  
みが確認され、蓋などの  
遺物と、最大15cmの焼土  
の堆積がみられた。

土器

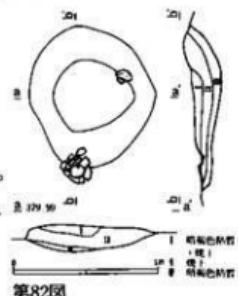
1. 床面直上出土。壺。口径10.8cm、器高3.7cm、底径5cmを測  
る。内外面とも横ナデ、底部外面にはヘラ削りがなされる。内面の  
暗文は、みこみ部には及ばない。胎土は精選され、赤色粒子を含む。

焼成も良好で、明褐色を呈する。 2. 床面直上出土。壺。口径10.8cm、  
器高3.7cm、底径5.2cmを測る。整形は1と同じであるが、  
磨滅により削りの有無は不明。胎土、焼成、色調とも1と同じ。

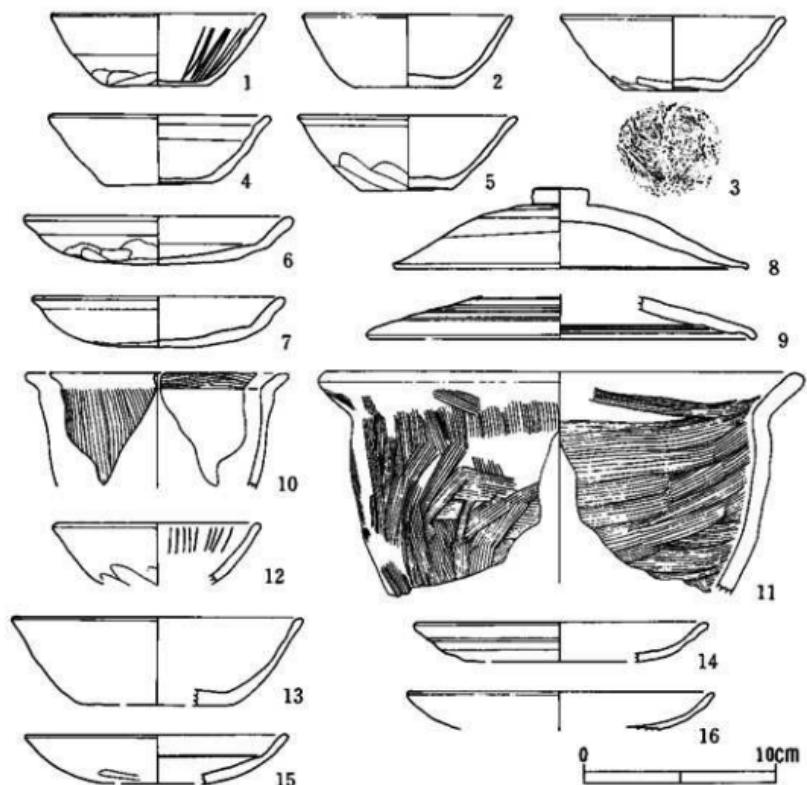
3. 床面直上出土。壺。口径11.3cm、器高3.6cm、底径5cmを測る。 5号住居址カマド実測図  
整形は1と同じであるが、底面の削りではなく、糸切り痕が明瞭である。胎土、焼成、色調は1  
と同じで、口縁内面にわずかにタール状の付着物がみられる。 4. 床面直上出土。壺。口径11cm、  
器高3.6cm、底径5.4cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。口縁内面にターネル状の付着物がある。 5. 床面直上出土。壺。口径11.2cm、器高3.9cm、底径4.7cmを測る。  
整形、胎土、焼成は1と同じ。褐色を呈する。 6. 床面直上出土。皿。口径13.3cm、器高2.  
4cm、底径6.3cmを測る。整形、胎土、焼成とも1と同じ。褐色を呈する。 7. 床面直上出土。  
皿。口径12.8cm、器高2.4cm、底径4.8cmを測る。整形は1と同じ。胎土は精選されているが、



第81図 5号住居址平面図



第82図



第83図 5号住居址出土土器

赤色粒子もほとんどみられない。褐色を呈する。8. 床面直上出土。蓋。径18.2cm、器高4.1cm。ロクロ整形後、ヘラ削りを施す。内面の一条の瘤みにより、かえりをつくり出している。胎土、焼成、色調は1と同じ。9. 烧土上出土。蓋。整形は8と同じで、さらにヘラ磨きが施される。胎土は7と同じで、褐色を呈する。10. 11. 烧土上出土。壺。内面横方向、外面縱方向のハケ調整。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。12. 覆土出土。坏。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。13. 床面直上出土。坏。14. 床面直上出土。皿。15. 覆土出土。皿。16. 烧土上出土。皿。いずれも整形は1と同じで、胎土には赤色粒子を含む。焼成も良好で、褐色を呈するが、13は内面黒色、外面明褐色を呈する。

#### ○24号住居址

554+92N1・N2、+96N1・N2グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.2m、短辺3.5m、壁高0.3mを測る。北壁から西壁の一部に擾乱を受けている。カマドは東壁に構築される。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、壁際には砂質土がブロック状に混入する。壁は比較的強く立ち

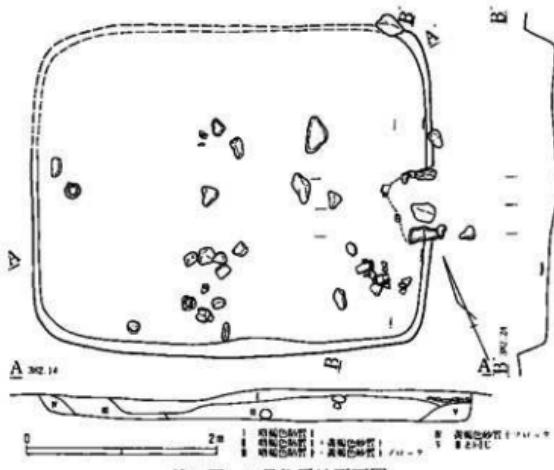
上がる。柱穴、周溝は確認されなかった。遺物は土器だけで、カマド内、床面直上から数多く出土している。

カマドは、20cm～30cmの礫を用いた石組みカマドで、110cm×80cmの掘り方をもつが、床面下への掘り込みはみられない。袖石間は50cmを測る大型の本体である。焼土は、内部に粒子が飛び散った状態でみられ、純粹な焼土層は形成されていない。

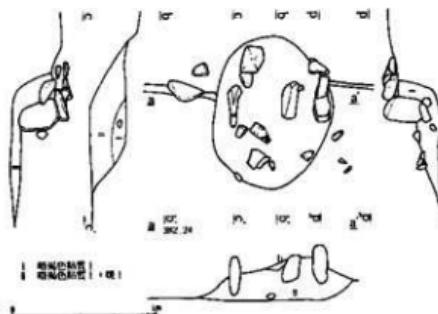
#### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径10.5cm、器高4.2cm、底径5.8cmを測る。横ナデ後、内面には暗文が、外面は底面を含めてヘラ削りが施される。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。なお、口縁内面には、タール状の付着物がある。2. 床面直上出土。杯。口径10.8cm、器高4cm、底径5.4cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。底面には「真」の墨書がみられる。

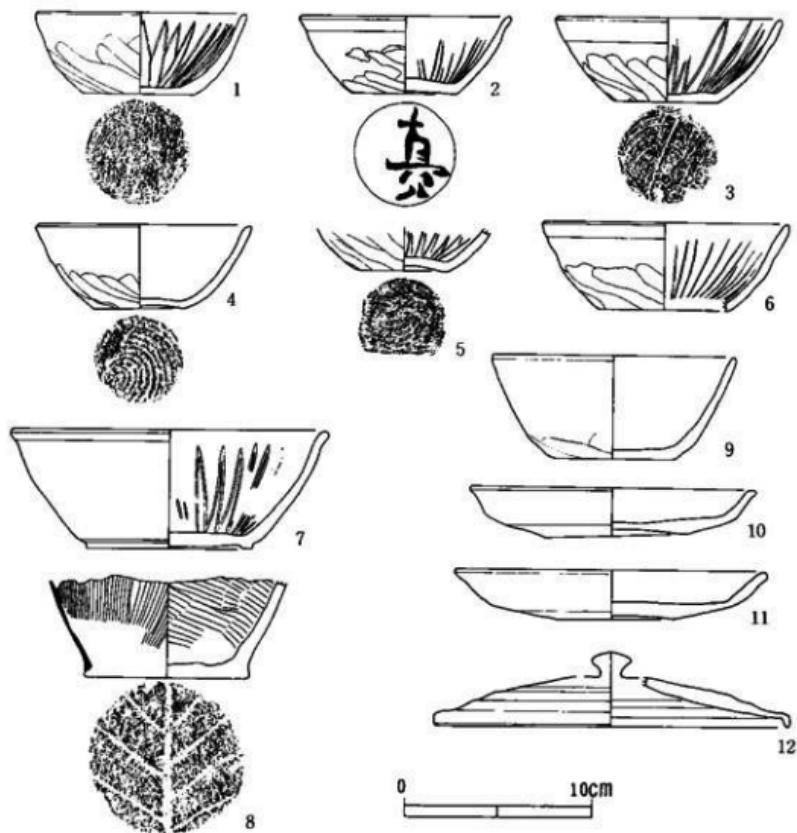
やはり、口縁内面にタール状の付着物がある。褐色を呈する。3. 床面直上出土。杯。口径11.4cm、器高4.4cm、底径5.2cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも2に同じ。4. 覆土出土。杯。口径11.2cm、器高4.4cm、底径4.7cmを測る。横ナデ後、内面はヘラ磨き、外面はヘラ削りを行う。底面にはヘラ削りは行わず、糸切り痕が残る。また、図版66に示したように、ヘラ状工具による2条の沈線1対が認められる。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。5. 覆土出土。杯。底径4.6cm。整形、胎土、焼成は1と同じ。黄褐色を呈する。6. 覆土出土。杯。口径12.4cm。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じであるが、削りが難で、表面が荒れている。7. 覆土出土。杯。口径16.2cm、器高6.2cm、底径8.5cmを測る。底部は貼り付け高台。横ナデ後内面には暗文、外面下半にはヘラ削りが施される。胎土、焼成とともに良好である。黄褐色を呈する。8. 床面直上出土。壺。底径8.3cm。内面横方向、外面縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。暗褐色を呈する。9. 覆土出土。杯。器高3.4cm、底径6cm。整



第84図 24号住居址平面図

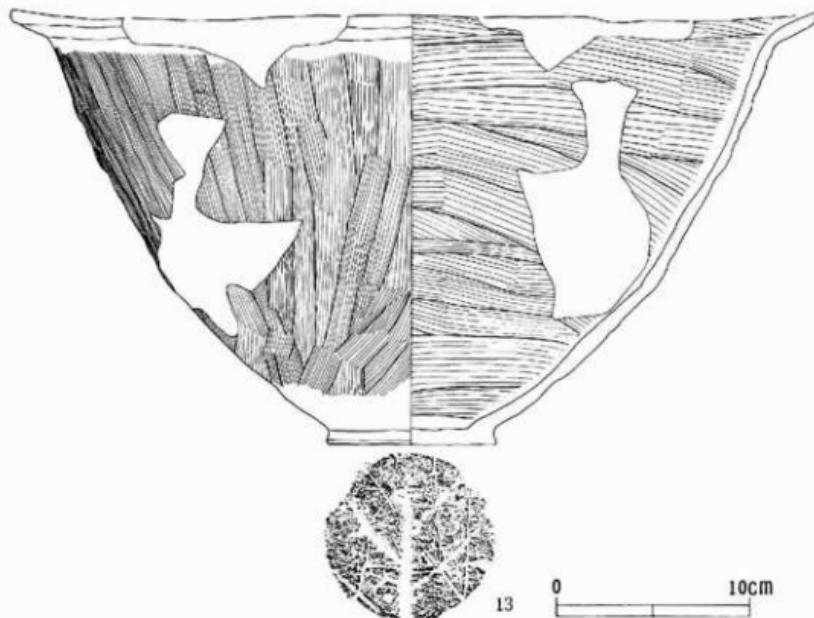


第85図 24号住居址カマド実測図



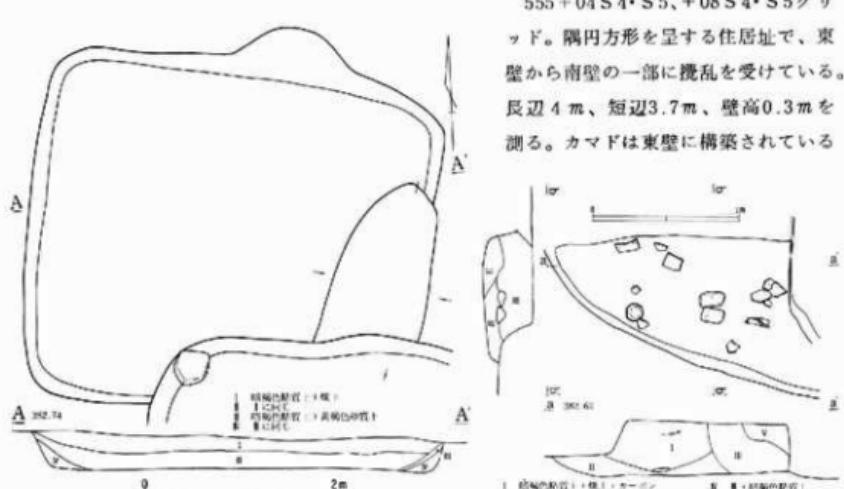
第86図 24号住居址出土土器 その1

形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。10. 床面直上出土。皿。口径14.5cm、器高2.5cm、底径7.2cmを測る。内面は横ナデ後ヘラ磨き、外面下半は横ナデ、ヘラ削り後ヘラ磨きが施される。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。11. 床面直上出土。皿。口径16.1cm、器高2.5cm、底径6cmを測る。整形、胎土は10に同じ。本資料にも、図版66に示したように、底面にペン先状工具による格子状の沈割がみられる。非常に丁寧なつくりで、内外面褐色を呈する。焼成も良好である。12. 床面直上出土。蓋。径推定18.3cm。ロクロ整形後、内面ヘラ磨き、外面上半にはヘラ削りを施す。胎土は精選され、焼成も良好である。内面赤褐色、外面黄褐色を呈する。13. 床面直上出土。鉢。口径41.5cm、器高22cm、底径8.8cmを測る。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされる。薄いつくりの大型の鉢で、丁寧な整形であるが、内面の一部に輪積み痕が残る。胎土は精選されているが、石英、雲母などの小粒子が目立つ。焼成は良好で、内面褐色、外面暗褐色を呈する。



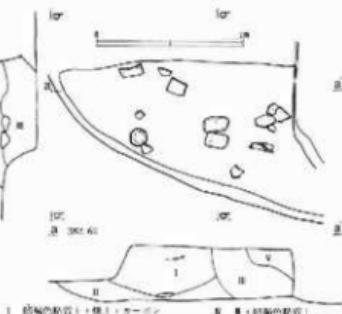
第87図 24号住居址出土土器 その2

○38号住居址



第88図 38号住居址平面図

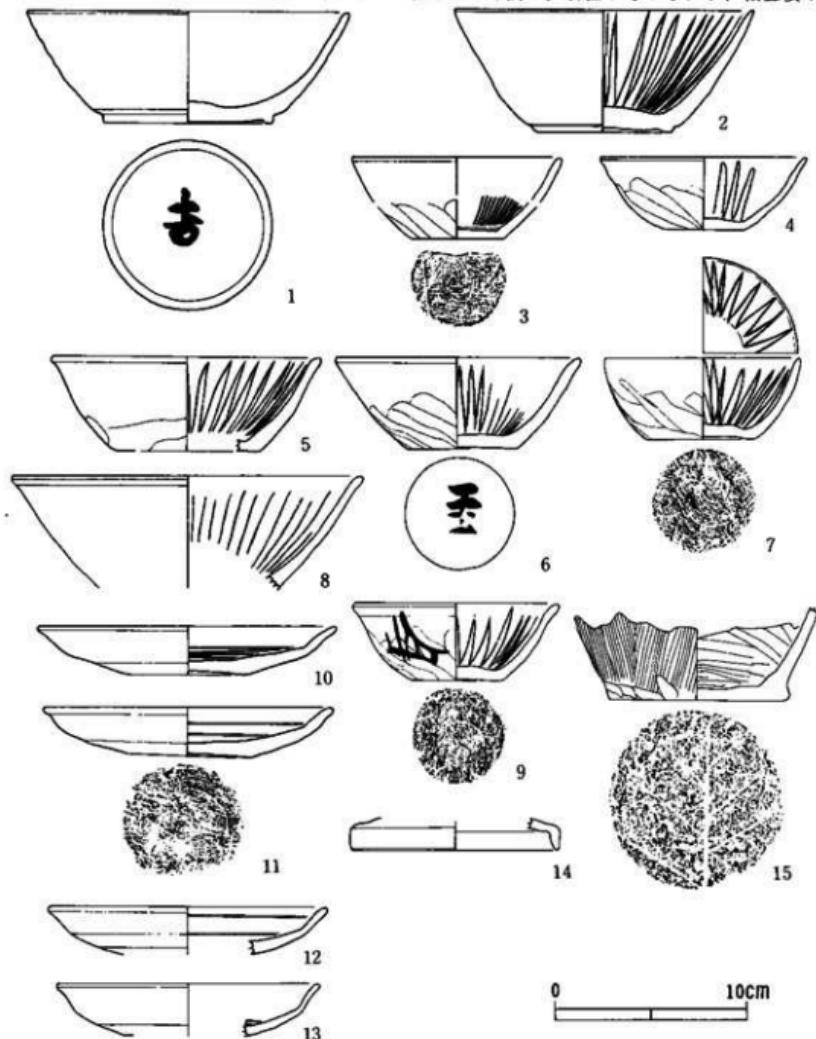
555+04 S 4・S 5、+08 S 4・S 5グリッド。隅円方形を呈する住居址で、東壁から南壁の一部に擾乱を受けている。長辺4m、短辺3.7m、壁高0.3mを測る。カマドは東壁に構築されている



第89図 38号住居址カマド実測図

が、北壁中央部にも掘り込みがみられ、最初北壁に構築したものを、東壁に造り変えたと考えられる。柱穴、周構は確認されなかった。床はほぼ全面踏み固められている。壁は、比較的強く立ち上がっているが、暗褐色粘質土を主体とする覆土には、壁際に壁面の崩落と思われる砂質土層がみられた。遺物は、土器だけで、カマド内、床面直上から多く出土している。

カマドの掘り方ははっきりせず、床面下への掘り込みも浅い。石組みもみられず、粘土積み



第90図 38号住居址出土土器

上げによる構築と思われる。

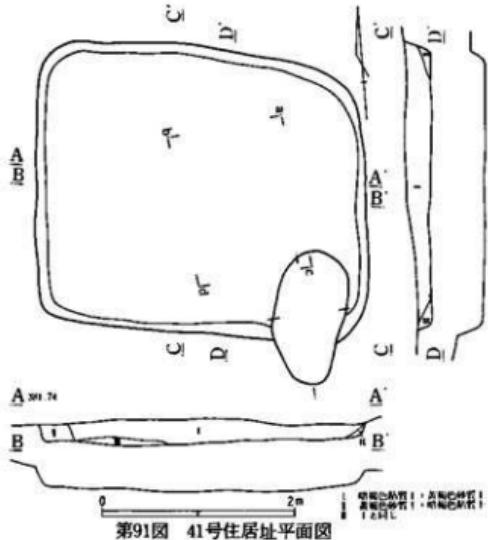
### 土器

- 床面直上出土。壺。口径16.4cm、器高5.8cm、底径8.8cmを測る。貼り付け高台。横ナデ後、外面下半にヘラ削りを行う。底面には墨書きがある。胎土は精選され、焼成も良好で、内面黒色、外面明褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。口径15.5cm、器高6.5cm、底径7.1cmを測る。削り出し高台。整形、胎土、焼成は1に同じ。明褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。底径5cm。整形、胎土、焼成は1に同じ。黄褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。口径10.5cm、器高3.8cm、底径4cmを測る。整形は1に同じ。胎土には砂粒が多い。焼成は良好で、赤褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。口径13.8cm、器高4.8cm、底径7.3cmを測る。整形、胎土は4に同じ。明褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。口径12.7cm、器高4.7cm、底径5.7cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じで、底面には墨書きがある。明褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。口径10cm、器高4.2cm、底径5.6cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。
- 覆土出土。壺。整形、胎土とも2に酷似。
- 床面直上出土。皿。口径15.3cm、器高2.5cm、底径5.5cm。
- 床面直上出土。皿。口径14.8cm、器高2.4cm、底径6.5cm。ともに横ナデ後、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、暗褐色を呈する。
- 床面直上出土。壺。整形、胎土、焼成は10に同じ。明褐色を呈する。
- 床面直上出土。灰釉陶器蓋。ロクロ整形。胎土、焼成とも良好で、灰色を呈する。
- カマド内出土。壺。内面横方向、外面縱方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。

### ○41号住居址

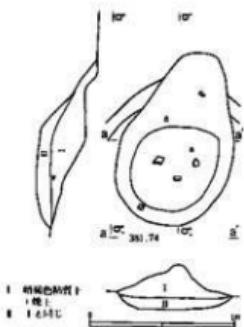
555+36S1+N1,+40S1+N1グ

リッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺3.7m、短辺3m、壁高0.2m~0.3mを測る。カマドは南壁の東コーナー寄りに構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。壁は比較的緩やかに立ち上がる。床は壁際以外は踏み固められている。覆土は暗褐色粘質土を主体とするが、砂が混ざり、とくに壁ちかくでは、砂質の割合が高くなっている。遺物は、A...等

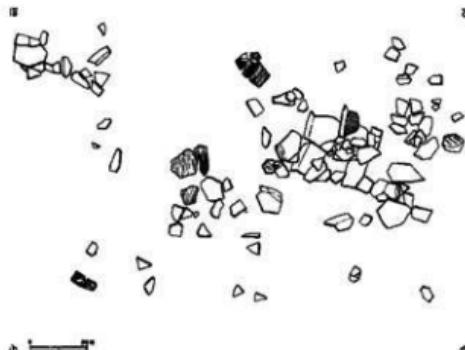


第91図 41号住居址平面図

カマドは、120cm×80cmの梢円形



第92図  
41号住居址カマド実測図

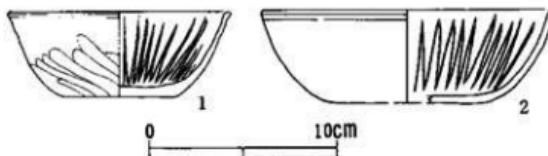


第93図 41号住居址内微細図

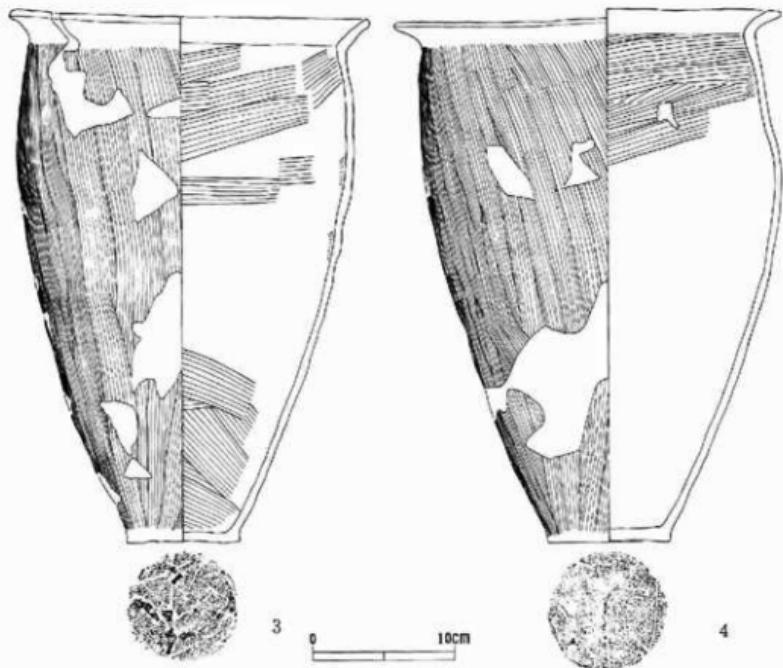
を呈し床面下への掘り込みは10cm程度である。内部には石はみられず、袖石の掘り込みもみられないため、粘土の積み上げによる構築と思われる。純粋な焼土層は確認されず、焼土は粒子状になって褐色土に混ざる程度であった。

#### 土器

1. カマド内出土。杯。口径11.4cm、器高4.4cm、底径5.9cmを測る。内面は横ナデ後、胴部に暗文を、底部にヘラ磨きを施している。外面は横ナデ後、大半をヘラ削り、底部にヘラ磨きを施している。なお、底部は静止糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好である。内面黄褐色、外面赤褐色を呈する。2. 覆土出土。杯。口径14.9cm、器高4.8cm、底径8cmを測る。整形は1と同様であるが、暗文は、みこみ部に及ぶ。また、外面下半から底部にかけてのヘラ削りは荒く、表面にざらつきがある。胎土は精選され、焼成も良好である。内外面とも明褐色を呈する。3. 床面直上出土。甕。口径24.7cm、器高36.2cm、底径7.8cmを測る。非常に薄手の甕である。内面は下半及び上半を横方向のハケ調整、中段を指頭で調整し、外面は縱方向のハケ調整を行っている。胎土は精選されており、甕母が目立つ。焼成は良好である。火熱によるものか、下半は暗褐色、上半は赤褐色を呈する。4. 床面直上出土。甕。口径25.5cm、器高36.9cm、底径8.2cmを測る。整形は1と同じで、やはり、内面中段には指頭痕が残っている。胎土、焼成とも1と同じで、色調の変化も1同様に認められるが、外面下半は一部灰褐色を呈する。



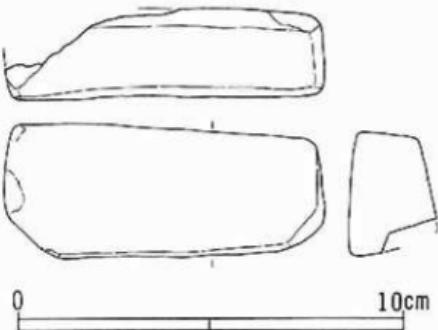
第94図 41号住居址出土土器 その1



第95図 41号住居址出土土器 その2

#### 石器

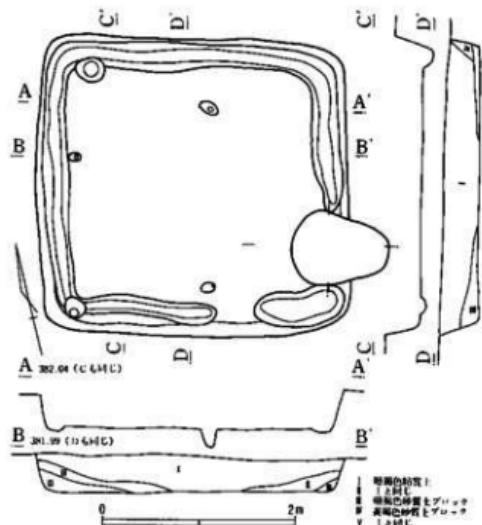
砥石が1点出土した。板灰岩製である。全面が研磨されている。一部欠損している。全体に細長い立方体を呈している。研磨されている面は、全体に平滑で、よく使用されていることを窺い知ることができる。いずれの面も、断面をみると、やや膨みをもっている。素材の面が全く残っていないが、おそらく、荒削りされた角礫状の素材を使用しているものと思われる。



第96図 41号住居址出土石器

#### ○42号住居址

555+28S2グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.3m、短辺3.1m、壁高0.4mを測る。



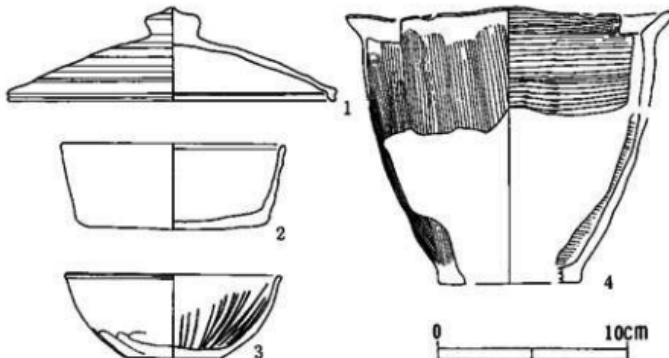
第97図 42号住居址平面図

し、壁付近には、黄褐色砂質土ブロックが認められた。床面はカマド付近を中心に踏み固められている。遺物は土器だけで、カマド内、床面上に2点のみである。

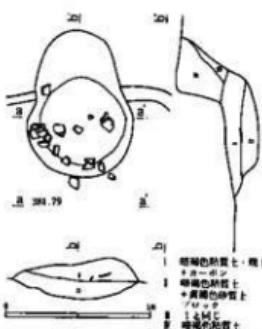
カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粋な焼土層ではなく、焼土粒子が飛散していた。

#### 土器

1. 床面上出土。蓋。径 $17\text{cm}$ 、器高 $4.8\text{cm}$ を測る。ロクロ整形後、内面はヘラ磨き、外面はヘラ削り後ヘラ磨きを行っている。内面にかえりをもつ。胎土は精選され、焼成も良好な、



第99図 42号住居址出土土器



第98図 42号住居址カマド実測図

カマドは東壁に構築される。周溝は四辺すべてに巡り、柱穴は周溝内に円形を呈するものが2本、中央部に楕円形を呈するものが2本が確認された。壁は強く立ち上がる。覆土は暗褐色粘質土を主体と

する。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粋な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粋な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

散していた。

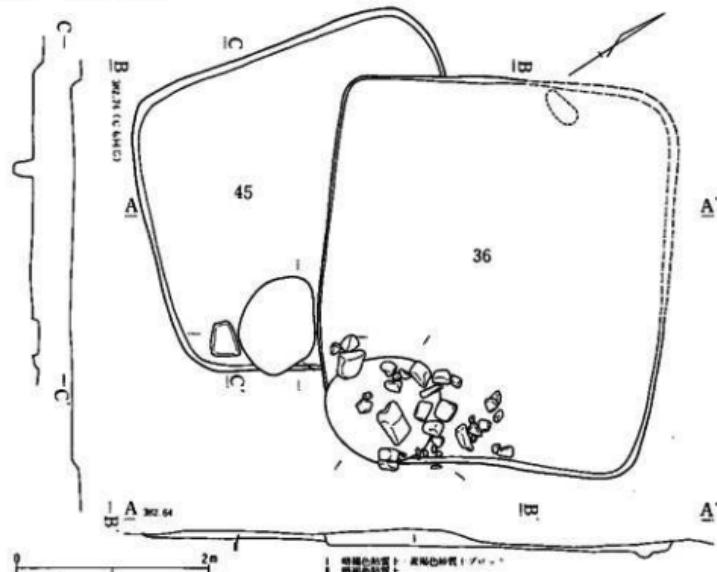
カマドは $100\text{cm} \times 75\text{cm}$ の楕円形で、床面下への掘り込みは $20\text{cm}$ ちかい。本住居址のカマドも

石組みが認められず、粘土の積み上げと思われる。やはり純粂な焼土層ではなく、焼土粒子が飛

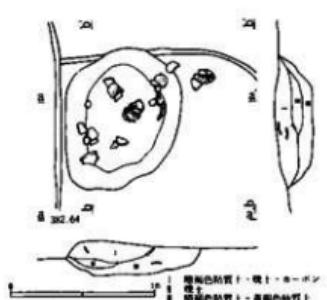
散していた。

丁寧なつくりである。赤褐色を呈する。2. 覆土出土。須恵器坏。口径11.4cm、器高4.4cm、底径10cmを測る。ロクロ整形後、底面はヘラ削りを行う。口縁は、整形段階のつまみにより、口唇先端を鋭くしている。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。3. 覆土出土。坏。器高4.3cm、底径4.7cmを測る。横ナデ後、内面には暗文が施され、外面下半及び底部はヘラ削りを行う。口縁内面にタールが付着している。胎土は精選され、焼成も良好である。褐色を呈する。4. カマド内出土。壺。口径16.8cm、器高14.2cmを測る。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整。胎土には砂粒が少なく、焼成は良好である。暗褐色を呈する。

○45号・36号住居址



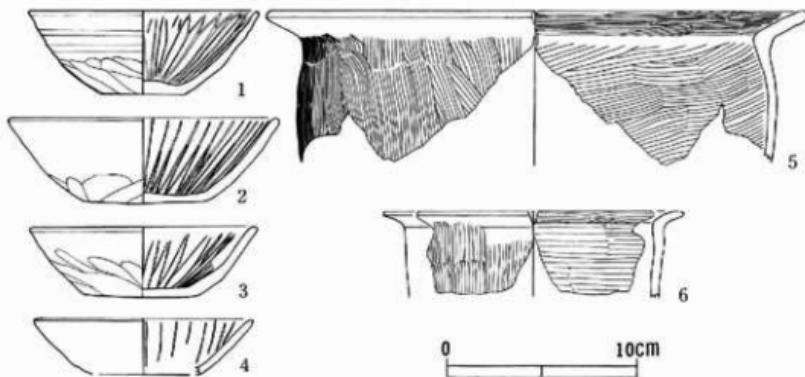
第100図 36号・45号住居址平面図



第101図 45号住居址カマド実測図

555+12 S 5・S 6.+16 S 5グリッド。ともに隅円長方形を呈する住居址で、45号住居址は、長辺3.5m、短辺3.4m、壁高0.1mを測る。ともに柱穴、周溝は認められなかった。カマドは、45号住居址が東壁に、36号住居址は南東コーナーに構築される。ともに浅く掘り込まれた住居址で、遺存状態は悪く、遺物も少ない。土器がカマド内を中心に出土しているほか、鐵器片が1点ずつ出土している。床は、カマド付近以外は軟弱である。壁の立ち上がりは残存部分からみる限り弱い。

45号住居址カマドは、100cm×80cmの掘り方をもち、



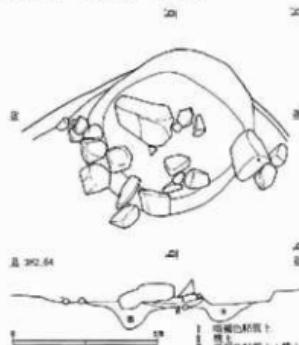
第102図 45号住居址出土土器

床面下への掘り込みは深く25cmを測る。石組みはみられず、焼土の堆積は6cmである。

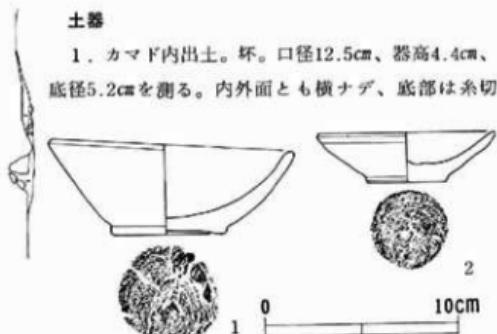
#### 土器

1. カマド内出土。杯。口径11.6cm、器高4.3cm、底径4.2cmを測る。内外面横ナデ後、内面には暗文が、外面下半及び底部にはヘラ削りが施される。胎土は精選され、焼成は良好である。明褐色を呈する。 2. カマド内出土。杯。口径13.6cm、器高4.4cm、底径6cmを測る。整形、胎土は1と同じであるが、削りが雑であり、表面が荒れている。明褐色を呈する。 3. カマド内出土。杯。口径11.4cm、器高3.6cm、底径5.8cmを測る。整形、胎土は1と同じ。黄褐色を呈する。 4. 床面直上出土。杯。小片で整形、胎土は1と同じと思われる。褐色を呈する。 5. カマド内出土。甕。整形、胎土、色調ともに1と同じ。

36号住居址カマドは、内部に石が散乱しており、石組みカマドと思われる。掘り方は、120cm×120cmで、床面下への掘り込みは約5cmを測り、袖石の掘り込みもみられる。焼土の堆積はわずかに3cmである。



第103図 36号住居址 カマド実測図



第104図 36号住居址出土土器

りのままで、削り、磨きは施されていない。胎土に砂粒を含み、焼成も良好である。灰褐色を呈する。2. 床面直上出土。壺。器高2.6cm、底径4.1cmを測る。整形は1と同じ。胎土は精選され、焼成も良好である。明褐色を呈する。

#### ○56号住居址

554+76 S 2・S 3、

+80 S 2・S 3グリット

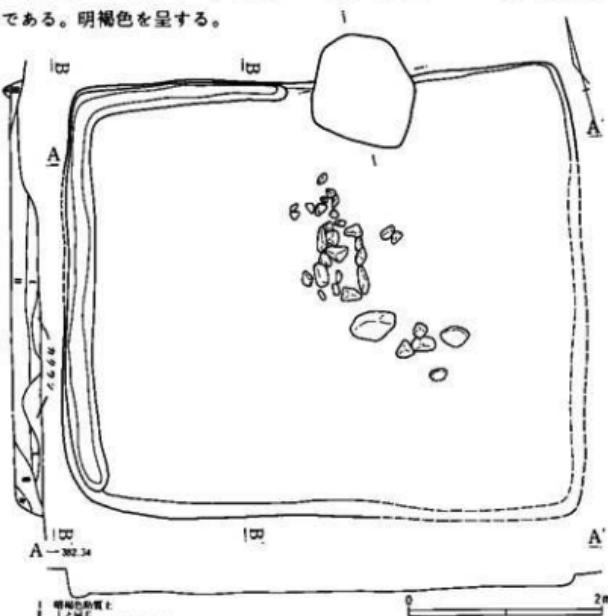
F. 構造長方形を呈する住居址で、東壁から南壁にかけて擾乱をうけている。長辺5.4m、短辺4.5m、壁高0.2m~0.3mを測る。カマドは北壁中央に構築される。柱穴は確認されていないが、周溝は西壁から北壁にかけてL字型に存在する。幅25cm、深さ5cmを測る。壁の立ち上がりは、残存部分からみる限り強くはない。

床面は、カマド付近のみ踏み固められており、他部は軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、壁付近には、黄褐色砂質土がブロック状に堆積している。なお、本住居址の中央部分には、近世墓塚の掘り込みがあり、石碑がみられる。遺物は極くわずかで、土器片が床面直上で1点、覆土から1点出土しているにすぎない。

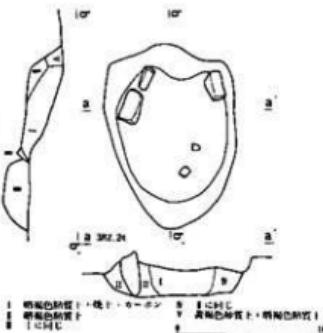
カマドは120cm×90cmの掘り込みをもち、床面下への掘り込みは15cmを測り、これはカマドの手前部分だけで、灰溜めと思われる。本体は30cm程度の石を用いた石組みカマドで、確認された袖石は1枚だけであるが、焼土粒子、カーボンの散り具合から袖石間は60cm程度と推定される。なお、純粋な焼土の堆積はみられなかった。

#### 土器

1. 床面直上出土。壺。底径7.4cm。底部の破片であり、残存部内面は指頭による調整、外面上には縦方向のハケ調整がなされている。胎土には砂粒、とくに石英・雲母が多く、焼成は良

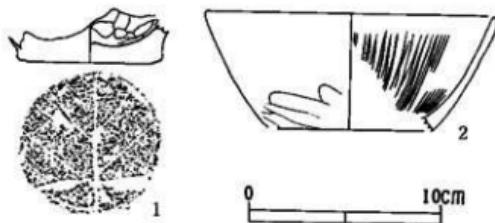


第105図 56号住居址平面図



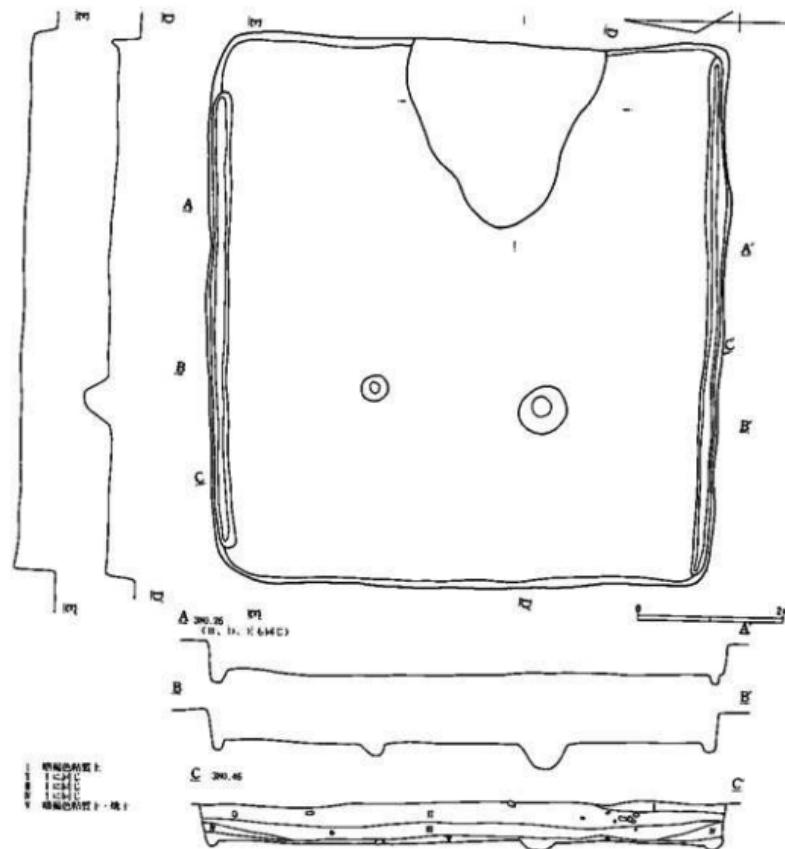
第106図 56号住居址カマド実測図

好である。暗褐色を呈する。 2.  
覆土出土。坏。小破片で、内面は  
横ナデ後、暗文が施され、外面は  
横ナデ後、ヘラ削り、ヘラ磨きが  
なされている。胎土は精選され、  
赤色粒子を含む。焼成は良好で、  
内外面とも赤褐色を呈する。

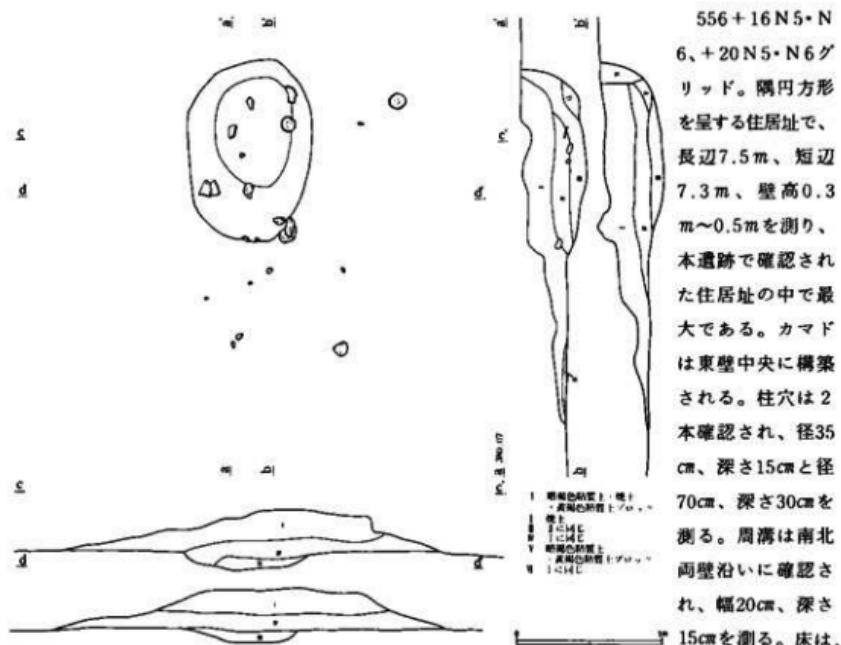


第107図 56号住居址出土土器

○ 1号住居址



第108図 1号住居址平面図



第109図 1号住居址カマド実測図

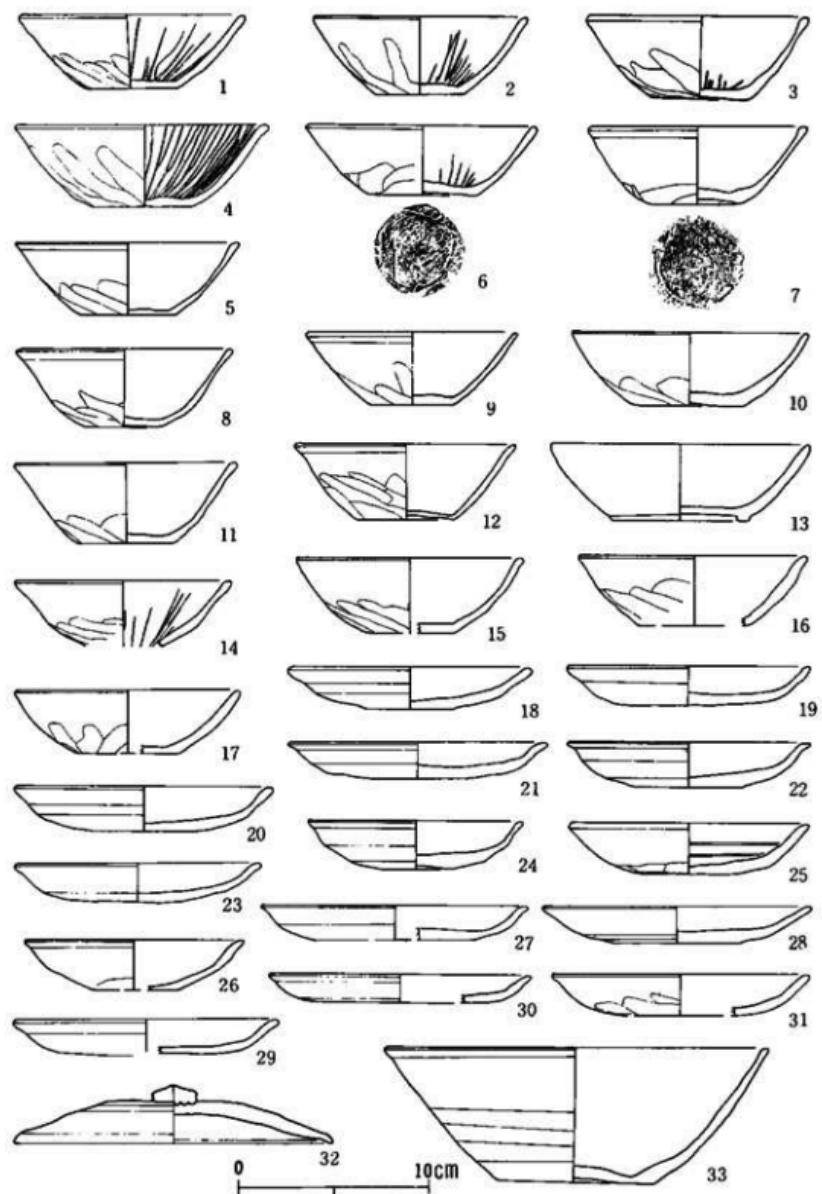
み固められている。覆土は暗褐色粘質土を主体としたもので、最下面では、焼土、カーボンを含む黒色土層が確認された。遺物は土器だけであるが、カマド内をはじめ、床面直上、周溝内からも非常に多く出土している。

カマドも大型である。床面下への掘り込みは小さく、 $125\text{cm} \times 80\text{cm}$ 、深さ15cm程度であるが、粘土積み上げの範囲は、幅2.7m、奥行2.4mに及ぶ。内部に石組みは一切みられず、焼土の堆積は約10cmで、また、壁面も15cm程の厚さで焼土化していた。

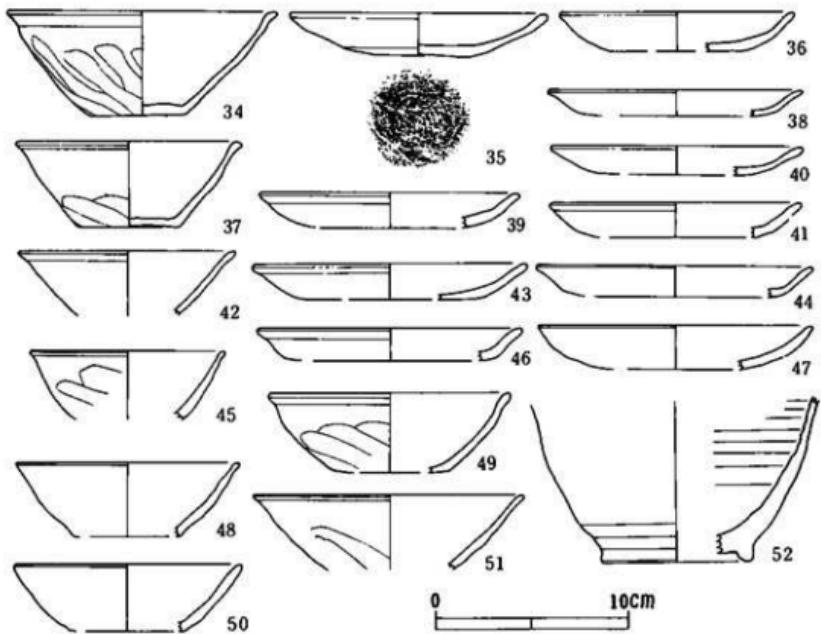
#### 土器

本住居址から出土した土器は、土師器の壺、皿、蓋及び須恵器の壺であるが、非常に多いため、個々の資料の詳細は省略する。

壺、皿は、内面に暗文の施されるものは少なく、施文されないものが圧倒的に多い。いずれも整形は同じで、横ナデ後、外面下半及び底面にヘラ削りを施す。ヘラ磨きは行われていない。胎土は精選され、赤色粒子を含んでいる。焼成も良好で、明褐色を呈するものが多い。33、34、51の3点は内面黒色を呈し、1は、口縁部に2ヶ所、タールが付着している。蓋は、覆土から1点だけの出土である。ロクロ整形後、外面をヘラ削りしている。内外面ともヘラ磨きはみられない。胎土、焼成、色調とも、壺、皿と類似するが、赤色粒子は少ない。壺も覆土から出土している。ロクロ整形後ヘラ削りを行う。底部は貼り付け高台である。



第110図 1号住居址出土土器 その1

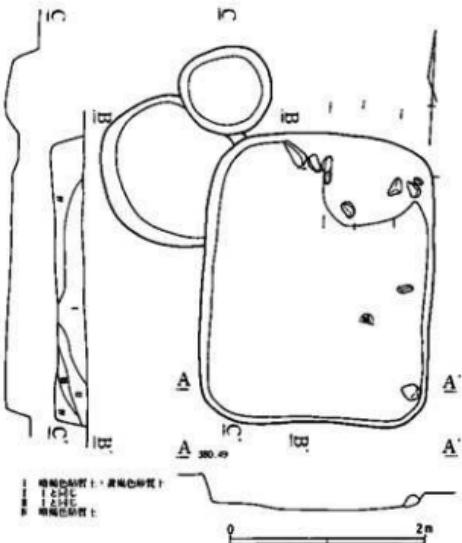


第111図 1号住居址出土土器 その2

○ 8号住居址

556+08N4+N5,+12N4+N5グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺3m、短辺2.4m、壁高0.3mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。床はほぼ全面踏み固められている。壁は比較的強く立ち上がる。覆土は暗褐色粘質土を主体としており、他の住居址にみられる壁ちかくの砂質土の混入は顕著でない。遺物は、土器だけで、カマド内7点、床面上2点が出土している。

カマドは、残存状況がよく、カマド脇の土留め石も確認された。カマド構築部分には、幅50cm、長さ70cm程度の石が壁面より出ており、この石を利用して構築



第112図 8号住居址平面図

されている。袖石は30cm程度の平石を立てており、袖石間は約70cmを測る。焼土の堆積は4cmである。

#### 土器

1. カマド内出土。杯。口径11cm、器高4.2cm、底径4.6cmを測る。横

ナデ後、外面下半及び底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。2. 床面直上出土。杯。口径11.2cm、器高

3.9cm、底径4.8cmを測る。整形、胎土は1と同じ。明茶褐色を呈する。なお、口縁部にタールが付着している。

3. カマド内出土。杯。器高3.6cm、底径5.9cm。整形、胎土、色調とも

1と同じ。

4. カマド内出土。杯。器高4.4cm、底径4.8cm。整形、胎土、色調とも1と同じ。

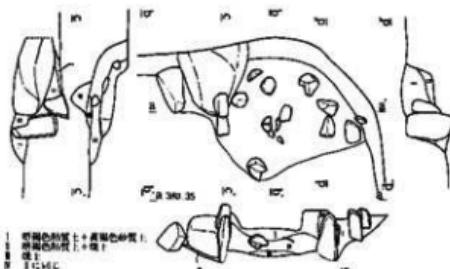
5. カマド内出土。皿。口径12.5cm、器高2.1cm、底径7cmを測る。整形、胎土、色調とも1と同じ。

6. 床面直上出土。皿。口径12.5cm、器高2.5cm、底径4.7cmを測る。整形、胎土、色調とも1と同じ。

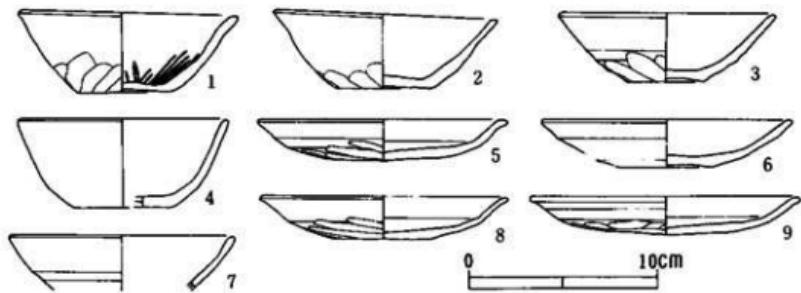
7. カマド内出土。杯。整形、胎土、色調とも1と同じ。

8. カマド内出土。皿。口径13cm、器高2.2cm、底径5.6cmを測る。整形、胎土は1と同じ。褐色を呈する。

9. カマド内出土。皿。口径13.6cm、器高2cm、底径6.4cmを測る。整形、胎土は1と同じ。赤褐色を呈する。いずれも焼成は良好である。



第113図 8号住居址カマド実測図



第114図 8号住居址出土土器

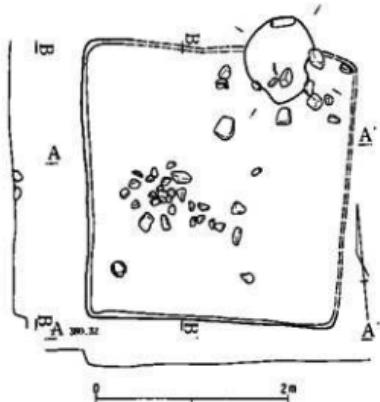
#### ○10号住居址

556+04N6+N7グリッド。隅円方形を呈する住居址で、北壁及び東壁は攪乱をうけているが、長辺2.9m、短辺2.8m程度と思われる。カマドは北壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。残存部からみる限り、壁の立ち上がりは強い。遺物は少なく、土器だけである。

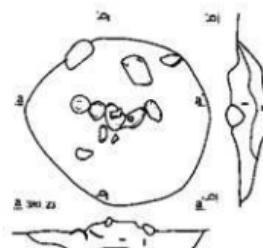
カマドは、掘り込みと焼土による確認であるが、内部に石が散乱しており、石組みカマドと思われる。床面下への掘り込みは深く、20cmを測る。焼土は10cm程の堆積であった。

#### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径12.2cm、器高4cm、底径3.8cmを測る。横ナデ後、内面に暗文、



第115図 10号住居址平面図



第116図  
10号住居址カマド実測図 カマド内出土。

壺。口径12.4cm、器高4.2cm、底径4.4cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。

胎土は1と同じで、焼成は良好である。褐色を呈する。3. カマド内出土。壺。口径11.8cm、器高4cm、底径4.2cmを測る。整形、胎土は2と同じで、焼成も良好である。赤褐色を呈する。

4. 床面直上出土。皿。口径13cm、器高2cm、底径4.8cmを測る。横ナデ後、外面下半に回転ヘラ削りを施す。胎土、色調は3に同じ。焼成も良好である。

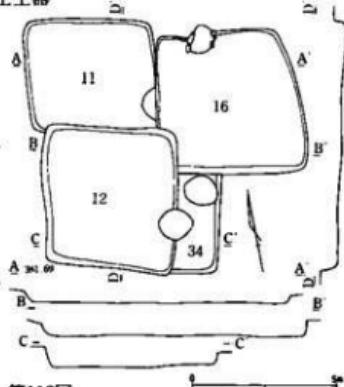
5. 床面直上出土。皿。口径12.8cm、器高2.2cm、底径4.9cmを測る。整形、胎土は4と同じ。焼成は良好で、褐色を呈する。



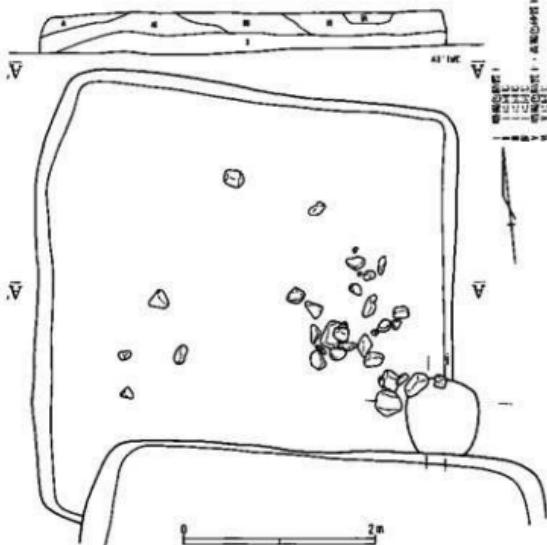
第117図 10号住居址出土土器

○11号・34号・16号・12号住居址

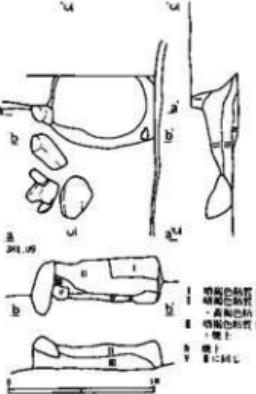
556+12S3+S4,+16S3+S4 グリッド。4軒が切り合っているが、セクション及び後述する出土遺物から、11号住居址が最も古く、34号住居址、16号住居址、12号住居址の順で新しくなると考えられる。4軒とも隅円方形を呈し、その規模は、11号住居址：長辺4.7m、短边4.3m、壁高0.3m～0.4m、12号住居址：長辺5.1m、短辺4.9m、壁高0.4m～0.5mを測る。34号住居址は極く一部だけが残存しているため規模は不明で、残存部分の壁高0.4mを測る。以下に各々の住居址ごとに、カマドの状況、出土遺物の紹介を行うが、16号住居址については後述する。



第118図  
11号・12号・16号・34号住居址平面図



第119図 11号住居址平面図



第120図 11号住居址カマド実測図

#### 11号住居址

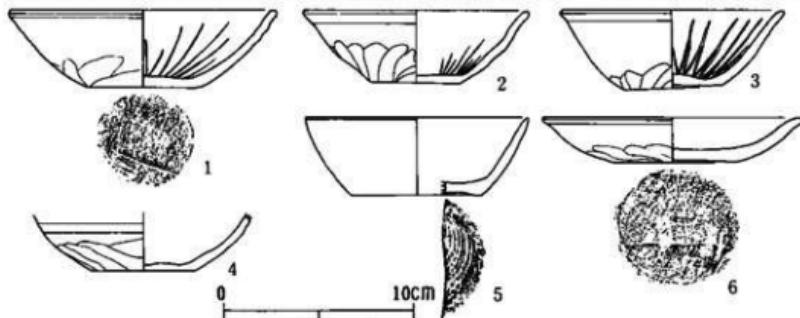
柱穴、周溝は認められなかった。床は全体的に軟弱で、わずかにカマドちかく

が踏み固められているだけである。遺物は土器だけで、多くはない。

カマドは、東壁に構築される。掘り方は90cm×60cm程度と推定され、床面下への掘り込みは、5cm程度である。40cm程の石を袖石とした石組みカマドで、焼土の堆積は5cmを測る。カマドの前部には、30cm程の石が散乱しており、これらも石組みの一部と思われる。

#### 土器

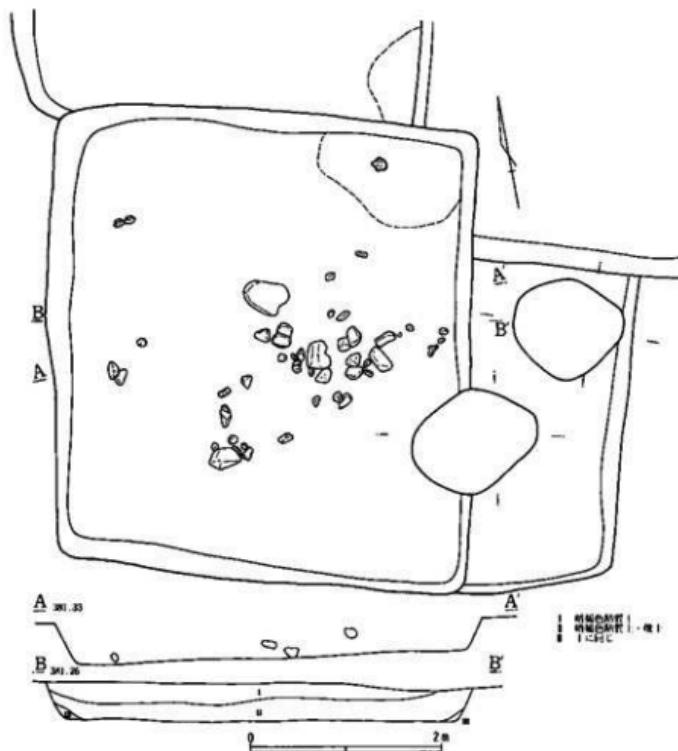
1. カマド内出土。壺。口径13.4cm、器高4cm、底径5.8cmを測る。内外面とも横ナデ後、内面には暗文、外面下半及び底面にはヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。 2. 床面直上出土。壺。口径11.5cm、器高3.8cm、底径4.5cmを測る。整形、胎土は1と同じ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。 3. 床面直上出土。壺。



第121図 11号住居址出土土器

口径11cm、器高4cm、底径5cmを測る。整形、胎土、色調とも2と同じ。内外面とも剥離が激しく、口縁には3ヶ所タールが付着している。4. 覆土出土。杯。小片で、整形、胎土、色調とも1と同じであるが暗文はみられない。5. 覆土出土。杯。器高4cm、底径6.8cmを測る。内外面とも横ナデのままで、ヘラ削りは行われていない。底面のみ、周辺部のヘラ削りを行う。胎土、色調は4に同じ。6. 床面直上出土。皿。口径13.2cm、器高2.3cm、底径6.1cmを測る。整形、胎土とも4と同じ。明褐色を呈する。いずれも焼成は良好である。

12号・34号住居址



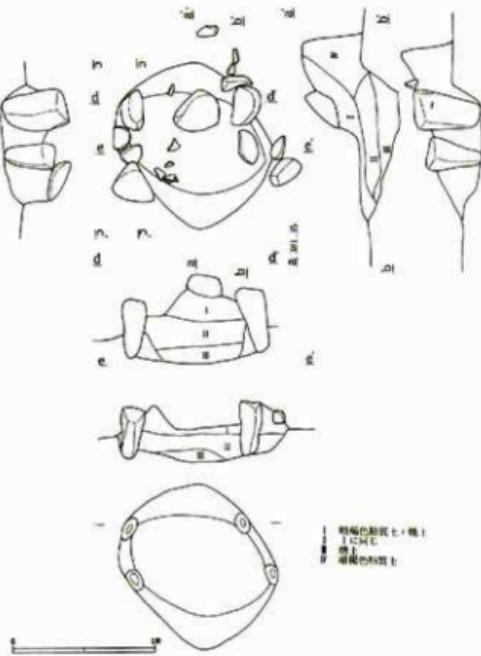
第122図 12号・34号住居址平面図

34号住居址は、残存部分が極くわずかで、柱穴、周溝ともに認められなかった。床面もカマドの前部にだけ確認されたにすぎない。遺物はカマド内を中心出土している。

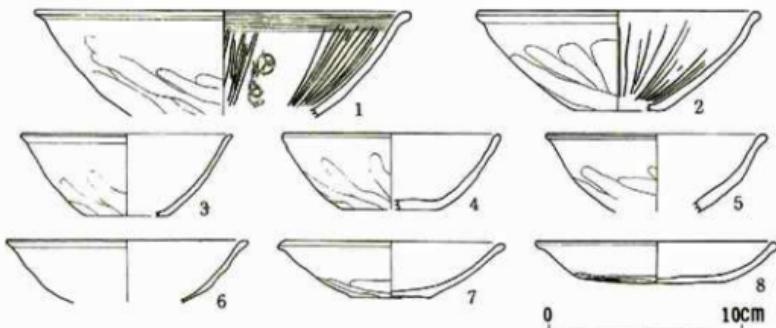
カマドは、残存状況がよく、袖石は40cm程の石を利用している。掘り方は110cm×110cmの円形を呈し、床面下への掘り込みも、最深部で30cmを測る。また、袖石の掘り込みも4ヶ所確認されている。なお、袖石間は60cmを測る。焼土は厚く堆積しており、最厚部で15cmである。

## 土器

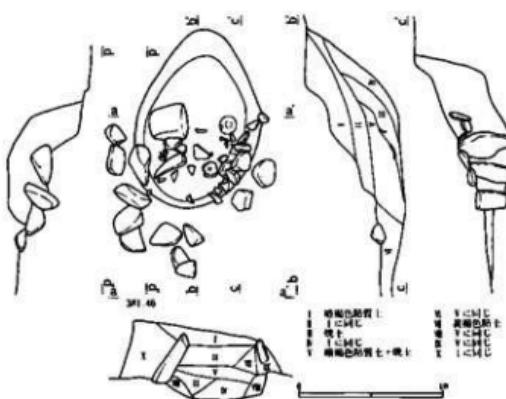
1. 床面直上出土。杯。推定口径19.2cmを測る。横ナデ後、内面には放射状暗文と螺旋状暗文を施し、外面はヘラ削りを行う。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内面黒色、外面明褐色を呈する。
2. 床面直上出土。杯。推定口径14cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じであるが、螺旋状暗文はみられない。
3. 床面直上出土。杯。器高4.2cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを行う。胎土は1と同じで、焼成も良好である。内外面とも褐色を呈する。
4. カマド内出土。杯。推定口径11.2cm、器高3.9cm、底径4.9cmを測る。整形、胎土は3と同じで焼成も良好である。明褐色を呈する。
5. カマド内出土。杯。小片で、整形、胎土、色調とも4に同じ。焼成も良好である。
6. カマド内出土。杯。小片で、現存部分は横ナデだけでヘラ削りは認められない。胎土、色調は4に同じ。焼成も良好である。
7. 床面直上出土。皿。推定口径11.3cm、器高3cm、底径4.1cmを測る。整形、胎土は3と同じ。焼成も良好で、褐色を呈する。
8. 床面直上出土。皿。口径12.2cm、器高2.2cm、底径3.5cmを測る。整形、胎土は7と同じ。焼成も良好で、明褐色を呈する。



第123図 34号住居址カマド実測図



第124図 34号住居址出土土器



第125図 12号住居址カマド実測図

12号住居址は、4軒の中で最も新しい住居址であるが、床面は、カマド付近以外軟弱である。遺物は土器が多い量に出土したほか、鉄器が1点出土している。

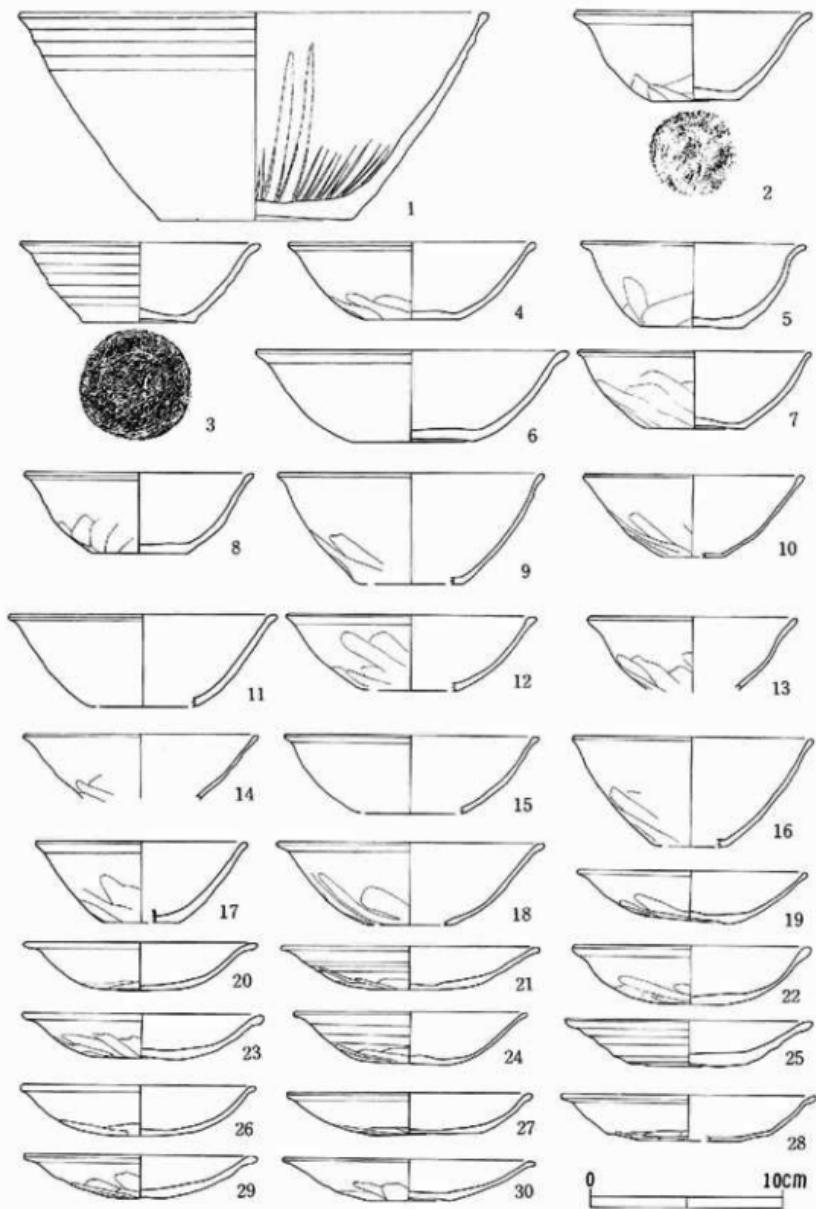
カマドは、40cm程の平石を用いた石組みカマドである。掘り方は125cm×85cmの橿円形を呈し、床面下への掘り込みは15cmを測る。袖石は、立ち上がりまでの間に3枚が立てられ、カマド本体を構成している。純粹な焼土層は認められず、焼土粒子が暗褐色土中に混在した。

### 土器

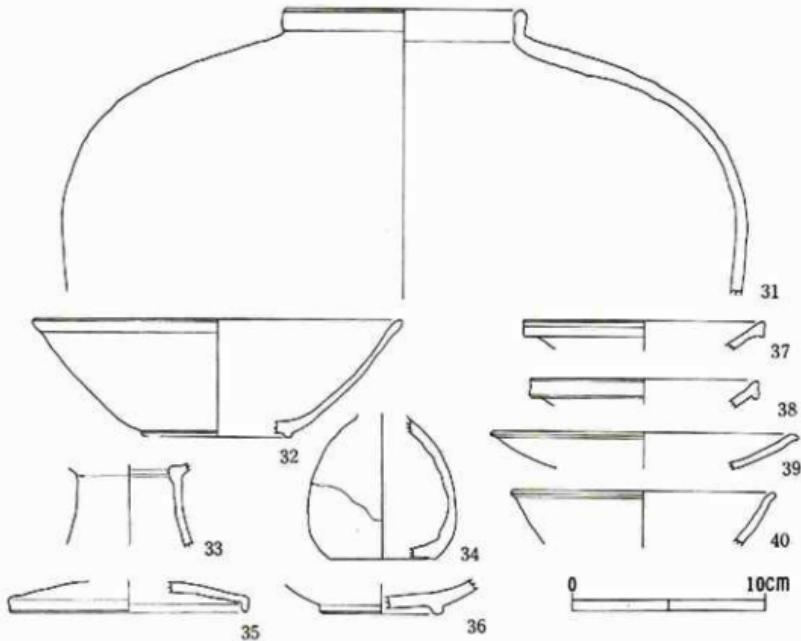
本住居址から出土した土器は非常に多い。土師器の壺、皿、鉢、壺、灰釉陶器の壺、皿、蓋などである。このうち小破片であるものは図示しなかった。また、図示したもののうち、覆土出土資料についての詳細は省略し、カマド内及び床面直上出土資料のみ紹介することにする。1. 床面直上出土。鉢。推定口径24cm、器高10.8cm、底径10cmを測る。横ナデ後、内面下半には暗文を、外面下半から底部にヘラ削りを施す。ヘラ磨きはみられない。胎土は精選され、赤色粒子はほとんど混入しない。焼成は良好で、内面黒色、外面明褐色を呈する。2. 床面直上出土。壺。口径12cm、器高4.6cm、底径4.4cmを測る。褐色を呈する。5. 床面直上出土。壺。口径11.3cm、器高4.4cm、底径5.2cmを測る。明褐色を呈する。9. カマド内出土。壺。器高5.8cm。暗褐色を呈する。

11. カマド内出土。壺。暗褐色を呈する。19. カマド内出土。皿。口径11.5cm、器高2.5cm、底径4.1cmを測る。明褐色を呈する。20. 床面直上出土。皿。口径12cm、器高2.5cm、底径3.8cmを測る。褐色を呈する。21. カマド内出土。皿。口径13.2cm、器高2.2cm、底径3cmを測る。暗褐色を呈する。2、5、9、11、19～21は、横ナデ後、外面下半から底部にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好である。なお、2は口縁部に1ヶ所タールが付着している。3. 床面直上出土。壺。口径12.1cm、器高4.1cm、底径5.8cmを測る。整形時の外面の稜が明瞭で、削り、磨きは一切行われていない。胎土、焼成は2と同じ。淡褐色を呈する。口縁部に1ヶ所タールが付着している。22. カマド内出土。皿。口径12.4cm、器高3cm、底径4.2cmを測る。23. カマド内出土。皿。口径12.2cm、器高2.3cm、底径4.7cmを測る。24. カマド内出土。皿。口径12cm、器高2.6cm、底径4.1cmを測る。26. カマド内出土。皿。口径11.8cm、器高2.6cm、底径3.6cmを測る。28. カマド内出土。皿。器高2.4cm。30. カマド内出土。皿。口径13cm、器高2.1cm、底径4.2cmを測る。22～24、26、28、30の整形、胎土、焼成、色調とも20に同じ。

第127図は、32以外灰釉陶器であるが、すべて覆土中からの出土のため、詳細は省略する。



第126図 12号住居址出土土器 その1



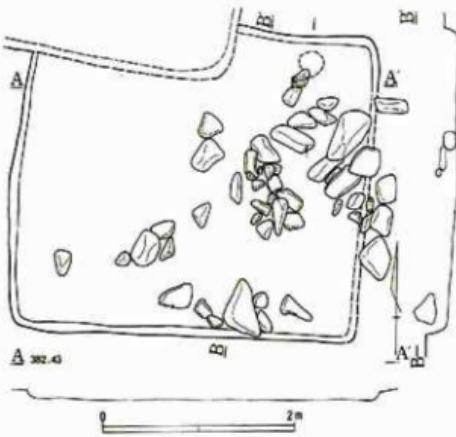
第127図 12号住居址出土土器 その2

○21号住居址

554+60N1,+64N1グリッド。隅円方形を呈する住居址で、東壁、北壁に擾乱を受けているが、長辺3.8m、短辺3.3m、壁高0.2mを測る。カマドは確認されず、おそらく、擾乱を受けた北壁に存在したと思われる。焼土は北東コーナー付近に、わずかに確認された。柱穴、周溝は確認されなかつた。床は軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。遺物は、床面直上で出土したもののは全くなく、土器が覆土からまとまって出土した。

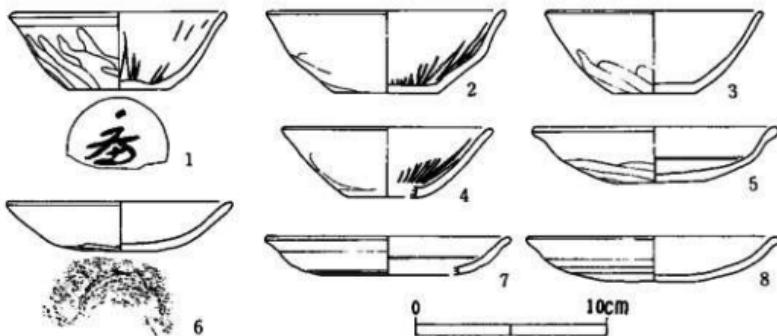
土器

1. 壺。推定口径10.8cm、器高4cm、



第128図 21号住居址平面図

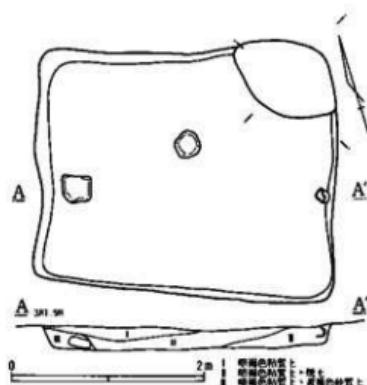
底径4.5cmを測る。横ナデ後、内面には暗文、外面下半から底面にヘラ削りを施す。底面に墨書きがある。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成は良好で、褐色を呈する。2.



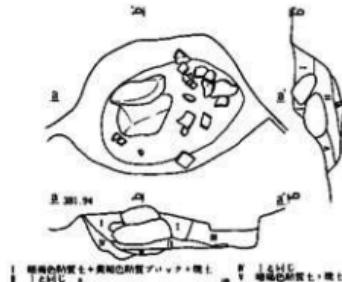
第129図 21号住居址出土土器

杯。推定口径12.2cm、器高4.2cm、底径5.2cmを測る。整形は1と同じであるが、底部のヘラ削りはみられない。胎土、焼成、色調は1と同じ。3. 杯。推定口径10.8cm、器高4.2cm、底径4cmを測る。整形、胎土、焼成、色調は1と同じであるが、暗文はみられない。4. 杯。器高3.6cm。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。5. 盆。口径12.4cm、器高2.8cm、底径4.7cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じであるが、内面には暗文ではなく、ヘラ磨きが施される。6. 盆。器高2.6cm。横ナデ後、内面はヘラ磨き、外面はヘラ削り後、さらにヘラ磨きを施す。胎土、焼成、色調は1に同じ。7. 盆。横ナデ後、内面はヘラ磨き、外面は回転ヘラ削りを施す。胎土、焼成、色調は1に同じ。8. 盆。口径12.6cm、器高2.8cm、底径4.5cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも6に同じ。

#### ○51号住居址

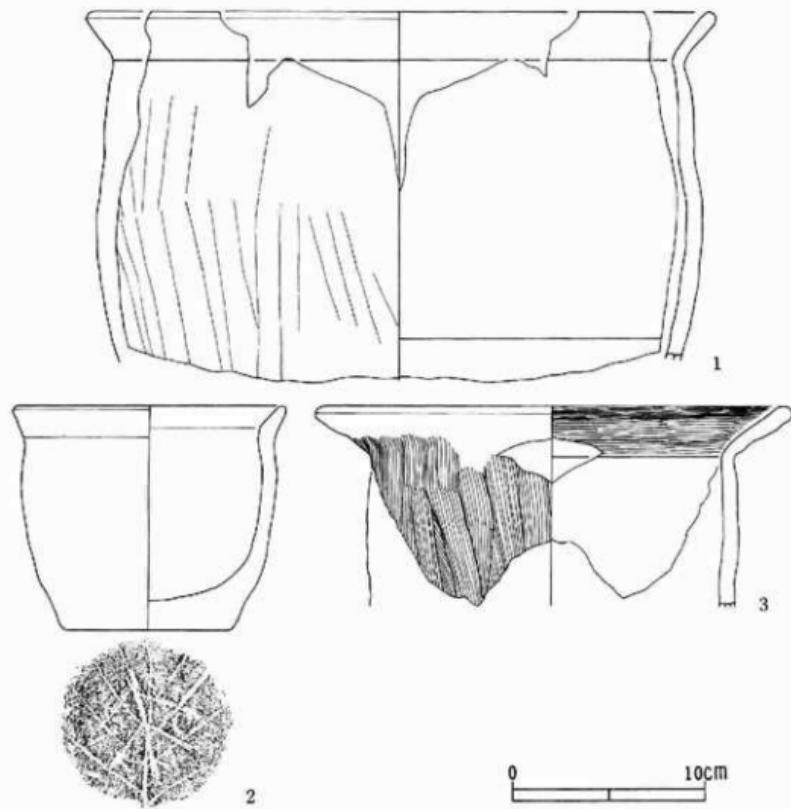


第130図 51号住居址平面図



第131図 51号住居址カマド実測図

555+52S4+S5グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺3.2m、短辺2.5m、壁高0.2mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。床はカマド付近以外はやや軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、壁付近には黄褐色砂質土



第132図 51号住居址出土土器

がブロック状にみられる。遺物は土器だけで、カマド内、覆土から出土している。

カマドは90cm×140cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは20cmを測る。内部には40cm程の石が横倒しになっており、石組みカマドと思われる。焼土の堆積は6cmを測る。

#### 土器

1. カマド内出土。甕。内面は指頭調整がなされ、外面は剝離しており、ヘラ削りと思われる。内外面とも調整が難で、内面には輪積み痕が残る。胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。外面褐色、内面暗褐色を呈する。 2. 覆土出土。甕。推定口径13.8cm、器高11.6cm、底径8.5cmを測る。内面は横ナデ調整がなされるが、外面は剝離が激しく、整形は不明で、胎土には砂粒が非常に多く、難なつくりである。焼成は良好で、赤褐色を呈する。 3. カマド内出土。甕。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。褐色を呈する。

○ 4号住居址

556+12N2+N3,+16N2+N3グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.9m、短辺4mを測る。本住居址も、黒色土中の掘り込みのため、確認に手間とり壁は10cmを残すのみである。カマドは東壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。遺物は土器だけで、カマド内、床面直上から出土している。

カマドは、110cm×150cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは10cmを測る。内部には30cm～40cm程の石が散乱しており、石組みカマドと思われる。焼土の堆積は約5cmである。

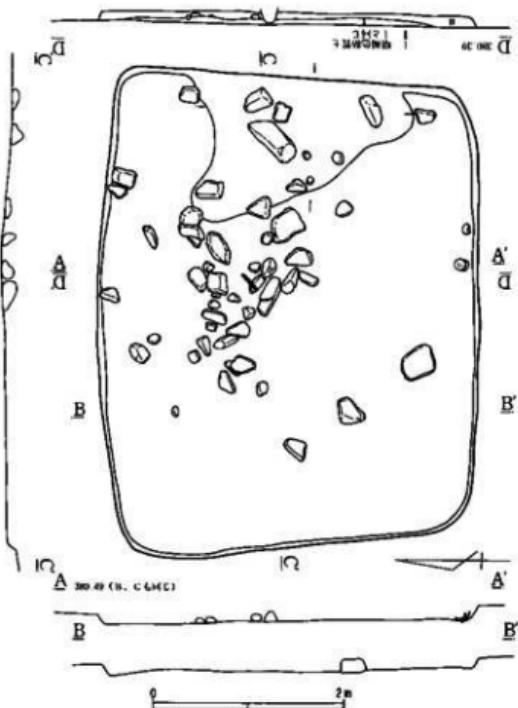
土器

1. 床面直上出土。壺。口

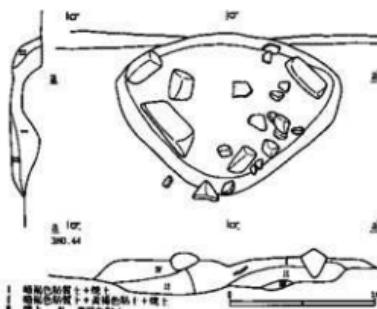
径11.6cm、器高4cm、底径3.

7cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。2. 床面直上出土。壺。口径11.4cm、器高4.5cm、底径4.2cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。赤褐色を呈する。3. カマド内出土。壺。口径11.7cm、器高4.1cm、底径4.3cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。4. 床面直上出土。壺。口径11.9cm、器高4cm、底径4.4cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。

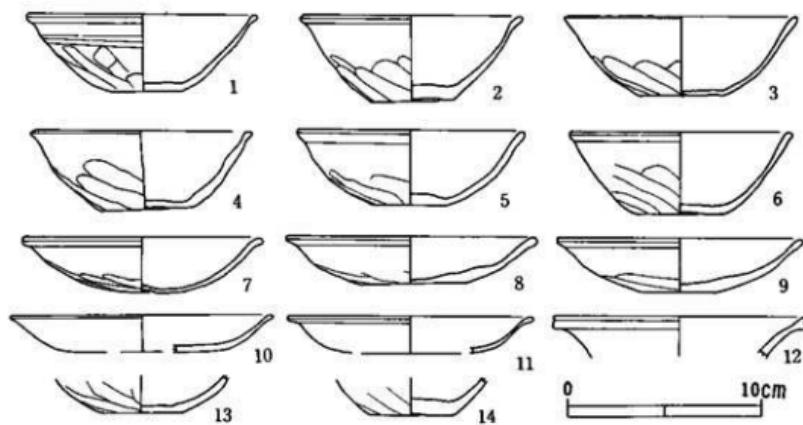
5. 床面直上出土。壺。器高3.8cm、底径3.8cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じであるが、つくりがやや雑で表面が荒れている。上半は灰褐色で、下半は黄褐色を呈する。6. 覆土出土。壺。口径11cm、器高4.2cm、底径4.4cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。7. 床面直上出土。皿。口径12.2cm、器高2.7cm、底径3.9cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも



第133図 4号住居址平面図



第134図 4号住居址カマド実測図

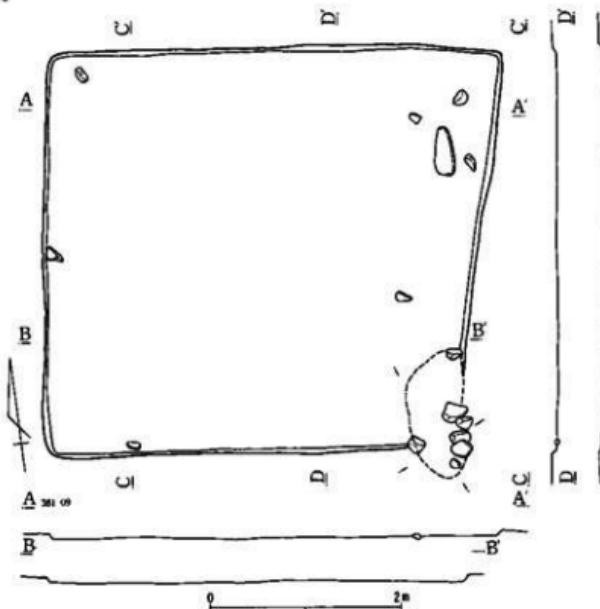


第135図 4号住居址出土土器

2に同じ。8. カマド内出土。皿。口径12.8cm、器高2.4cm、底径5.5cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。9. 13. 14. 床面直上出土。10. 11. 覆土出土。いずれも、整形、胎土、焼成は1と同じ。12. 覆土出土。灰釉陶器壺。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。灰色を呈する。

○ 6号住居址

556+16S2+S3.  
+20S2+S3グリッ  
F. 暗円方形を呈す  
る住居址で、長辺4.  
6m、短辺4.3mを  
測る。本住居址も浅  
く掘り込まれた住居  
址で、壁は、わずか  
に立ち上がりがみら  
れるだけである。カ  
マドは南東コーナー  
に構築されている。  
柱穴、周溝は確認さ  
れなかった。床は、  
ところどころ擾乱が  
入っているが、軟弱  
な部分が多い。遺物  
は少なく、土器片が



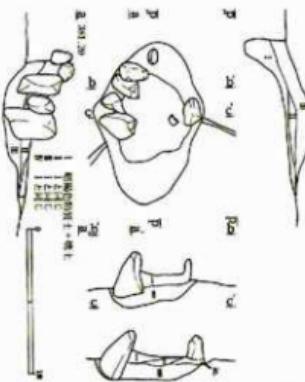
第136図 6号住居址平面図

カマド内及び覆土から、わずかに出土しているにすぎない。

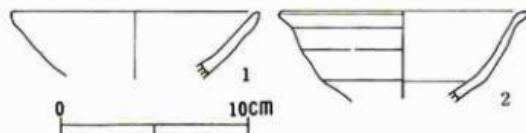
カマドは、浅く掘り込まれた住居址の割には残存状況がよく、袖石も立てられている。掘り方は $110\text{cm} \times 80\text{cm}$ を測り、床面下への掘り込みは $10\text{cm}$ である。袖石は、片方には $40\text{cm}$ ちかい大型の石を用い、片方は、 $20\text{cm}$ に満たないものを、下に土を入れ、天井レベルが同一になるように構築している。焼土の粒子が飛散しており、純粋な焼土の堆積はみられなかった。

#### 土器

1. カマド内出土。壺。内外面とも横ナデ、削り、磨きは一切みられず、表面にはざらつきがある。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。2. 覆土出土。壺。横ナデ後、外面下半にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内面明褐色、外面暗褐色を呈する。



第137図 6号住居址カマド実測図

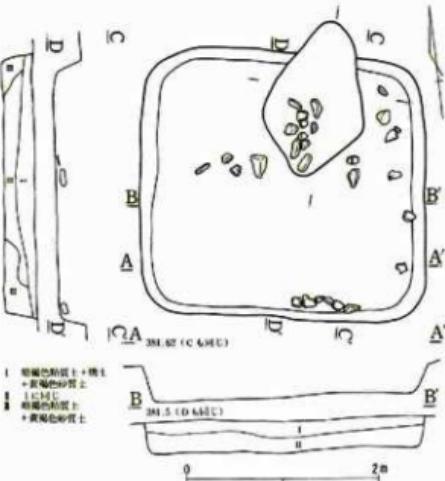


第138図 6号住居址出土土器

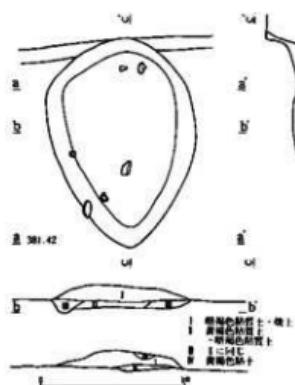
#### ○14号住居址

555+96S2・S3, 556+00S2・S3グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 $3\text{m}$ 、短辺 $2.8\text{m}$ 、壁高 $0.3\text{m} \sim 0.4\text{m}$ を測る。カマドは北壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。壁の立ち上がりは強く、南壁沿いには、 $10\text{cm} \sim 20\text{cm}$ の石が数個転がっており、壁の土留めに用いられた可能性がある。床は壁際以外は踏み固められている。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、下層、とくに壁ちかくには砂質土が混ざる。遺物は少なく、土器だけで、図示した以外には、カマド内より甕の小破片が出土しているにすぎない。

カマドは、 $150\text{cm} \times 100\text{cm}$ の掘り方をもち、床面下への掘り込みは浅く、 $5\text{cm}$ 程度である。カマド内には、小砾だけが石組みはみられず、黄褐色粘土が一部残存することから、粘土積み上げによる構築と思われる。純粋な焼土の堆積はみられない。



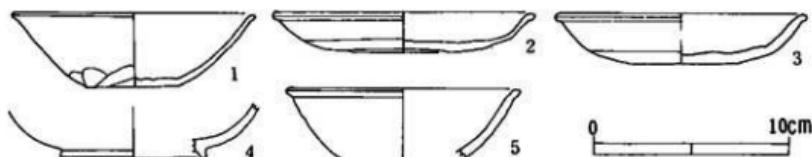
第139図 14号住居址平面図



第140図 14号住居址カマド実測図

### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径12.2cm、器高3.8cm、底径4.6cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子が混入する。焼成は良好で明褐色を呈する。 2. 床面直上出土。皿。口径13.2cm、器高2.1cm、底径4.9cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半から底面に回転ヘラ削りを施す。胎土、焼成、色調は1に同じ。 3. カマド内出土。皿。器高2.6cm。整形、胎土、焼成は2と同じであるが、ナデが難で表面が荒れている。内面暗褐色、外面明褐色を呈する。 4. 覆土出土。灰釉陶器杯。底部は貼り付け高台。ロクロ整形。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈



第141図 14号住居址出土土器

する。 5. 覆土出土。須恵器杯。ロクロ整形。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈する。

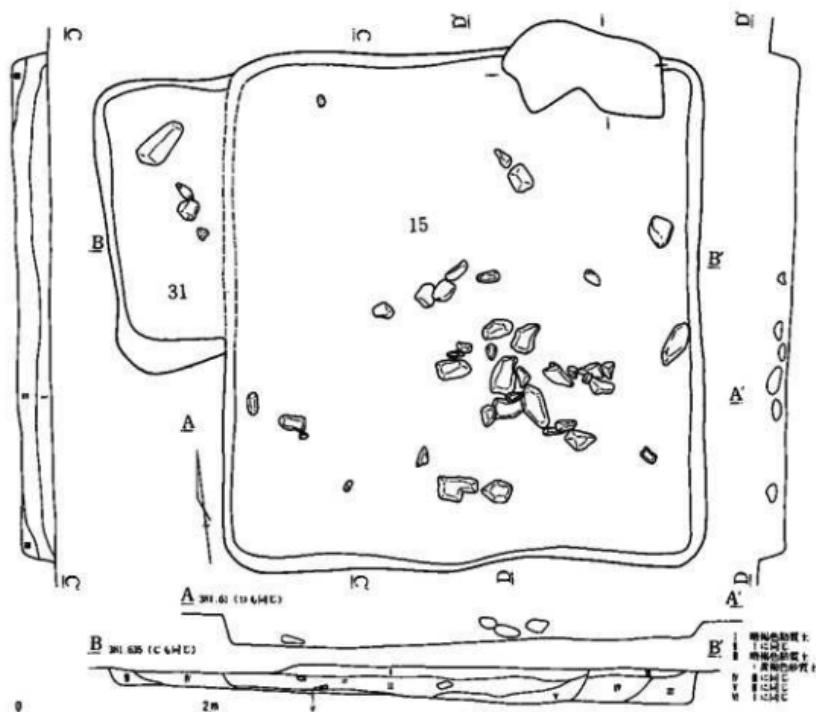
### ○15号・31号住居址

555+92S3・S4,+96S3・S4グリッド。ともに隅円方形を呈する住居址で、15号住居址は長辺5.4m、短辺5m、壁高0.3mを測る。31号住居址は確認された一辺2.9m、壁高0.3mを測る。カマドは15号住居址だけ北壁に確認された。柱穴、周溝は確認されなかった。床はカマド付近においてのみ、踏み固められた部分が確認されたが、他部は軟弱である。2軒の住居址には、床面のレベル差は認められない。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、壁際には、砂質土の混入がある。遺物は土器だけであるが、とくに15号住居址からは、多くが出土している。

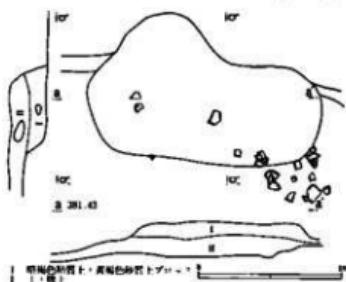
カマドは、160cm×100cmの範囲に焼土がみられるが、床面下への掘り込みはほとんどない。石組みも認められず、粘土の積み上げによる本体の構築であったと思われる。また、焼土の堆積も認められなかった。

### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径18.7cm、器高7.5cm、底径6.2cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半から底部にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、赤褐色を呈する。 2. 床面直上出土。杯。口径14.2cm、器高4.7cm、底径4.2cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。明褐色を呈する。 3. 床面直上出土。杯。口径11.6cm、器高4cm、底径4.7cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。磨きはみられないが、丁寧なつくりである。暗褐色を呈する。 4. 床面直上出土。杯。口径11.9cm、器高4.2cm、底径4.8cmを測る。整



第142図 15号・31号住居址平面図

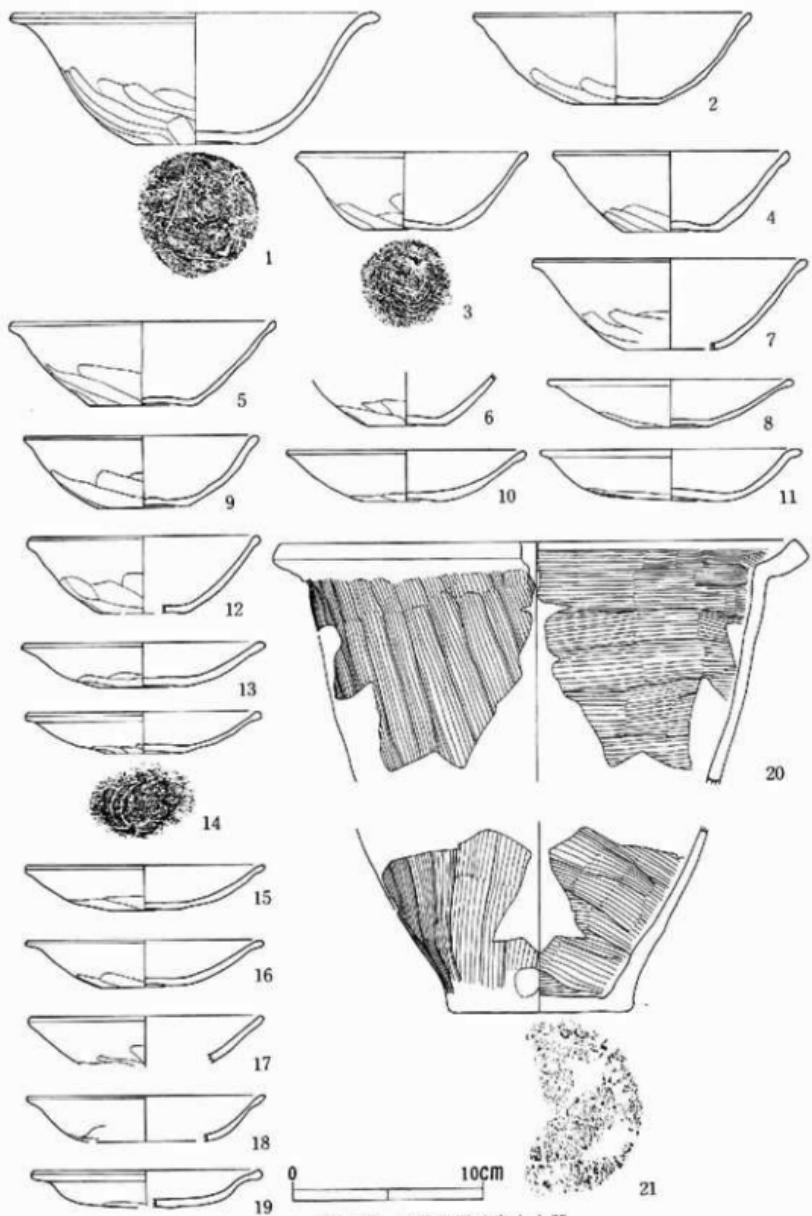


第143図 15号住居址カマド実測図

形、胎土、焼成は1と同じ。内面暗褐色、外面明褐色を呈する。5. 床面直上出土。壺。口径13.6cm、器高4.4cm、底径5.4cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。明褐色を呈する。6. 床面直上出土。壺。底径4cm。整形、胎土、焼成、色調とも5に同じ。

7. 床面直上出土。壺。器高4.7cm。整形、胎土、焼成、色調とも5に同じ。8. カマド内出土。皿。器

高2.5cm、底径3.8cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。9. 床面直上出土。壺。口径12cm、器高3.7cm、底径4.6cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。口縁にタールが付着している。10. 床面直上出土。皿。口径12.2cm、器高2.5cm、底径4cmを測る。整形は1と同じであるが、ナデが極めて雑で表面が荒れている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。褐色を呈する。11. カマド内出土。皿。口径13cm、器高2.6cm、底径4.3cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。12. 床面直上出土。壺。

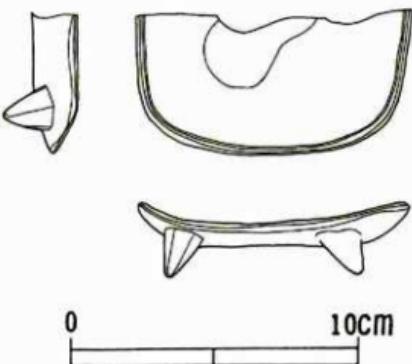


第144図 15号住居址出土土器

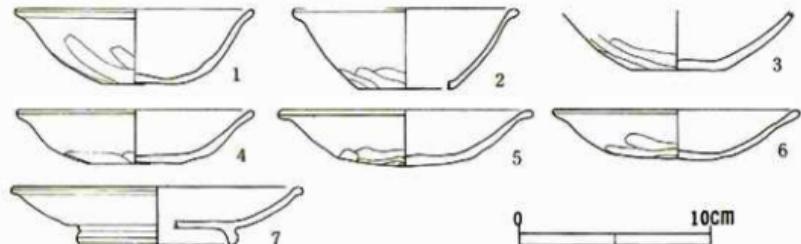
- 口径11.6cm、器高4cm、底径5cmを測る。明褐色を呈する。13. 床面直上出土。皿。器高2.3cm、底径4.1cm。
14. 床面直上出土。皿。器高2.2cm。
15. 覆土出土。皿。黄褐色を呈する。
16. 床面直上出土。皿。口径12cm、器高2.4cm、底径4.2cmを測る。暗褐色を呈する。17. カマド内出土。皿。整形、胎土、焼成とも10に酷似。
18. 床面直上出土。皿。19. 床面直上出土。皿。暗褐色を呈する。20. 床面直上出土。甕。内面横方向、外面縦方

向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒、とくに雲母が目立つ。焼成は良好で、暗褐色を呈する。21. 床面直上出土。甕。20と同一個体と思われる。2~9、11~16、18、19は整形、胎土、焼成とも1に同じ。

第145図は、床面直上出土の土器製観である。この資料についての詳細は、第Ⅳ章で述べることとする。



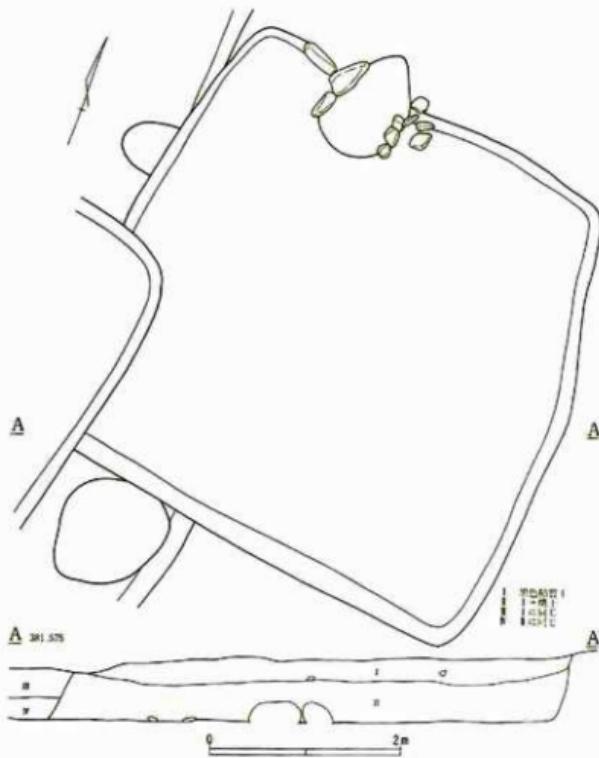
第145図 15号住居址出土甕



第146図 31号住居址出土土器

#### 土器（31号住居址）

1. 床面直上出土。杯。口径12.1cm、器高3.8cm、底径4cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は小砂粒が多く、焼成は良好で、明褐色を呈する。2. 覆土出土。杯。口径11.4cm、器高4.2cm。整形、焼成、色調は1に同じ。胎土は精選されている。
3. 床面直上出土。杯。底径4.8cm。整形、焼成、色調は1に同じ。胎土は精選され赤色粒子を含む。
4. 床面直上出土。皿。器高2.5cm、底径4.2cm。整形、胎土、焼成、色調とも2に同じ。
5. 覆土出土。皿。口径13cm、器高2.9cm、底径3.4cmを測る。整形、胎土、焼成は3に同じ。暗褐色を呈する。
6. 床面直上出土。皿。口径12.3cm、器高2.5cm、底径5.5cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。
7. 床面直上出土。灰釉陶器皿。器高3cm。底部は貼り付け高台。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。



第147図 16号住居址平面図

#### ○16号住居址

555+12 S 3+S 4,+

16 S 3+S 4グリッド。

隅円方形を呈する住居

址で、長辺5.1m、短辺4.9m、壁高0.3m

~0.5mを測る。カマドは北壁に構築され

る。柱穴、周溝は確認され

なかった。床はカマド付近以外は軟弱である。

覆土は暗褐色粘質土を

主体とする。

カマドは、石組みカ

マドで、150cm×90cm

の掘り方をもち、床面

下への掘り込みは10cm

を測る。カマド本体に

は袖石が残り、袖石は

最大のもので50cm×30

cmを測り、袖石間は約

70cmを測る。焼土の堆

積は、最大8cmを測る。

なお、本カマドは、コーナーに構築されたものではないが、壁沿いに石が数個みられ、土留めがなされたと考えられる。

#### 土器

1. カマド内出土。壺。口径12.9

cm、器高5cm、底径4cmを測る。横

ナデ後、外面下半から底面にヘラ削

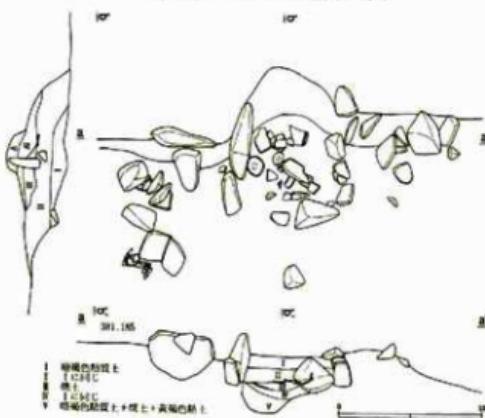
りを施す。胎土は精選され、赤色粒

子を含む。焼成も良好で、明褐色を

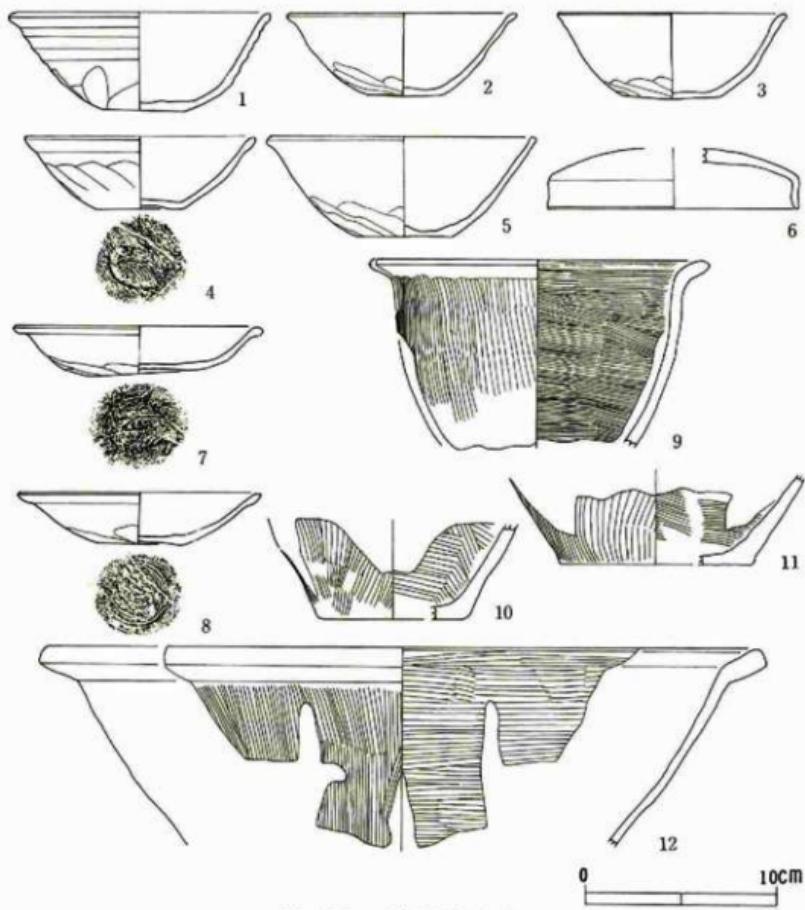
呈する。2. カマド内出土。壺。

口径11.8cm、器高4.2cm、底径3.9

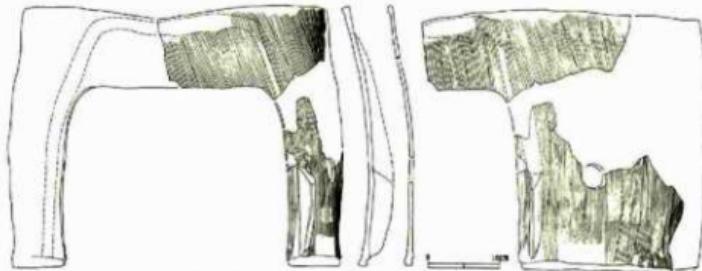
cmを測る。3. カマド内出土。壺。



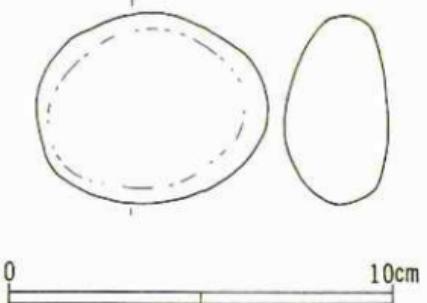
第148図 16号住居址カマド実測図



第149図 16号住居址出土土器



第150図 16号住居址出土土置きカマド



第151図 16号住居址出土石器

口径11.6cm、器高4.4cm、底径4.9cmを測る。2. 3は、整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。4. カマド内出土。坏。口径11.8cm、器高4.4cm、底径4.9cmを測る。整形、胎土は1に同じ。褐色を呈する。5. 覆土出土。坏。器高5.2cm、底径4.9cm。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。6. 覆土出土。灰釉陶器壺。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。

7. カマド内出土。皿。口径12.6cm、器高2.4cm、底径4.7cmを測る。8.

カマド内出土。皿。口径12.2cm、器高2.7cm、底径4.7cmを測る。7. 8は、整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。9~11. カマド内出土。壺。内面横方向、外面縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が多く、焼成も良好である。褐色を呈する。12. カマド内出土。鉢。整形、胎土、焼成、色調とも9に同じ。

第150図に示した置きカマドも、カマド内出土である。推定器高36cm。内面横方向、外面縦方向のハケ調整を行う。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。

#### 石器

輕石の円礫である。磨きや敲打など、加工の跡は全くみられない。50号住居址出土のものと比べ小型である。多量に出土しないが、おそらく浮子として使用したのかもしれない。

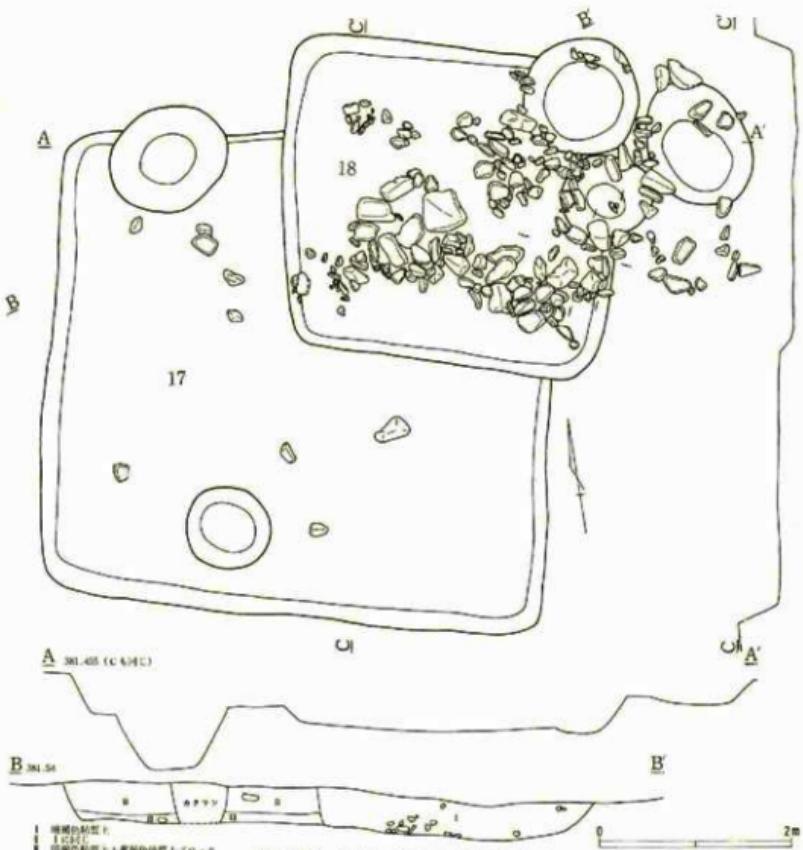
#### ○17号・18号住居址

554+80N5・N6・N7,+84N5・N6・N7グリッド。ともに隅円方形を呈する住居址で、17号住居址は長辺5.3m、短辺5m、壁高0.4m、18号住居址は長辺3.6m、短辺3.3m、壁高0.3mを測る。土塙群が集中し、また、地山が砂礫層のため、2軒とも攪乱が著しい。柱穴、周溝は確認されていない。17号住居址はカマドも確認されず、おそらく18号住居址に切られた北東コーナーに構築されたと思われる。18号住居址ではカマドは東壁に構築される。床はともに軟弱であった。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、砂質土がブロック状に混入している。遺物はほとんどなく、18号住居址のカマド内及び床面直上から坏が1点ずつ出土しているにすぎない。17号住居址からは、遺物は全く出土していない。

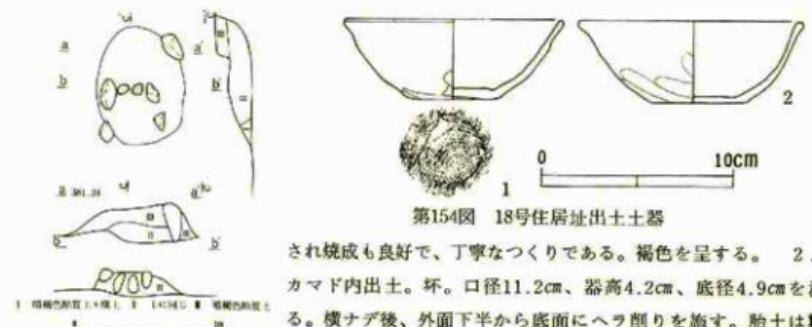
18号住居址カマドは、掘り込みもほとんどなく、90cm×70cmの範囲に焼土粒子が散っており、袖石に30cm程度の平石を用いた石組みカマドである。焼土はわずかに粒子が散っているだけで、純粋な焼土の堆積層はみられなかった。

#### 土器

1. 床面直上出土。坏。口径11.2cm、器高4.2cm、底径4.7cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面をヘラ削りし、さらにヘラ磨きを行っている。磨き部分には光沢がある。胎土は精選



第152図 17号・18号住居址平面図



第153図 18号住居址内微細図

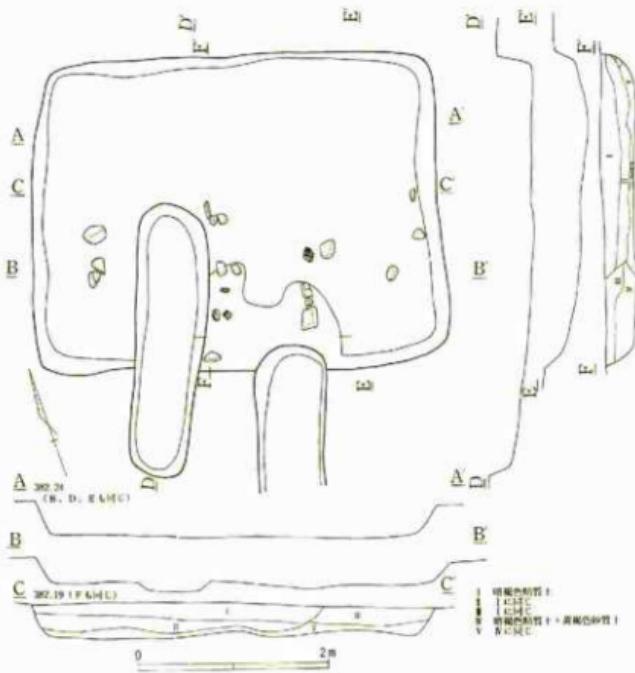
され焼成も良好で、丁寧なつくりである。褐色を呈する。2. カマド内出土。壺。口径11.2cm、器高4.2cm、底径4.9cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子が目立つ。焼成も良好で、明褐色を呈する。

○19号住居址

554+64 N3+N

4,+68 N3+N4グ

リッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.3m、短辺3.3mを測る。カマドは南壁に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。本住居址も、カマドの一部が土塙による擾乱をうけている。床は総じて軟弱である。壁の立ち上がりも弱い。覆土は暗褐色粘質土を主体としており、下層や壁付近には砂質土が混入している。



第155図 19号住居址平面図

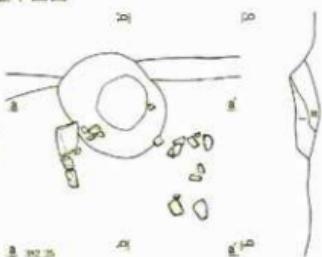
る。遺物は土器がわずかに出土しただけで、図示した以外は、カマド内から甕の小破片が出土しただけである。

カマドの掘り方は、70cm×70cmと小さく、床面下への掘り込みは10cmを測る。掘り方前部には20cm程度の石が転んでおり、石組みカマドと思われる。焼土の堆積はみられず、粒子がわずかにみられる程度であった。

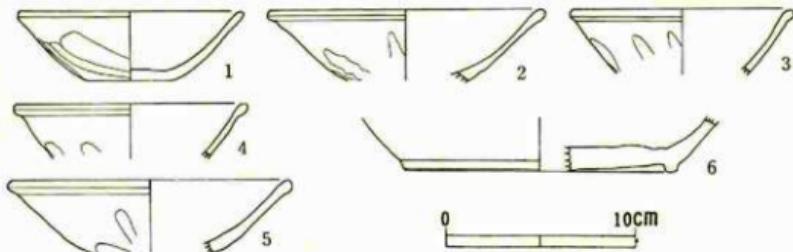
土器

1. 覆土出土。杯。器高3.5cm、底径4.4cm。横ナデ後、外面下半から底面をヘラ削りし、さらにその部分にヘラ磨きを施している。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。褐色を呈する。2. カマド内出土。杯。横ナデ後、外面下半にヘラ削りを施す。また、内面の一部にヘラ磨きを行っている。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で、内面黒色、外面暗褐色を呈する。3. 覆土出土。杯。整形、胎土、焼成は2に同じで、褐色を呈する。赤色粒子が非常に多い。また、口縁の磨きはない。

4. カマド内出土。杯。推定口径11.1cm。整形、胎土、焼成は2に同じであるが、横ナデが



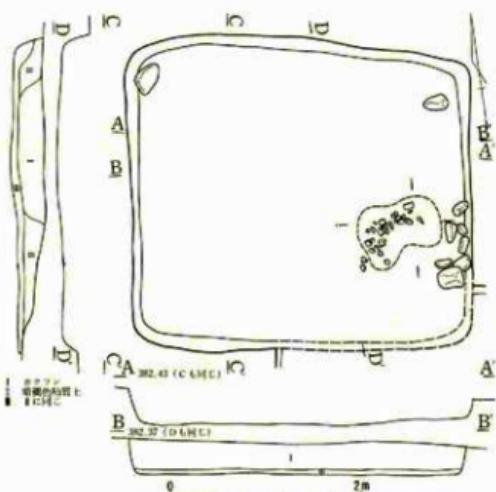
第156図 19号住居址カマド実測図



第157図 19号住居址出土土器

雜で表面が荒れている。また、磨きはみられない。明褐色を呈する。5. 覆土出土。坏。整形、胎土、焼成、色調とも4に同じ。また、口縁にタールが付着している。6. 覆土出土。須恵器壺。底部は貼り付け高台。胎土は精選され、焼成も良好である。内面灰色、外面暗灰色を呈する。

○22号住居址



第158図 22号住居址平面図

554+60N2、+64N1・N2グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.6m、短辺3.3m、壁高0.3mを測る。カマドは、すでに破壊されており、東壁にその残骸と思われる石数個が残り、そのちかくに掘り込み、焼



第159図 22号住居址内微細図

土、カーボンがみられた。床は、破壊されたカマド付近だけが固く、他部は軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。壁の立ち上がりは強い。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、下層には、黄褐色砂質土が混入する。遺物は示した2点のみである。

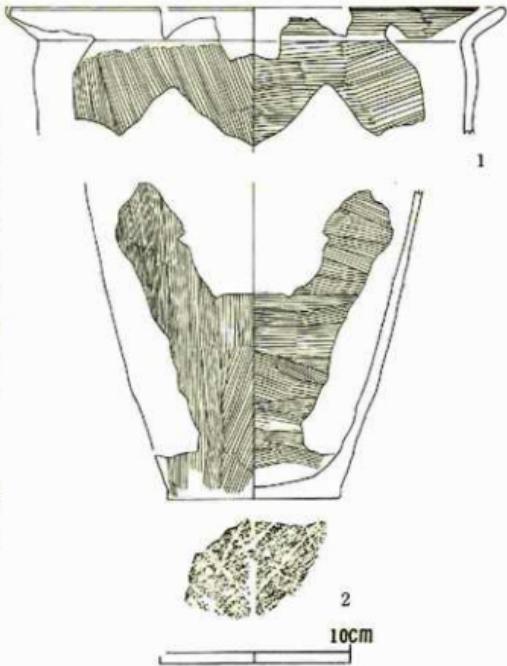
カマドの存在した部分には80cm×50cmの範囲で焼土粒子、カーボンが散っており、焼土層下には、径10cm、深さ5cm程度の小ピットが確認された。おそらく、前述した東壁沿いの石は、20cm～30cm程の大きさで、一部にタールが付着し、黒変しているものがあることから、天井石

もしくは袖石に使用された石と考えられる。

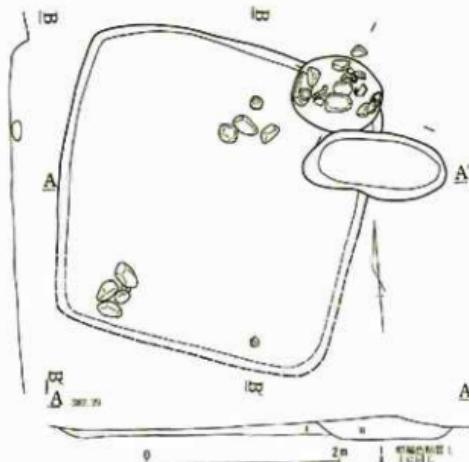
#### 土器

1. 焼土集中部出土。甕。推定口径25.7cm。内面は横方向の、外表面は縦方向のハケ調整を施している。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成も良好で、内外面とも褐色を呈する。2. 焼土集中部出土。甕。底径8.9cm。整形は1と同じであるが、内外面とも底部にまで、ハケ調整が及んでいる。胎土には砂粒が多く含まれ、3mm程度の石英粒子を含んでいる。また、雲母が目立つ。焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。1. 2は同一個体の可能性もある。

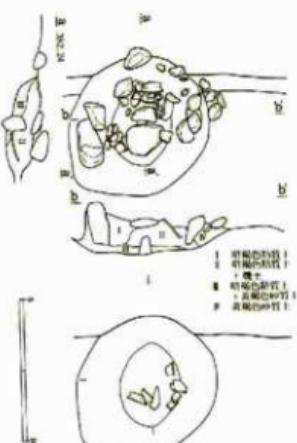
○25号住居址



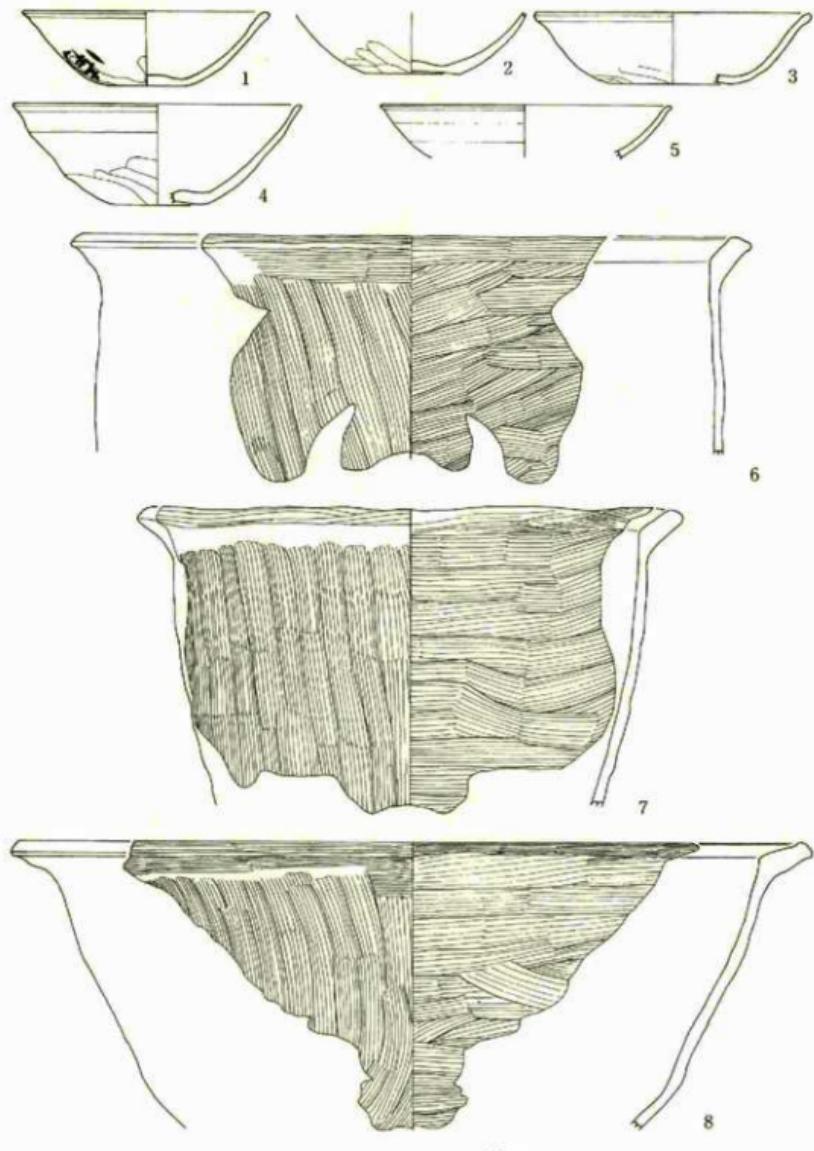
第160図 22号住居址出土土器



第161図 25号住居址平面図



第162図 25号住居址カマド実測図



第163図 25号住居址出土土器

554+92N1・S1、+96N1・S1グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.3m、短辺3.1m、壁高0.2mを測る。カマドは北壁の東コーナー寄りに構築される。柱穴、周溝は認められなかった。床はカマド付近以外軟弱である。壁の立ち上がりも弱い。覆土は暗褐色粘質土で、砂粒は混入しない。遺物は土器が出土した他、刀子片が1点出土している。

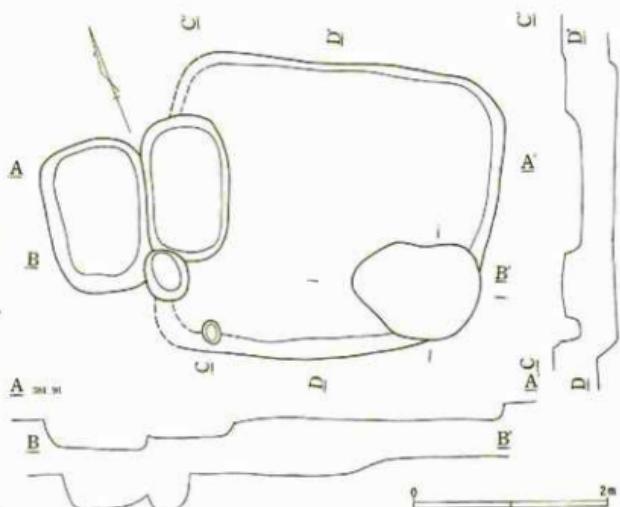
カマドは、100cm×90cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは10cmを測る。本体は、30cmの平石を立てた石組みカマドで、焼土の堆積はみられず、粒子が飛び散る程度である。

#### 土器

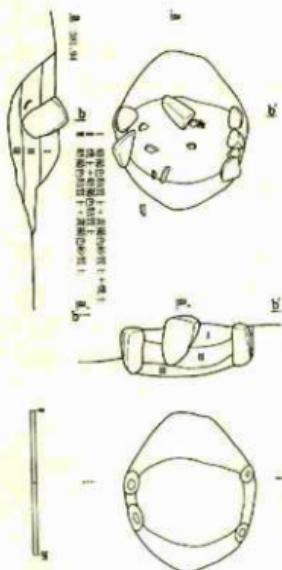
1. 床面直上出土。壺。口径12.5cm、器高3.8cm、底径4.1cmを測る。横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施し、内面はヘラ磨きを行っている。胸部に墨書「南」がみられる。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。 2. 床面直上出土。壺。底径4.9cm。整形、胎土、焼成は1と同じであるが、磨きは認められない。内面明褐色、外表面黄褐色を呈する。 3. 覆土出土。壺。器高3.6cm。整形は2と同じで、胎土には砂粒が多い。焼成は良好で、明褐色を呈する。 4. 覆土出土。壺。器高5.2cm。整形、胎土、焼成は2と同じ。明褐色を呈する。 5. 覆土出土。灰釉陶器皿。ロクロ整形。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。 6. カマド内出土。甕。内面は横向方向の、外表面は縦方向のハケ調整がなされる。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。 7. カマド内出土。鉢。整形、胎土、焼成、色調とも6と同じであるが、雲母がさらに目立つ。また、口縁外表面にも、横向方向のハケ調整がなされる。

#### ○43号住居址

555+24N1・S1、  
+28N1・S1グリッド。  
隅円方形を呈す  
る住居址で、長辺3.  
5m、短辺3.1m、  
壁高0.1mを測る。A  
床はカマド付近以外  
軟弱で、壁も残存部  
分でみると、立ち  
上がりは弱い。柱穴、  
周溝は確認されてい  
ないが、南壁際に径  
20cm、深さ15cmの小  
ピット1基が確認さ  
れた。覆土は、暗褐  
色粘質土を主体とし、  
砂質土の混入がみら



第164図 43号住居址平面図



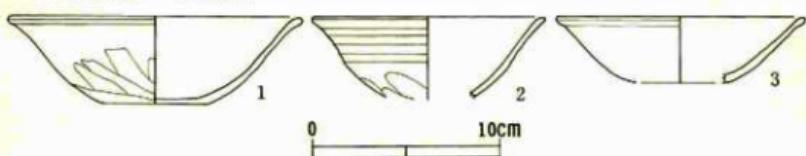
第165図  
43号住居址カマド実測図

れる。また、砂礫層に掘り込まれた住居址のため、壁には自然礫がみられた。遺物は少なく、図示した土器3点のみである。

カマドは、 $110\text{cm} \times 90\text{cm}$ の掘り方をもち、床面下への掘り込みは $15\text{cm}$ を測る。本体は石組みカマドで、袖石は $30\text{cm}$ 程度の平石を用いている。燃焼部本体の袖石間は $80\text{cm}$ を測る。また、掘り方には、袖石の掘り込みもみられる。純粹な焼土層はみられないが、暗褐色土と焼土の混土が厚く堆積している。

#### 土器

1. カマド内出土。壺。推定口径 $14.9\text{cm}$ 、器高 $4.5\text{cm}$ 。内外面横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選されており、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内外面とも明褐色を呈する。2. 覆土出土。壺。小片で、整形は1と同じであるが、ナデもヘラ削りも1に比べ難で、表面が荒れている。胎土は精選されているが、石英粒子が目立つ。焼成は良好で、内面明褐色、外面赤褐色を呈する。3. 床面直上出土。壺。小片で、整形は1と同じであるが、やはり、整形法が難で、表面が荒れている。口縁内面にタールが付着している。胎土は精選され、焼成も良好で、色調は2と同じ。



第166図 43号住居址出土土器

#### ○49号住居址

555+00 S 1・S

2,+04 S 1・S 2グ

リッド。隅円方形

を呈する住居址で、

長辺 $2.6\text{m}$ 、短辺

$2.3\text{m}$ 、壁高 $0.1$

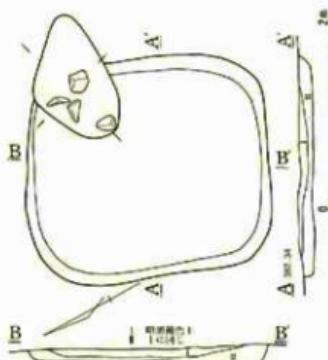
$\text{m}$ を測る。カマド

は北東コーナーに

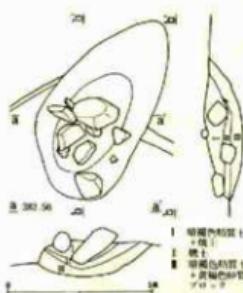
構築される。柱穴、

周溝は認められず、

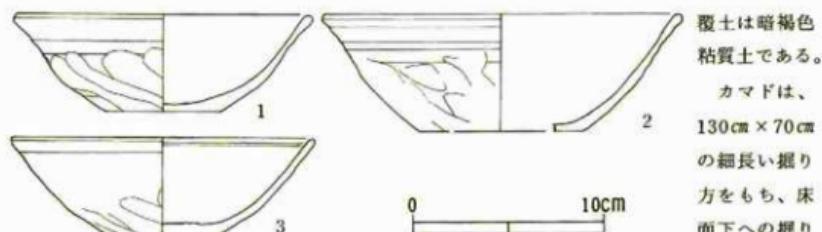
床も軟弱である。



第167図 49号住居址平面図



第168図 49号住居址カマド実測図



第169図 49号住居址出土土器

測る。内部には30cm大の石がみられ、石組みカマドと思われる。焼土の堆積は6cmを測る。

#### 土器

1. 床面直上出土。壺。口径15cm、器高5cm、底径5.8cmを測る。内外面横ナゲ後、外面下半から底面をヘラ削りし、さらにその部分にヘラ磨きを行っている。胎土は精選され、赤色粒子は含まない。焼成も良好で、内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。 2. 覆土出土。壺。器高6cm。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。 3. 床面直上出土。壺。器高5cm、底径6cm。整形は1と同じであるが、ヘラ磨きはみられない。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内外面とも赤褐色を呈する。

#### ○60号住居址

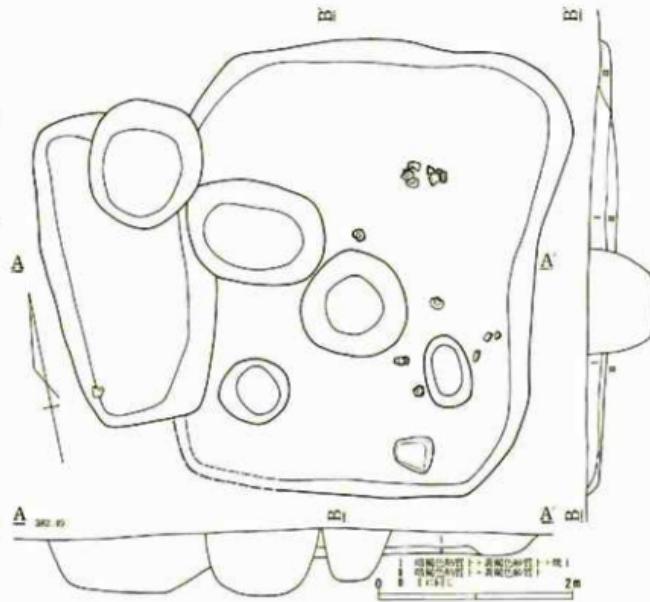
554+80 S 4・S

5、+84 S 4・S 5グ

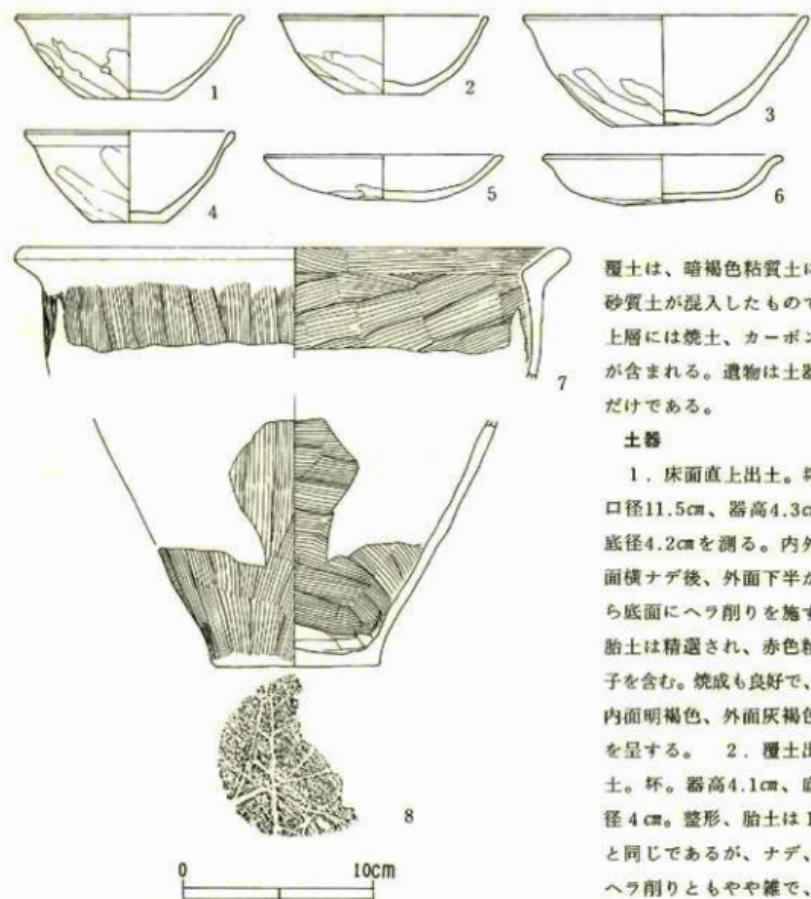
リッド。隅円方形

を呈する住居址で、長辺4.8m、短辺3.6m、壁高0.1m～0.2mを測る。本住居址も土塙集中部分に掘り込まれているため、土塙による擾乱が著しく、カマドは残存しない。柱穴、周溝も認められなかった。壁の立ち上がりは強くない。

床は一部踏み固められているが、軟弱な部分が多い。



第170図 60号住居址平面図



第171図 60号住居址出土土器

覆土は、暗褐色粘質土に砂質土が混入したもので、上層には焼土、カーボンが含まれる。遺物は土器だけである。

#### 土器

1. 床面直上出土。杯。口径11.5cm、器高4.3cm、底径4.2cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、内面明褐色、外面灰褐色を呈する。2. 覆土出土。杯。器高4.1cm、底径4cm。整形、胎土は1と同じであるが、ナデ、ヘラ削りともやや雑で、表面が荒れている。焼成

も良好で、内外面とも明褐色を呈する。3. 覆土出土。杯。口径14.4cm、器高5.6cm、底径5.2cmを測る。整形、胎土、焼成とも1と同じ。内外面とも赤褐色を呈する。4. 覆土出土。杯。器高4.6cm、底径3.6cm。整形、胎土、焼成とも1と同じ。内面褐色、外面赤褐色を呈する。5. 床面直上出土。皿。口径12.2cm、器高2.3cm、底径3.9cmを測る。整形、胎土は1と同じであるが、胎土にやや砂粒が多い。焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。6. 床面直上出土。皿。口径12cm、器高2.5cm、底径5cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも5と同じ。7. 8. 床面直上出土。甕。同一個体と思われる。内面横方向の、外面縦方向のハケ調整がなされる。胎土には砂粒が目立ち、焼成は良好である。内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。

○ 2号住居址

556+20N4+N5、  
+24N4+N5グリッド。隅円方形を呈す  
る住居址で、長辺4.  
9m、短辺4.7mを  
測る。本住居址も、  
黒色土中に掘り込ま  
れた住居址で、しか  
も浅く掘り込まれて  
いるため、床面の一  
部に擾乱が達してお  
り、壁もほとんど確  
認できなかった。平  
面図も推定プランで  
ある。カマドは2基  
確認されており、あ  
るいは、2軒の住居  
址の重複の可能性も

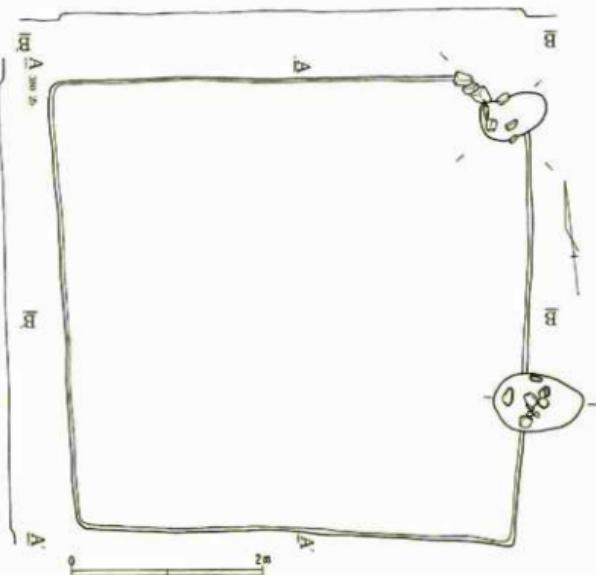
考えられよう。床は、やはりカマド  
付近以外は軟弱である。遺物は、カ  
マド2から出土しており、カマド1  
及び床面直上からは出土していない。<sup>2)</sup>

カマド1は、脇に土留め石を立て  
ている石組みカマドで、70cm×60cm  
の規模で、掘り込みはない。また、  
焼土の堆積もみられない。カマド2  
は、85cm×65cmの規模で、床面下へ  
の掘り込みは5cmを測る。

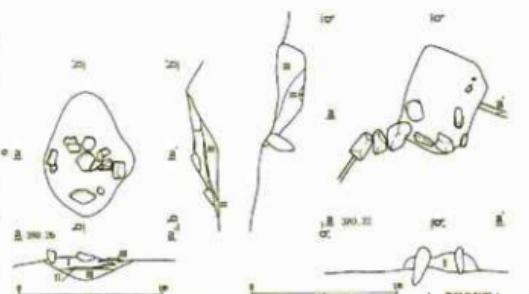
内部にみられる石は10cm  
程度の小さなもので、お  
そらく、粘土積み上げに  
よる本体と思われる。焼  
土は8cmの堆積である。

土器

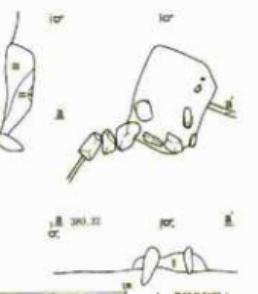
1. カマド2出土。杯。器高7.5cm。内外面とも横ナデで、ヘラ削り・磨きなどは認められ



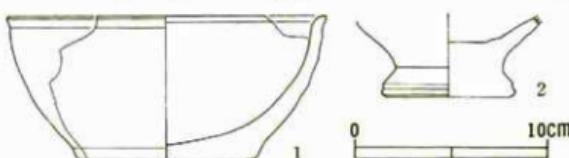
第172図 2号住居址平面図



第173図 2号住居址カマド2実測図



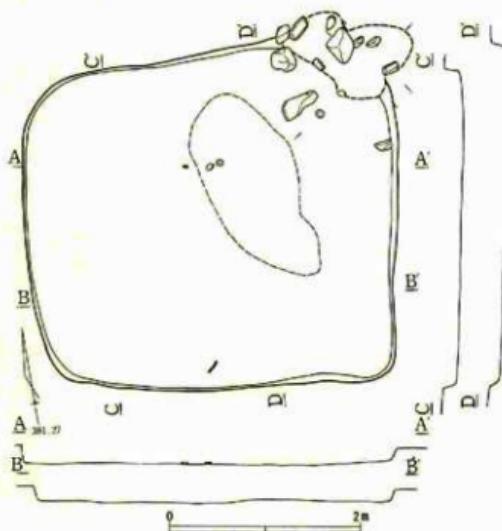
第174図 2号住居址カマド1実測図



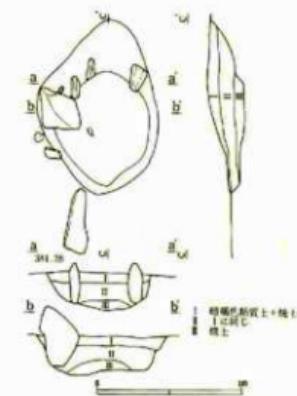
第175図 2号住居址出土土器

ない。胎土は精選され、焼成は良好である。明褐色を呈する。2. カマド2出土。壺。底径6.3cm。磨滅が激しいが、整形は1と同じで、削り・磨きはみられない。胎土には小砂粒が多く、赤色粒子もわずかに含む。褐色を呈する。

#### ○ 7号住居址



第176図 7号住居址平面図



第177図 7号住居址カマド実測図

556+04 S2,+08 S2グリッド

D. 暗円方形を呈する住居址

で、長辺3.9m、短辺3.5m、

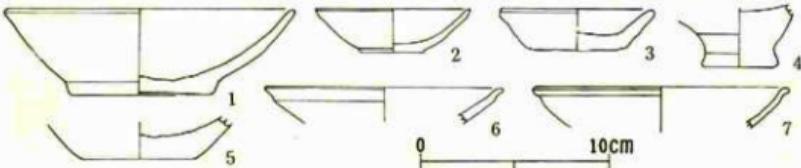
壁高0.2mを測る。カマドは

北東コーナーに構築される。柱穴、周溝は認められなかった。床は、踏み固められた部分が多く、住居址中央部の床面上には、2m×1mの範囲で炭が散っていた。

カマドは、120cm×85cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは10cmを測る。30cm程度の平石を用いた石組みカマドで、袖石間は40cmを測る。なお、カマド前部には、50cmちかい平石があり、天井石と思われる。焼土の堆積は8cmを測る。

#### 土器

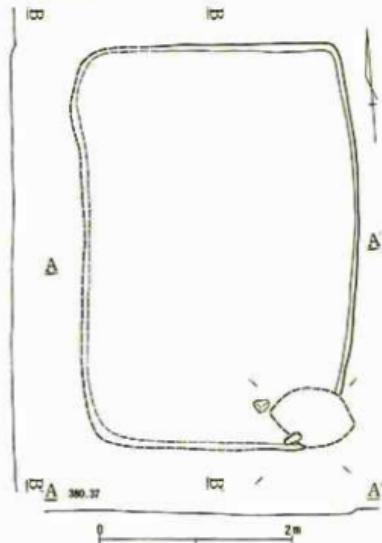
1. 床面直上出土。壺。口径14.7cm、器高4.5cm、底径7.2cmを測る。横ナデ調整で底部は糸切り。胎土は精選され、雲母が目立つ。焼成は良好で、褐色を呈する。2. 床面直上出土。壺。口径8cm、器高2.3cm、底径3.1cmを測る。褐色を呈する。3. 床面直上出土。壺。口



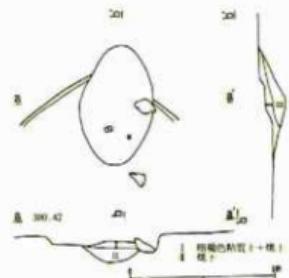
第178図 7号住居址出土土器

径7.8cm、器高2.2cm、底径4.4cmを測る。4. 床面直上出土。台付壺。底径3.5cm。明褐色を呈する。2～4は、整形、胎土、焼成とも1に同じ。5. カマド内出土。壺。底径5.8cm。整形は1と同じ。胎土には砂粒が多く、赤色粒子を含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。6. 7. 覆土出土。灰釉陶器壺。ロクロ整形。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈する。

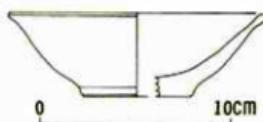
#### ○ 9号住居址



第179図 9号住居址平面図



第180図 9号住居址カマド実測図



第181図 9号住居址出土土器

556+00N5+N6,+04N5+N6グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺

4.2m、短辺2.9mを測る。本住居址も浅く掘り込まれており、土器が1点出土したにすぎない。カマドは南東コーナーに構築される。柱穴、周溝は認められなかった。

カマドも破壊されているが、85cm×50cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは15cmを測る。内部には平石がみられ、石組みカマドと思われる。焼土の堆積は10cmを測る。

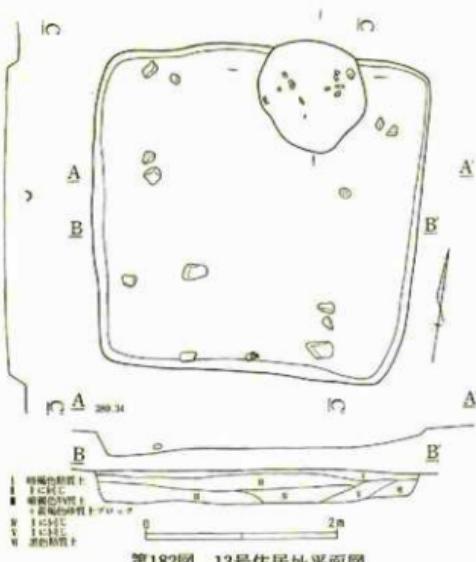
#### 土器

1. 床面直上出土。壺。器高4.4cm。横ナデ。底部は糸切り。ヘラ削り、磨きは認められない。胎土は精選され、焼成も良好で、丁寧なつくりである。内外面とも明褐色を呈する。

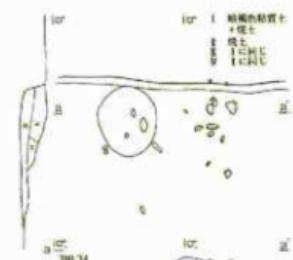
#### ○ 13号住居址

556+08N5+N6グリッド。隅円方形を呈する住居址で、1辺3.4m、壁高0.2mを測る。カマドは北壁に構築される。柱穴、周溝は認められなかった。床はカマド付近以外軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、砂質土がブロック状に混入する。遺物は土器が床面直上より完形で1点出土し、他には、カマド内より小破片が出土しただけである。

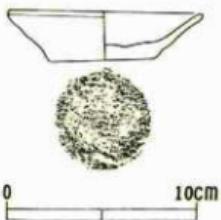
カマドは、内部に石組みがみられず、粘土積み上げによるものと思われる。掘り込みもほとんどなく、わずかに50cm×40cm、深さ10cmの掘り込みが検出されたにすぎない。



第182図 13号住居址平面図



第183図 13号住居址カマド実測図



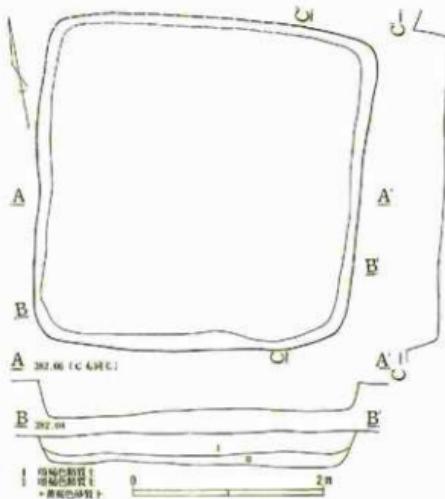
第184図 13号住居址出土土器

### 土器

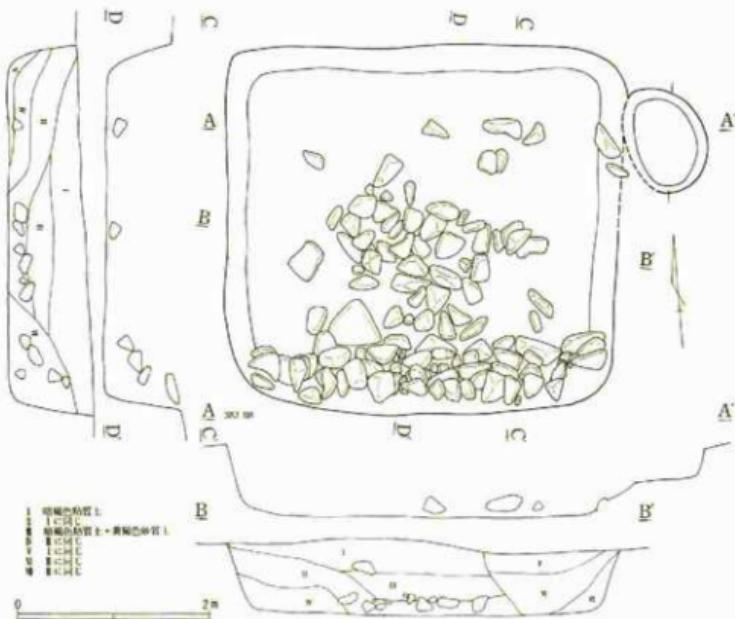
1. 床面直上出土。杯。口径10cm、器高2.5cm、底径5.3cmを測る。横ナデ。底部は糸切り。胎土は精選され、焼成も良好である。内外面とも明褐色を呈する。

### ○20号住居址

554+68N4+N5,+72N4+N5グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.5m、短辺3.4m、壁高0.3mを測る。北壁から西壁及び南壁の一部を、1号・2号溝に切られている。カマドは存在しないが、おそらく攪乱部分に存在したと思われる。柱穴、周溝は認められなかつた。壁の立ち上がりも弱い。床は中央部分で一部認められたが、他部は軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、大きく上下二層に分かれ、下層には砂質土の混入がみられた。本住居址からは、出土遺物がなく、図示しなかったが、わずかに覆土上層から、国分期の杯の小破片が出土したにすぎない。



第185図 20号住居址平面図



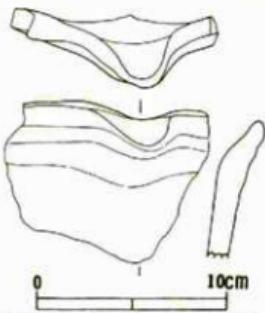
第186図 29号住居址平面図

○29号住居址

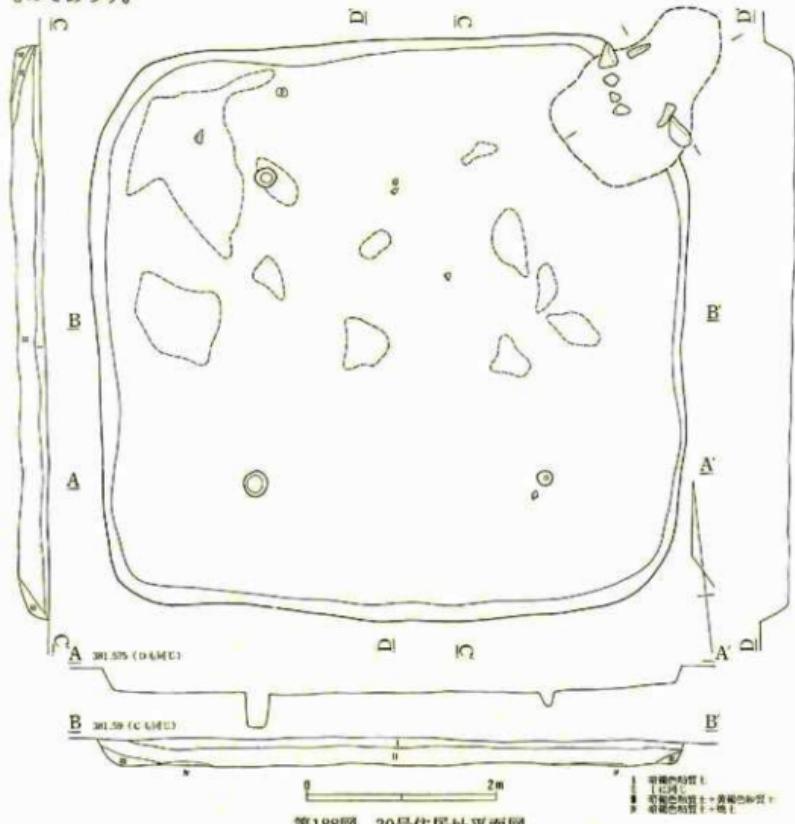
553+96S2・S3, 554+00S2・S3グリッド。本遺構は、調査段階で住居址として扱ったが、カマド、柱穴、周溝などの施設はなく、また、後述する石組みの存在からも、住居址とは考えにくい。しかし、本遺跡で、2基確認されている方形石組遺構のような溝は伴わず、底面の鉄分堆積もみられないため、水溜めとも考えられず、一応住居址として報告することにする。

長辺4.1m、短辺3.8m、壁高0.6m～0.8mを測る。南壁には、10cm～30cm程度の石を壁に貼り付けるように積み上げ、また、覆土中からも同程度の石が多く出土している。他の三壁には石積みはみられないが、壁の立ち上がり具合は南壁と変わらない。確認されている方形石組遺構に比べると、石も小さく、積み上げ方も乱雑である。床面は平坦で、軟弱である。覆土は、他の住居址と同様に、暗褐色粘質土を主体とし、壁際には砂質土の混入がみられるが、住居址の覆土にみられる焼土粒子やカーボンは、全く含んでいない。

遺物は1点だけ覆土中から出土している。片口の土師質土器で、内面及び口縁外面は横ナデ調整がなされている。外面 第187図 29号住居址出土土器



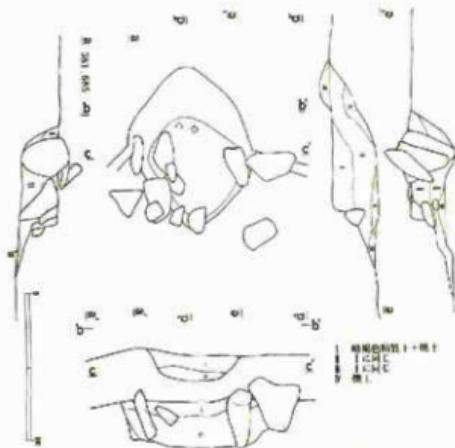
は整形時のままで、表面が荒れている。胎土には砂粒が少なく、赤色粒子も含んでいる。器厚が1cmちかいため、焼成はやや不良である。内外面とも褐色を呈する。中世に位置づけられるものであろう。



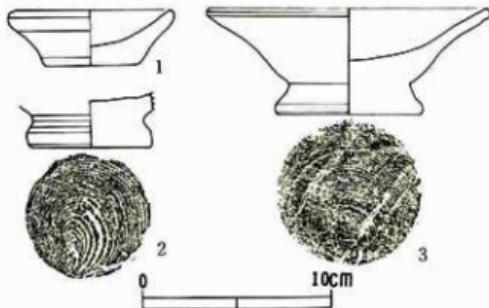
第188図 30号住居址平面図

#### ○30号住居址

555+84 S2・S3,+88 S2・S3グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺6.2m、短辺6m、壁高0.2m~0.3mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。周溝は認められないが、柱穴は3本確認された。おそらく、4本柱穴と思われるが、カマドちかくの1本は確認されなかった。径20cm程度の円形を呈し、東側の1本は深さ12cmと浅く、西側の2本はそれぞれ38cm、34cmを測る。床は踏み固められた部分が多く、床面北半分のところどころに、焼土、カーボンが認められた。床面全面を覆うほどではないが、一部は壁まで達しており、火災住居と考えられる。壁の立ち上がりは強い。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、壁際、下層には、焼土、カーボンが多く含まれる。遺物は少なく、土器だけである。



第189図 30号住居址カマド実測図



第190図 30号住居址出土土器

### ○35号住居址

555+80S6・S7,+84S6・S7グリッド。隅円長方形を呈する住居址で、長辺4.6m、短辺3.7m、壁高0.1mを測る。なお、本住居址の南東コーナー付近は、路線外のため未調査である。本住居址も浅く掘り込まれた住居址である。カマドは、北壁の北東コーナー寄りに構築されている。柱穴、周溝は認められなかった。床も、カマド付近が踏み固められているだけで、他部は軟弱である。本住居址内には、床面に接して、30cm~40cm程度の石が多くみられたが、使用痕もみられず、ススの付着も、火熱を受けたための剥離なども認められなかった。壁の立ち上がりは、残存部分からみる限り強くはない。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、焼土粒子、カーボンが混入している。遺物は壺の破片が、覆土から1点出土しただけである。

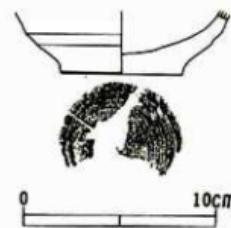
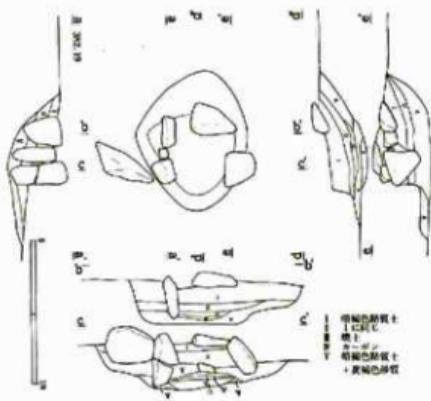
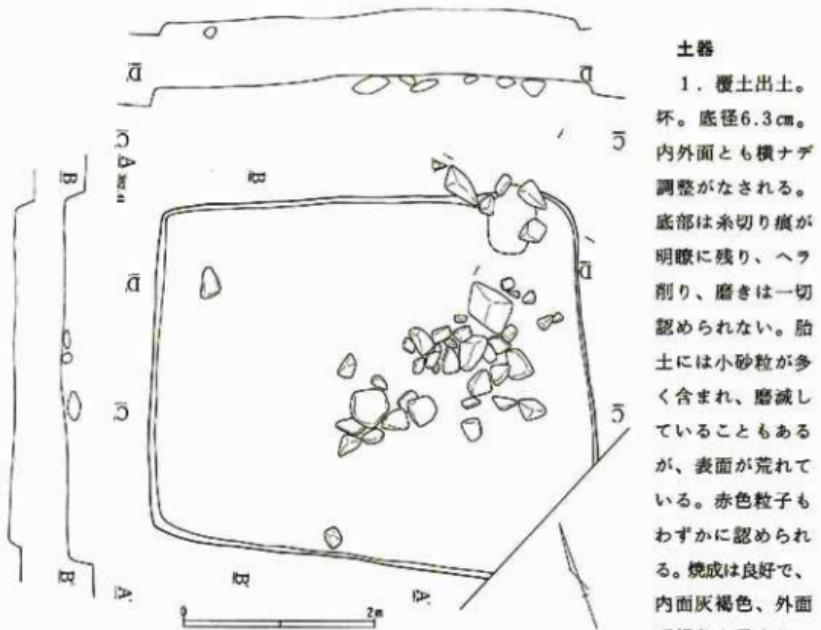
カマドは、95cm×75cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは5cmを測る。30cm~40cmの平石を用いた石組みカマドで、袖石間は50cmを測る。焼土の堆積は約5cmである。なお、カマドの脇には、30cm程の石を壁面に貼り、土留めとしている。

カマドは、110cm×85cmの掘り方で、床面下への掘り込みは5cmを測る。30cm程度の平石を用いた石組みカマドで、カマド脇には土留め石が立てられていた。袖石間は60cm。焼土層は5cmを測る。

### 土器

1. 床面直上出土。壺。口径8.5cm、器高2.9cm、底径4.9cmを測る。横ナデ。底部は糸切り。ヘラ削り、磨きは一切認められず、表面が荒れている。胎土は精選されているが、小砂粒が目立つ。焼成は良好で、褐色を呈する。2. 覆土出土。台付壺。底径6.6cm。整形は1と同じであるが、非常に丁寧に行われている。

胎土は精選され、雲母、長石の小砂粒が目立つ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。3. 床面直上出土。台付壺。口径14.5cm、器高5.5cm、底径7.6cmを測る。整形は1と同じで、丁寧である。また台部と、台部のくびれには、指頭による調整がなされている。胎土は精選され、焼成も良好である。内面灰褐色、外面赤褐色を呈する。



は、最も厚い部分で6cmを測る。床は踏み固められた部分が多い。壁の立ち上がりは、残存部分で見る限り弱い。覆土は、暗褐色粘質土が主体で、壁際には砂質土の混入が著しい。また、下層は焼土、カーボンがおびただしい。遺物の量は極めて少ないが、カマドや床面直上から土器・石器・鉄製品が出土している。鉄製品についてはまとめて後述する。住居内には、

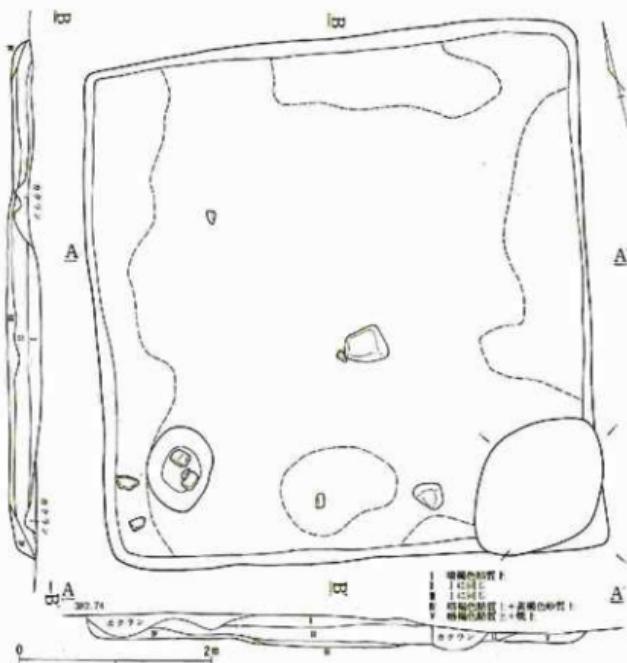
90cm×65cm、深さ

40cmの楕円形を呈するピットが1基あり、土器片・角礫が出土している。

カマドは、残存状況が比較的良好で、120cm×100cmの掘り方をもつ。カマドの両脇には、40cm程度の平石を壁面に押しつけるように配して土留めとしている。また、住居外の掘り込みは、幅25cm、長さ30cm、深さ10cmの細長いもので、煙道と考えられる。本体は、30cm程度の平石を袖石とした石組みカマドである。確認された袖石は1枚だけであるが、袖石間は50cm程度と推定される。カマド内には、焼土粒子、カーボンを主体とした、15cmの堆積がみられた。

#### 土器

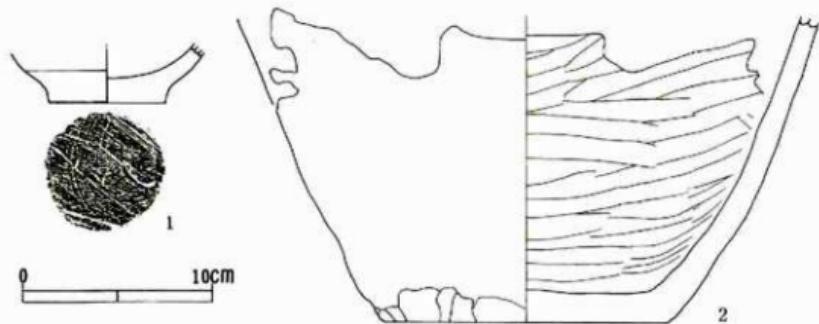
1. 床面直上出土。壺。底径6.2cm。横ナデ。底部は糸切り後、一部にヘラ削りを行う。胎土には小砂粒を多く含んでおり、石英・長石・雲母が目立つ。また、赤色粒子もみられる。断面には1mm~3mm程度の隙間が多くみられ、また底



第194図 37号住居址平面図



第195図 37号住居址カマド実測図



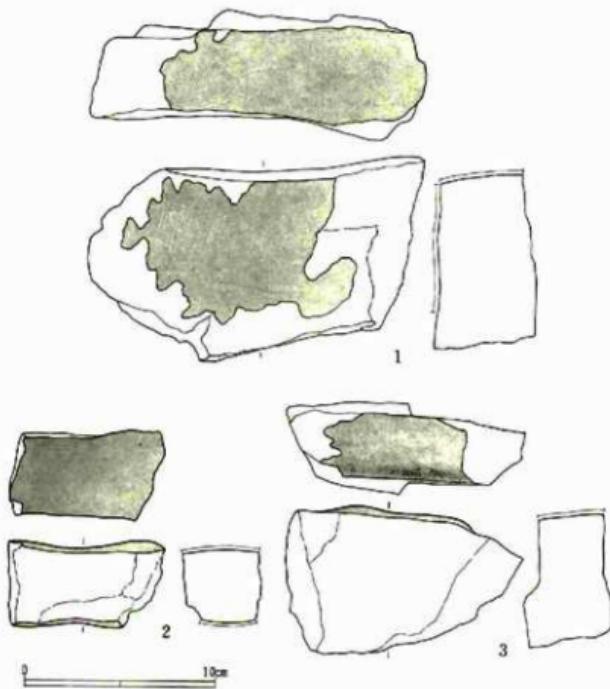
第196図 37号住居址出土土器

面にも亀裂がみられることから、胎土に空気を含んだまま、整形、焼成したものと思われる。焼成は良好で、内面暗褐色、外面明褐色を呈する。

2. 床面直上及びピット内出土。甕。底径15cm。内外面横ナデ後、外面には縦方向のヘラ削りを施す。また、底部付近は、横、斜め方向の細かなヘラ削りを施している。胎土は精選され、焼成も良好である。内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。

#### 石器

砥石 3点出土。いずれも凝灰岩で、お



第197図 37号住居址出土石器

そらく同一母岩であると思われる。1は角礫の片側の横面を最もよく用いている。その面は湾曲している。広い面はかなり凹凸がある。2は、焼けている。両横面を用い、いずれもよく用いている。3は片側の横面のみを用いている。三者は、接合を試みたが接合しなかった。大きな砥石用石材を確保し、少しづつ分割して使用したのであろう。

#### ○40号住居址

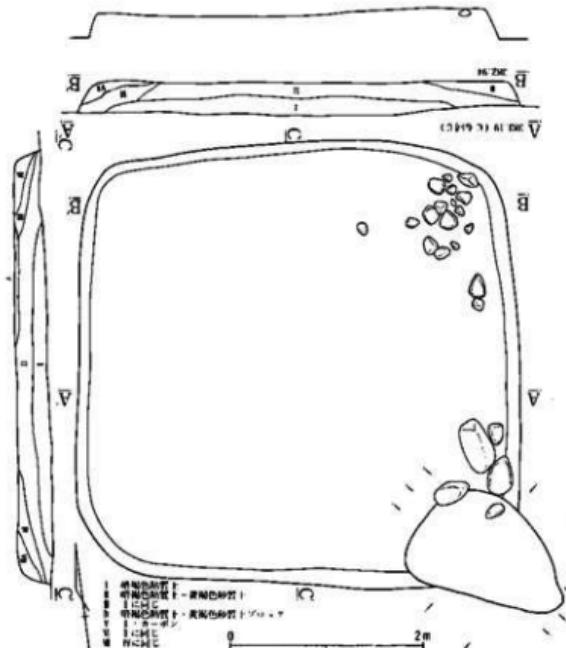
554+20 S1・S2,+24 S1・S2グリッド。隅円方形を呈する住居址で、一辺4.6m、壁高0.3mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。本住居址も中央部に焼土、カーボンが堆積していた。床はほぼ全面踏み固められている。覆土は、やはり暗褐色粘質土を主体としたもので、壁際には、砂質土がブロック状に混入する。壁の立ち上がりは強くはない。遺物は少なく、土器が床面直上、覆土から出土したほかは、覆土上層から鉄器が2点出土したにすぎない。また、北東コーナー付近からは、10cm~20cmの円礫が床面からやや浮いた状態でまとまって出土しているが、火熱の痕跡、擦痕などは認められなかった。

カマドは、残存状況が良好で、前述した37号住居址と酷似した構造をもつ。本体は130cm×100cmの掘り方をもち、袖石の掘り方も認められる。袖石は4枚確認されたが、前面の2枚は40cmを越える大型の平石を用い、後方の2枚は30cmを測るが、天井石が乗ったままであった。掘り方と袖石の間には、灰色粘土を埋め、補強している。煙道部は幅40cm、長さ40cm、深さ10cmの掘り方をもつ。また、本住居址のカマドも40cm程度の平石を壁面に貼り付け土留めをしている。焼土は、カーボン、灰と混ざって、15cm程の堆積であった。

#### 土器

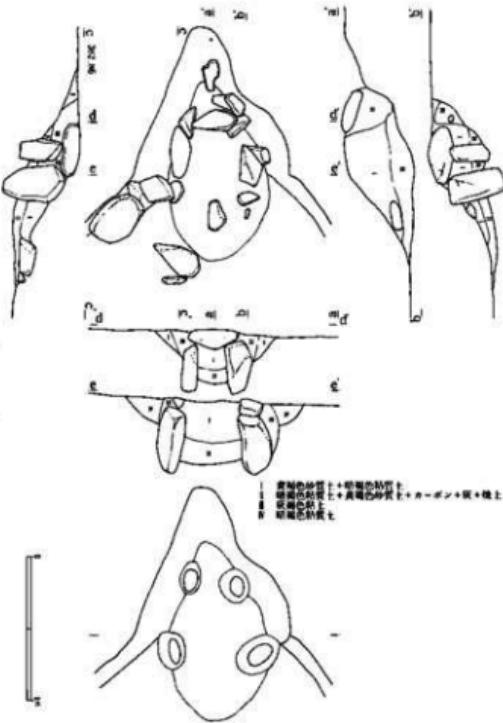
##### 1. 覆土出土。Ⅲ. 推定

口径12.6cm、器高2.4cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半から底面にヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、褐色を呈する。2. 覆土出土。壺。推定口径7.8cm、器高2.6cm、底径4.2cmを測る。横ナデ。底部は糸切り痕が不明瞭に残るが、磨滅によるもので、削りはみられない。胎土には小砂粒が多く含まれ、赤色粒子もわずかに含む。焼成も良好で、内外面褐色を呈する。3. 床面直上出土。壺。口径8.5cm、器高2.6cm、底径4.9cmを測る。形状は2と同じ。胎土は精選されているが、雲母を多量

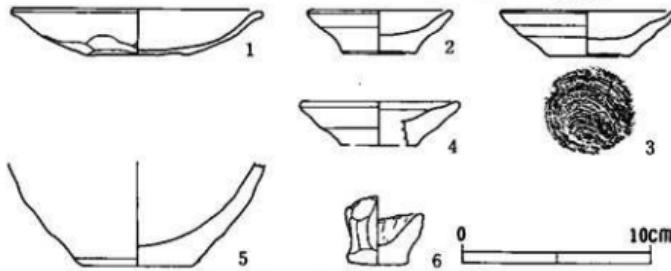


第198図 40号住居址平面図

に含み、赤色粒子はみられない。焼成も良好で、内外面とも暗褐色を呈する。4. 覆土出土。杯。器高2.5cm。整形、胎土、焼成、色調とも2に同じ。5. 覆土出土。杯。底径5.6cm。磨滅が激しいが、整形は2に同じ。胎土には小砂粒が多く、焼成は不良で、内外面とも灰褐色を呈するが、内面の中央部分は黒色を呈する。6. 床面直上出土。手捏ね。口径4cm、器高3.6cm、底径3.2cmを測る。整形は雑で、口縁は平坦ではなく、粘土塊をつまみ上げるような整形法でつくられている。指頭による調整がなされているが、外面は縦方向に丁寧に行われ、内面は極めて雑で、表面が荒れている。胎土には小砂粒を多く含むが、赤色粒子は全く含まない。焼成も良好で、内外面とも赤褐色を呈する。



第199図 40号住居址カマド実測図



○28号住居址

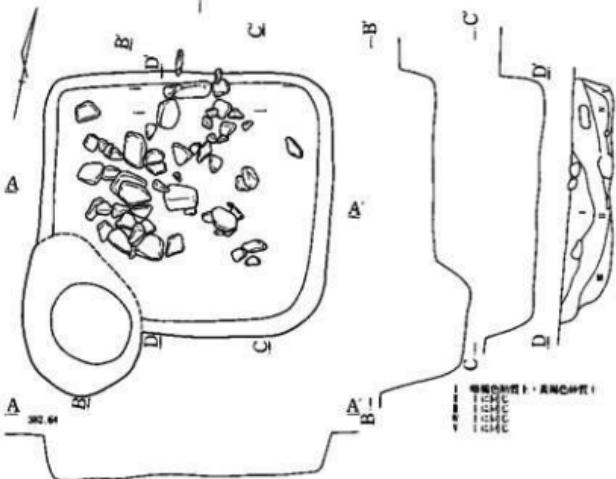
554+20N1・N2,+24N1・N2グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.1m、短辺2.8m、壁高0.4m~0.5mを測る。カマドは北壁中央に構築される。柱穴、周溝は確認されなかった。床はカマド付近以外は軟弱である。また、床面には20cm程度の石がみられたが、これ

らは、同様な石が覆土からも多く出土していることから、壁付近が埋没したのに、投げ込まれたものと思われる。覆土は大きく三層に分かれ、上層は砂質土を主体とし、中層は暗褐色粘質土を主体とする。下層及び壁際は砂質土を主体とするもので、焼土、カーボンの混入はほとんどない。壁の立ち上がりは強い。遺物は、カマド、床面直上、覆土とも一切出土しなかった。

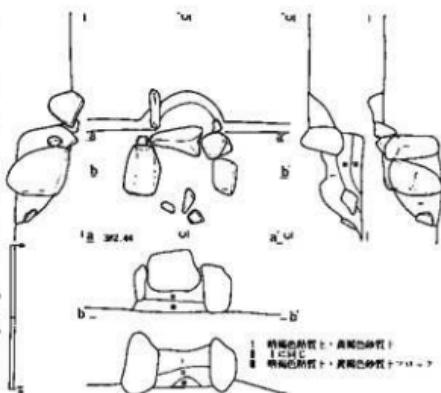
カマドは、石組みカマドであるが、これを探っていたと思われる粘土は確認されなかった。住居内の掘り込みはみられず、掘り方は、壁から外側に幅60cm、奥行き20cm程度みられるだけであった。袖石は両側に2枚ずつ、4枚が確認されたが、使用されていたのは平石ではない。前方の袖石間は50cm、後方は30cmを測るが、後方の袖石の間には30cm程度の天井石が落ち込んでいた。純粋な焼土の堆積はみられず、中心部分に、わずかに焼土粒子、カーボンがみられる程度であった。

### ○33号住居址

555+88S6・S7,+92S6・S7グリッド。一部を調査しただけであるが、隅円方形を呈する住居址で、北辺は4m程度と推定される。これは、踏み固められた床面の範囲から推定したもので、本住居址も非常に浅く掘り込まれておらず、壁は確認されていない。調査区域内との境界の断面でみると、壁高35cm程度と推定され、立ち上がりも強くはない。柱穴、周溝は確認されなかった。覆土は暗褐色粘質土一層だけで、砂質土の混入ではなく、焼土、カーボンが含まれている。カマドも確認されなかったが、北辺中央部付近を中心に、床面に、焼土、カーボンが散っている。

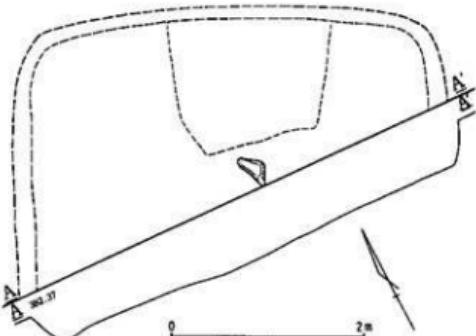


第201図 28号住居址平面図



第202図 28号住居址カマド実測図

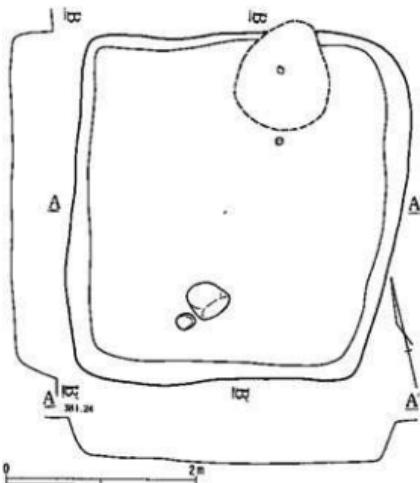
ており、掘り込みはないが、北壁のカマドの可能性が強い。出土遺物は全くなく、調査区境界の断面の、覆土に相当する部分に、国分期の壺の小破片が確認されたにすぎない。他には、中央部に床面に接する状態で、30cm程度の平石が確認されただけである。



第203図 33号住居址平面図

#### ○ 55号住居址

555+60 N2・N3、+64 N2・N3グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺3.6m、短辺3.4m、壁高0.4mを測る。カマドは北壁に構築されたと思われる。柱穴、周溝は確認されなかった。床は軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。北壁のカマドが存在したと思われる部分には、掘り込みは確認されなかつたが、110cm×100cmの範囲で、焼土、カーボンが散っていた。覆土は、ほぼ暗褐色粘質土の單一層で、焼土、カーボンは混入するものの、砂質土の混入はみられなかつた。本住居址も、床面直上はもちろん覆土からも遺物は出土しておらず、南壁にちかい部分に径40cm及び径20cmの石が、床面直上に確認されただけである。



第204図 55号住居址平面図

#### ○ 鉄製品

##### 鉄鎌 (1, 2)

1は、40号住居址の覆土中より出土したものである。ほぼ完形にちかいものと言える。鎌身は五角形を呈し、断面がレンズ状の両丸造りのものである。特に棘突起などは、今のところ明瞭にできない状態である。全長10.65cm、鎌身長2.1cmほどである。40号住居址からは、土師質の壺類が出土しており、北堀Ⅳ期におかれる。2は、7号住居址の覆土中より出土したもので、ほぼ完形である。鎌身は断面がレンズ状の両丸造りで、柳葉形に似る形態のものである。全長13.6cm、鎌身長8.8cm、基長4.8cmを測る。7号住居址出土の土器は、台状の底部を形成する土師器の壺類であり、灰釉陶器も伴出するようである。

### 刀子（3）

23号住居址より出土している。茎部の一部と、刃の大半を欠いているようである。刃は楔形を呈し、関部で最も幅が広くなり、1.15cmほどを測る。現存する刃部は2.9cm、茎部3.6cmほどである。半球形の坏などを伴出しており、北縄Ⅰ期に比定される。

### 不明鉄製品（4）

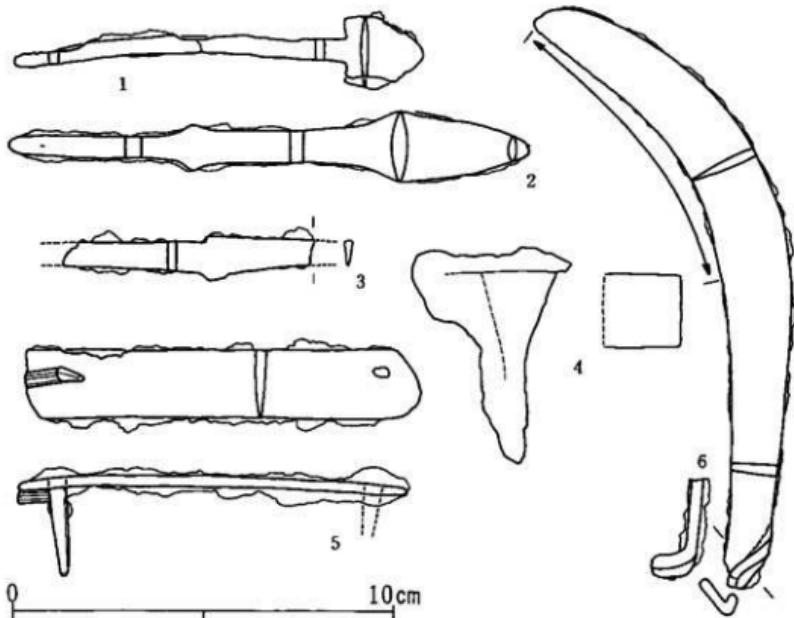
4は、37号住居址より出土した、板状ないしカマボコ状の頭をもつ製品で、頭の直下の断面が四角形を呈し、他端に向い細くなるものである。北縄Ⅱ期に位置づけられる。

### 半月形鉄製品（5）

45号住居址より出土している。ほぼ完形に近い状況といえる。長さ10.3cm、身幅1.7cm～1.8cm、背厚0.25cmを測る。両端の中央やや上方に角釘がそれぞれ遺存している。角釘は片方が完全に近い状態といえ、長さ2.6cmほどを測る。また、角釘の貫通している側には、木目痕が認められ、角釘によって木製の部位の取付けられていたことが分かる。土師器の坏、甕などが伴出している。北縄Ⅳ期に位置づけられ、このうち坏は甲斐型坏のⅢ期におかれしたものといえる。

### 鎌（6）

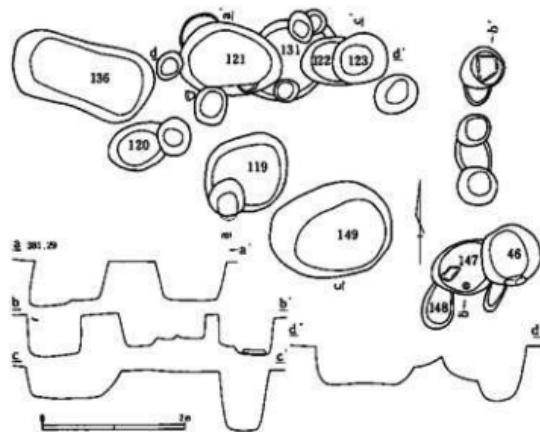
身が茎の折り返し部から著しく上方に伸び、全体が大きく湾曲し、刃部中央に最大幅がある。全長13.7cmのうち、刃部が8.3cm、茎部が5.4cmを測り、茎部の比率が大きい。40号住居址出土。



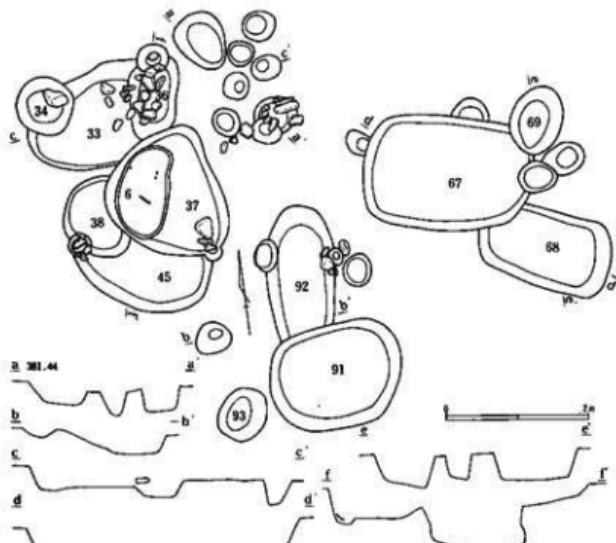
第205図 鉄製品

## 2. 土塁群

本遺跡では、290基の土塁が確認された。これらは、調査区域中央部に多く、とくに1号溝東側に集中する。これらの時期の決定は困難であるが、平安時代の住居址を切るものが多い。出土遺物（第219図）には、平安時代末のものを示したが、土塁からの出土遺物のうち、最も多いのは縄文時代前期末の土器片である。中には、後述するように、確実に鎌倉時代に入

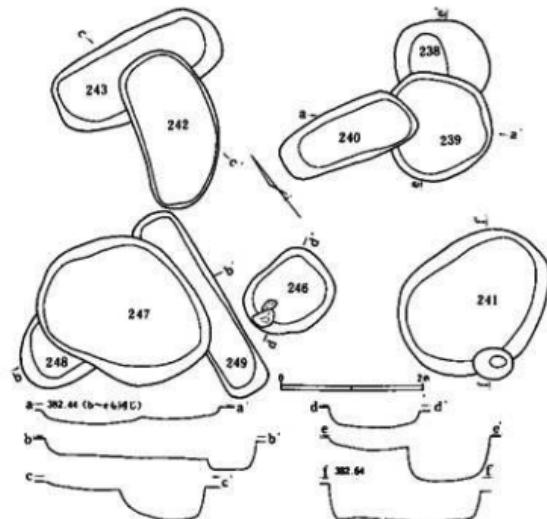


第206図 土塁群 その1

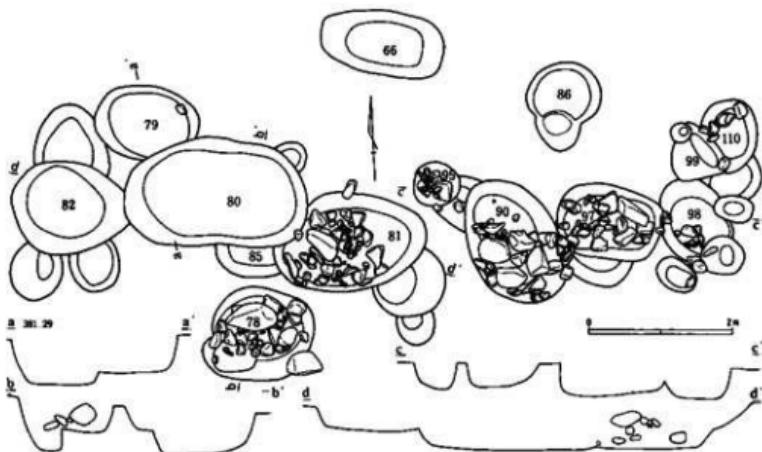


第207図 土塁群 その2

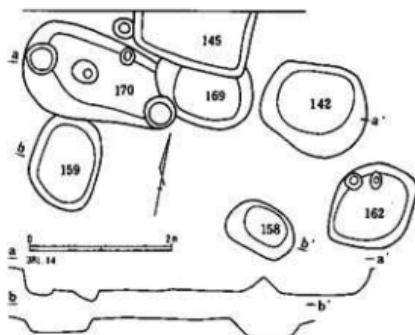
るものも存在することから、ここでは、これらの土塙群を平安時代末以降としておく。また、1号溝東側の土塙群は、その配列に規則性はみられないが、集中区域全体としては、ほぼ長方形を呈する状況を示し、構築物との関連も否定しきれない。さらに、この部分の土塙内からは、石英片が出土した例もあり、他地域の土塙との違いといえるものである。なお、この地域で、底部に平石を敷いた柱穴と考えられるものは1基だけ確認された。



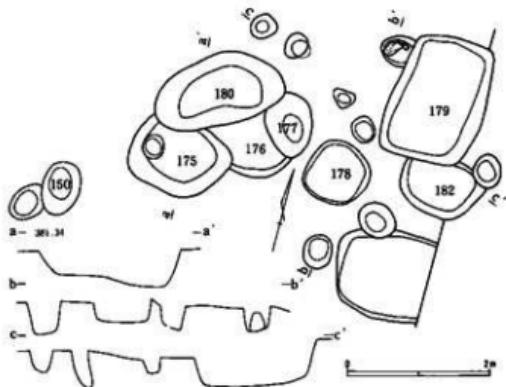
第208図 土塙群 その3



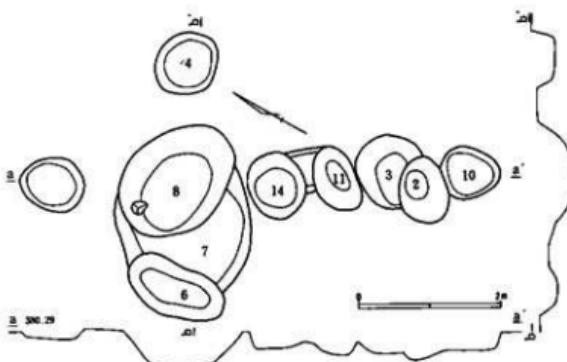
第209図 土塙群 その4



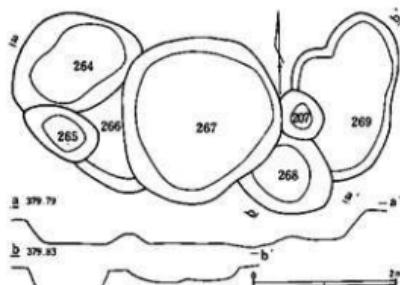
第210図 土塙群 その 5



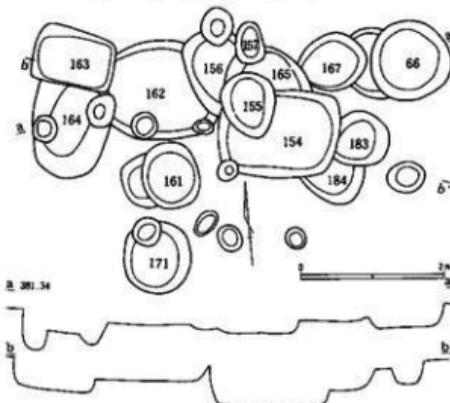
第211図 土塙群 その 6



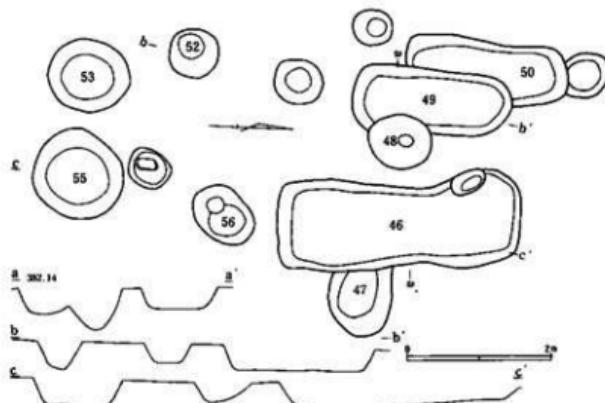
第212図 土塙群 その 7



第213図 土塙群 その8



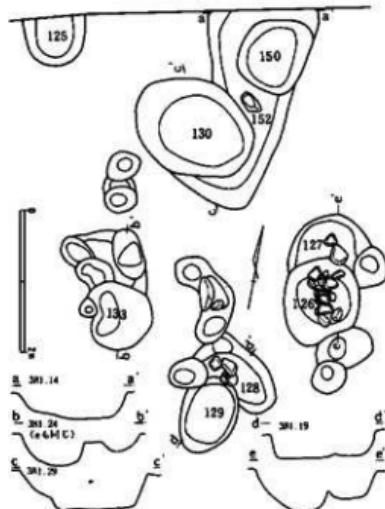
第214図 土塙群 その9



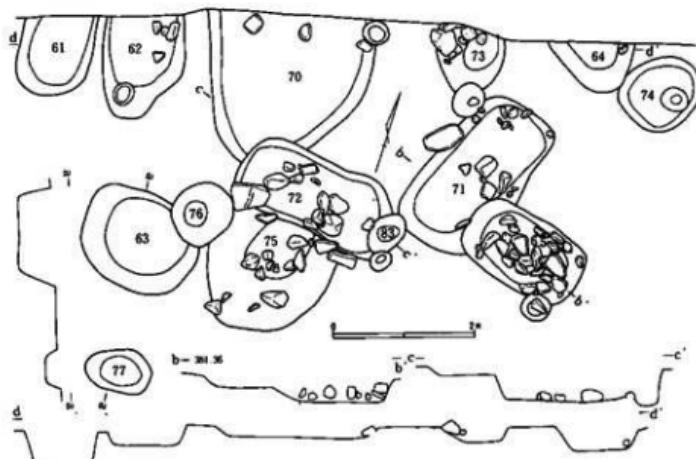
第215図 土塙群 その10

土塙群は、径1m程度の円形を呈し、深さ1m程度のものが最も多い。その他の形状としては、方形、長橢円形を呈するものなどが認められるが、いずれも確認された数は多くない。

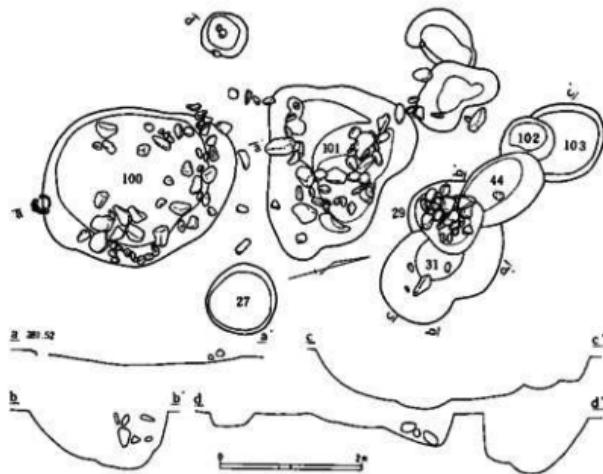
内部は、石の入るもののが40基、小ピットの掘り込まれたもの26基が確認されているが、何の施設もたないものが圧倒的に多い。個々の土塙の規模、形状、施設などについては、次表に示しておく。



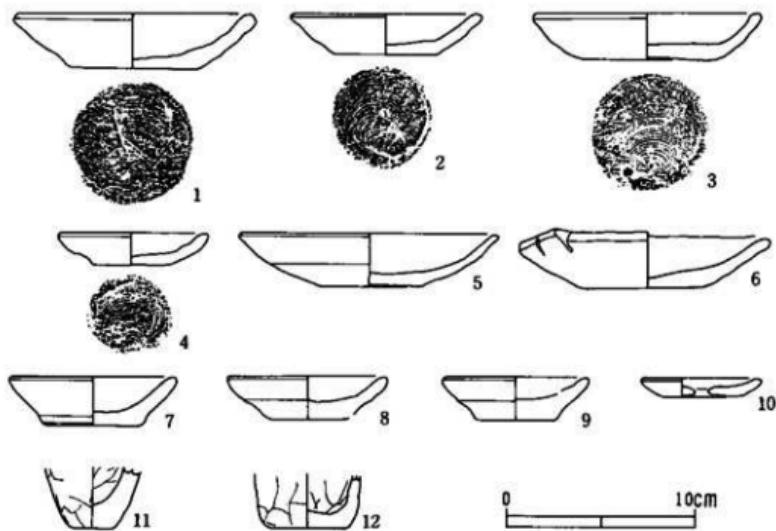
第216図 土塙群 その11



第217図 土塙群 その12



第218図 土塙群 その13



- |           |            |            |            |
|-----------|------------|------------|------------|
| 1. 35号土塙  | 2. 147号土塙  | 3. 98号土塙   | 4. 180号土塙  |
| 5. 252号土塙 | 6. 35号土塙   | 7. 187号土塙  | 8. 117号土塙  |
| 9. 250号土塙 | 10. 109号土塙 | 11. 194号土塙 | 12. 210号土塙 |

第219図 土塙出土土器

土 塙 一 覧 表

遺構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の 記述	遺構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の 記述
1号土塙	精円形	1.9	0.9	0.24		37号土塙	不整円形	1.9	1.55	0.47	
2号土塙	精円形	0.95	0.65	0.37		38号土塙	不整円形	1.15	0.9		
3号土塙	円形	0.95	1.0	0.25		39号土塙	円形	1.2	1.2	0.44	石
4号土塙	円形	0.85	0.85	0.28		40号土塙	精円形	1.4	1.05	0.21	石
5号土塙		0.5		0.3		41号土塙	精円形	0.95	0.85	0.15	石
6号土塙	精円形	1.45	0.7	0.26		42号土塙	円形	0.8	0.85	0.32	
7号土塙	精円形	2.3	1.85	0.17		43号土塙	精円形	1.25	1.05	0.1	
8号土塙	精円形	1.8	1.35	0.47	石	44号土塙	精円形	1.2	0.85	0.59	石
9号土塙	円形	1.05	1.0	0.21		45号土塙	精円形	2.1	1.45	0.28	
10号土塙	不整円形	0.85	0.75	0.25		46号土塙	長方形	3.4	1.1	0.3	
11号土塙	精円形	0.6	0.95	0.26		47号土塙	精円形		0.85	0.31	
12号土塙	精円形	0.8	0.65	0.19		48号土塙	精円形	0.9	0.75	0.51	
13号土塙	円形	0.75	0.75	0.33		49号土塙	精円形	2.2	0.85	0.31	
14号土塙	精円形	0.95	0.8	0.19		50号土塙	精円形	2.2	0.8	0.26	
15号土塙	精円形	1.7	1.05			51号土塙	円形	0.7	0.6	0.31	
16号土塙	不整円形	1.7	1.45	0.32		52号土塙	円形	0.7	0.7	0.35	
17号土塙	円形	0.9	0.9	0.32		53号土塙	円形	1.15	1.05	0.2	
18号土塙	円形	0.6	0.55	0.23		54号土塙	長方形	3.3	0.7	0.29	
19号土塙	円形	0.6	0.5	0.18		55号土塙	円形	1.25	1.25	0.40	
20号土塙	精円形	0.7	0.45	0.24		56号土塙	精円形	0.95	0.65	0.28	
21号土塙	円形	0.6	0.6	0.16		57号土塙	長方形	2.8	0.75	0.37	
22号土塙	精円形	0.85	0.7	0.3		58号土塙	精円形	1.15	1.0		石
23号土塙	不整円形	2.25	1.95	0.13	平石	59号土塙	円形	0.6	0.65		
24号土塙	不整円形	0.8		0.4		60号土塙	円形	1.25	1.2	0.34	
25号土塙	不整円形	0.95		0.3		61号土塙	精円形		1.0	0.51	
26号土塙	長方形	2.3	0.8	0.43		62号土塙	不整円形		1.1	0.29	平石、ピット1
27号土塙	円形	1.0	1.0	0.25		63号土塙	精円形	1.65	1.35	0.48	
28号土塙	不整円形	1.4		0.4		64号土塙	精円形		1.1	0.37	
29号土塙	精円形	1.25	1.05	0.41	石	65号土塙	長方形	1.7	1.05	0.34	石
30号土塙	精円形	1.4	1.15	0.74	石	66号土塙	精円形	1.75	0.85	0.35	
31号土塙	精円形	1.4	1.05	0.79	石	67号土塙	長方形	2.35	1.6	0.3	
32号土塙	長方形	1.5	1.25	0.3		68号土塙	長方形	1.9	1.05	0.44	
33号土塙	不整円形	2.15	1.4	0.34	平石	69号土塙	精円形	0.95	0.75	0.48	
34号土塙	円形	0.8	0.8	0.61	石	70号土塙	精円形		2.2	0.12	石、ピット1
35号土塙	精円形	0.45	0.35	0.48	石	71号土塙	長方形	2.35	1.5	0.26	石
36号土塙	精円形	1.1	0.65	0.22	石	72号土塙	長方形	2.3	1.0	0.42	石

造構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の	造構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の
73号土塁	橢円形		0.9	0.22	石	112号土塁	長方形	1.75	0.85	0.24	ピット1
74号土塁	橢円形	1.15	1.0	0.24	ピット1	113号土塁	橢円形	4.25	2.65	0.08	石
75号土塁	橢円形		1.7	0.18	石	114号土塁	橢円形	1.35	0.9	0.24	
76号土塁	橢円形	0.85	0.8	0.44		115号土塁	橢円形	1.25	0.8	0.31	
77号土塁	橢円形	0.9	0.6	0.2		116号土塁	橢円形	1.35	0.9	0.22	ピット1
78号土塁	不整円形	1.4		0.5		117号土塁	橢円形	1.45	1.25	0.17	ピット1
79号土塁	橢円形	1.45	1.05	0.44		118号土塁	不整円形	1.35	1.2	0.33	
80号土塁	橢円形	2.55	1.5	0.63		119号土塁	橢円形	1.2	1.05	0.52	
81号土塁	橢円形	2.15	1.4	0.58	石	120号土塁	橢円形	0.9	0.65	0.31	
82号土塁	橢円形	1.7	1.35	0.45		121号土塁	橢円形	1.45	1.0	0.49	
83号土塁	橢円形	0.65	0.45	0.48	古鉄	122号土塁	橢円形	1.0	0.65	0.5	
84号土塁						123号土塁	円形	0.75	0.7	0.8	
85号土塁	橢円形	1.1	0.75	0.29		124号土塁	橢円形	1.55	1.4	0.39	ピット2
86号土塁	橢円形	1.05	0.9	0.32		125号土塁	橢円形			0.85	0.13
87号土塁						126号土塁	橢円形	1.3	1.05	0.56	石
88号土塁		0.5		0.45		127号土塁	橢円形	1.4	1.1	0.22	石
89号土塁		0.7		0.2		128号土塁	橢円形	1.25	0.7	0.34	石
90号土塁	橢円形	1.85	1.25	0.34	石	129号土塁	橢円形	1.15	0.8	0.38	
91号土塁	橢円形	1.9	1.45	0.7		130号土塁	橢円形	1.75	1.4	0.55	
92号土塁	橢円形	2.1	0.95	0.17	ピット1	131号土塁	橢円形	1.45	1.1	0.24	ピット1
93号土塁	不整円形	0.75	0.65	0.59		132号土塁	橢円形	1.4	1.3	0.2	
94号土塁						133号土塁	不整円形	1.7	0.8	0.52	
95号土塁	円形	0.65	0.65	0.58	石	134号土塁	橢円形	1.65	1.5	0.34	
96号土塁	橢円形	0.65	0.55		石	135号土塁	橢円形	1.55	1.1	0.41	
97号土塁	橢円形	1.45	1.0	0.47	石	136号土塁	橢円形	2.0	0.9	0.35	
98号土塁	橢円形	1.15	0.9	0.42	石	137号土塁	橢円形	1.4	1.0	0.5	
99号土塁	不整円形	0.9	0.7	0.61		138号土塁	円形	0.6	0.6	0.1	
100号土塁	橢円形	2.8	2.2	0.21	石	139号土塁	不整円形	1.45	1.2	0.42	石
101号土塁	不整円形	2.55	2.0	0.09	石	140号土塁	橢円形	1.35		0.42	
102号土塁	橢円形	0.8	0.65	0.48		141号土塁	不整円形	1.75	1.35	0.2	
103号土塁	橢円形	1.25	1.1	0.17		142号土塁	橢円形	1.5	1.2	0.16	
104号土塁	円形	0.85	0.9	0.68		143号土塁		1.75		0.45	
105号土塁	長方形	3.05	0.7	0.57		144号土塁		1.25		0.29	
106号土塁	長方形	2.85	0.7	0.22		145号土塁	四角形	1.7		0.47	
107号土塁	長方形	2.6	0.9	0.23		146号土塁	円形	0.85	0.85	0.47	石
108号土塁	橢円形	1.25	1.65	0.5		147号土塁	橢円形	0.9	0.75	0.54	平石
109号土塁	不整円形	2.4	1.2	0.27	ピット5	148号土塁	橢円形	0.7	0.4	0.39	
110号土塁	橢円形	1.0	0.8	0.34	石、ピット1	149号土塁	橢円形	1.75	1.25	0.46	
111号土塁	長方形	1.5	0.7	0.1		150号土塁	橢円形	1.05	0.9	0.5	

造構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の	造構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の
151号土塁	円 形	0. 6		0. 5		190号土塁	円 形	1. 5	1. 4	0.06	
152号土塁	長 方 形	3. 1	1.15	0.34		191号土塁	不 整	2.25	1. 5	0.72	石
153号土塁	精円形	1. 4	0. 9	0.34	ピット1	192号土塁	精円形	2. 4	1. 6	0.51	石
154号土塁	長 方 形	1. 7	1.25	0.56	ピット1	193号土塁	精円形	2.15	1. 6	0.48	
155号土塁	不整円形	0. 9	0.75			194号土塁	精円形	1.65	1. 4	0. 3	
156号土塁	精円形	1. 2	0.85	0.28		195号土塁	長 方 形	2. 7	1.95	0.31	ピット1
157号土塁	精円形	0.55	0. 4	0.46		196号土塁	精円形	2. 1	1. 2	0.45	
158号土塁	精円形	1. 0	0.65	0.19		197号土塁	円 形	0.85	0.85	0.37	石
159号土塁	精円形	1.25	0.95	0. 2		198号土塁	不整円形	1.35	1. 3	0.41	
160号土塁	精円形	1.45	0.95	0.16	ピット2	199号土塁					
161号土塁	精円形	0. 9	0. 8	0.31		200号土塁					
162号土塁	精円形	1. 7	1. 4	0.31	ピット2	201号土塁	精円形	2.65	1.65	0. 3	石
163号土塁	長 方 形	1.15	0. 8	0.33		202号土塁	精円形		1.35	0.29	
164号土塁	精円形	1. 5	1. 1	0.39	ピット2	203号土塁	精円形	1.05	0. 8	0.36	石
165号土塁	精円形		1.15	0.38		204号土塁	精円形	1.25	0.95	0.46	
166号土塁	円 形	1. 1	1. 1	0.32		205号土塁	精円形	1. 3	1. 1	0. 4	
167号土塁	精円形	0.95	0. 8	0.17		206号土塁	精円形	1.75	1. 1	0.31	
168号土塁	精円形	2. 0	1.45	0. 2		207号土塁	精円形	1.55	1. 3	0.45	
169号土塁	精円形	1.45	1.05	0.12		208号土塁	長 方 形	3. 4	1.65	0.35	
170号土塁	精円形	2. 3	1. 2	0. 2	ピット4	209号土塁	精円形	1. 0	0. 9	0.61	
171号土塁	円 形	1. 0	0.95	0.34	ピット1	210号土塁					
172号土塁	精円形	0. 9	0. 8	0.23		211号土塁	精円形	1. 1	0.85	0. 3	
173号土塁	精円形	1. 6	1. 1	0.09	石	212号土塁	長 方 形	2.25	1. 4	0.64	
174号土塁	精円形	1.05	0.75	0.26		213号土塁	精円形	1.55	0. 7	0.59	
175号土塁	精円形	1. 3	1.05	0.36	ピット1	214号土塁	精円形	1. 7	1. 3	0.18	
176号土塁	円 形	1.15	1.15	0.25		215号土塁	精円形	1. 7	1. 2	0.85	
177号土塁	精円形	0. 9	0. 7	0.69		216号土塁	円 形	1.05	1.05	0.23	
178号土塁	円 形	0. 9	0.85	0.27		217号土塁	長 方 形	1. 9	1. 5	0.71	
179号土塁	長 方 形	1. 8	1.25	0.49		218号土塁	長 方 形	2.45	2. 2	0.97	
180号土塁	精円形	1. 9	0.95	0.55		219号土塁	長 方 形	2. 0	1. 6	0.58	
181号土塁	精円形	0. 5	0.35	0.61		220号土塁	長 方 形	3.15	1. 7	0.69	石
182号土塁	精円形	1. 1	0.85	0.41		221号土塁	精円形	1.85	1. 0	0.42	
183号土塁	円 形	0.75	0. 8	0.33		222号土塁	精円形	1.15	0.95	0.21	
184号土塁	精円形	0. 9	0. 8	0.27		223号土塁	精円形	1.15	1. 0	0.57	
185号土塁	精円形		0.75	0.18		224号土塁	円 形	1.15	1. 1	0.43	
186号土塁	精円形	1. 7	1. 5	0.43	石	225号土塁	円 形	0. 9	0.95	0.47	
187号土塁	精円形	1.65	1.05	0.17		226号土塁	円 形	1.15	1. 1	0.76	
188号土塁						227号土塁	円 形	0.95	0.95	0.53	
189号土塁	精円形	1. 1	0.95	0.88		228号土塁	精円形	1.05	0. 9	0.26	

遺構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の記述	遺構名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	その他の記述
229号土塁	円 形	1. 2	1.25	0.51		268号土塁	橢 圆 形	1.55	1.15	0.42	
230号土塁	円 形	1.25	1.25	0.54		269号土塁	不整圓形	2. 4	1. 4	0.21	
231号土塁	橢 圆 形	1. 0	0.85	0.71		270号土塁	不整圓形	3. 1	2. 3	0.44	
232号土塁	円 形	0.75	0.75	0.48		271号土塁	正 方 形	2.15	2.15	0.17	
233号土塁	橢 圆 形	1. 3	1.15	0.53	石	272号土塁	長 方 形	3. 7	1.85	0.42	
234号土塁	円 形	1. 2	1. 2	0. 2		273号土塁	長 方 形	3.95	0.95	0.32	
235号土塁	橢 圆 形	1. 3	1. 1	0.47		274号土塁	長 方 形	2.55	1.25	0.49	
236号土塁	橢 圆 形	1. 3	1. 2	0.52		275号土塁	橢 圆 形	1. 3	1. 2	0.56	
237号土塁	橢 圆 形	1. 5	1.35	0.41		276号土塁	橢 圆 形	1.45	1.05	0.53	
238号土塁	橢 圆 形	1.35	1. 2	0.63		277号土塁	円 形	1. 1	1. 1	0.55	
239号土塁	円 形	1. 5	1. 5	0.18		278号土塁	円 形	0.75	0. 7	0.56	
240号土塁	長 方 形	1. 9	0. 8	0.23		279号土塁	橢 圆 形	0.75	0. 5	0.33	
241号土塁	橢 圆 形	2.25	1. 8	0.47	ピット1	280号土塁	長 方 形	2. 6	1. 1	0.79	
242号土塁	長 方 形	2. 2	1.15	0.08		281号土塁	橢 圆 形	2. 0	1.65	0.24	ピット1
243号土塁	長 方 形	2.45	1. 1	0.49		282号土塁	橢 圆 形	1.05	0. 8	0.07	
244号土塁	橢 圆 形	1. 6	1.05	0.37		283号土塁	橢 圆 形	2.05	1. 4	0.25	
245号土塁	橢 圆 形	1. 5	0. 9	0.13		284号土塁	橢 圆 形	1.85	1. 3	0. 7	
246号土塁	橢 圆 形	1. 3	1.05	0.26	石	285号土塁	橢 圆 形	1. 4	1.15	0.23	
247号土塁	橢 圆 形	2. 5	1.85	0.32		286号土塁	橢 圆 形	1.05	0. 8	0.89	古錢
248号土塁	橢 圆 形		1. 1	0.19		287号土塁	橢 圆 形	1. 7	1.45	0.31	
249号土塁	長 方 形	2.85	0. 7	0.35		288号土塁	橢 圆 形	1. 5	1. 0	0.34	
250号土塁	長 方 形	3.45	2.15	0. 5	石	289号土塁	橢 圆 形	2.25	2. 1	0. 2	
251号土塁		2.05		0. 2		290号土塁	橢 圆 形	1. 5	1. 2	0.89	
252号土塁	長 方 形	3.65	2. 2	0.39	古錢						
253号土塁	橢 圆 形	1.45	1. 3	0.31							
254号土塁	橢 圆 形	1. 4	0.95	0.17							
255号土塁	橢 圆 形	1.25	1. 0	0.34							
256号土塁	円 形	1. 2	1. 1	0.41							
257号土塁	橢 圆 形	1. 4	1. 2	0.44							
258号土塁	橢 圆 形	1.35	1. 0	0.29							
259号土塁	橢 圆 形	2. 1	1.65	0. 7							
260号土塁	長 方 形	1. 1	0. 9	0. 3							
261号土塁	橢 圆 形	2. 1	1. 5	0.53							
262号土塁	円 形	1. 0	0.95	0.46							
263号土塁	橢 圆 形	1. 0	0. 8	0.34							
264号土塁	橢 圆 形	1. 9	1. 4	0.38							
265号土塁	橢 圆 形	1. 1	0. 6	0.46							
266号土塁	橢 圆 形	2.15	1.85	0.28							
267号土塁	円 形	2.35	2.25	0.53							

## 第5節 中世・近世

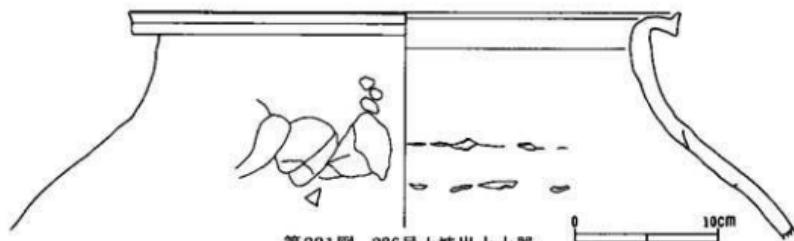
### 1 土 塚

#### ○ 286号土塚

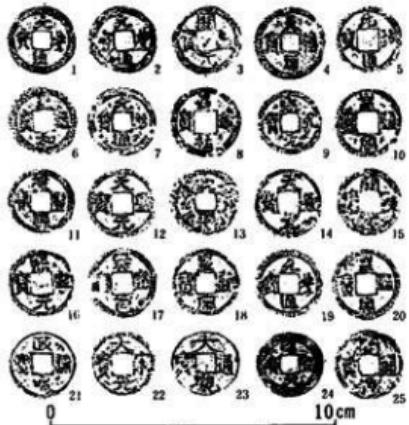
39号住居址内に掘り込まれており、梢円形を呈し、径、深さとも1m程度の袋状土塚である。底面に接する状態で、古銭26枚が納められ、それを覆うように、常滑の大壺破片が乗せられていた。この常滑破片は、折り返し口縁をもつが、折り返しはほぼ水平にちかい状態を呈しており、13世紀～14世紀頃に位置づけられる。なお、肩部には自然釉が付着し、内面には輪積み痕が明瞭に残っている。本土塚もこの時期の所産と考えられよう。出土した古銭は、拓本に示したとおりであるが、このうち1枚は判別不可能なため、図示しなかった。



第220図  
286号土塚平面図



第221図 286号土塚出土土器



第222図 286号土塚出土古銭

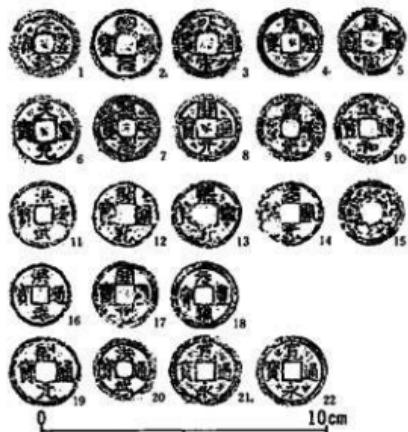
#### ○ その他の土塚出土古銭

本遺跡の土塚では、286号土塚以外には、4基の土塚から古銭が出土した。第223図に示したもので、1～18は252号土塚から、19は272号土塚から、20は70号土塚から、21、22は198号

#### 286号土塚出土古銭

- |          |          |
|----------|----------|
| 1. 元寶通寶  | 14. 天寶元寶 |
| 2. 元寶通寶  | 15. 開元通寶 |
| 3. 開元通寶  | 16. 熙寧元寶 |
| 4. 天禧通寶  | 17. 熙寧元寶 |
| 5. 元祐通寶  | 18. 皇宋通寶 |
| 6. 至和通寶  | 19. 元豐通寶 |
| 7. 元祐通寶  | 20. 皇宋通寶 |
| 8. 嘉祐通寶  | 21. 政和通寶 |
| 9. 熙寧元寶  | 22. 大宋元寶 |
| 10. 皇宋通寶 | 23. 大觀通寶 |
| 11. 元豐通寶 | 24. 紹聖元寶 |
| 12. 天聖元寶 | 25. 開元通寶 |
| 13. 太平通寶 | 26. 不明   |

土塙からそれぞれ出土している。このうち、252号土塙からは多くの古銭が出土しているが、これは、底面ちかくからの出土であり、本土塙も鎌倉時代に位置づけられよう。



#### ○その他の土塙出土古銭

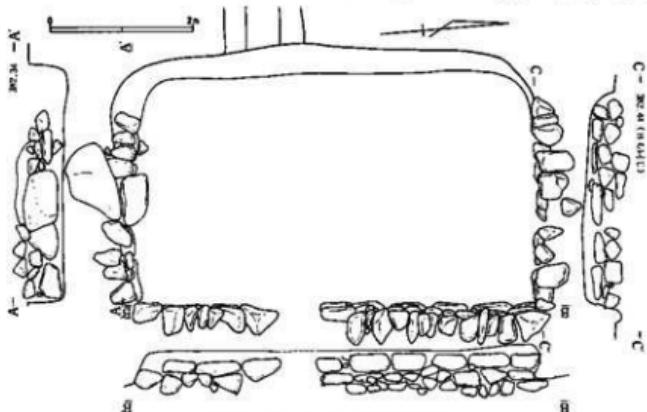
- |          |          |
|----------|----------|
| 1. 元宝通宝  | 12. 開元通宝 |
| 2. 明道元宝  | 13. 熙寧元宝 |
| 3. 皇宋通宝  | 14. 紹・通宝 |
| 4. 紹興元宝  | 15. 不明   |
| 5. 皇宋通宝  | 16. 洪武通宝 |
| 6. 天盛元宝  | 17. 開元通宝 |
| 7. 紹聖元宝  | 18. 元寶通宝 |
| 8. 開元通宝  | 19. 開元通宝 |
| 9. 不明    | 20. 洪武通宝 |
| 10. 政和通宝 | 21. 寛永通宝 |
| 11. 洪武通宝 | 22. 寛永通宝 |

第223図 その他の土塙出土古銭

## 2. 方形石組造構・溝

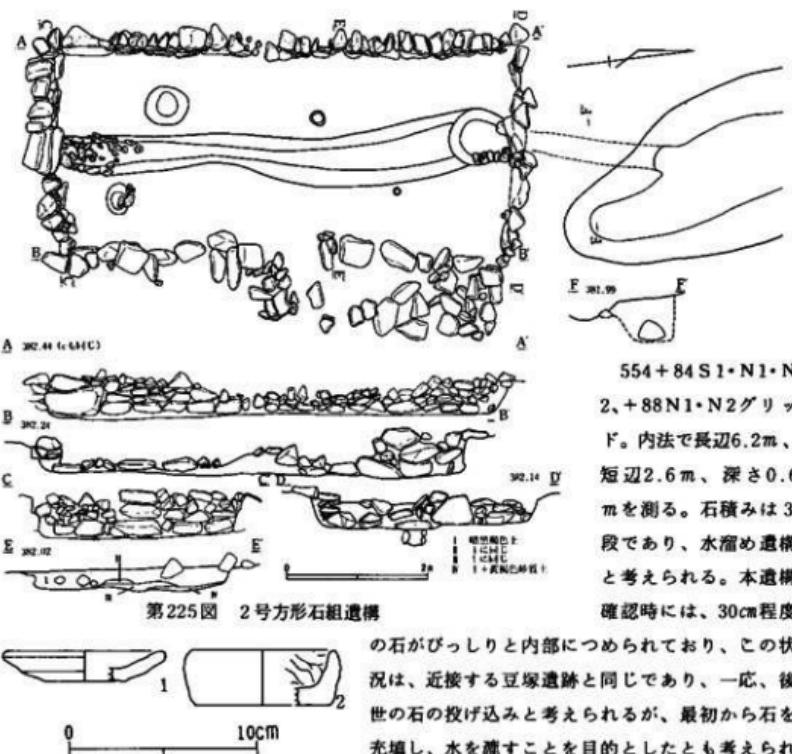
### ○ 1号方形石組造構

554+72S1+N1+N2,+76S1+N1+N2グリッド。内法で、長辺5.6m、短辺2.3m、深さ0.6mを測る。石積みは3段で、下段の石が最も大きく60cm程度のものを用い、上段には20cm程度の石がみられる。石積み内面には、石の平面を用い、基本的には各辺とも直線をなしていない。西壁は石積みがすべてとりさられ、掘り方がみられる。西壁からは5号溝が続き、東壁中央には石積みがみられず、東側に続く溝が存在したと思われる。付近の傾斜は、南東から北西に向うもので、東から西へ向う溝に直交する水溜め造構と考えられる。床面はよく締っているが、わずかながら鉄分堆積が認められた。

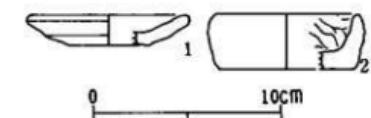


第224図 1号方形石組造構

○ 2号方形石組遺構



第225図 2号方形石組遺構



第226図 2号方形石組遺構出土土器  
第226図 2号方形石組遺構出土土器  
第226図 2号方形石組遺構出土土器

南壁中央は上段まで比較的大きな石を用い、下部の弱い掘り込みに小砾をつめて入水口としている。南壁外側の溝は確認できなかった。北壁は中央部下に深さ20cm、幅30cmの溝を掘り、両脇には丁寧に石を配し、土留めとした出水口をつくり出している。北壁の約1.2m北側には、1号溝が掘り込まれているが、この間は、高さ、幅とも約50cmのトンネルで結ばれている。

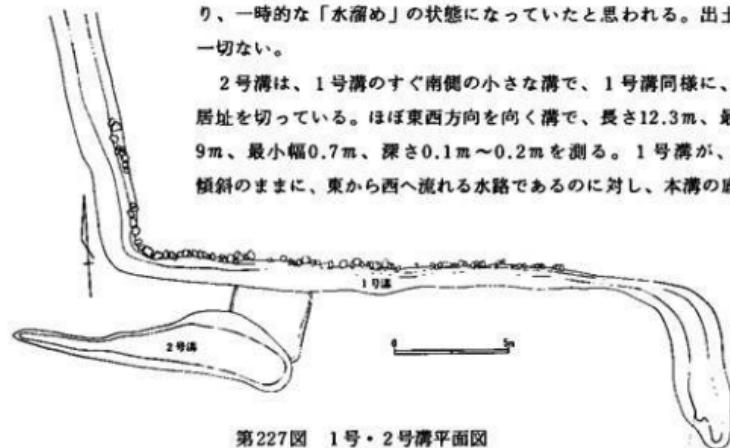
遺物は、土器片2点だけである。いずれも充填された石の間から出土した。

1. 皿。推定口径8.2cm、器高2.5cm、底径4.1cmを測る。横ナゲ。底部は糸切り。胎土には小砂粒を含み、赤色粒子も多い。焼成も良好で、褐色を呈する。2. 手捏ね。器高2.9cm。内外面とも指頭調整。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。赤褐色を呈する。

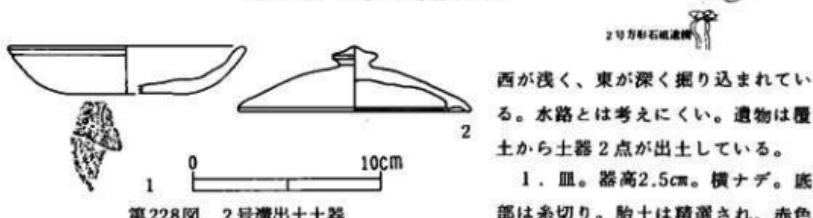
### ○ 1号・2号溝

1号溝は、2号方形石組遺構からトンネルを抜けて続く水路で、クランク状を呈し、北に続いている。本溝の土塁集中側には、溝の掘り込み部分に10cm~30cm程度の石を並べ、土留めとしている。今回調査された部分は、総延長42m、最大幅2.3m、最小幅0.5m、深さ0.2m~0.4mを測る。2号方形石組遺構寄りの先端部分は幅が広くなっている。一時的な「水溜め」の状態になっていたと思われる。出土遺物は一切ない。

2号溝は、1号溝のすぐ南側の小さな溝で、1号溝同様に、20号住居址を切っている。ほぼ東西方向を向く溝で、長さ12.3m、最大幅2.9m、最小幅0.7m、深さ0.1m~0.2mを測る。1号溝が、付近の傾斜のままに、東から西へ流れる水路であるのに対し、本溝の底部は、



第227図 1号・2号溝平面図



第228図 2号溝出土器

西が浅く、東が深く掘り込まれている。水路とは考えにくい。遺物は墳土から土器2点が出土している。

1. 盆。器高2.5cm。横ナデ。底部は糸切り。胎土は精選され、赤色

粒子は含まない。露母が目立つ。焼成も良好で、明褐色を呈する。  
2. 須恵器蓋。推定径12cm、器高3.4cm。ロクロ整形後、外面に回転ヘラ削りを施す。内面のかえりは貼り付けによる。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。

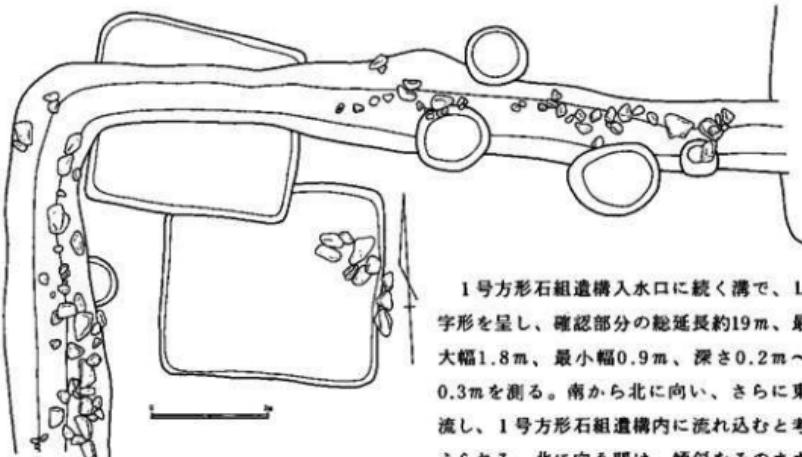
### ○ 3号溝

2号方形石組遺構東壁中央部に、東側から続く溝である。前述したように、2号方形石組遺構の入水口は、南壁下部にみられるため、2号方形石組遺構構築時には、東壁につづく本溝は存在しなかったと考えられる。したがって、本溝は、後に付け加えられたと思われるが、掘り込みもはっきりしなかったため、図示しなかった。

### ○ 4号溝

60号住居址の南側を、東から西に延びる溝で、幅約50cm、深さ30cmを測るが、掘り込みが非常にはっきりしており、また、覆土も跡っていないため、極めて新しい溝と考えられる。

○ 5号溝



第229図 5号溝平面図

1号方形石組造構入水口に続く溝で、U字形を呈し、確認部分の総延長約19m、最大幅1.8m、最小幅0.9m、深さ0.2m～0.3mを測る。南から北に向い、さらに東流し、1号方形石組造構内に流れ込むと考えられる。北に向う間は、傾斜をそのまま

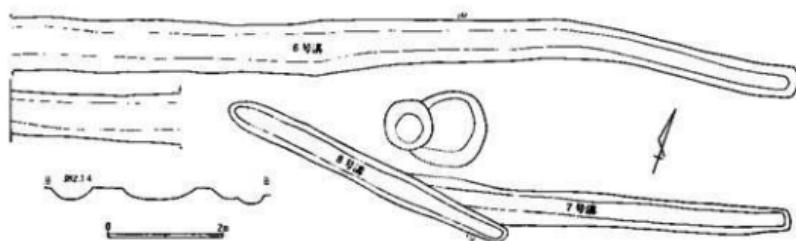
利用することになるが、曲ったあとは、緩

やかとはいって、傾斜と逆方向となる。本溝も、掘り込みの片側に10cm～30cm大の石をおき、土留めとしている。本溝の南端は不明である。出土遺物は一切ない。

○ 6号・7号・8号溝

6号溝は、調査区西端に確認された、ほぼ真直ぐな溝で、長さ16.7m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。7号溝は、6号溝のすぐ南側に6号溝と平行して東西に延びる溝で、8号溝に切らるまでの長さ6m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。8号溝は、7号溝を切り、6号・7号溝と平行ではなく、やや斜めに走る。長さ5.4m、幅0.6m、深さ0.3mの溝である。

いずれの溝も出土遺物は全くなく、時期、性格とも不明である。



第230図 6号・7号・8号溝平面図

○ 9号溝

調査区西端に確  
認された溝で、調  
査部分は東西方向  
を向くが、極く一



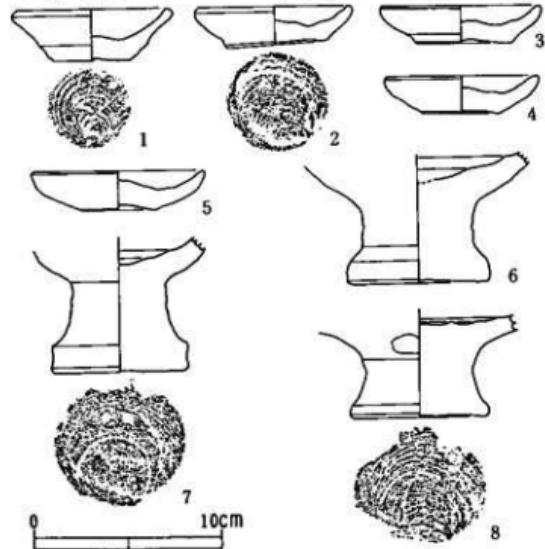
第231図 9号溝平面図

部の調査のため、詳細は不明である。確認部分の長さ5.4m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。本溝も、出土遺物は全くなく、時期、性格は不明である。

○ 10号・11号溝

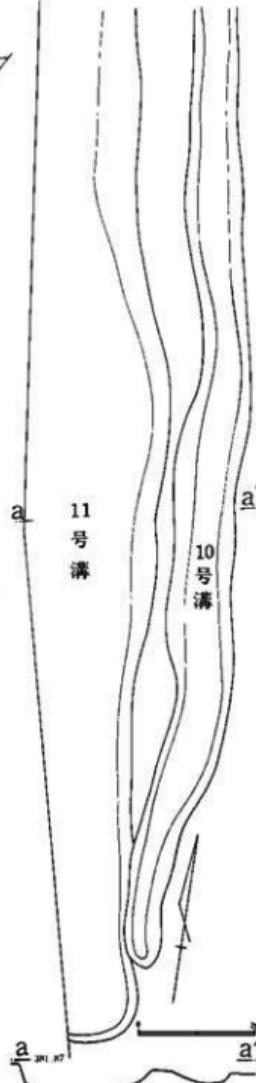
調査区のはば中央を南北方向に平行して走る溝である。確認された部分で、10号溝は、長さ16.7m、幅1m、深さ0.2mを測る。11号溝は、長さ17.9m、推定幅2.5m、深さ0.3mを測る。南端部分はほぼ揃っているが、10号溝が11号溝を切っていることが確認された。

10号溝には出土遺物は全くないが、11号溝は、底部より多量の土器が出土した。ほとんどが小破片であるが、復元可能なも



第233図 11号溝出土土器

のが図示した8点である。杯と台付杯とがみられるが、いずれも平安時代に位置づけられる資料で、器肉の厚いつくりである。11号溝も、この時期に位置づけられるものであろう。



第232図 10号・11号溝平面図

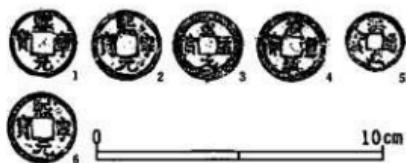
### 3. 墓 塚

#### ○ 1号墓塚

554+80N6、+84N6グリッド。確認面では円形を呈し、径0.6m、深さ0.2mを測る。内部からは、棺と思われる木片、3枚ずつに分かれた古銭、歯などが出土している。

第234図

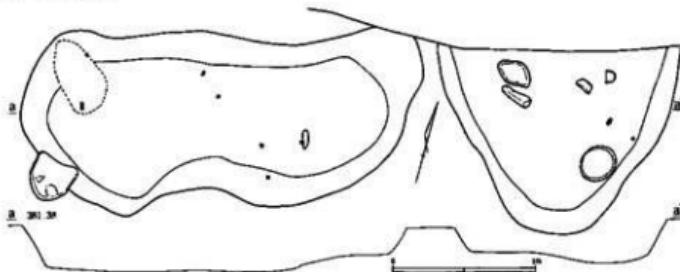
1号墓塚平面図



第235図 1号墓塚出土古銭

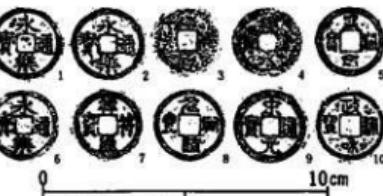
掘り込みの幅が極めて狭く、出土した木片も、あるいは、床面に敷いたものであるかもしれない。

#### ○ 2号・3号墓塚



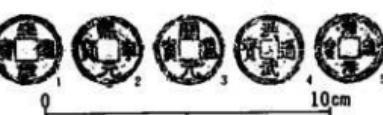
第236図 2号・3号墓塚平面図

554+76N8、+80N8グリッド。2号墓塚は梢円形を呈し、ほぼ東西方向を向く。長さ2.9m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。掘り込み西側に人骨片が集中し、古銭10枚が全域から出土した。掘り込みの大きさ、出土した古銭の数などから、2体が埋葬された可能性がある。なお、木片などは出土していない。



第237図 2号墓塚出土古銭

3号墓塚は、ほぼ半分だけの調査であるが、調査部分の長さ1.3m、幅1.7m、深さ0.2mを測る。3号墓塚は、南北方向に長い墓塚と思われる。内部からは、古銭5枚が出土しているが、やや浮いた状態で、10cm~30cm大の石が4個出土している。なお、人骨、木片などは出土していない。

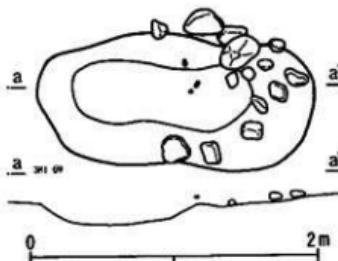


第238図 3号墓塚出土古銭

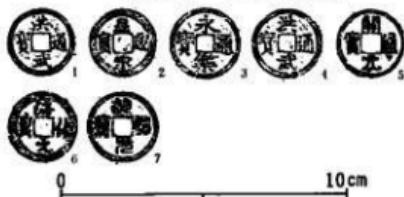
いずれも、1号墓塚に比べ、はるかに掘り込みが大きく、座棺埋葬ではなく、伸展葬と考えられる。

○ 4号墓塚

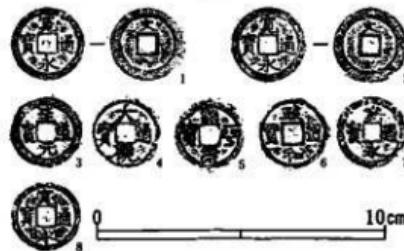
554+64N8グリッド。1号溝の西側に位置する。梢円形を呈し、長さ1.9m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。本墓塚も伸展葬が予想される。内部からは7枚の古銭が出土しているが、3枚のセットが2組と1枚が単独で出土した。人骨、木片などは出土していない。なお、本墓塚の掘り込み周縁から内部にかけて、10cm~30cmの石が多数出土しており、周縁に石囲いを施したもののが崩れ込んだと考えられる。



第239図 4号墓塚平面図



第240図 4号墓塚出土古銭



第241図 グリッド出土古銭

第235・237・238・240・241図古銭一覧

第235図 1	熙寧元宝	7	祥符通宝	4	洪武通宝
2	熙寧元宝	8	元祐通宝	5	開元通宝
3	至道元宝	9	宋通元宝	6	淳化元宝
4	元豐通宝	10	政和通宝	7	明道元宝
5	洪武通宝	第238図 1	天聖元宝	第241図 1	寛永通宝
6	熙寧元宝	2	熙寧元宝	2	寛永通宝
第237図 1	永業通宝	3	開元通宝	3	至道元宝
2	永業通宝	4	洪武通宝	4	大觀通宝
3	不明	5	熙寧元宝	5	治平元宝
4	不明	第240図 1	洪武通宝	6	政和通宝
5	皇宋通宝	2	皇宋通宝	7	寛永通宝
6	永業通宝	3	永業通宝	8	寛永通宝

## 第Ⅳ章 まとめ

### ○縄文時代について

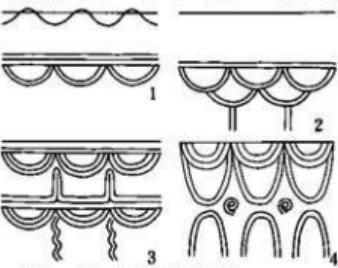
本遺跡では、前期終末期の諸磯c式、十三菩提式、中期の五領ヶ台式、井戸尻式、曾利式期の遺構、遺物が確認されているが、このうち、前期末と中期後葉について触れてみたい。

一宮町内で前期末の遺物が出土しているのは、駿迎堂遺跡群をはじめ数遺跡が確認されているが、発掘調査によって住居址が確認されたのは駿迎堂遺跡群だけである。本遺跡も例外ではなく、かつて該期の遺構が存在したことは想像されるが、遺構は確認されなかった。しかし、平安時代を主体とする土塙群からの出土も含めて、土器片の出土量は非常に多い。それも、諸磯c式～十三菩提式にかけての資料である。本県においては、大泉村天神遺跡に代表されるように、前期末の資料は諸磯b式期が多いのが特徴であり、前期終末期の遺構の調査例は極くわずかである。当然資料も少なく、諸磯c式土器では、ボタン状貼付文、結節状浮線文などが、十三菩提式土器ではソーメン状貼付文などが知られている。本遺跡出土の土器片は、これらに加えて、幅広隆帯上の半截竹管による連続爪形文、竹管の背面利用による連続押引文、三角形沈刻文などを特徴としている。この中で、諸磯c式土器については、從来出土している資料と変わらないものであるが、十三菩提式土器は、中道町上の原遺跡や敷島町金の尾遺跡にみられるような、ソーメン状貼付文及びそれにヘラで刻目を施すタイプは皆無である。本遺跡出土の十三菩提式土器は、より諸磯c式的な様相の強い一群ととらえられるものであろう。

出土状態では、深鉢の底部が平安時代の住居址のカマド内から出土した例が注目される。堅穴住居構築の際、掘り出されたものをカマドの袖石あるいは支脚代わりに再利用したものと考えられる。このような例は、長野県富士見町阿原端下遺跡でも確認されている。

中期後葉の住居址は4軒確認されている。いずれも入口部に埋甕をもち、44号住居址が曾利Ⅰ式末～Ⅲ式初期に、58号・59号住居址が曾利Ⅱ式期に、61号住居址が曾利Ⅲ式～Ⅴ式期に位置づけられる。該期の遺構、遺物は県内各地で多く発見されており、一宮町内でも駿迎堂遺跡群などで確認されている。このように普遍的な時期の遺構であるが、この中で、とくに関東的色彩の強い土器群の存在が注目される。第10図2、第16図1、3、7、第32図31がこれに当る。このうち、第16図7は有溝小把手土器で、山梨県内の出土例は極めて少ない。他の4点は連弧文土器である。

第242図に4点の文様モチーフを示したが、1は第32図31の、2は第16図1の、3は第16図3の、4は第10図2の文様モチーフである。桐生直彦氏の文様分類によると、1は下部文様にも連弧文を有するもの(B1型式)、2、3は下部文様帶の連弧文下に懸垂文を有するもの(B2型式)、4は肩部の分帶のないもの(D型式)に分類されるが、4については、D型式細分のう



第242図 連弧文土器文様モチーフ

ち、連弧文を複数表出するもの（D3型式）のバラエティーととらえることも可能であろう。

これらの土器のうち、第32図31以外は住居内からの出土であり、59号住居址からは、第16図1が埋壺として、さらに第16図3の連弧文土器、7の有溝小把手土器がまとめて出土していることから、他の3軒の住居址とは、やや性格が違うと考えられる。周知の如く、曾利式土器は、分布の中心を本県におくもので、その中でもとくにⅠ式、Ⅱ式期は最も多くの遺跡が確認されている時期である。このような状況下において、59号住居址のような、関東的色彩の強い住居址の存在は、極めて特異な例であると言わざるを得ない。

#### ○15号住居址出土の土師製硯について

本県においては、奈良・平安時代の硯は現在までに転用硯と考えられるものを含めて、2例確認されているにすぎない。1例は、一宮町東原遺跡杭N313地点の出土品で、須恵器杯蓋による転用硯とされ、真間期に位置づけられている。もう1例は、都留市牛石遺跡の出土品で、<sup>(注)</sup>須恵器円面硯脚部の破片であり、やはり真間期に位置づけられるとのことである。

本遺跡出土の硯は、土師製風字硯で、硯頭部分を欠損している。現存の硯面幅9cm、器高2.7cmを測る。胎土には小砂粒が含まれるが、磨きが丁寧であり、焼成も良好で、黒色を呈している。脚は2本が存在したことが明らかで、現存するのは1本だけである。この脚も丁寧に仕上げられており、断面が六角形を呈するように面を構成している。一般に、土師製硯は、墨汁をあけて使用すると考えられるが、本資料は、陸の中央部分が使用によって磨滅しており、その部分の器厚は1mmに満たない。明らかに、墨を擦った結果によるものである。

本例は、本県での3例目になるが、平安時代に位置づけられるうえ、使用の痕跡が明瞭な土師製硯という点で特筆される。このような、擦った痕跡の明瞭な土師製硯は少ないようであり、類例の増加が望まれる。

(注)未報告であり、時期も含めて詳細は不明である。奈良泰史氏の御教示による。

#### ○北堀遺跡出土の土師器について

本遺跡では、鬼高期～国分期までの住居址57軒が調査され、多くの資料を提供することとなつた。ここでは、各住居址から出土した土師器を整理し、その変遷について触れてみたい。

本遺跡出土の土師器は、大きく7期に分類される。杯、皿、壺、鉢などについて各時期ごとの概要を示すと以下のようになる。

北堀Ⅰ期 杯、壺、鉢、円筒形土器、須恵器杯が出土している。杯は丸底を呈し、横ナデ後外面下半から底部にかけてヘラ削りを施す。胴上半部に縫の付くものは、本遺跡ではほとんど出土していない。壺は、大型と小型のものがあり、大型の長削壺には内外面ハケ調整が、小型の壺には外面に縦方向のヘラ削りが施される。7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

北堀Ⅱ期 杯、壺、置きカマド、須恵器杯が出土している。杯は、底部を糸切り後ヘラ削りし、さらにヘラ磨きを施している。このため、底部の端は丸味を帯びる状態となっ

ている。また、器体部内面にもヘラ磨きが施される。なお、特異なものとして、丸底の杯で外面にハケ調整を施したものが併出している。壺は、口縁の大きく開く長胴壺で、内外面ハケ調整を施す。8世紀第3四半期前後に位置づけられる。

北堀Ⅲ期　杯、皿、壺、須恵器蓋が出土している。杯、皿は、底径が大きく、身も深い器形で、内面の暗文が、みこみ部に及ぶのを特徴とする。底部は糸切り後周縁部をヘラ削りし、さらにヘラ磨きを施す。胴部についても同様であるが、磨きについては施すものと施さないものがある。口縁は、先端が鋭いつくりになっており、Ⅲ期の杯に類似する。壺は、口縁部がⅢ期に比べ小さくなり、胴部最大径がさらに高い位置にあるのを特徴とする。内外面ハケ調整が施される。なお、本遺跡の資料によれば、この時期から杯、皿の胎土に赤色粒子がみられるようになる。9世紀第2四半期～第3四半期に位置づけられる。

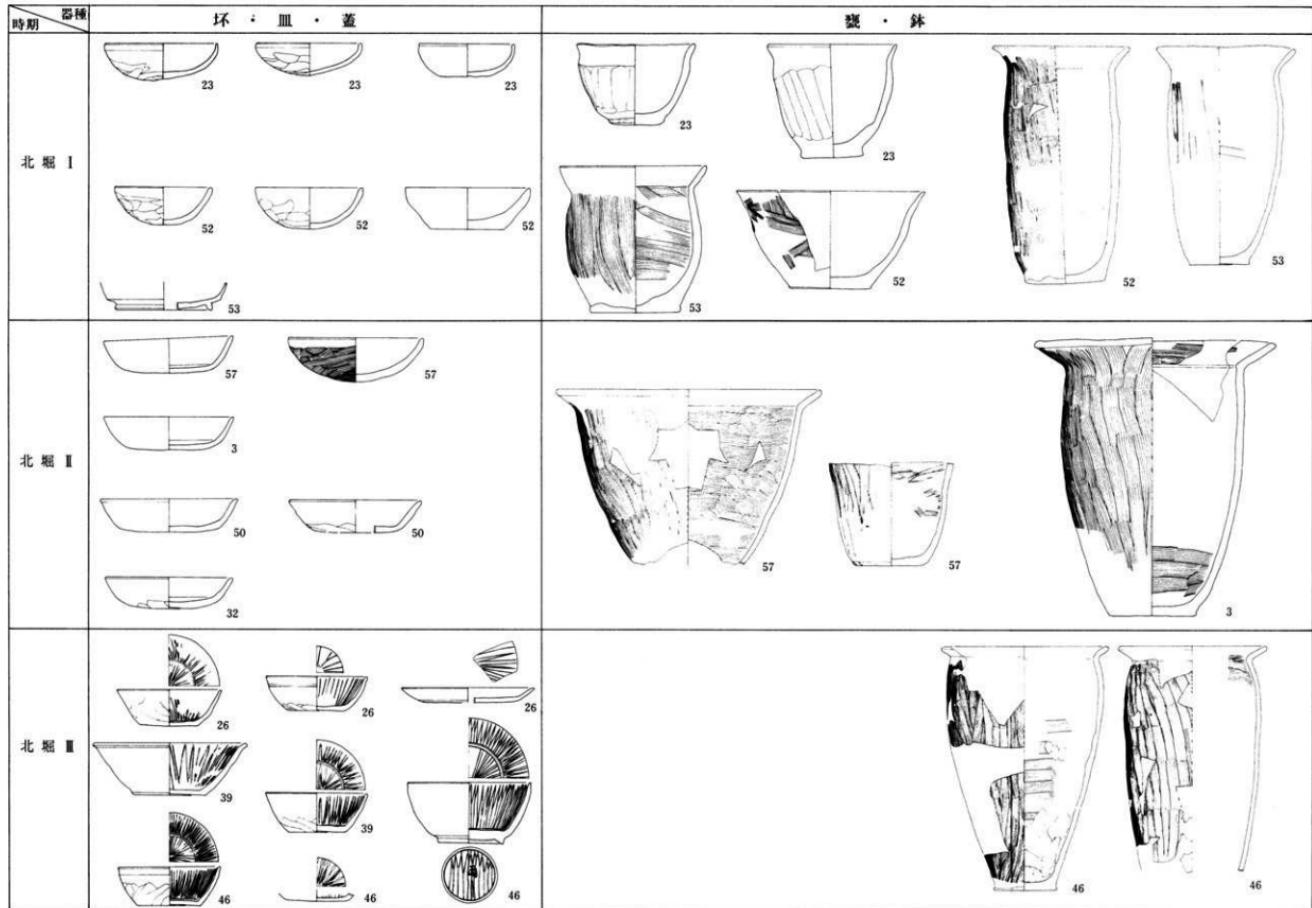
北堀Ⅳ期　杯、皿、蓋、壺、大鉢が出土している。また、小破片ではあるが、灰釉陶器蓋が出土しており、逆に、須恵器は床面直上、カマド内から出土したものはない。杯は、暗文がみこみ部に及ばなくなり、形態的にはⅢ期に比べ底径が小さくなる。皿は、中段位に明瞭な稜をもつ。また、ヘラ削り後の磨きは、Ⅲ期と同様、施されるものと施されないものがある。口縁は、Ⅲ期に比べ先端が丸味を帯びる。壺、大鉢は、口縁が薄いつくりとなり、内外面ハケ調整が施される。9世紀第4四半期に位置づけられる。

北堀Ⅴ期　杯、皿、蓋、壺が出土している。杯には暗文の施されないものが多く、ヘラ削り後の磨きはほとんどみられない。胴部の立ち上がりは極く緩いカーブを描く。皿は、Ⅳ期に明瞭であった中段位の稜が不明瞭となる。壺は、口縁が厚いつくりとなり、内外面ハケ調整が施される。10世紀第1四半期～第3四半期に位置づけられる。

北堀Ⅵ期　杯、皿、壺、大鉢、置きカマド、灰釉陶器皿などが出土している。杯、皿は、玉縁口縁となる。また、胴部のカーブは強くなり、その分底径が小さくなる。削りの後の磨きは全くみられない。底部も、糸切り後ヘラ削りを施すが、一部に底部はもちろん、胴部にもヘラ削りの施されないものが出現する。このタイプは底部が弱い段状をなし、Ⅶ期の台付杯の前段階とも考えられる。全体的に杯、皿は薄いつくりとなっている。壺、大鉢は、口縁の厚みがさらに増し、内外面ハケ調整が施される。10世紀第4四半期～11世紀前半に位置づけられる。

北堀Ⅶ期　杯、皿が出土している。ともに厚いつくりで、底部は糸切り後のヘラ削りが全く行われていない。磨きもみられない。本期の杯、皿の胎土は、Ⅵ期までのものに比べ精選されておらず、赤色粒子とともに砂粒を含むものが多い。11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる。

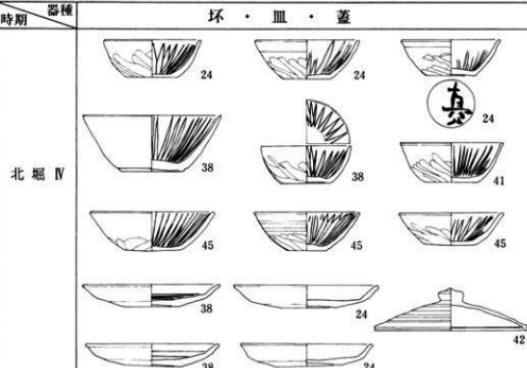
以上のように分類される。これを、遺物を出土した住居址別にみてみると、Ⅰ期5軒（23、27、52、53、54号住居址）、Ⅱ期5軒（3、32、50、51、57号住居址）、Ⅲ期3軒（26、39、46号住居址）、Ⅳ期7軒（22、24、38、41、42、45、56号住居址）、Ⅴ期7軒（1、5、8、



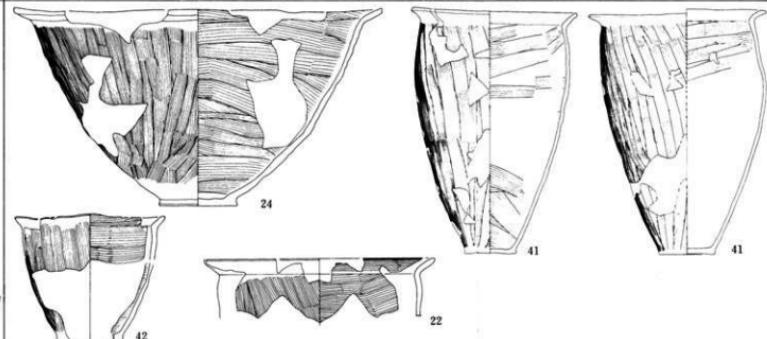
第243図 北堀遺跡出土土器編年図 その1 (数字は住居址を示す)

## 時期 器種

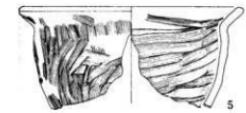
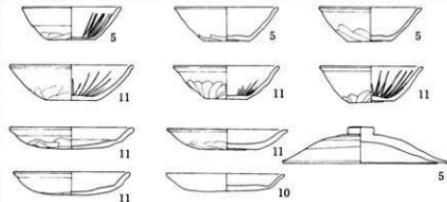
## 坏・皿・蓋



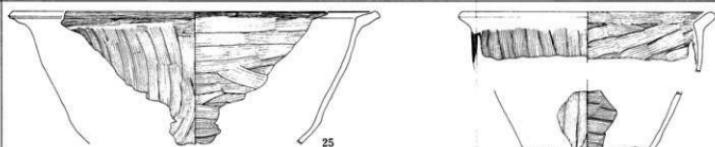
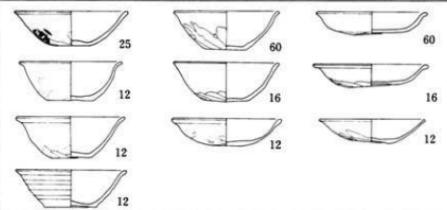
## 甕・鉢



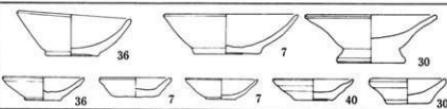
## 北堀 V



## 北堀 VI



## 北堀 VII



第244図 北堀遺跡出土土師器編年図 その2 (数字は住居址を示す)

10、11、21、34号住居址)、Ⅶ期14軒(4、6、12、14、15、16、17、18、19、25、31、43、49、60号住居址)、Ⅷ期11軒(2、7、9、13、20、29、30、35、36、37、40号住居址)となる。なお、これは最小数値であり、出土遺物のない住居址がこれに加わることになる。

このように、鬼高期末～国分期まで断続的に集落が營まれていたのであるが、この中でも、平安時代に位置づけられるⅢ期～Ⅶ期までが、本遺跡の主体を成す時期で、周辺遺跡も含めた、該期の当地域の様相が改めて窺われることとなった。この期間は、『和名抄』の所載の郷名の時代に該当するが、当時の一宮町とその周辺は郷の密集地帯であり、本遺跡がどの郷に属したかは確定しがたい。ただし、本遺跡の北西約1.2kmの同町大字東原にその遺称をとどめる「山梨郡林部郷」を形成する集落の1つであった可能性がもっとも大きい。

また、Ⅸ期については、隣接する笠木地蔵、東新居両遺跡が該期を主体とする集落であることが明らかであり、とくに既報告の東新居遺跡では、該期の年代を11世紀後半～12世紀前半に位置づけ、住居址の切り合いも確認されている。しかし、まだ該期の資料不足は否めないものであり、その年代的位置づけも含めて、さらに今後検討されるべきものであろう。

### 参考文献

- 『勝沼バイパス建設に伴う古代甲斐国の考古学調査』 1974 山梨県教育委員会
- 『埋蔵文化財ニュース41—陶窯関係文献目録一』 1983 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
- 「連弧文土器」桐生直彦 『縄文文化の研究』 4 1981 雄山閣
- 「曾利式土器」末木 健 『縄文文化の研究』 4 1981 雄山閣
- 「曾利式土器編年の基礎的把握」 米田明訓 『長野県考古学会誌』 30 1978 長野県考古学会
- 「甲斐の都（評）郷制」 坂本美夫 『研究紀要』 1 1983 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター
- 『山梨県の歴史』 磯貝正義、飯田文弥 1973 山川出版社
- 「甲斐地域」 坂本美夫、末木健、堀内真 『シンポジウム 奈良、平安時代の諸問題 神奈川考古』 14 1983 神奈川考古同人会
- 「平安時代末期の土器について」 田代孝 『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第4集 豆塚遺跡、東新居遺跡』 1984 山梨県教育委員会、日本道路公団
- 「山梨県下における奈良時代土器の様相」 坂本美夫 『シンポジウム盤状坏』 1981 東洋大学未来考古学研究会、相武古代研究会
- 「山梨県における奈良・平安時代の集落遺跡」 猪股喜彦 『歴史手帳13-1』 1985 名著出版

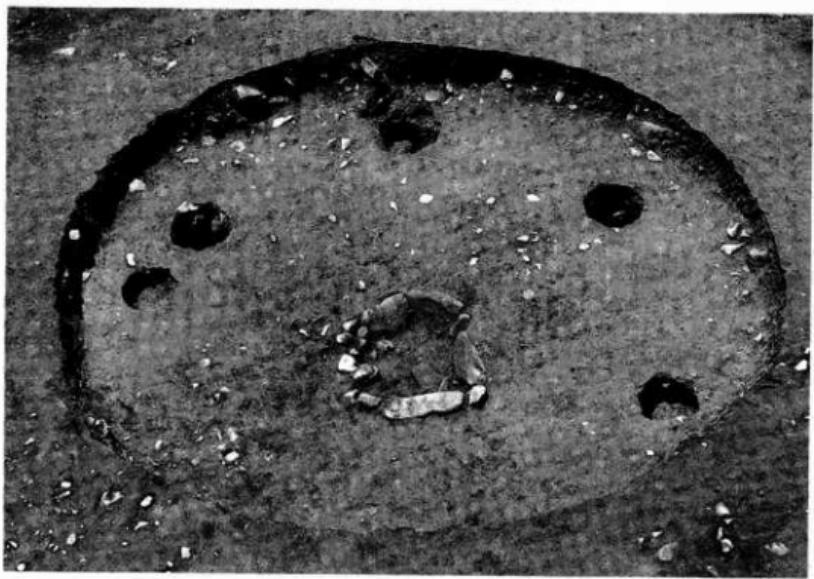
図 版



北廬遺跡全景



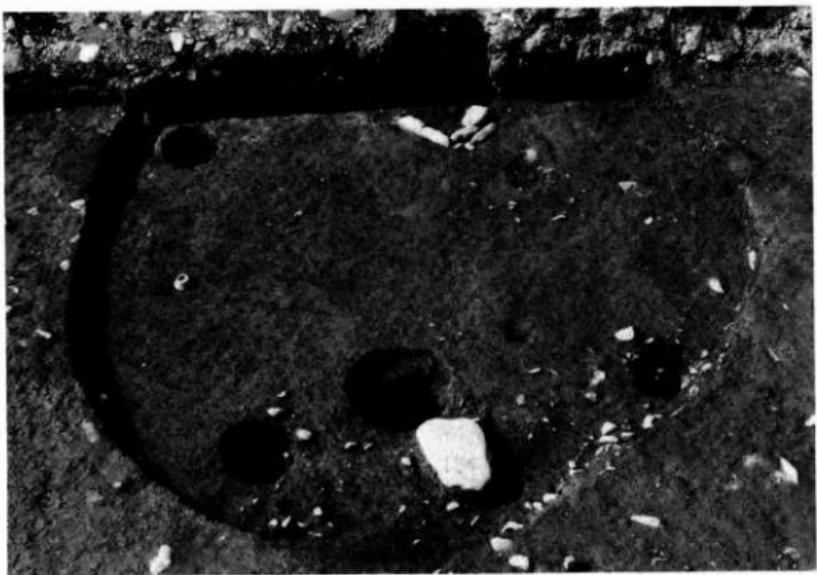
調查風景



44号住居址



58号住居址



59号住居址



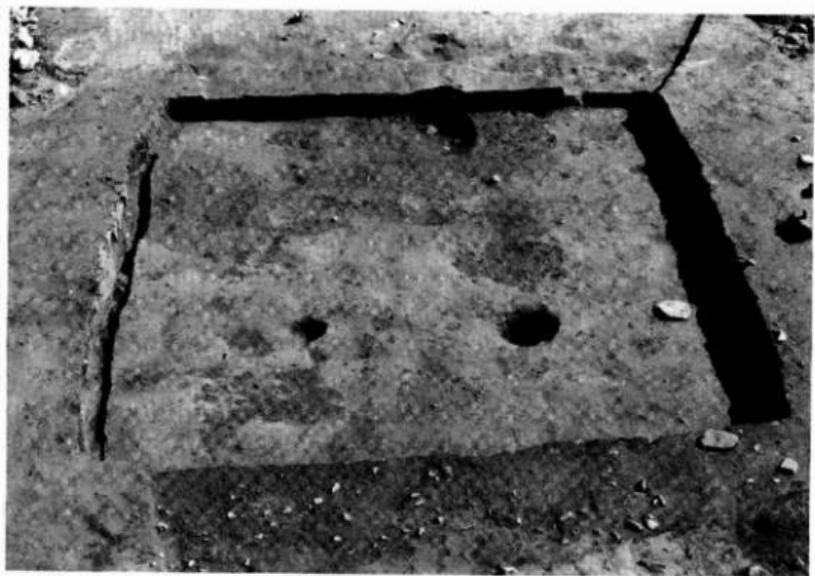
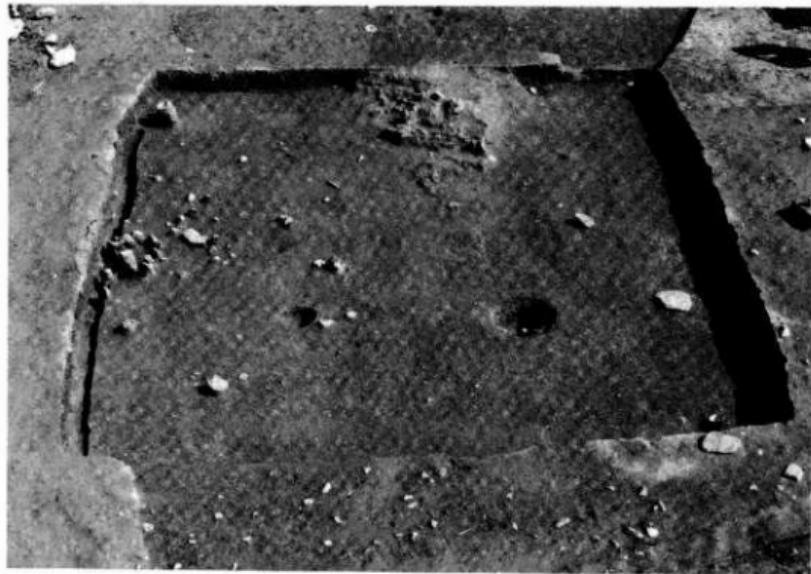
59号住居址埋甕



61号住居址



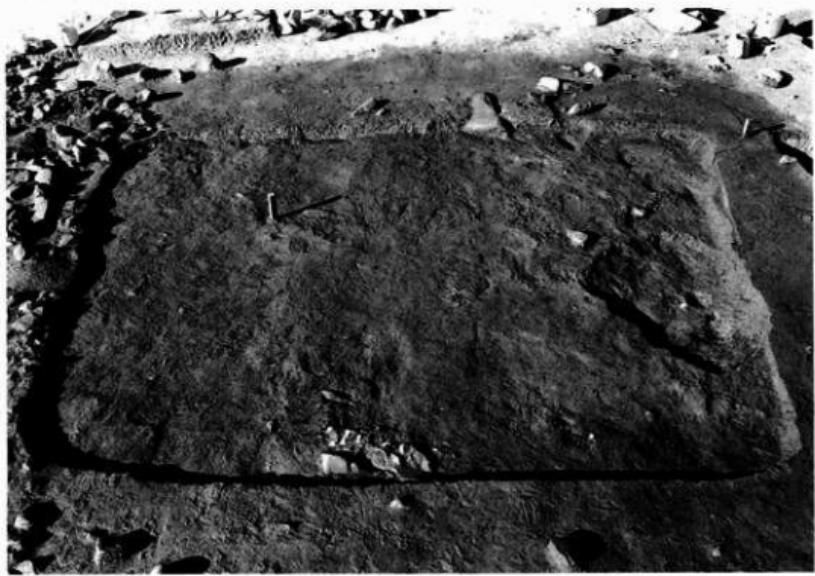
1号单独埋葬



1號住居址



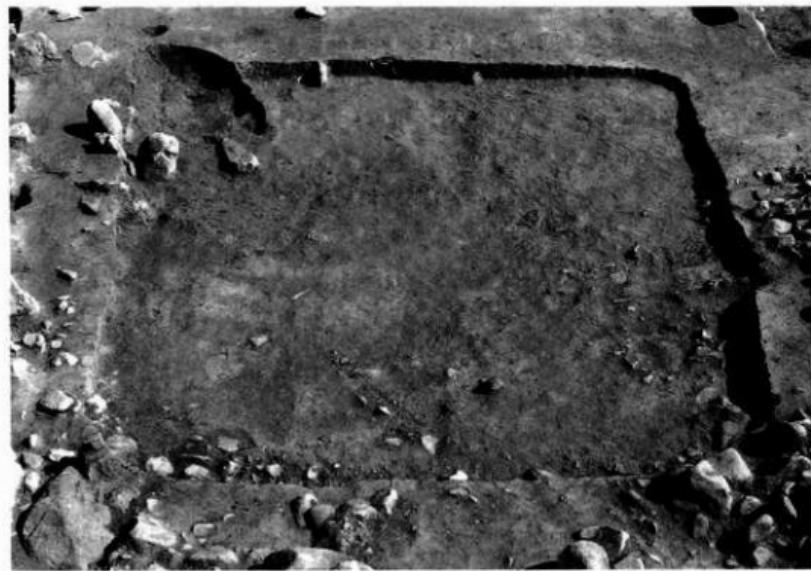
3號住居址



4號住居址



5號住居址



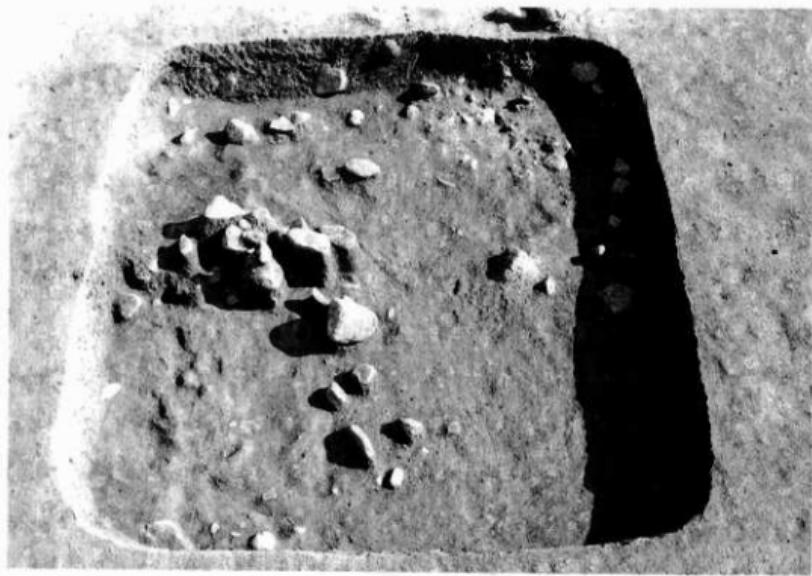
7號住居址



8号住居址



11号・12号・16号・34号住居址



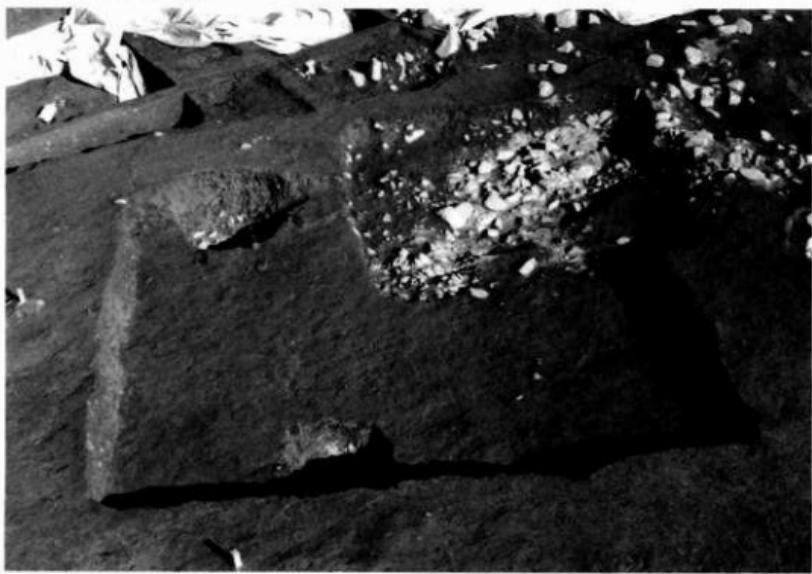
14号住居址



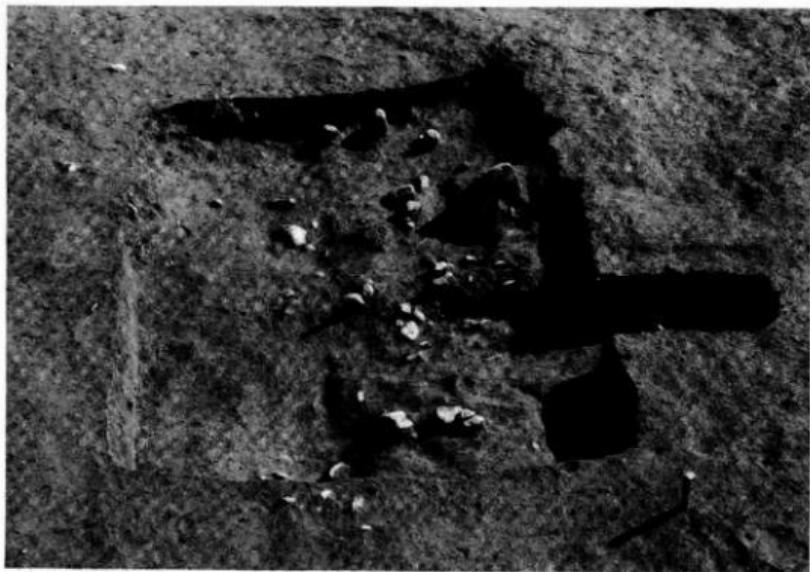
15号·31号住居址



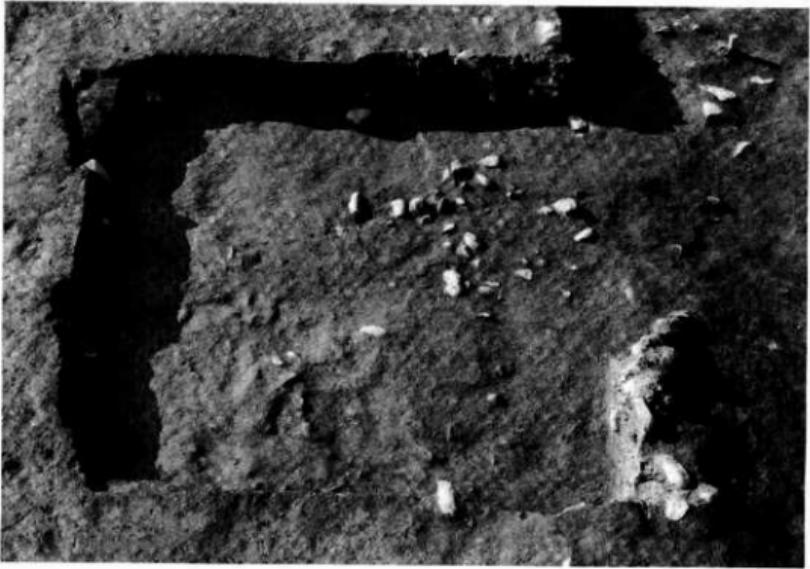
15号住居址観出土状態



17号・18号住居址



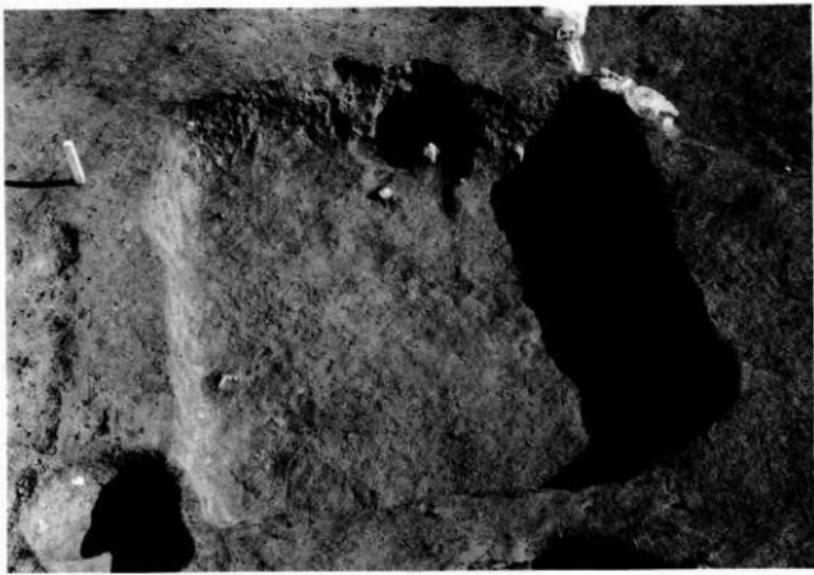
19號住居址



20號住居址



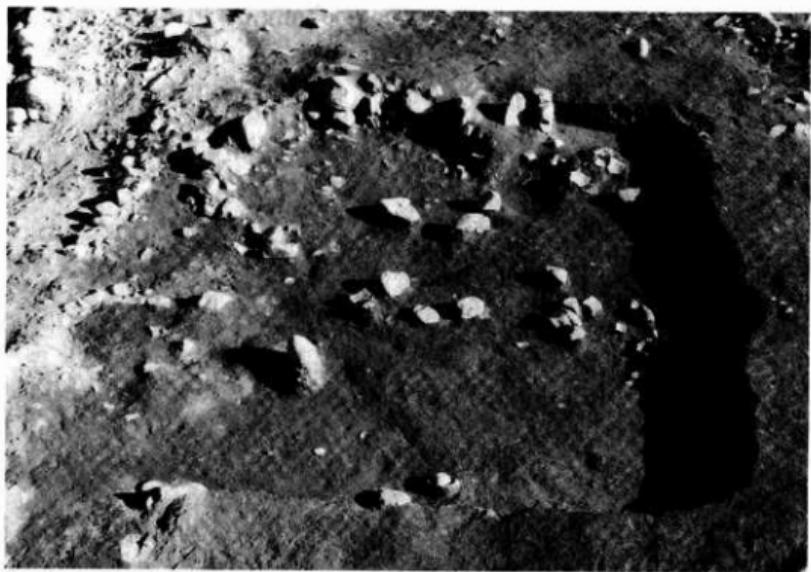
21号・22号住居址



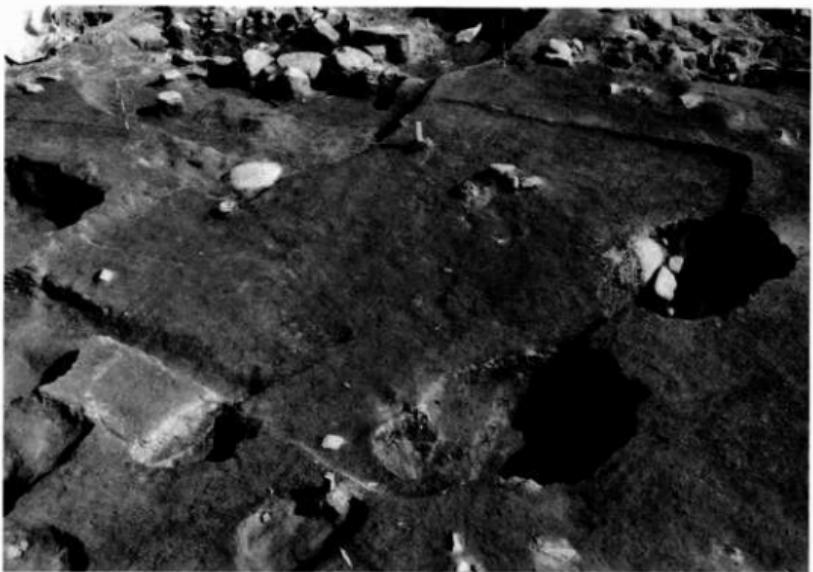
23号住居址



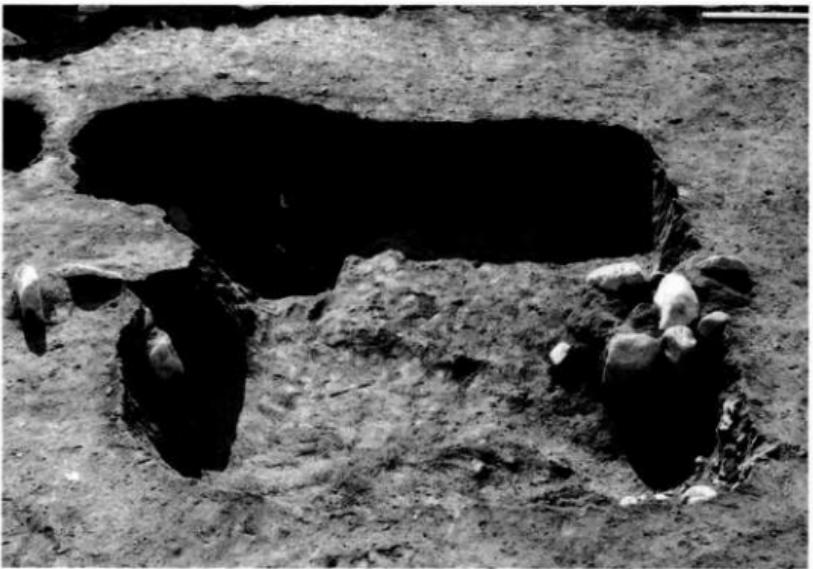
23号住居址遺物出土状態



24号住居址



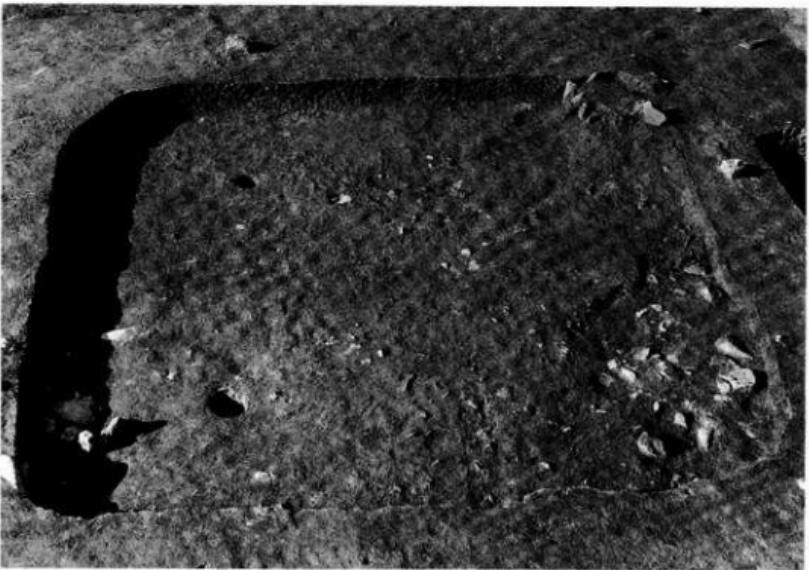
26號住居址



28號住居址



29号住居址



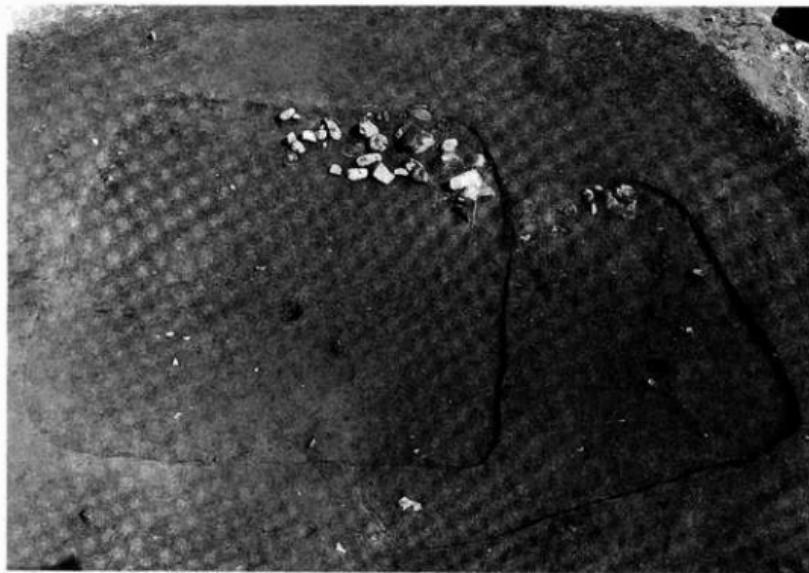
30号住居址



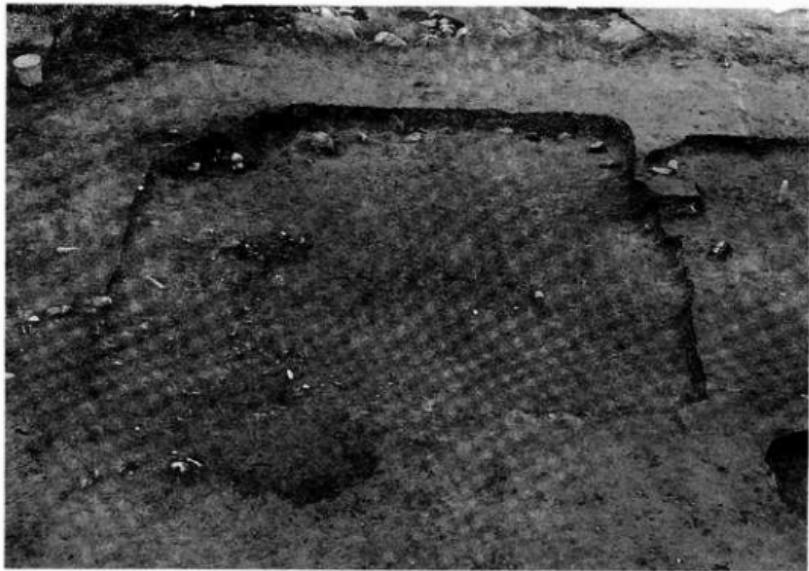
32号住居址



35号住居址



36號・45號住居址



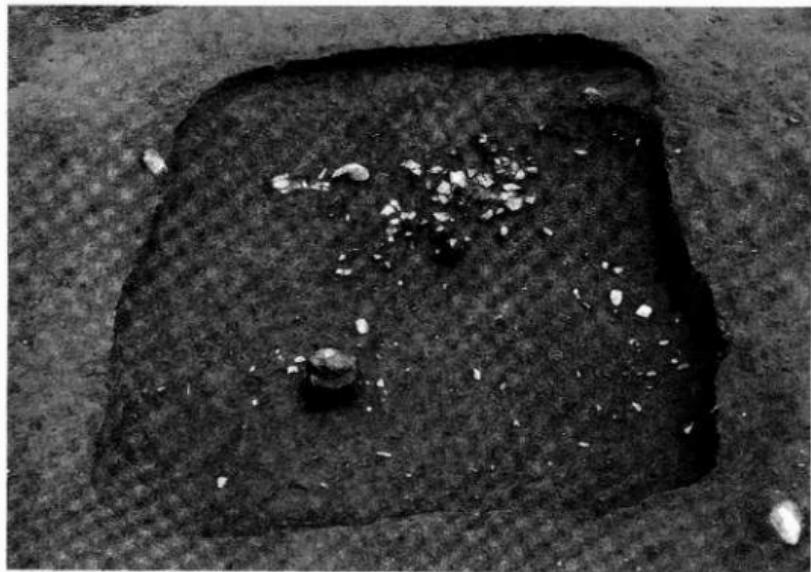
37號住居址



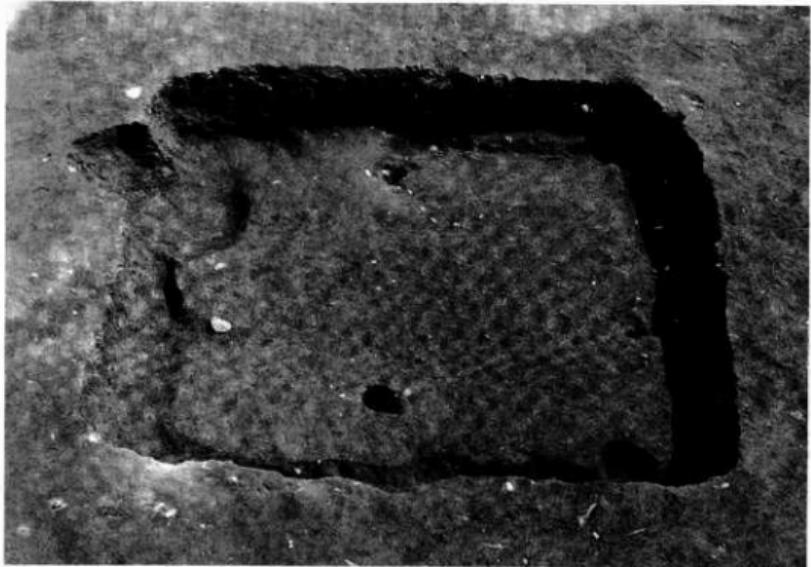
38号住居址



40号住居址 カマド



41號住居址



42號住居址



43号住居址



46号·47号·48号住居址



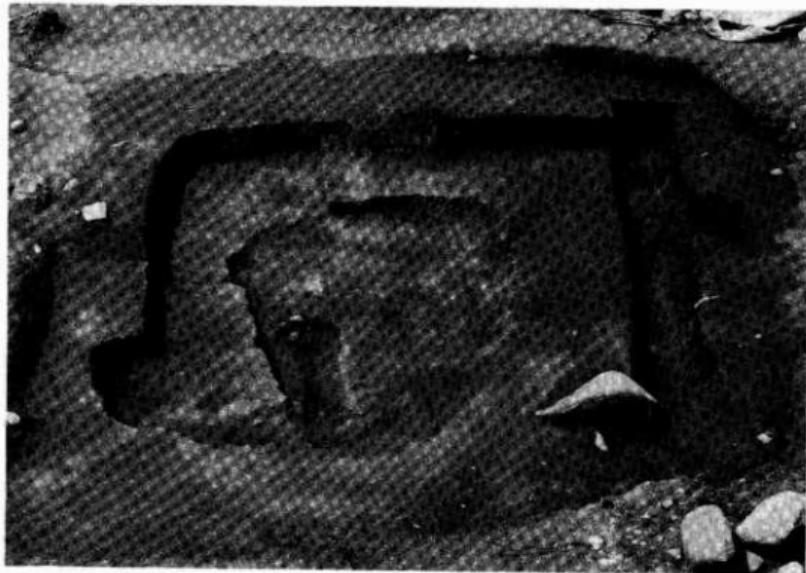
50号住居址



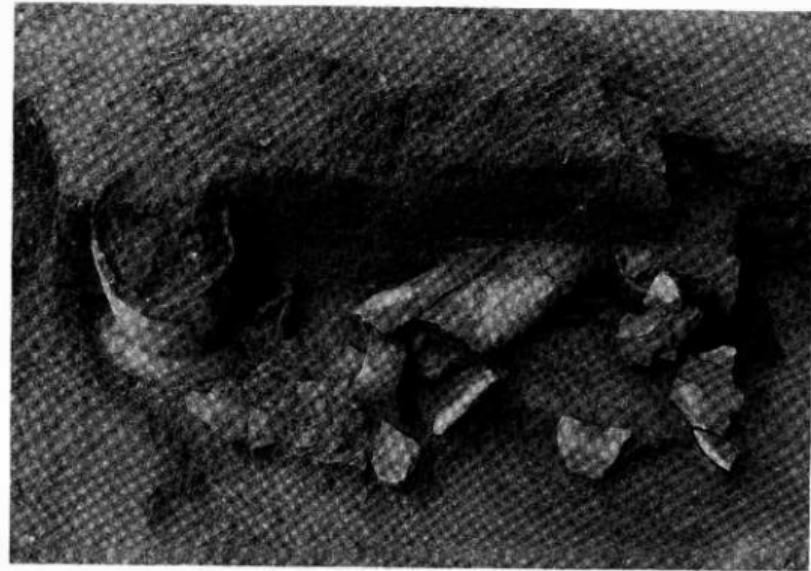
52号住居址遺物出土状態



同カマド付近



53号住居址



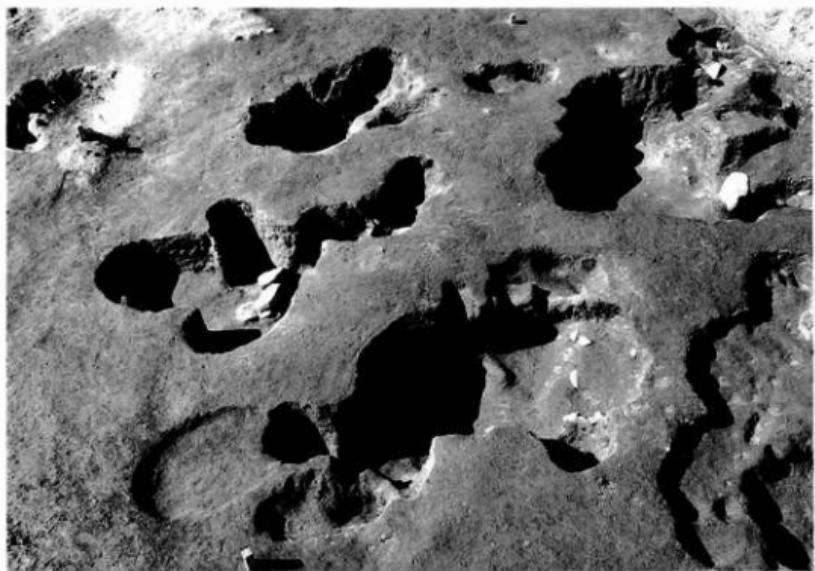
53号住居址 カマド



53号住居址 カマド



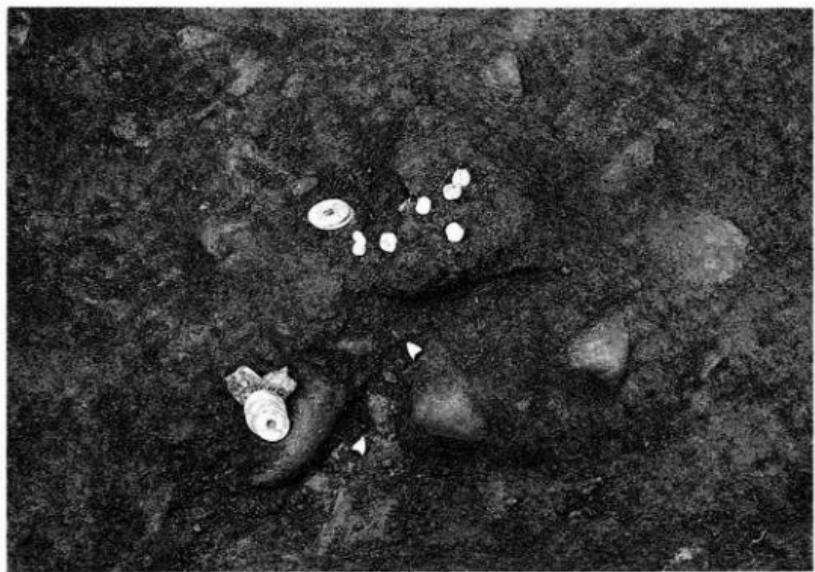
57号住居址遗物出土状态



土 塚 群



土 埼 群



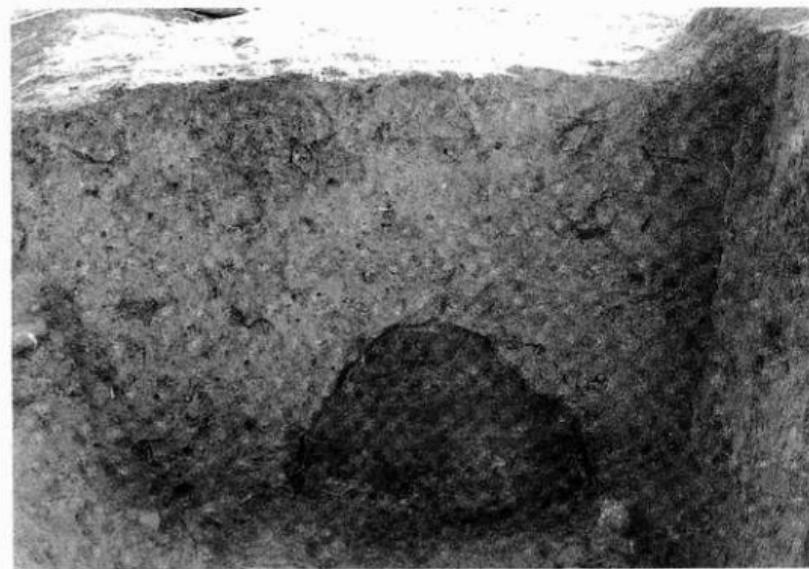
1号墓 坛



2号方形石組遺構（調査前）



2号方形石組遺構・1号溝



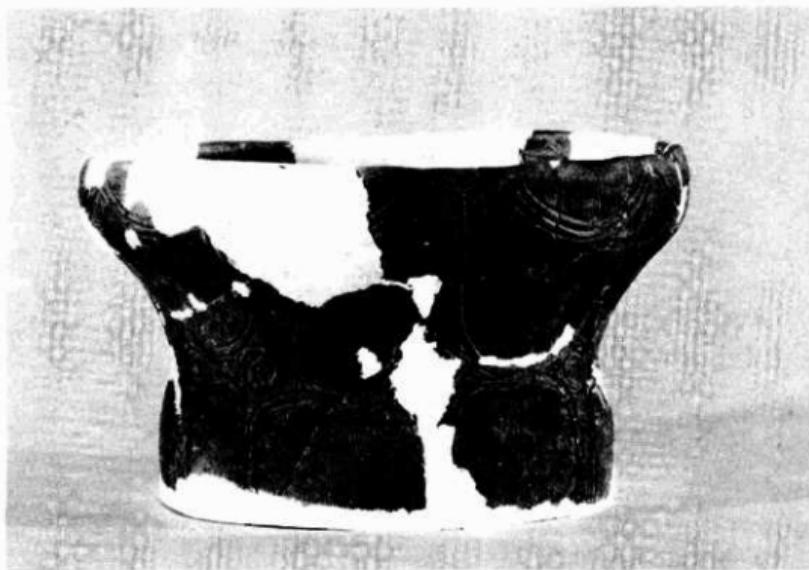
同トンネル



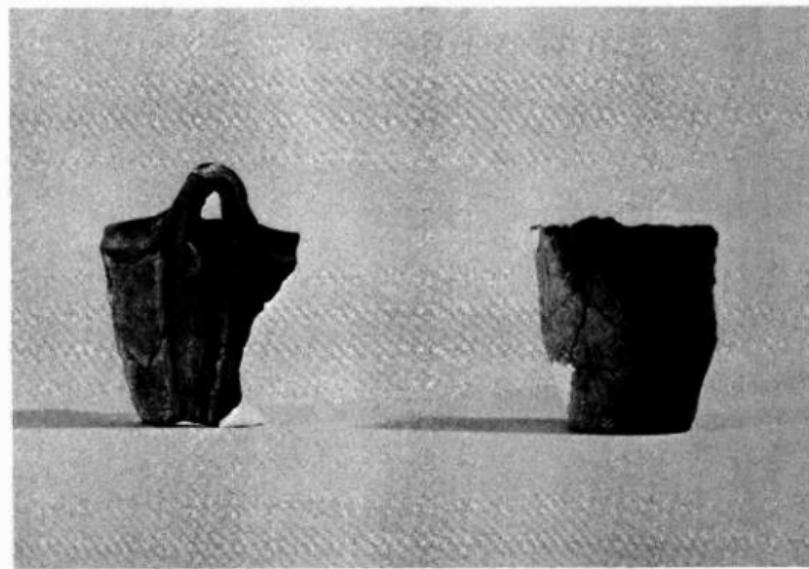
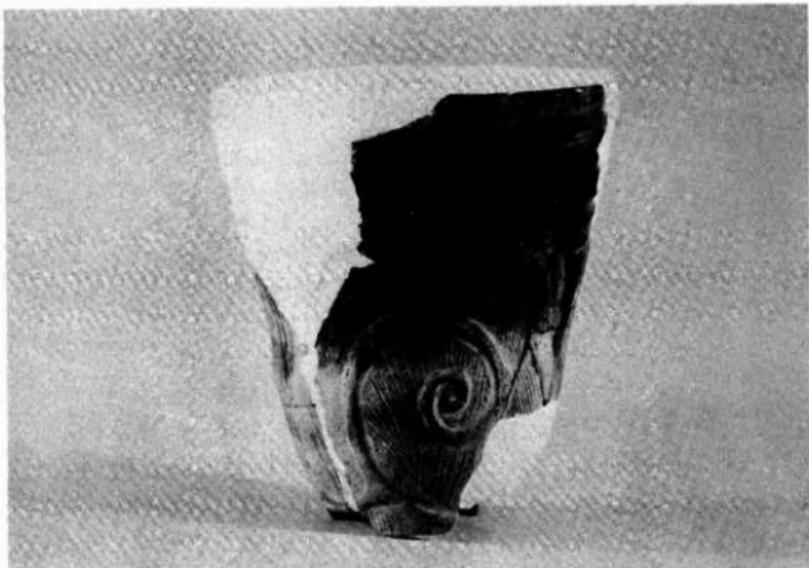
44号住居址出土土器



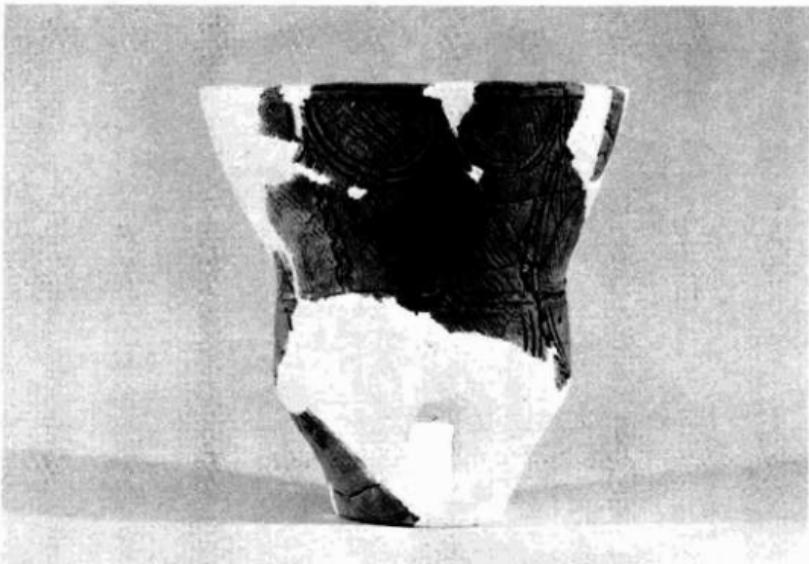
44号住居址出土土器



58号居住址出土土器



58号住居址出土土器



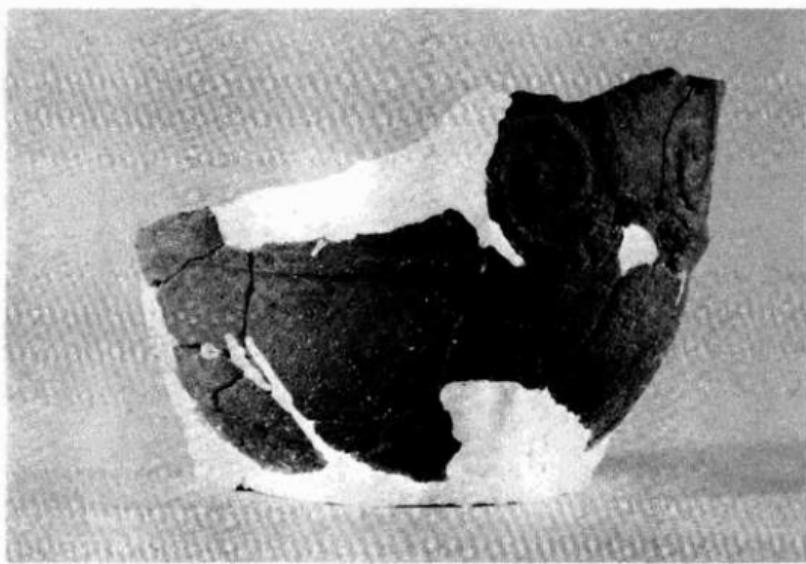
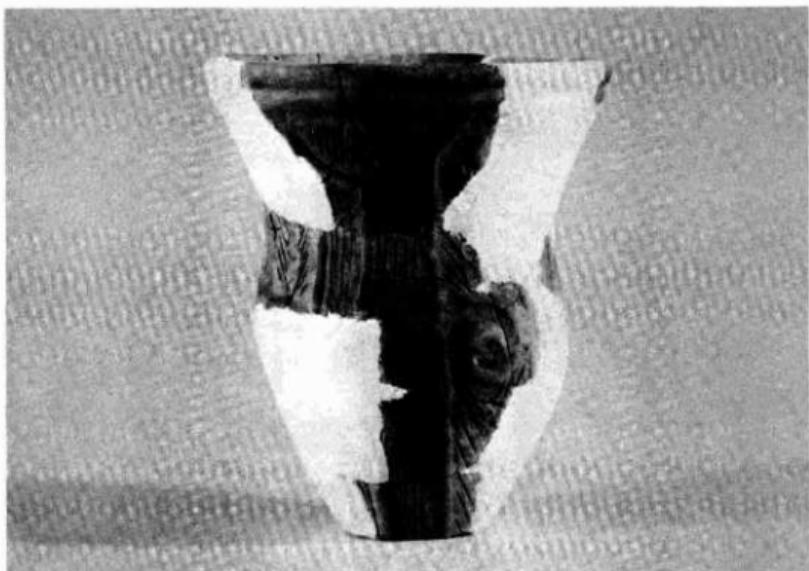
59号住居址出土土器



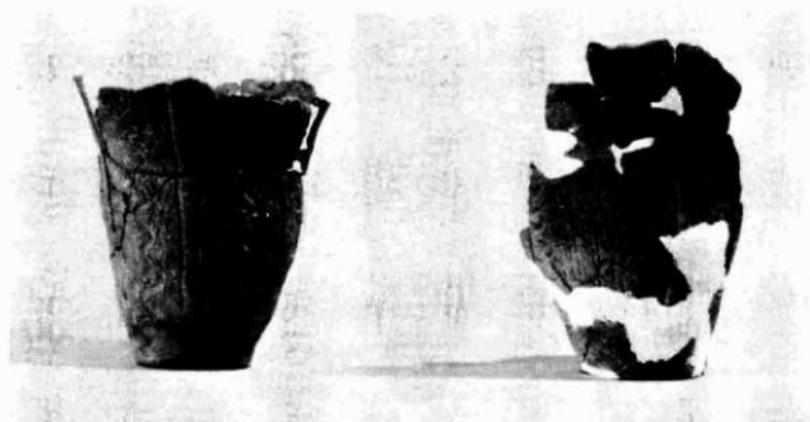
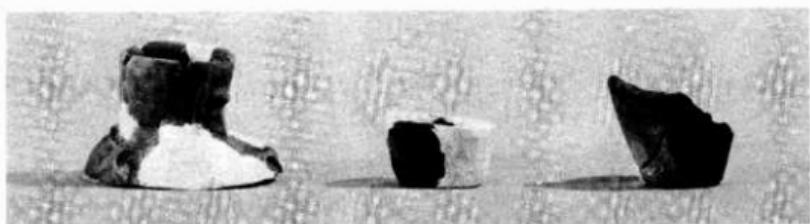
59号住居址出土土器



61号住居址出土土器



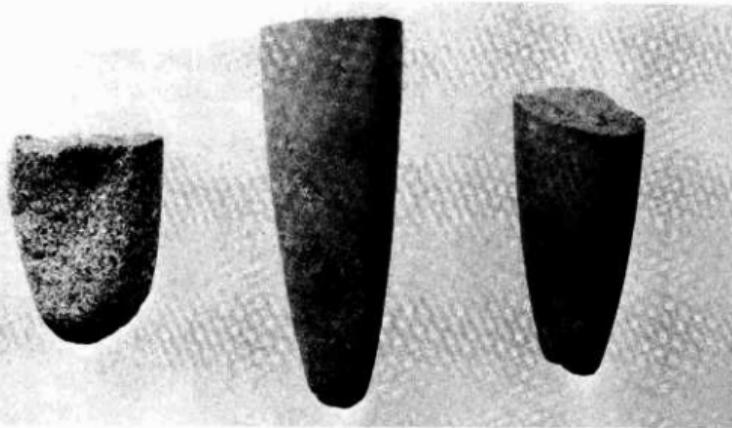
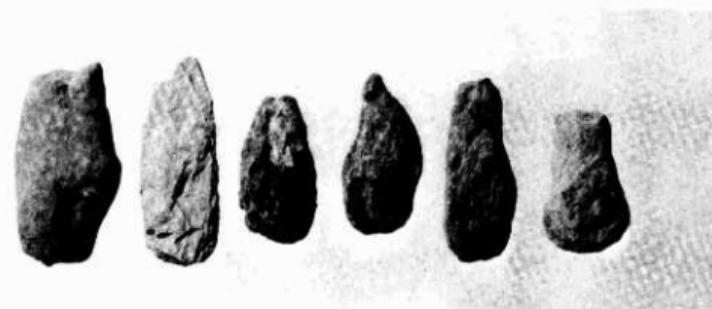
61号住居址出土土器



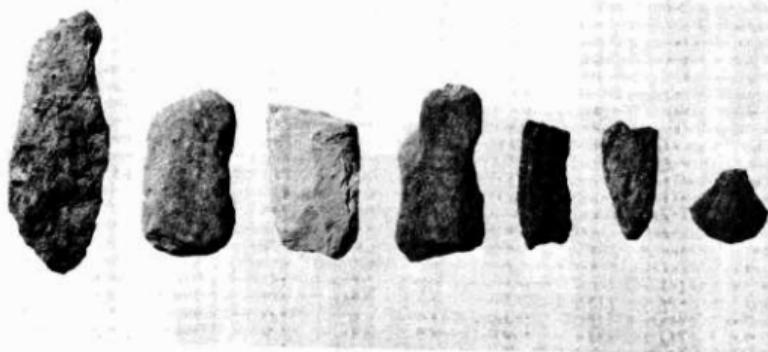
61号住居址出土土器



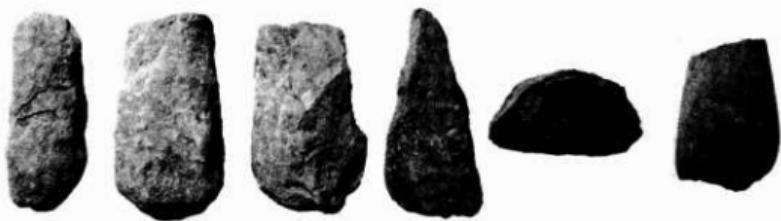
44号住居址出土石器



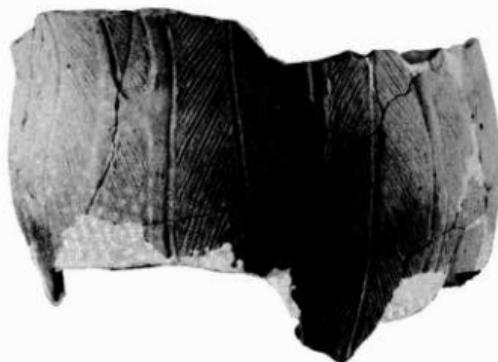
58号住居址出土石器



59号出土居址出土石器



61号住居址出土石器



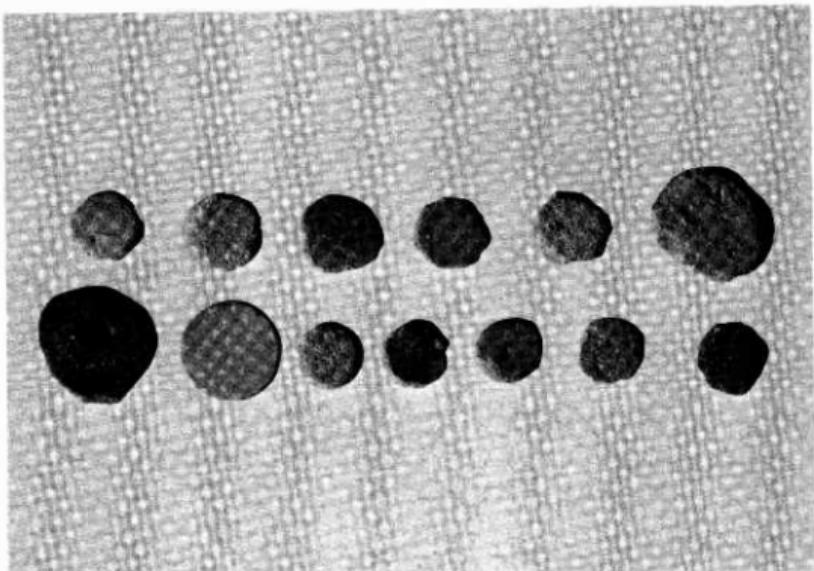
1号单独埋葬



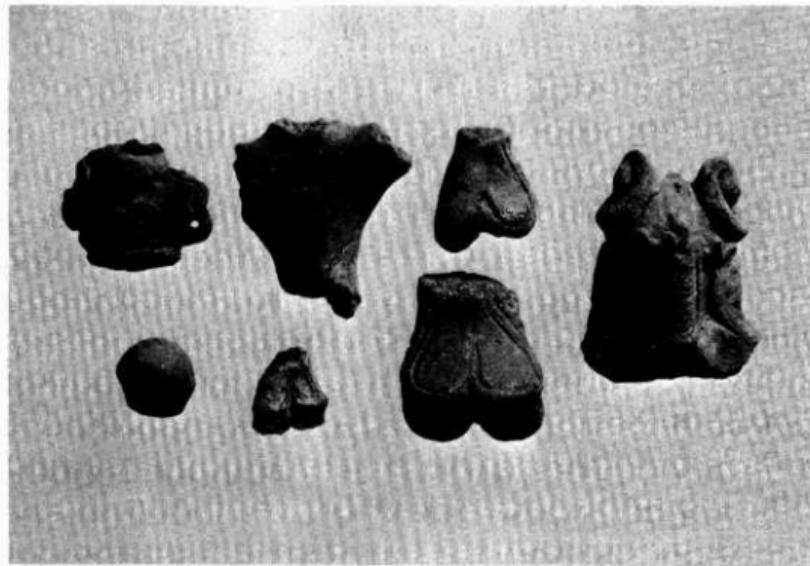
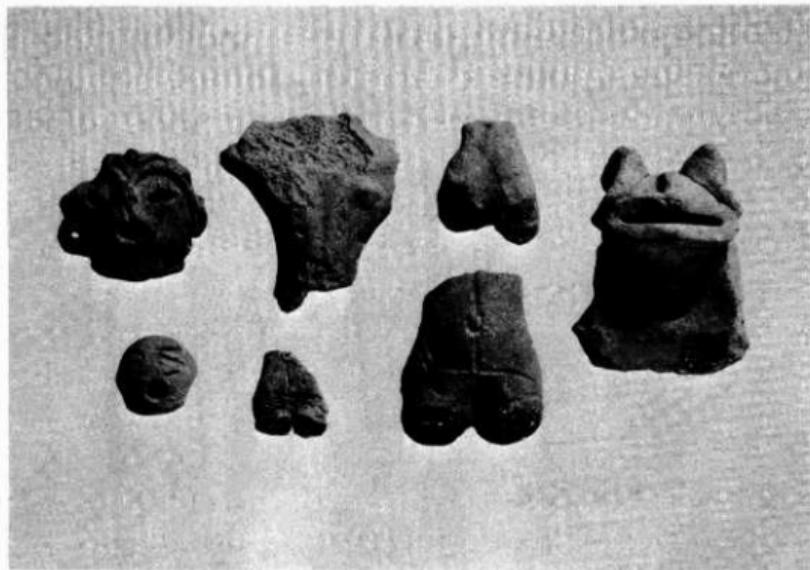
2号单独埋葬



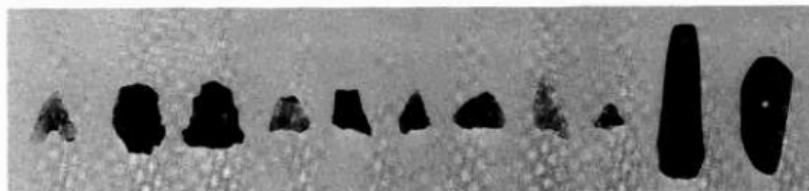
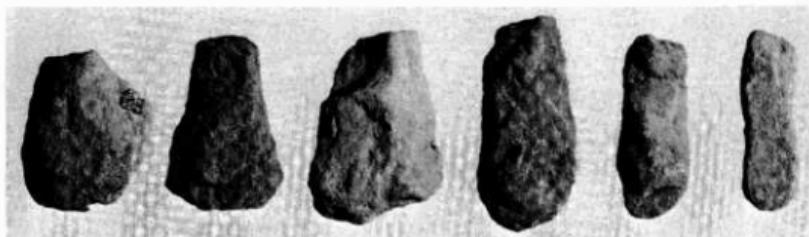
グリッド出土土器



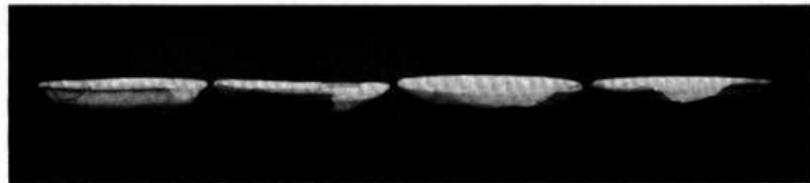
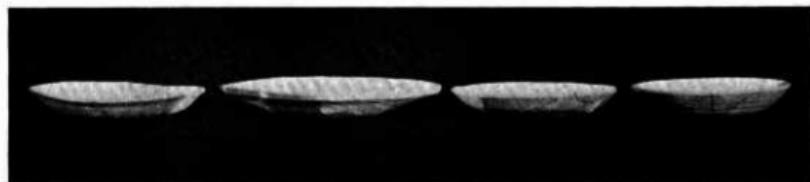
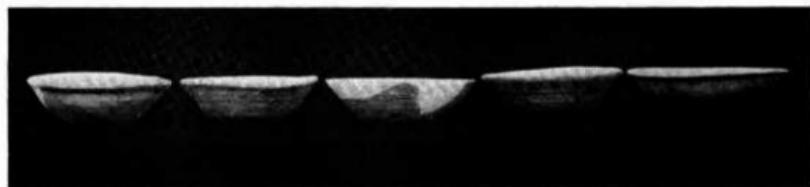
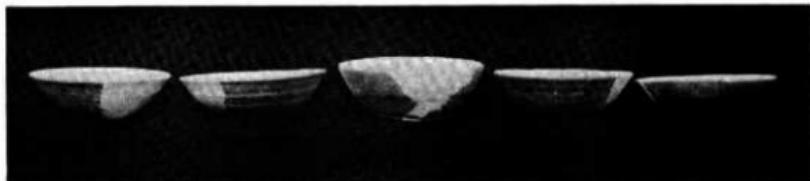
土 製 円 板



獸面把手·土偶



グリッド他出土石器



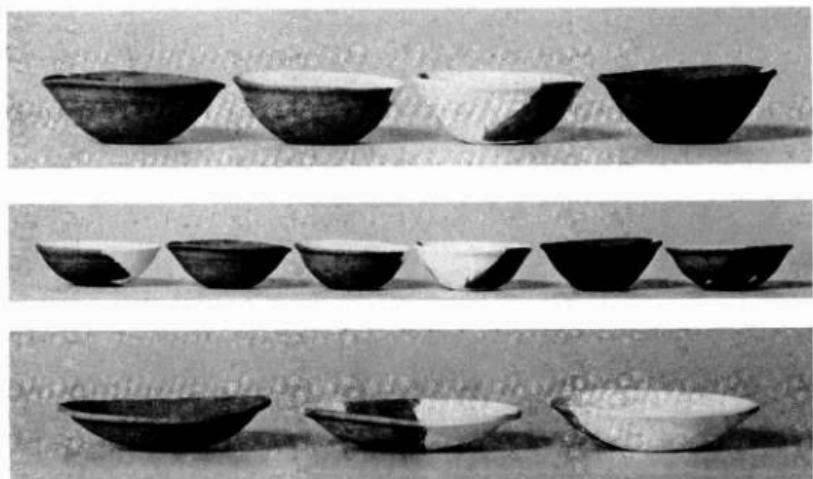
1號住居址出土土器



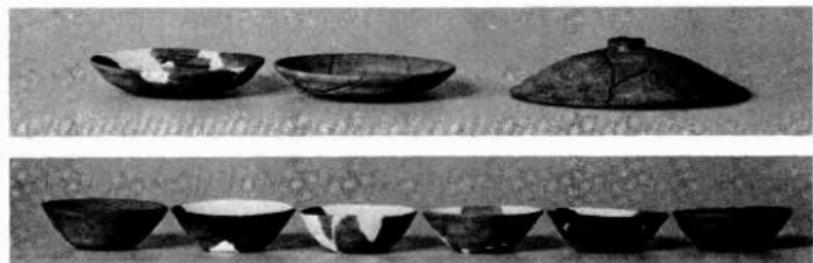
2号住居址出土土器



3号住居址出土土器



4号住居址出土土器



5号住居址出土土器



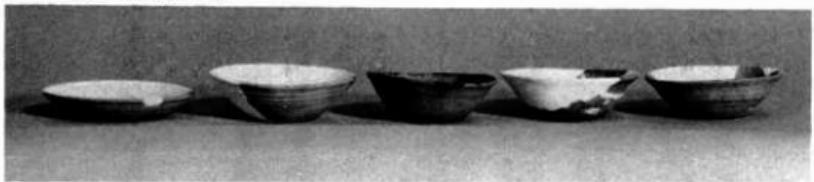
7号住居址出土土器



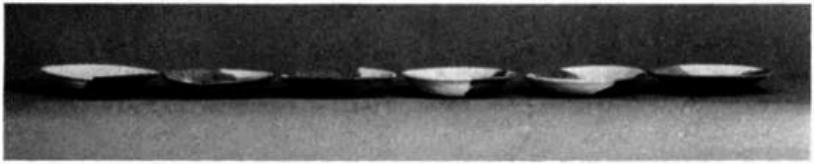
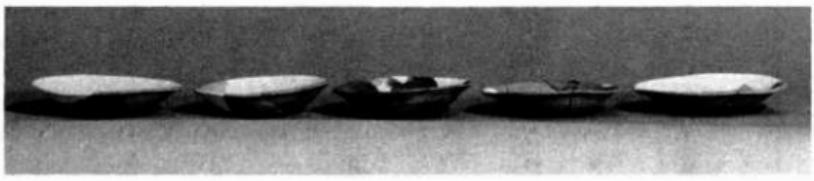
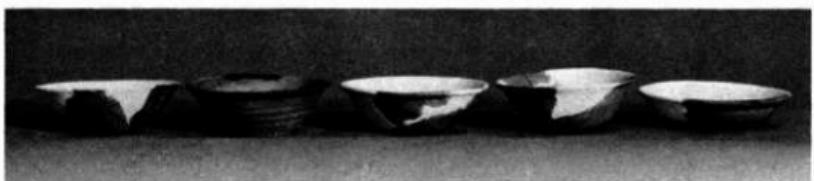
8号住居址出土土器



10号住居址出土土器



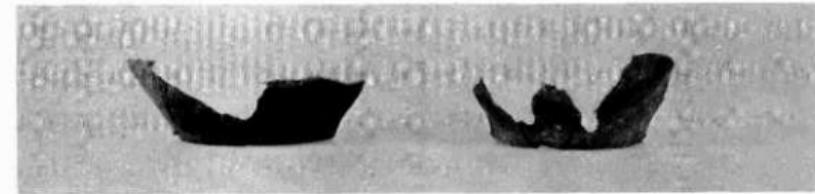
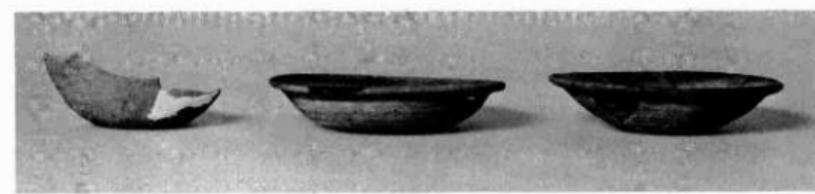
11号住居址出土土器



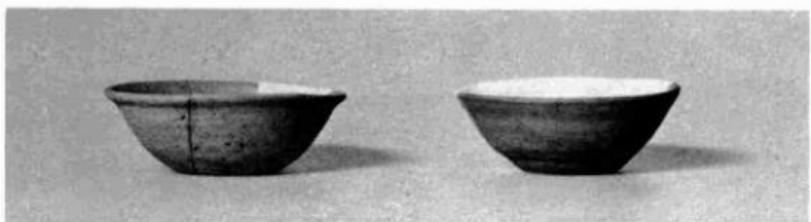
12号住居址出土土器



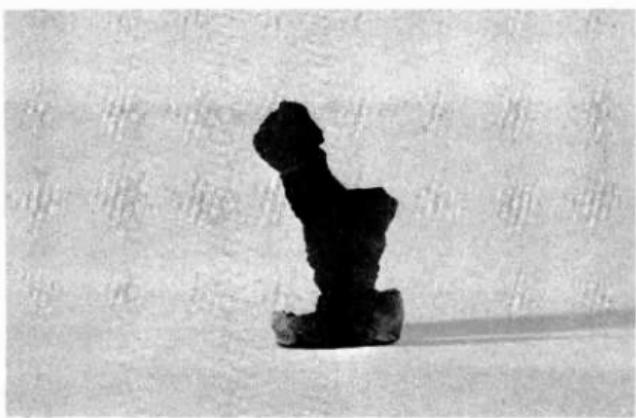
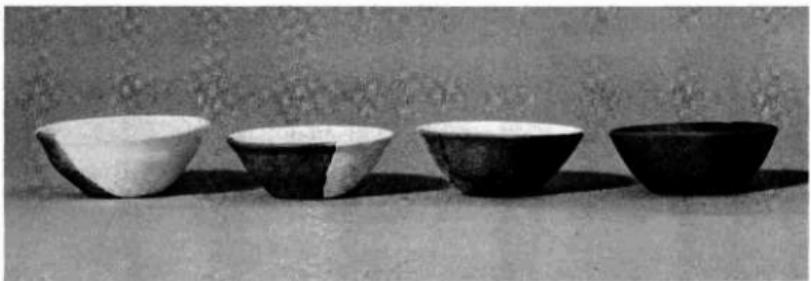
15号住居址出土土器



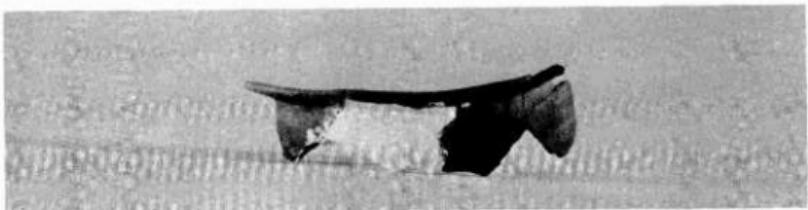
16号住居址出土土器



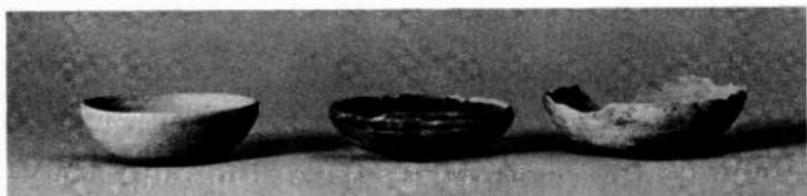
18号住居址出土土器



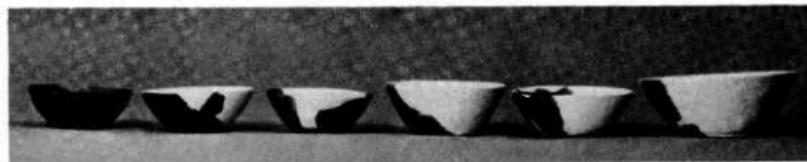
21号住居址出土土器



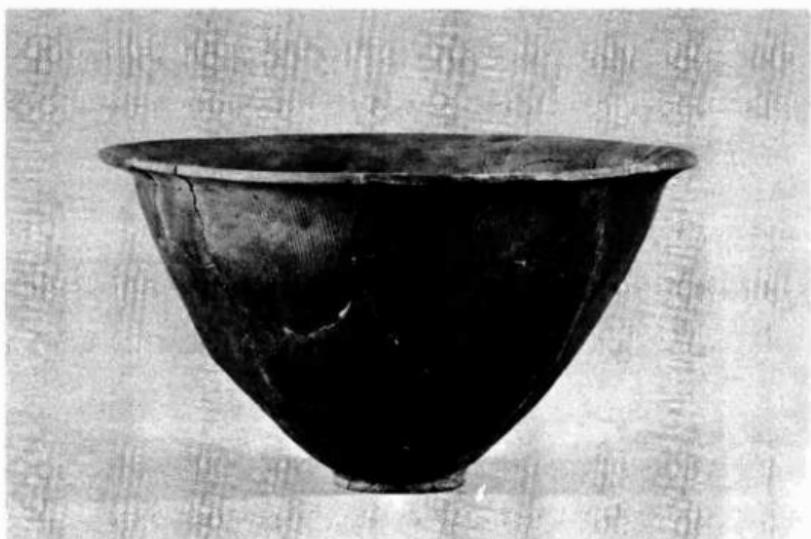
22号住居址出土土器



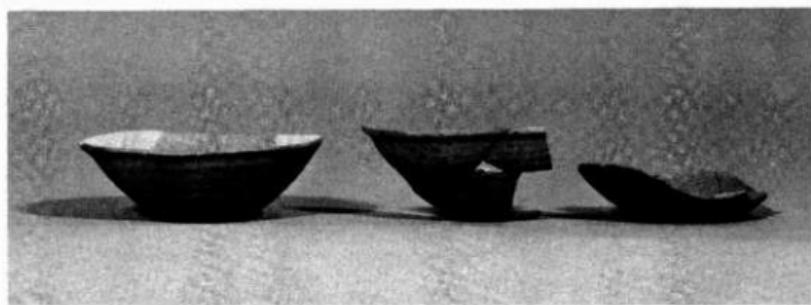
23号住居址出土土器



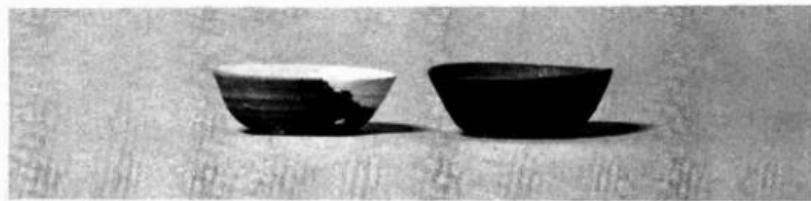
24号住居址出土土器



24号住居址出土土器



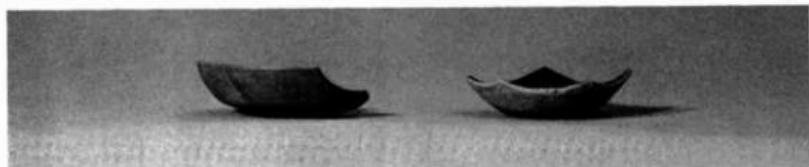
25号住居址出土土器



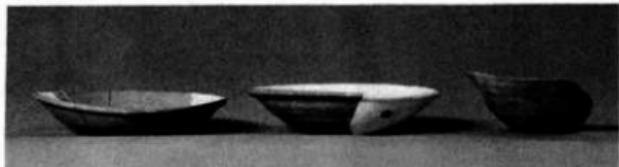
26号住居址出土土器



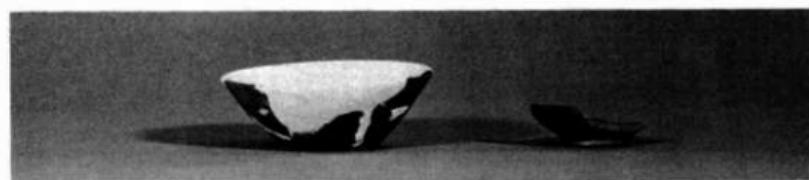
30号住居址出土土器



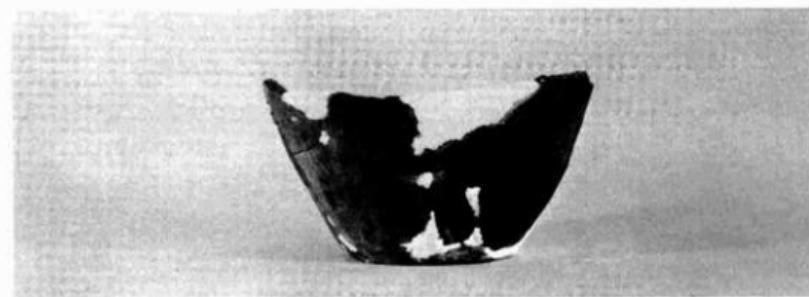
32号住居址出土土器



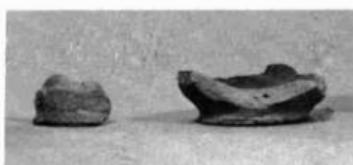
34号住居址出土土器



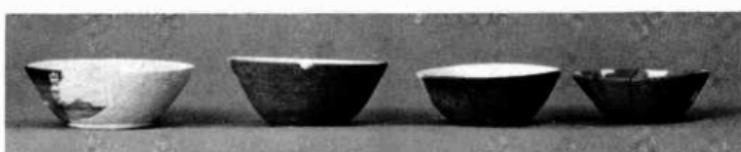
36号住居址出土土器



37号住居址出土土器



37号住居址出土土器



38号住居址出土土器



39号住居址出土土器



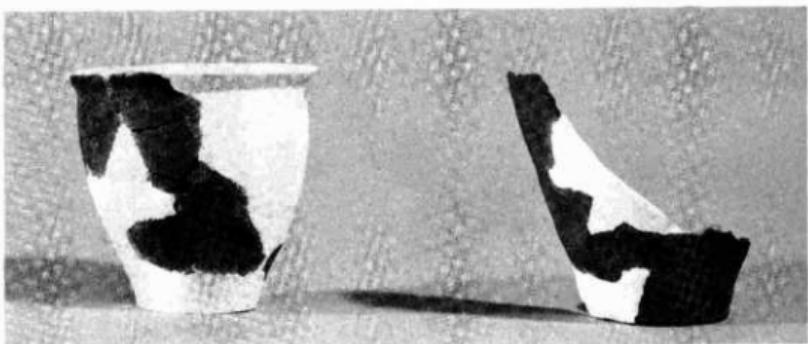
40号住居址出土土器



41号住居址出土土器



42号住居址出土土器



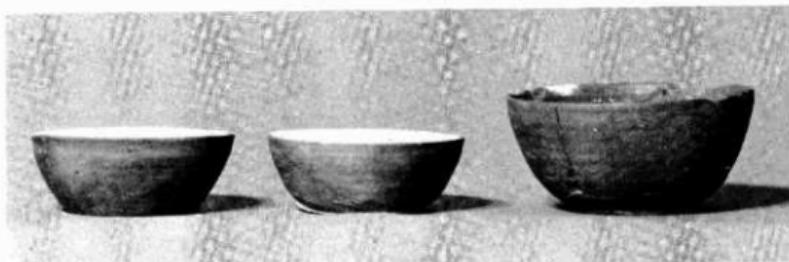
42号住居址出土土器



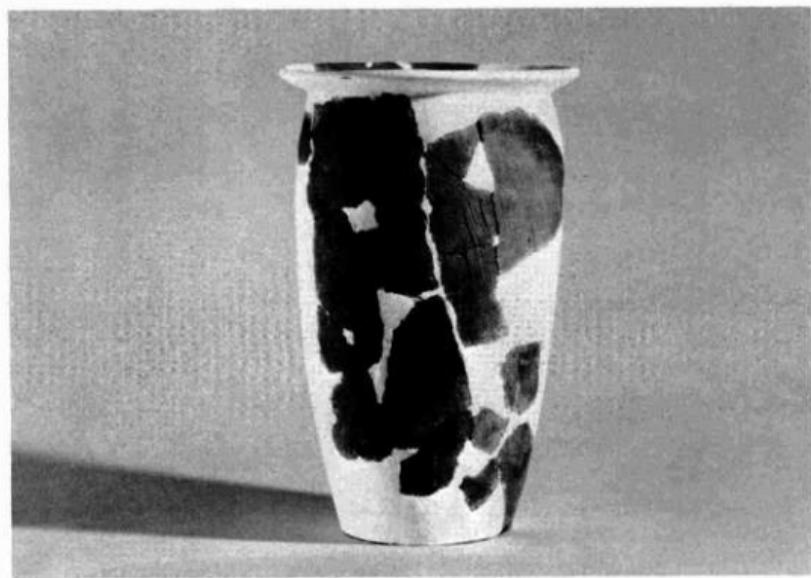
43号住居址出土土器



45号住居址出土土器



46号住居址出土土器



46号住居址出土土器



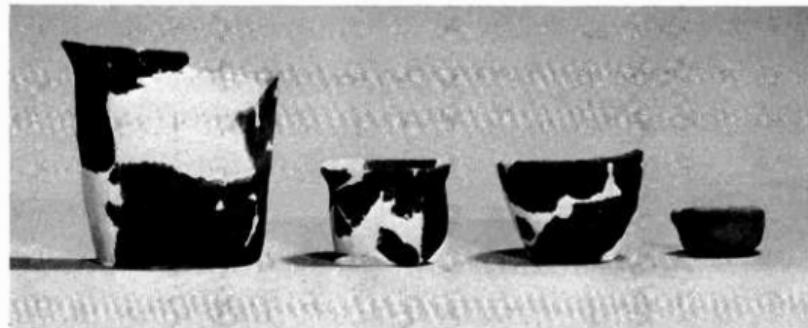
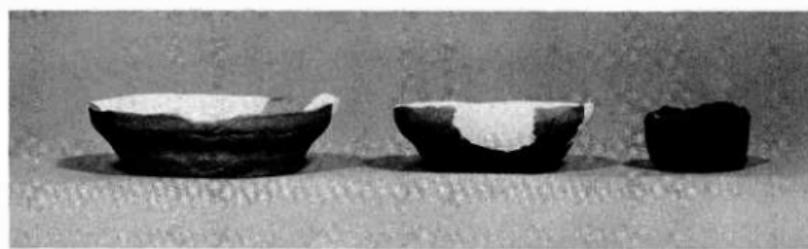
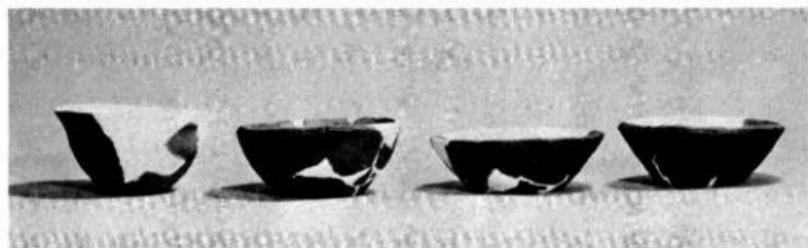
49号住居址出土土器



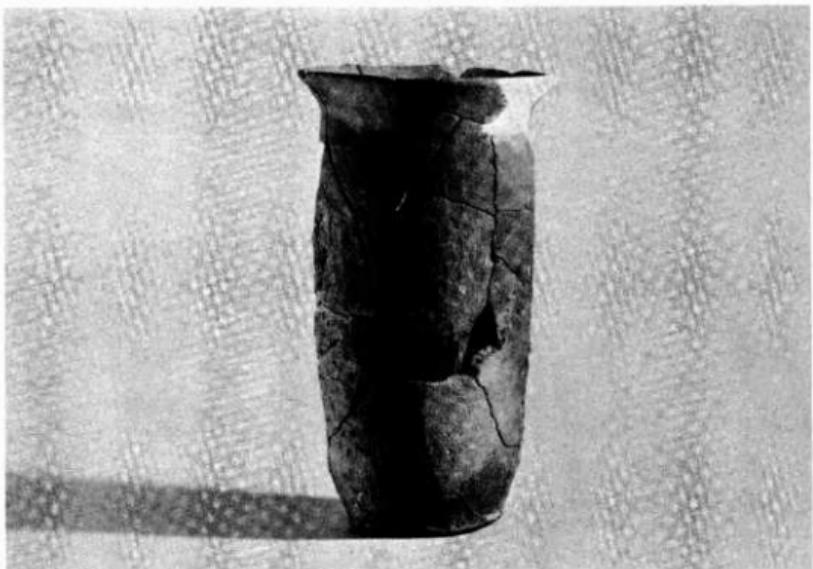
50号住居址出土土器



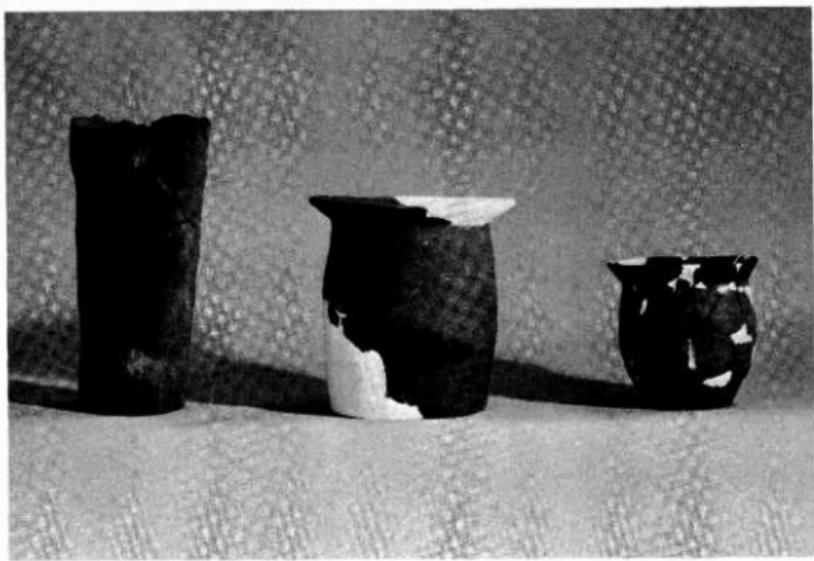
51号住居址出土土器



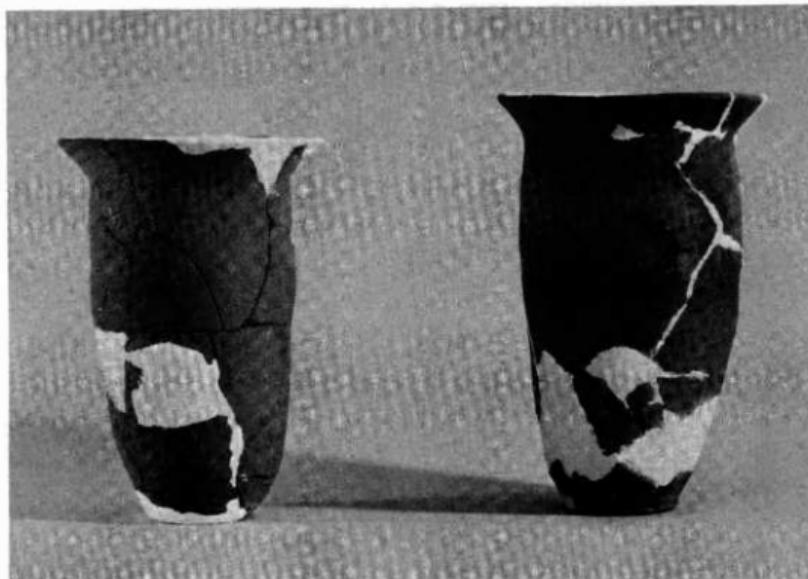
52号住居址出土土器



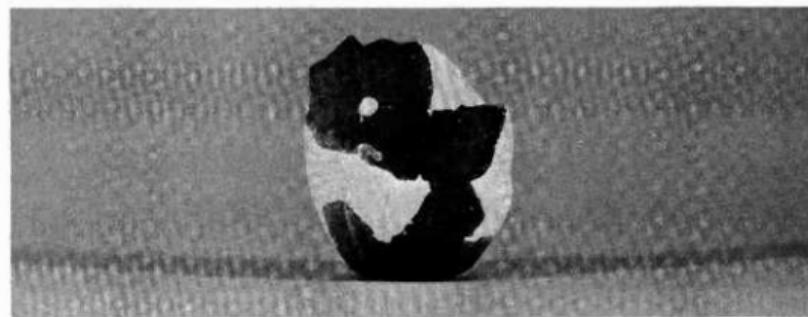
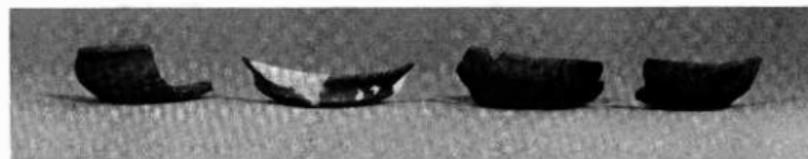
52号住居址出土土器



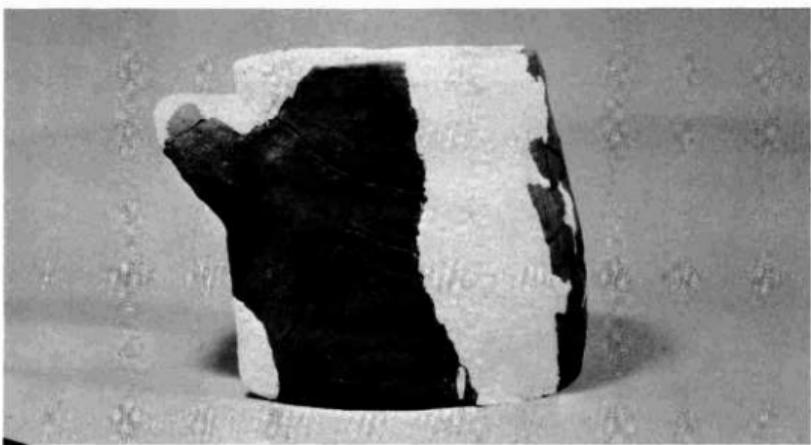
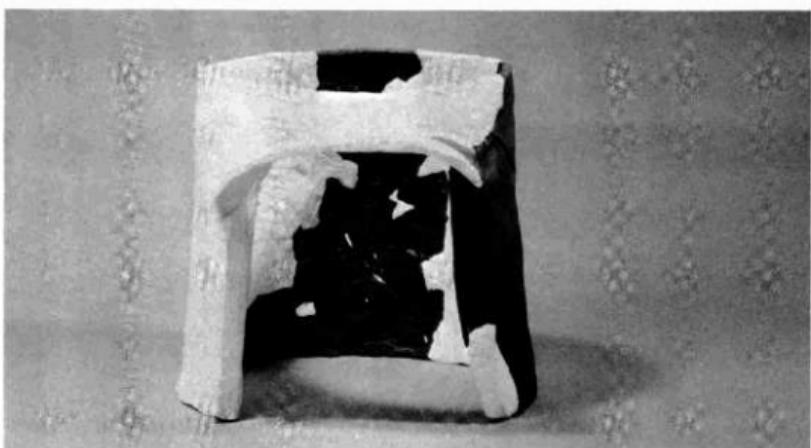
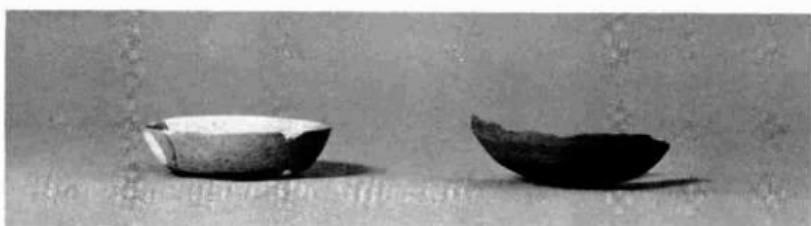
53号住居址出土土器



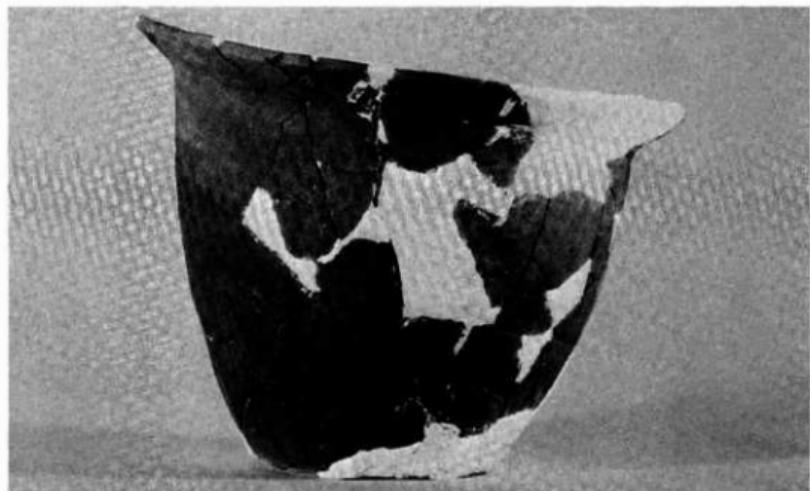
53号住居址出土土器



54号住居址出土土器



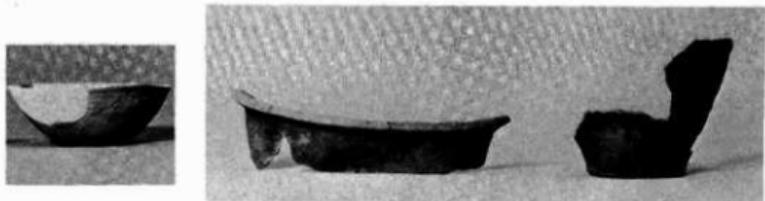
57号住居址出土土器



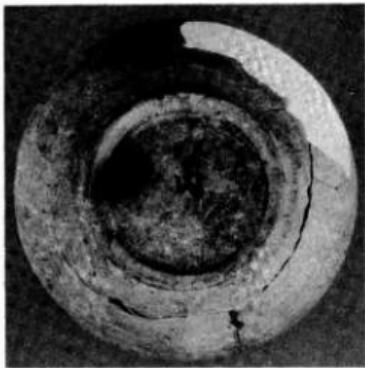
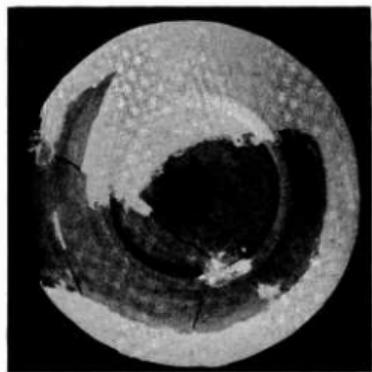
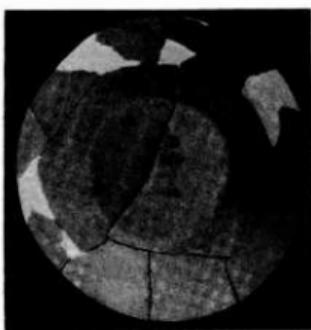
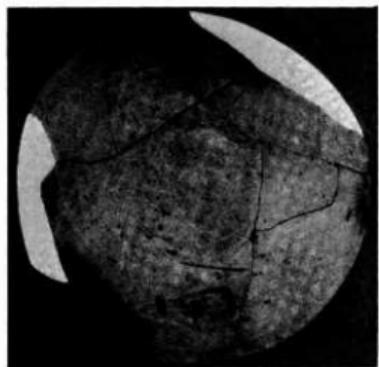
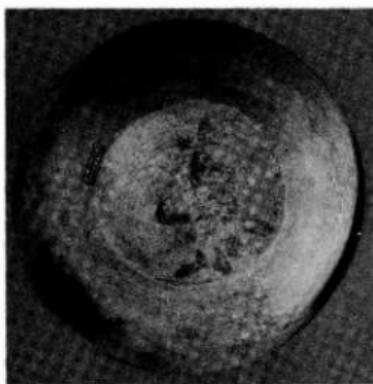
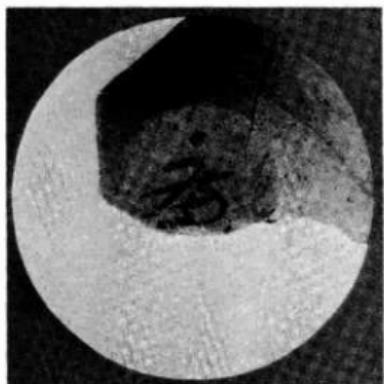
57号住居址出土土器



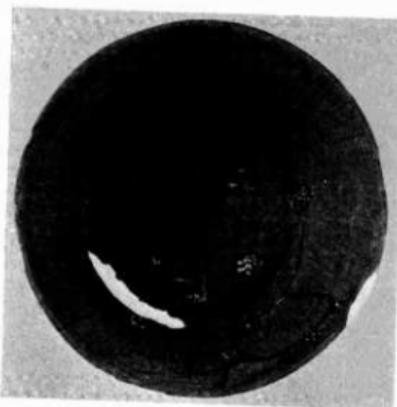
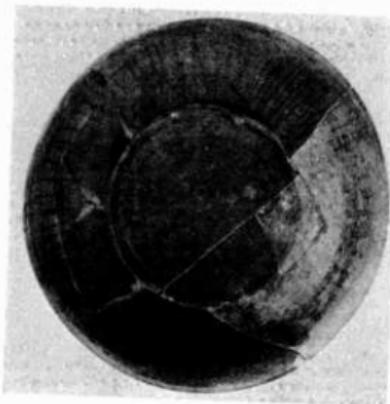
58号住居址出土土器



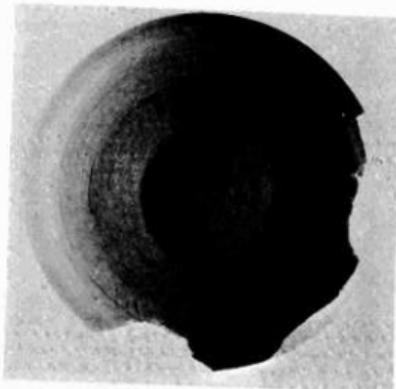
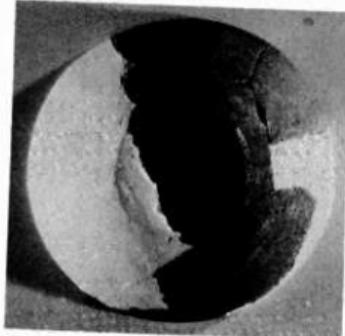
60号住居址出土土器



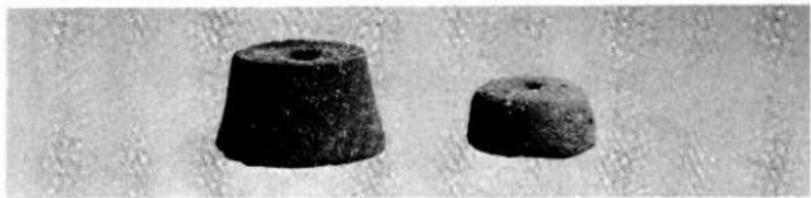
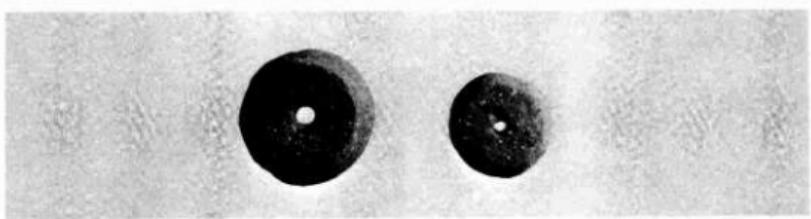
墨書 左：上21號住居址、中25號住居址、下38號住居址  
右：上24號住居址、中38號住居址、下46號住居址



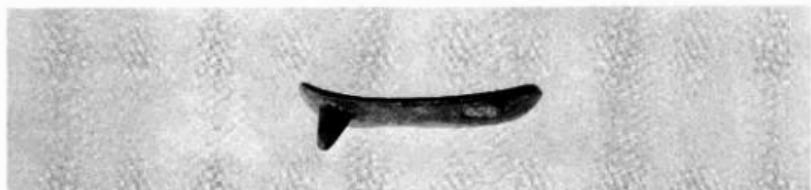
暗文（左39号住居址、右46号住居址）



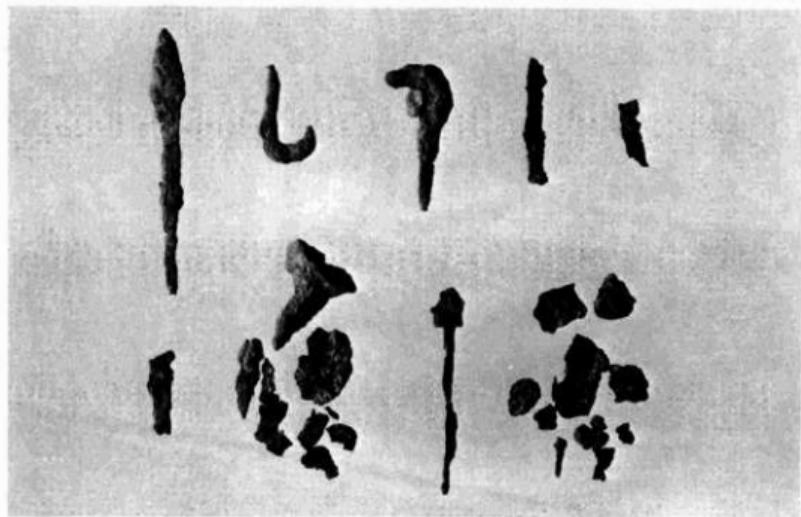
ペン先状工具による沈刻



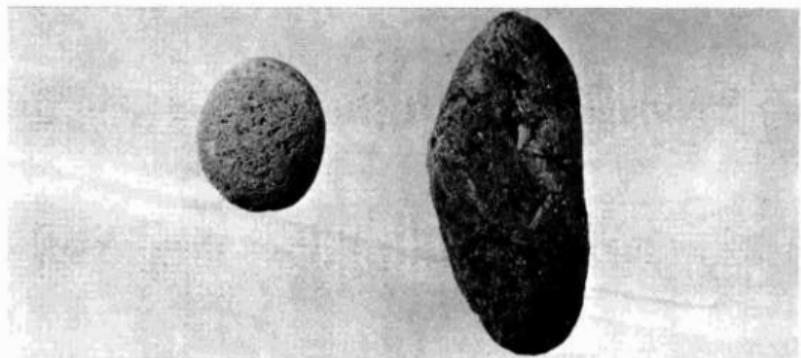
纺錘車（左52号住居址、右50号住居址）



15号住居址出土硯



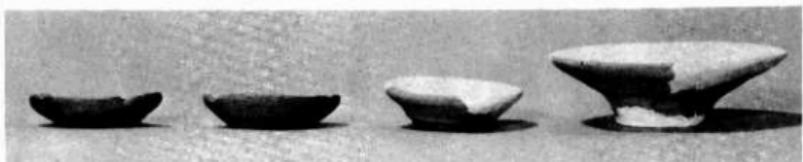
鐵製品



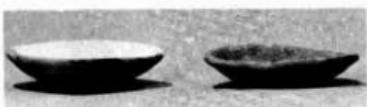
輕石（左16号住居址、右50号住居址）



砥石（左37号住居址、中41号住居址、右53号住居址）



11號溝出土土器



35號土塚出土土器

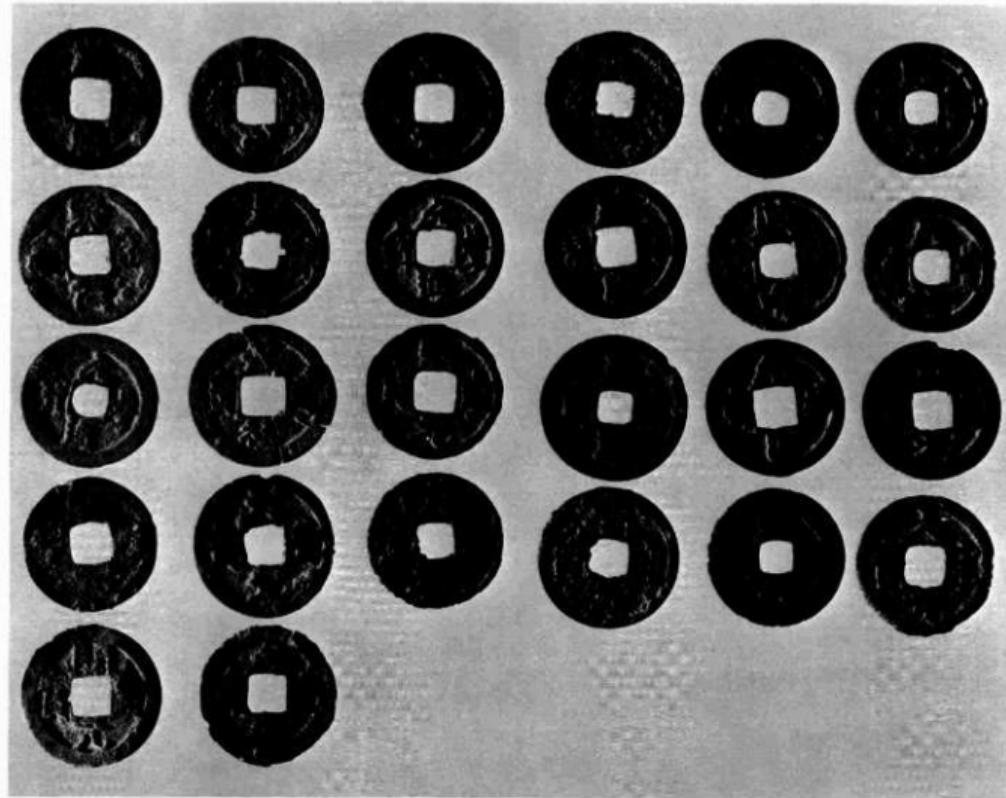


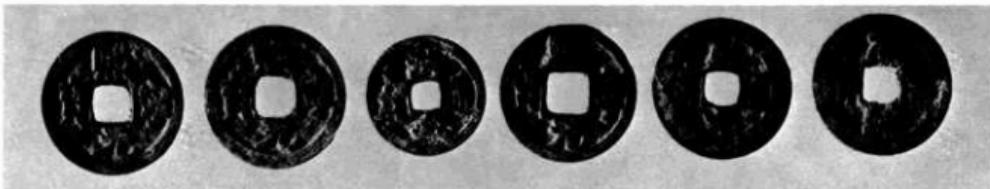
98號土塚出土土器



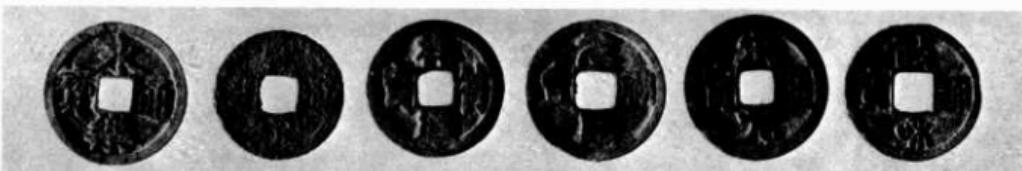
286號土塚出土土器

286号土塗  
出土古錢





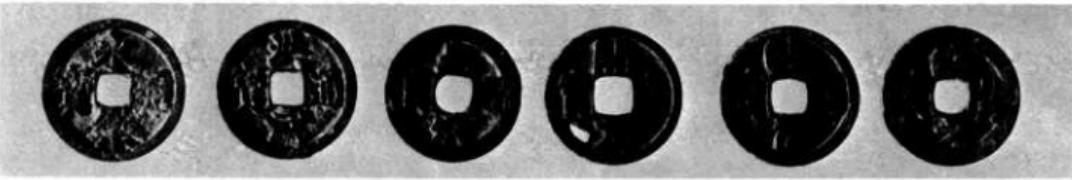
1号墓  
出土古钱



2号墓  
出土古钱



3号墓  
出土古钱



4号墓  
出土古钱

昭和60年3月25日 印刷  
昭和60年3月30日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第7集

## 北堀遺跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会  
日本道路公団

印刷所 ヨネヤ印刷

